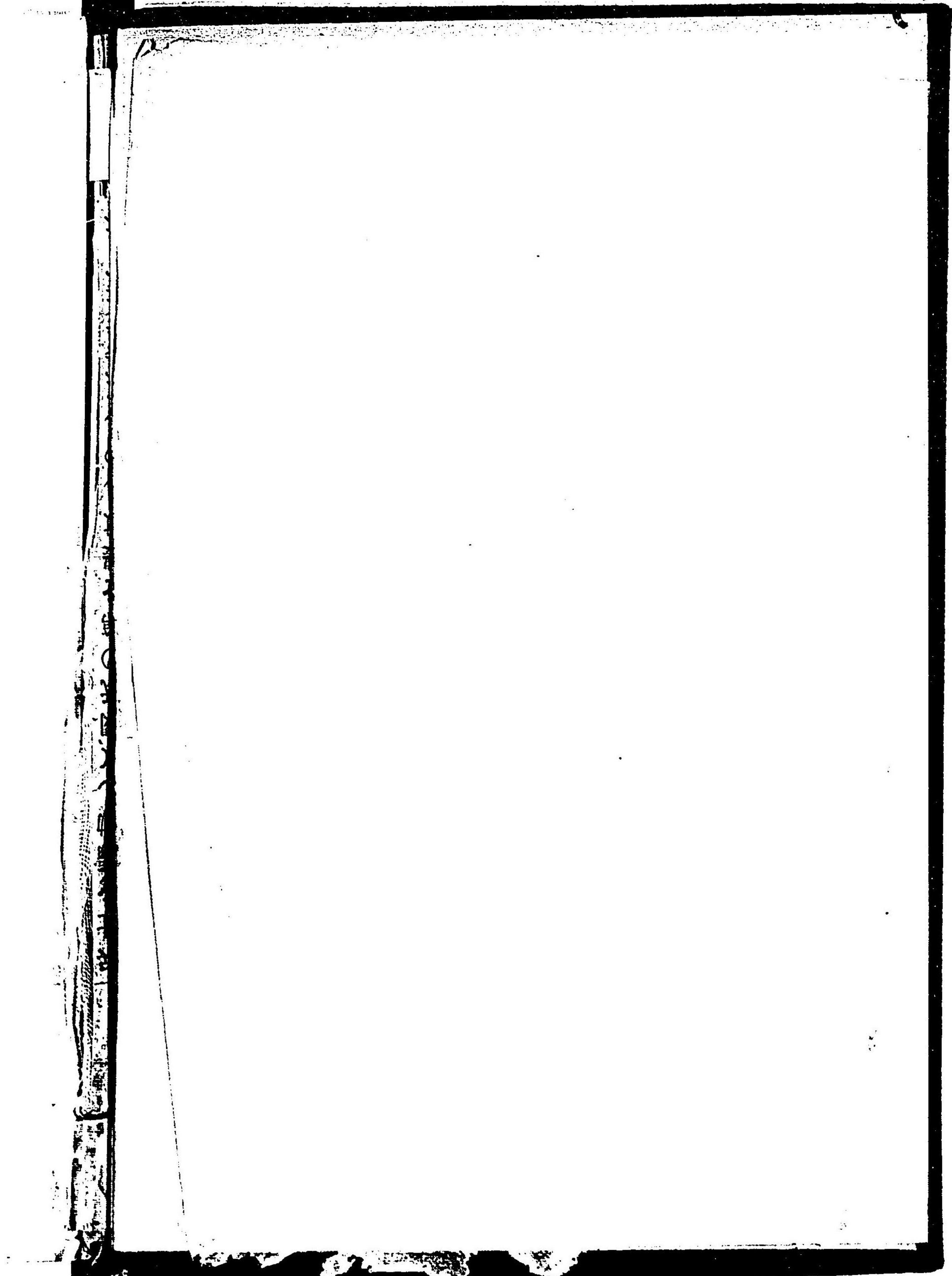




1894



武州比企郡松山箭弓神社

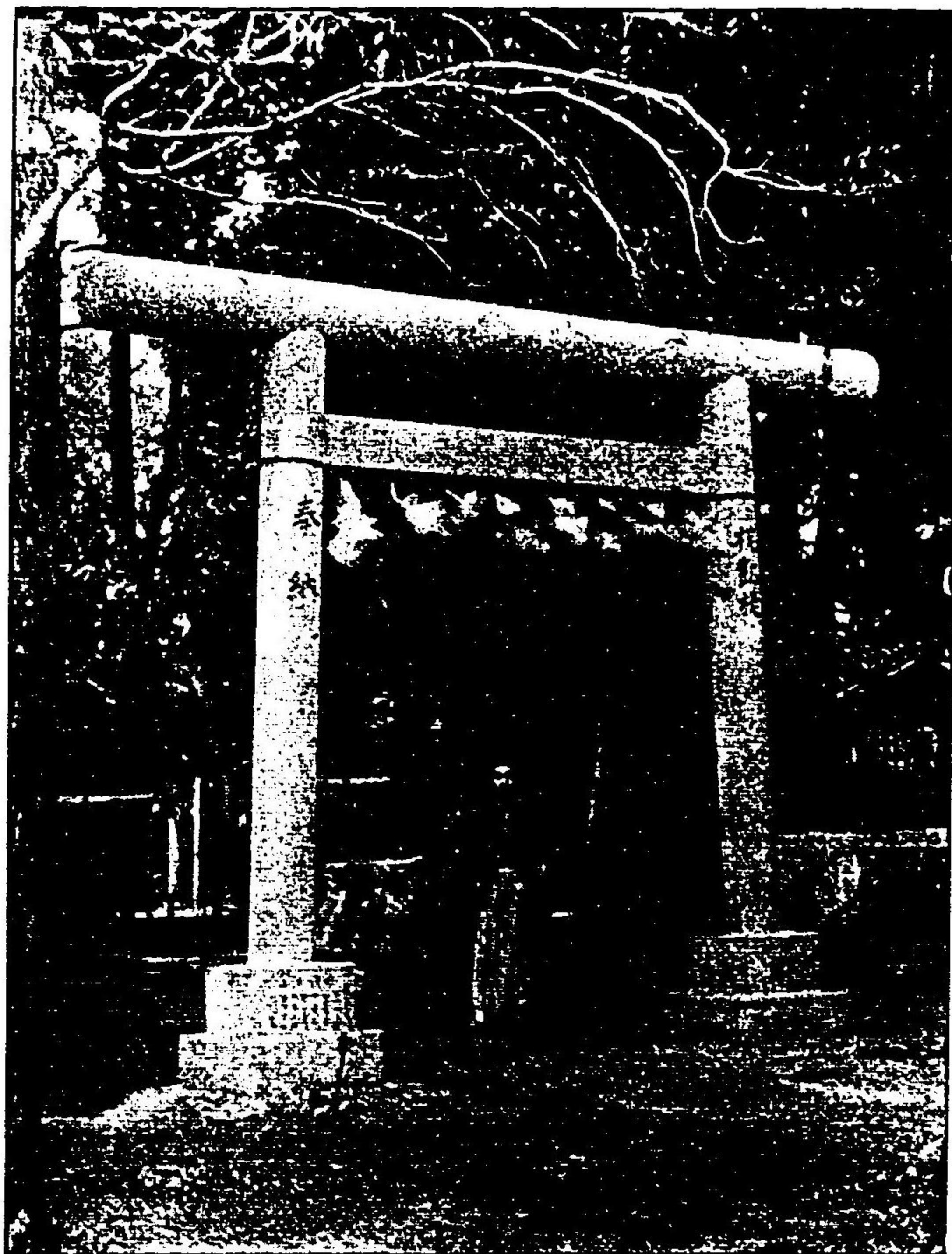
箭弓神社は掛巻も畏き宇迦御魂神を齊き奉れる御社なり大神の古き史も
 の上に著しく神徳の廣く大にまします事ほゆふも更なり後一條天皇の御
 宇長元年前上總介平忠常反せし時甲斐守源賴信朝命によりて討手に向ひ
 武藏國比企郡松山に致りて忠信と相對して陣せしか敵の大軍に身方や、猶
 驍ひぬたかりける所に賴信朝臣本陣の傍に最物置りたる詞あるを見てまづ
 其身を深の朝敵退治の祝詞を奏し幣物を神前に献りて終夜祈請を致しやが
 て其曉に軍を整へて進發すかくて明けゆく空またならぬ雲のけしきの中
 一白羽の征箭の如き形の雲二行顯れたりと見る間にさつと吹き起る一陣の
 風に彼方をさして射るが如くに飛びゆきぬこの奇瑞も源氏の諸軍の勇み立
 ち敵陣を押し寄せ唯二戦に打破り勝りて其則宿を衝き遂に忠常を滅し
 たり賴信大に悦び是偏に神威を致せる所なりさて社殿を改築して報賽せ
 れたりかくてこの奇瑞によりていつしか箭弓の神社と稱へ所の名にさへな
 れりき是より後武將の尊信殊に厚く中世關東兵亂の際松山城も築かれて
 り代々領主武運長久の祈請をせられざるなく庶民の防水除災の利益を蒙ら
 ざるなく神威を炳然たりかくて社殿も數百年の間度々の修造ありしが今の
 は元祿中造營せられたるなりとぞかゝる正しき由緒あるをもて茲に社格を
 郷社に列せらるゝに至れりこゝに境内風景を寫すに當り同神社の起れる由
 縁を識す

社司 神保 鐵 男
 社掌 須田 平 太郎
 全 布施 田 常 安



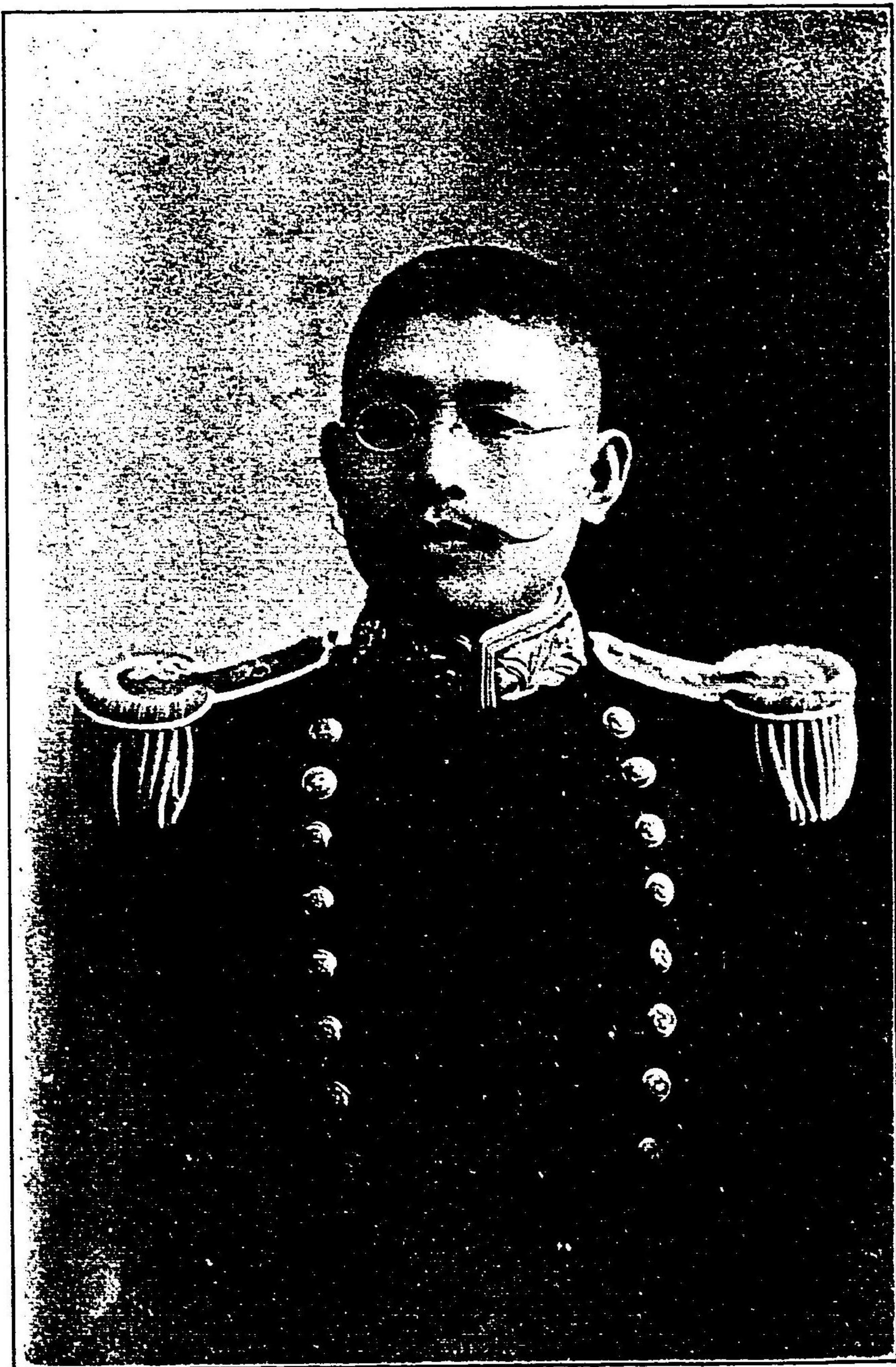
社 神 山 松

山 24
 4
 17
 内 交



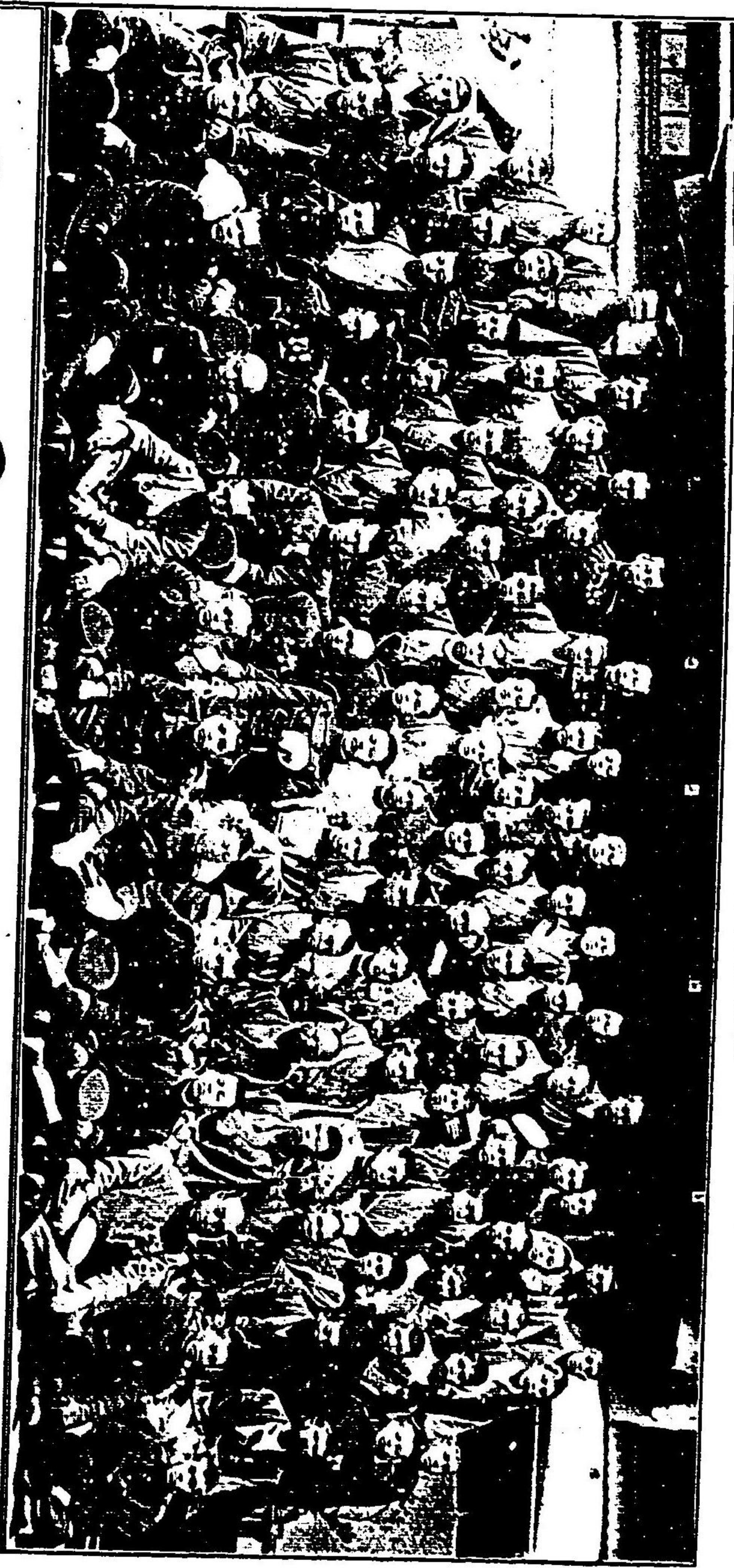
關東靈場

川島鬼鎮神社は埼玉縣比企郡菅谷村にあり此の地秩父二郡畑山黨忠の城址にして壽永年間重忠城廓を築造せんとするに當り方位を占したるに東北の一隅は恰も鬼門に相當するを以て鬼門除けの爲め茲に樹立船月神八衢比賣神を勧請奉祀せるものにて威軼殊に著しきより爾來陰曆三月九月の十五日を以て例祭を執行する事となれり家屋を新築若くは改修せんとする者又は俗に鬼門の祟りよ遣へる者なれば此所を參拜せば無事幸福の基ひを開らし利益豊からずと傳へられ東京其他の各地も多數の神社を有し祭日の盛んなる地方の神社佛閣中稀れに見る所なり加ふるに比企郡の地たるや山脈重疊として都市雜踏の俗氣を放たれ自づから神心爽快を覺へると共に神の御威も亦殊に尊嚴なるを覺へしむ參拜の行路は比企郡松山町若くは今郡小川町に出で馬車又は腕車の便に依るを最も便利とす菅谷村は恰も兩町の間位に位ひすればなり下國の華表は日露戰爭の際に數萬の守護札を無料にて各地に配付したるより東京の講社より凱旋後奉納せるものに三月十五日例祭を兼ね盛大なる土攘式を舉行せり華表の下に佇立せるは社掌高橋信久氏及び令息佐久氏なり境内幽靜閑雅として亦關東一箇の靈場たるを失はずんや參拜せらるべし



海軍大計正七位勳等法學士田庫文司君

影撮會賀祝旋凱人軍征出村河大



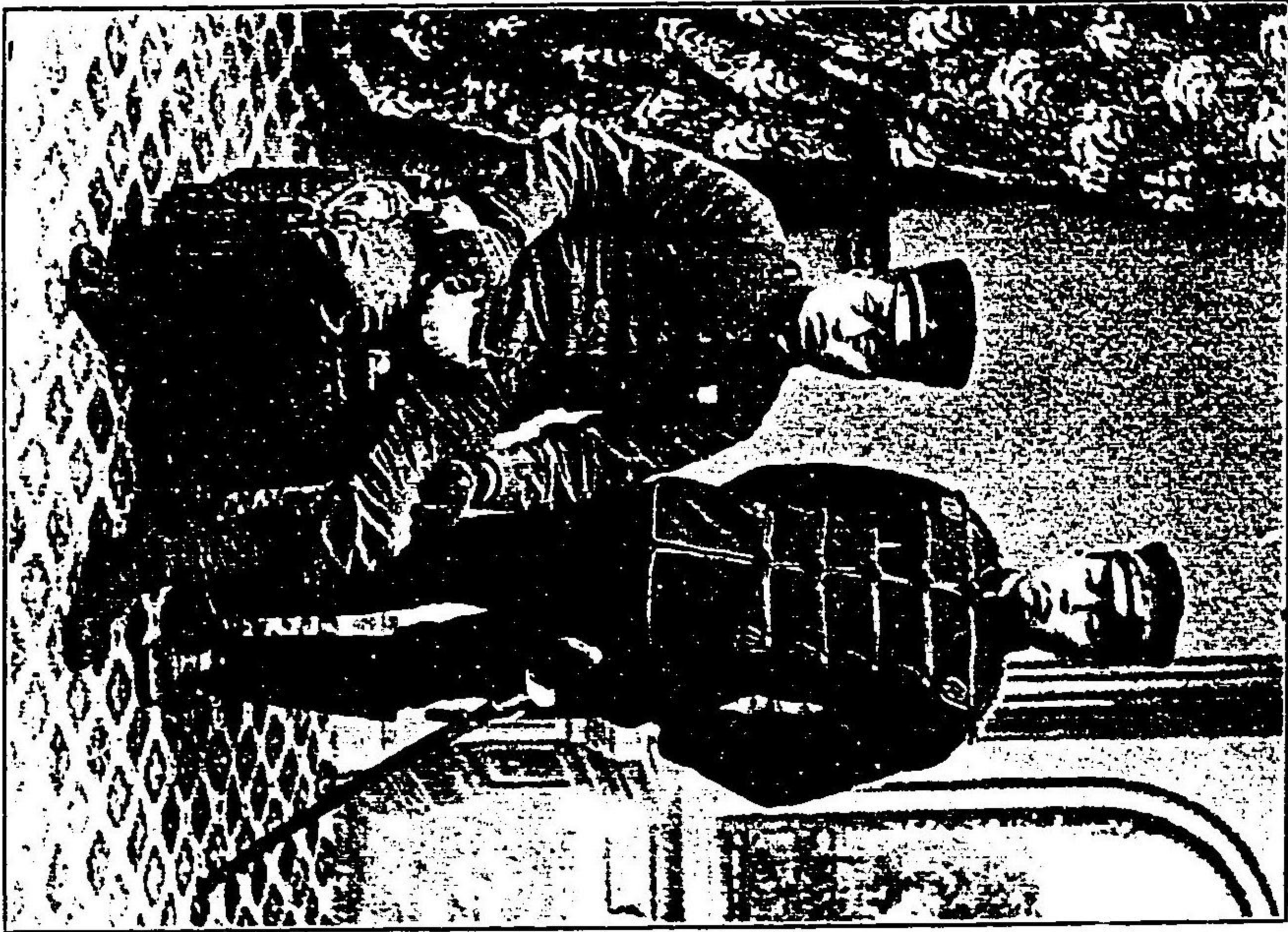
君三雄井荒 君那次定根原 君藤浦保久小 君密島崎野 君藤田川棟



君次十八端田位七從等六勳尉中兵砲軍陸



君介甫川横等六勳位八正尉少兵砲軍陸



君卅十佐崎野級七功 君七勳長曹兵隊軍陸
君吉英崎野卒輪瓦勳軍陸



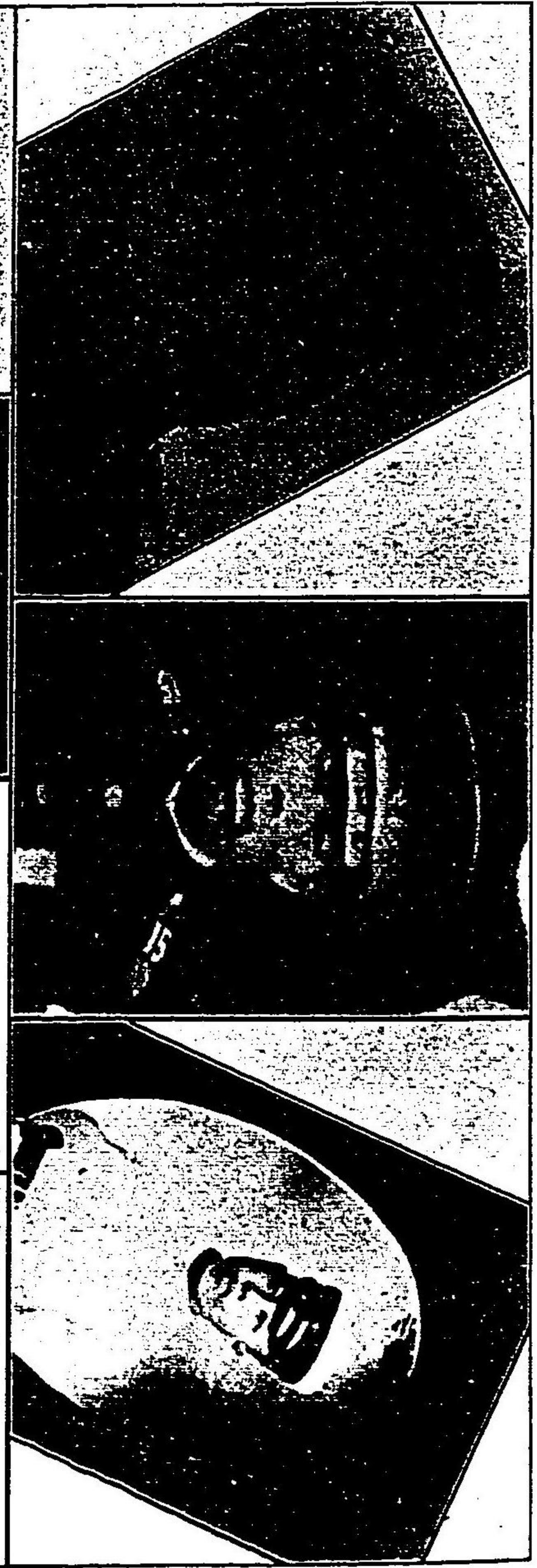
君郎大榮島福等七勳長曹兵步軍陸



君助糸井櫻級七功等七勳曹軍兵少軍陸
君松福邊馬等八勳兵等上兵重帽軍陸



君治平九岡松等八勳兵步軍陸
君耶十金田澤等七勳手計等二軍陸



級七功等八勳兵等上兵步軍陸故 君 道 鶴 本 松
 等七勳長伍兵步軍陸故 君 耶 五 光 井 荒
 等八勳兵等上兵步軍陸故 君 作 清 井 強
 級七功等八勳兵等上兵工軍陸故 君 一 帆 本 岡
 級七功等八勳兵等上兵步軍陸故 君 藏 仲 本 松
 卒 輪 重 輔 軍 陸 故 卒 等 一 兵 步 軍 陸 故
 君 助 武 田 吉 君 吉 鶴 木 大



君助五田吉兵等上兵騎
君吉治野吉幸觀看軍陸
君那十長井新等八勳

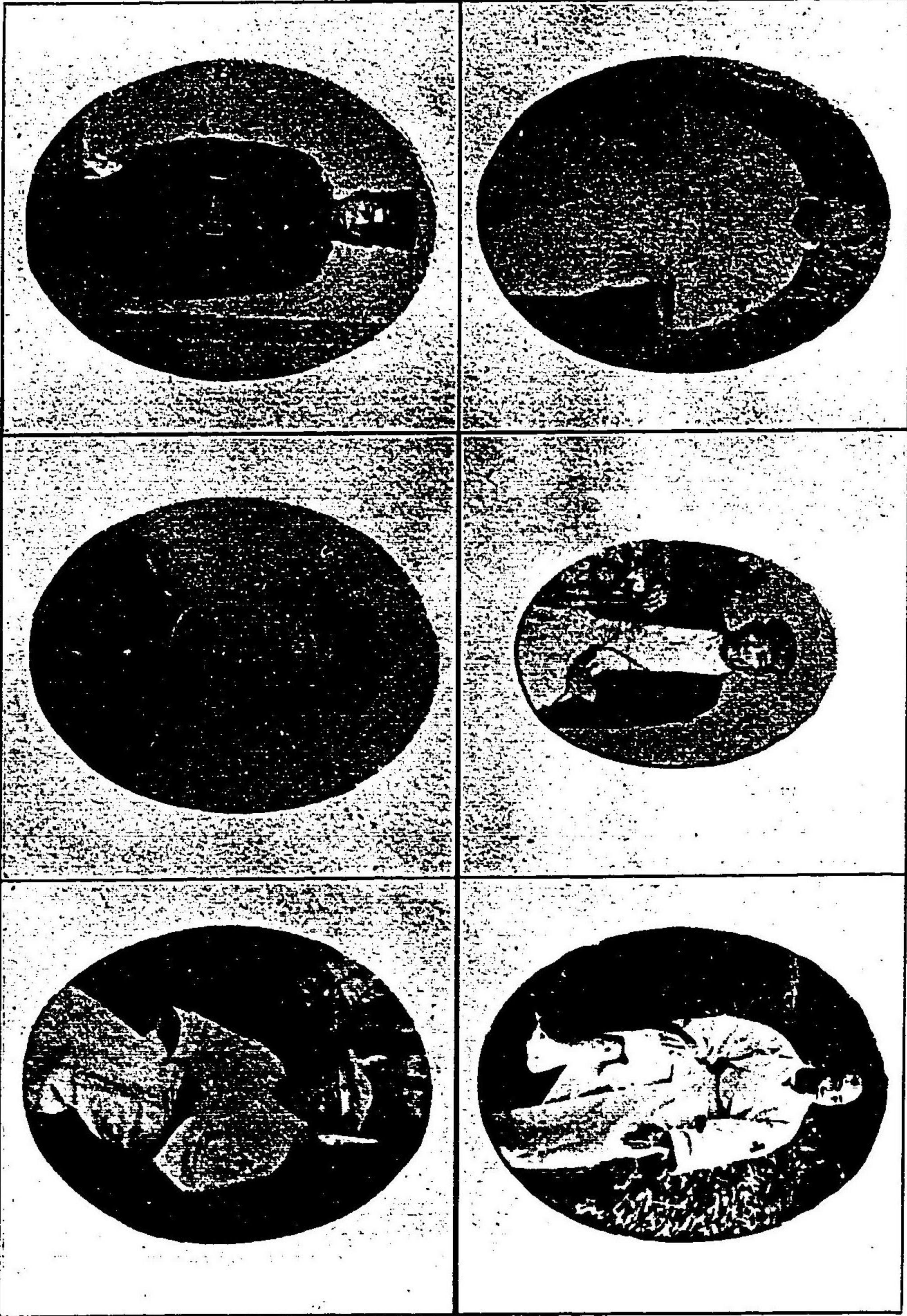
君那太靜兄渡兵憲
君助平塚石等八勳
君那太百口野

君那次常野島等八勳
君作新端田等七勳
君那次呼口山等八勳

君助之近高小等八勳卒第一兵參元

君那五才原笠級七功等八勳兵等上兵參元

君不那木村等上勳兵等上兵參元

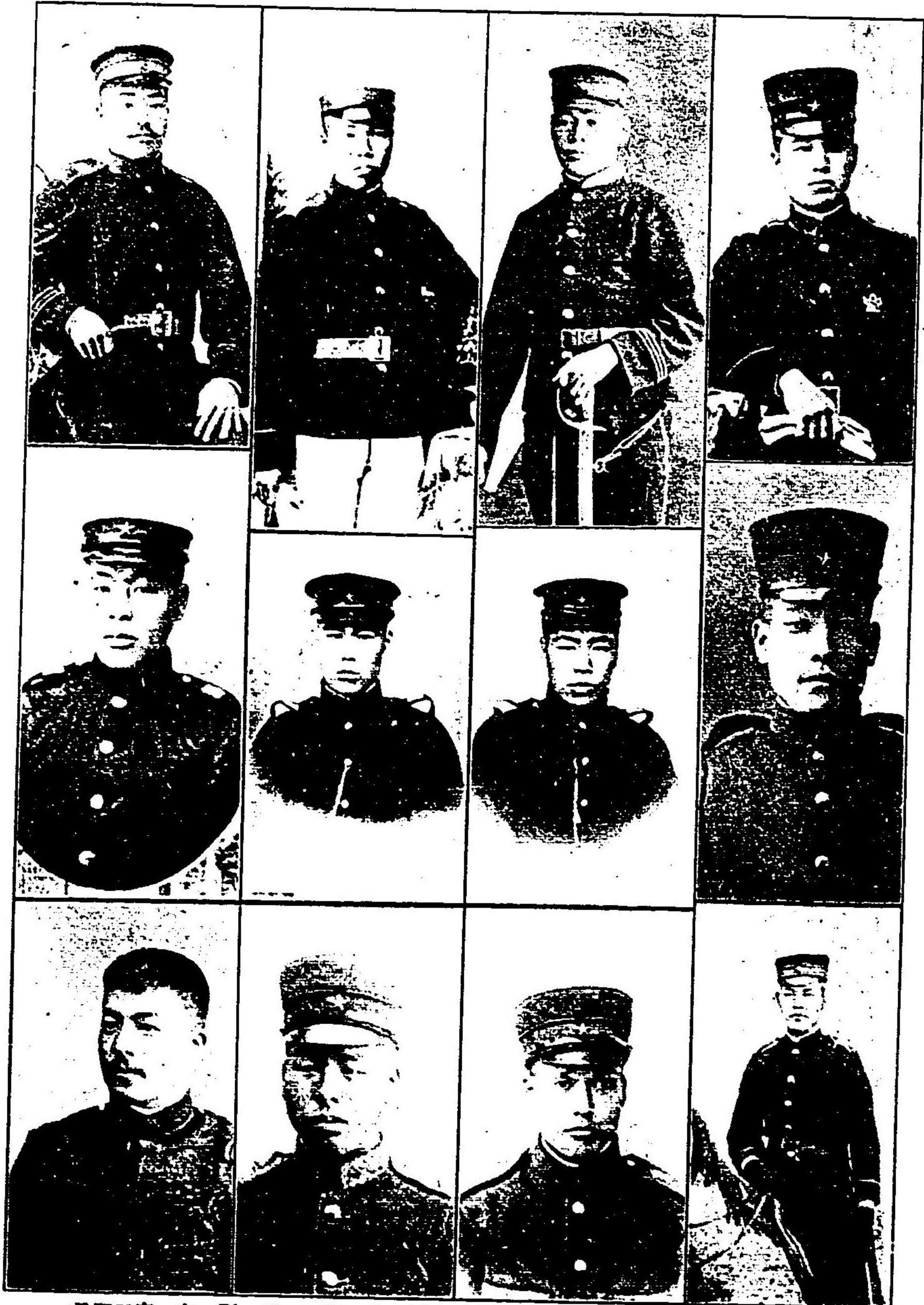




網海山 本合山 常代英 次三治 青杉野 木川野 總中野 太郎 君作太郎 金子野 子藤野 定藤野 吉藏君 野青君 口原青 增兵木 平治君



島岡野 野本野 金雄 太郎 君藏太郎 小林崎 君太郎 青木 佳原 君太郎 木笠 朝武 志 日川 周勤 君三太郎 作太郎 君太郎



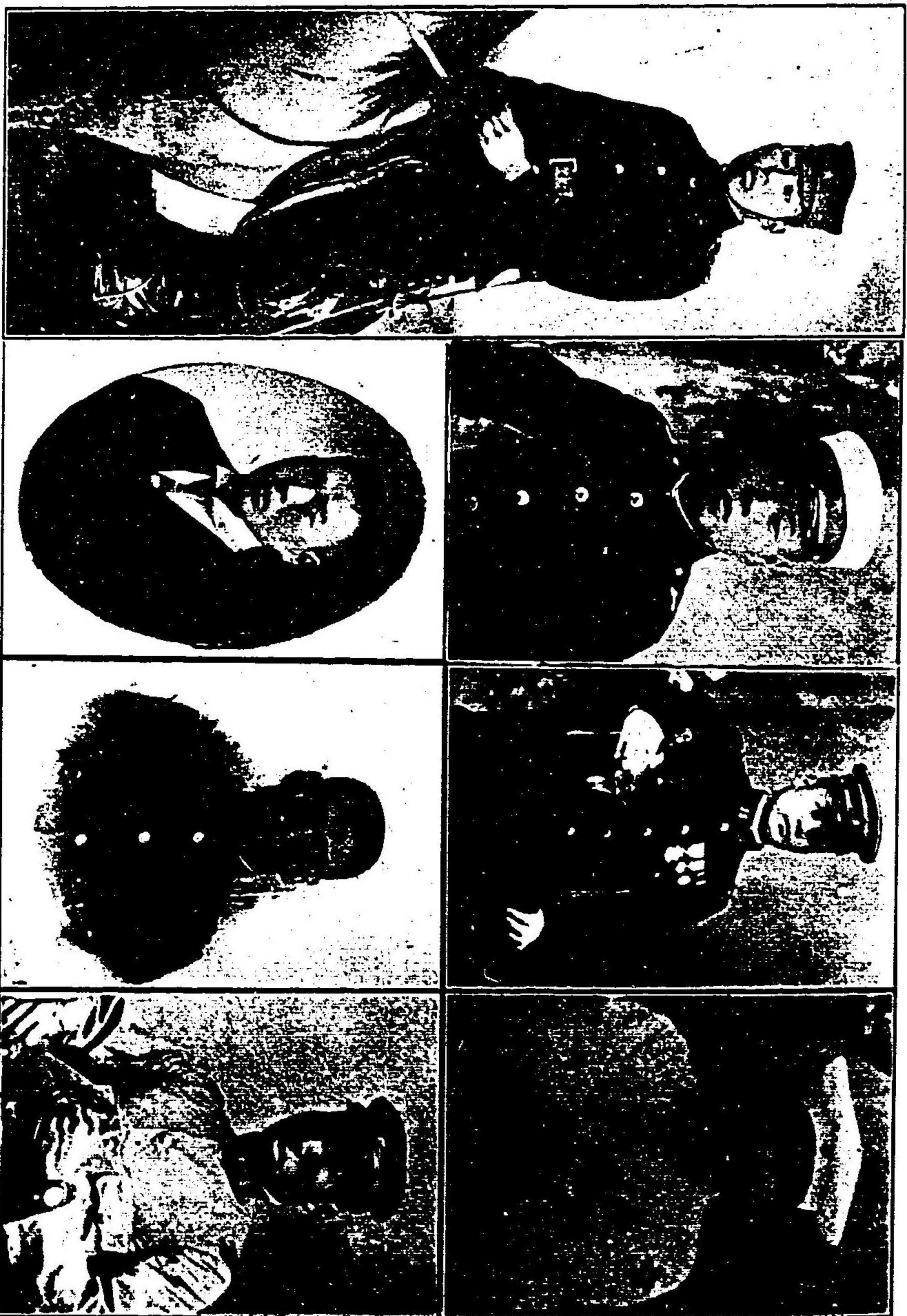
君耶五宗山影君一孝本岡君吉新塚大君吉鶴本岡
 君耶三受岸根君吉長端岡君耶次長本岡君助之角井荒
 君助忠瀨高君耶次辰岸根君耶次泰澤瀧君助之虎本岡



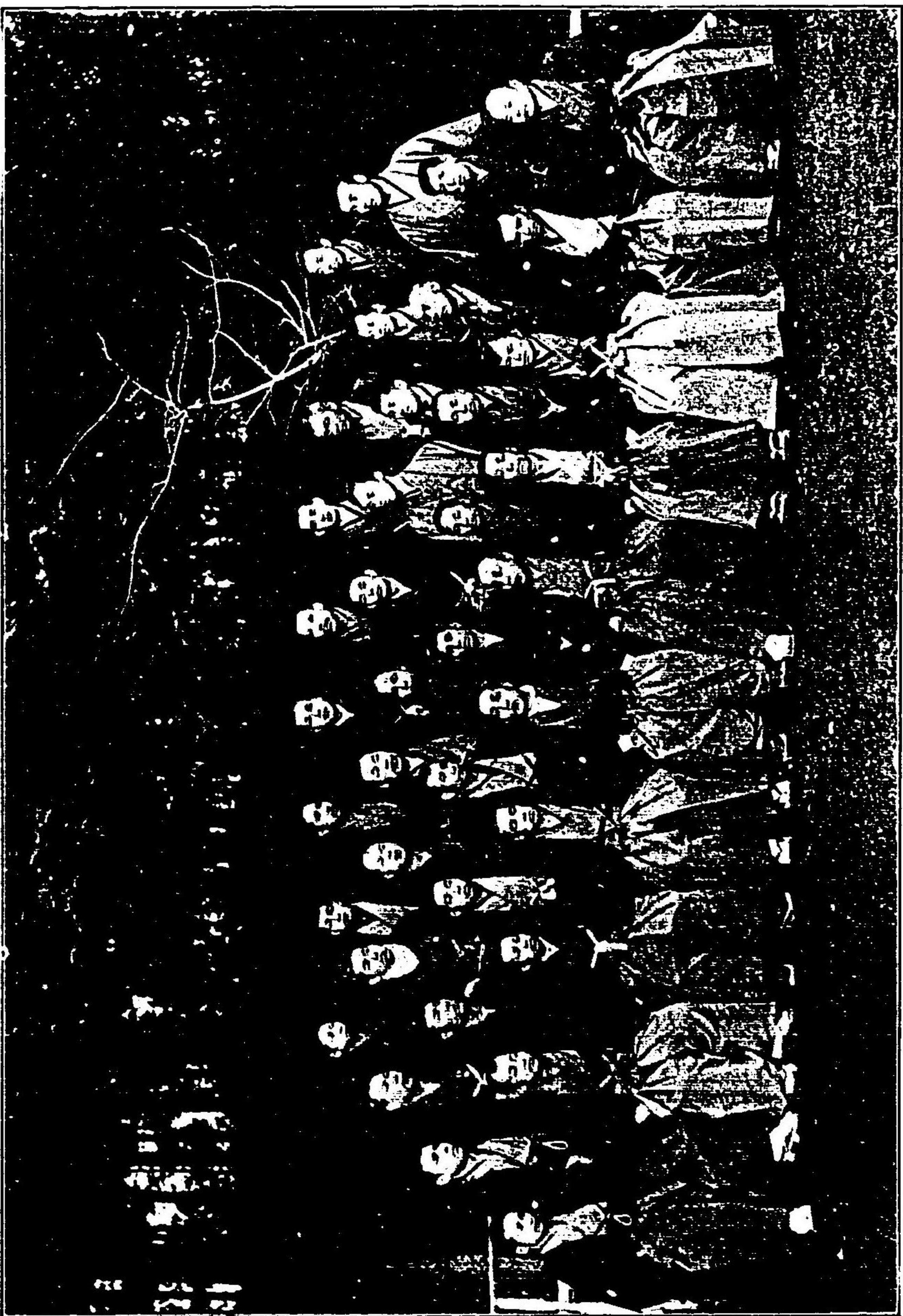
君耶次近木大君耶太藤崎山君八長保中君平國嶋川
 君耶五辰栗平君吉廣嶺馬君耶三爲口山君耶次周田吉
 君耶五辰栗平君吉廣嶺馬君耶三爲口山君耶次周田吉



酒本 井保 君 茂 君 村 原 君 木 三 武 君 三 代 君 恩 田 野 島 田 三 福 君 平 三 君 馬 山 角 橋 口 三 君 三 清 田 三 君



山 下 野 大 塚 君 中 大 塚 君 網 本 君 島 春 君 治 吉 君 澤 野 君 留 吉 君 荒 井 君 平 君



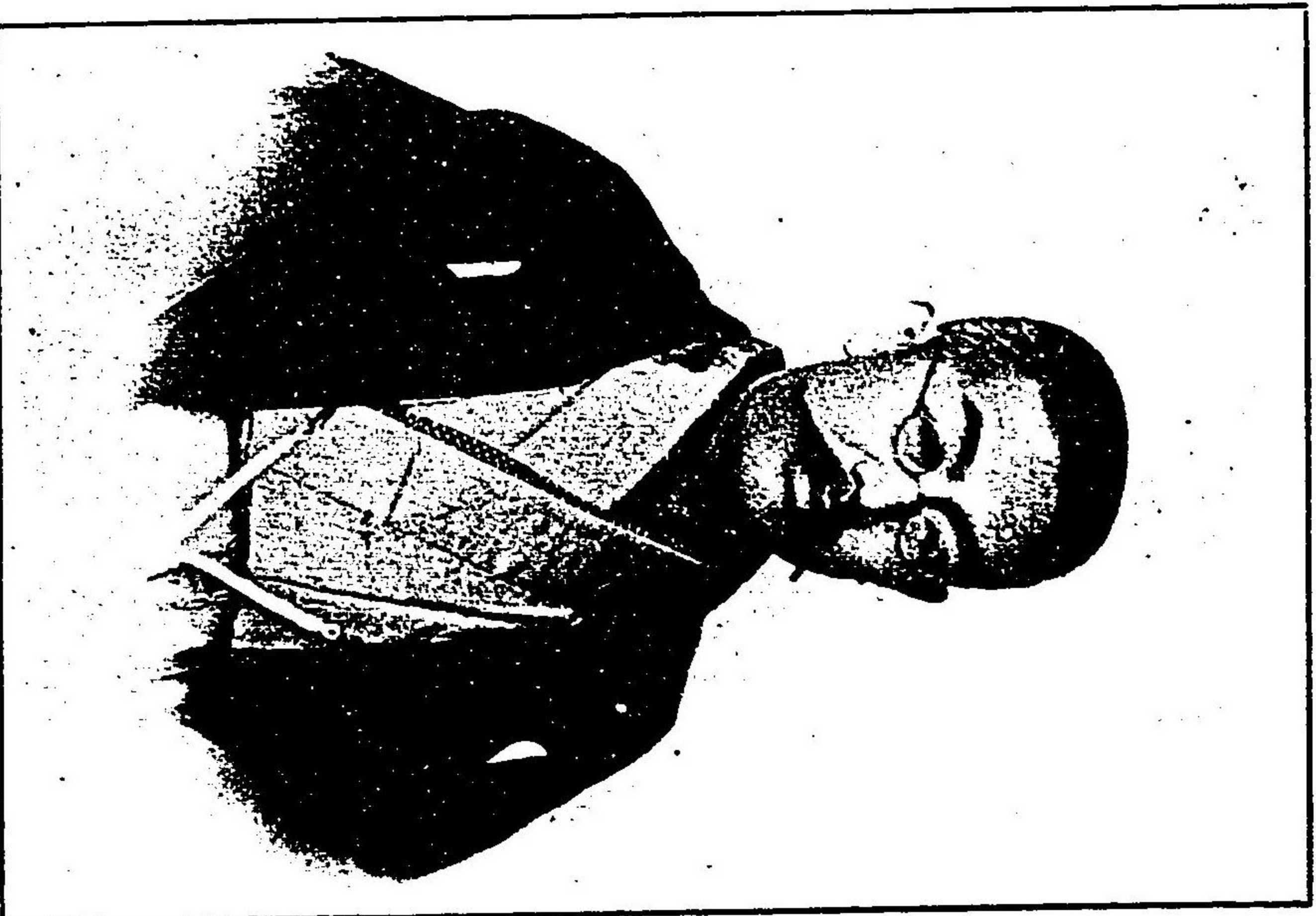
小川町凱祝會會員



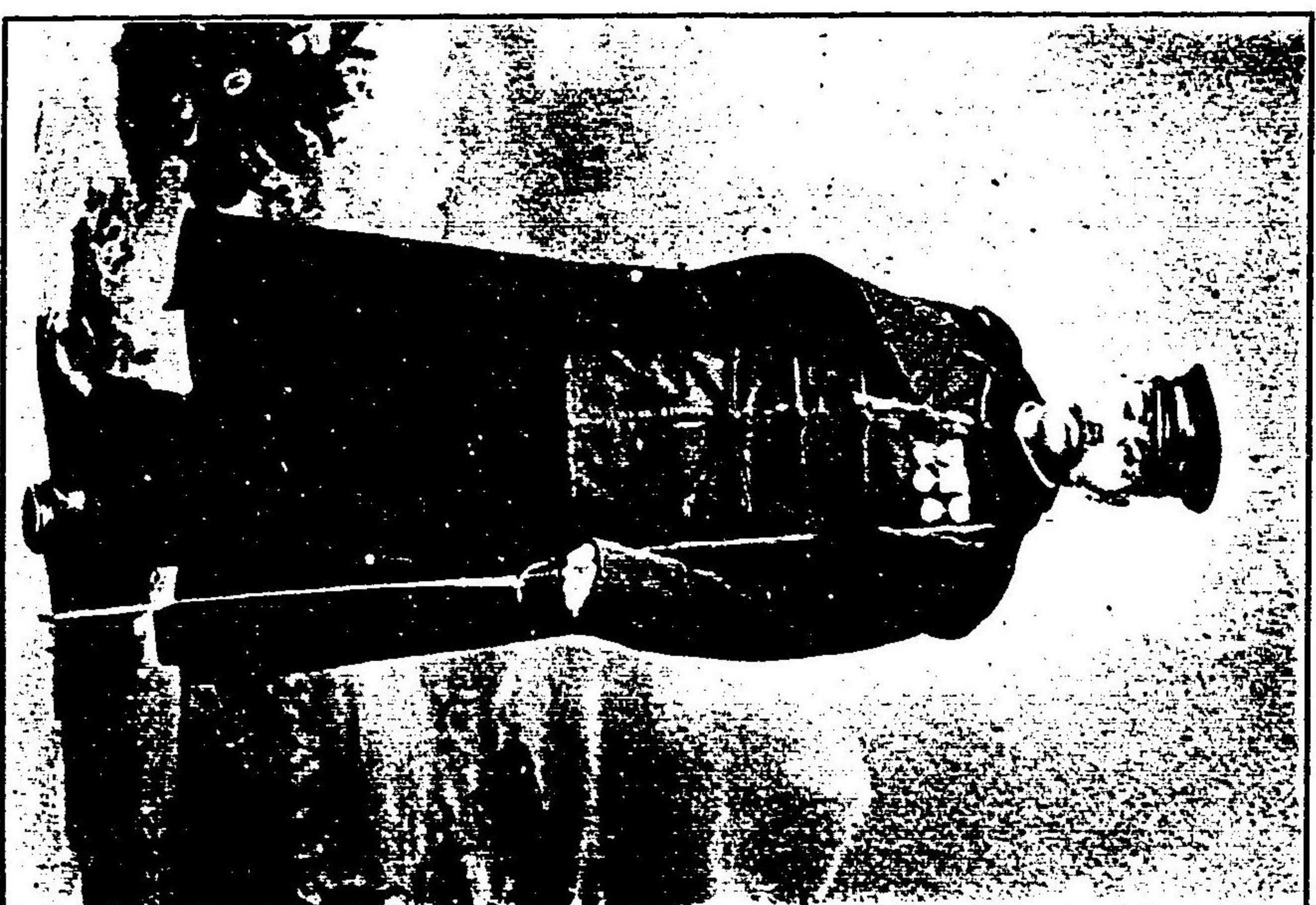
正八位勳章三等松島周三君



勳章六等松島源太郎君



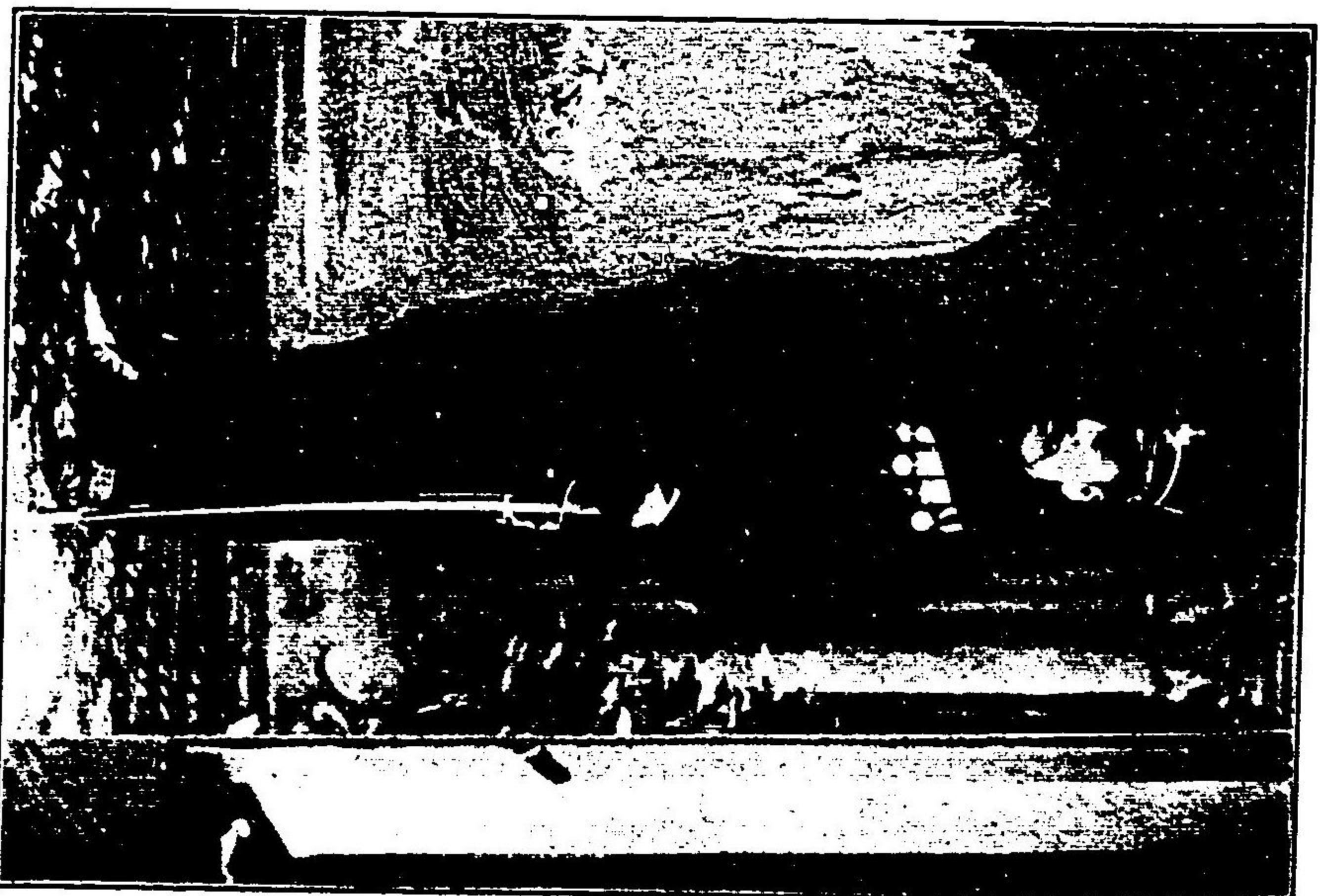
君耶 大 寅 田 和 師 醫



君 耶 次 軍 口 山 長 曹 務 特



君 平 嘉 島 中



君 耶 次 大 島 羽 等 六 勳 位 八 正 醫 軍 等 三 軍 院



星野 金子 野子 竹慶 松次郎 梅高 澤生 清山 吉文 秋銀 君藏 太忠 山本 秋本 山島 幸三 山田 幸次郎



齋藤 寺昌 夫人



勳八 功七 坂井 幸六



中田親夫 岩下雄三 原野三郎 山口芳五 篠田正次 新田作三 伊奥田勇吉 脇谷三郎
 中田親夫 岩下雄三 原野三郎 山口芳五 篠田正次 新田作三 伊奥田勇吉 脇谷三郎



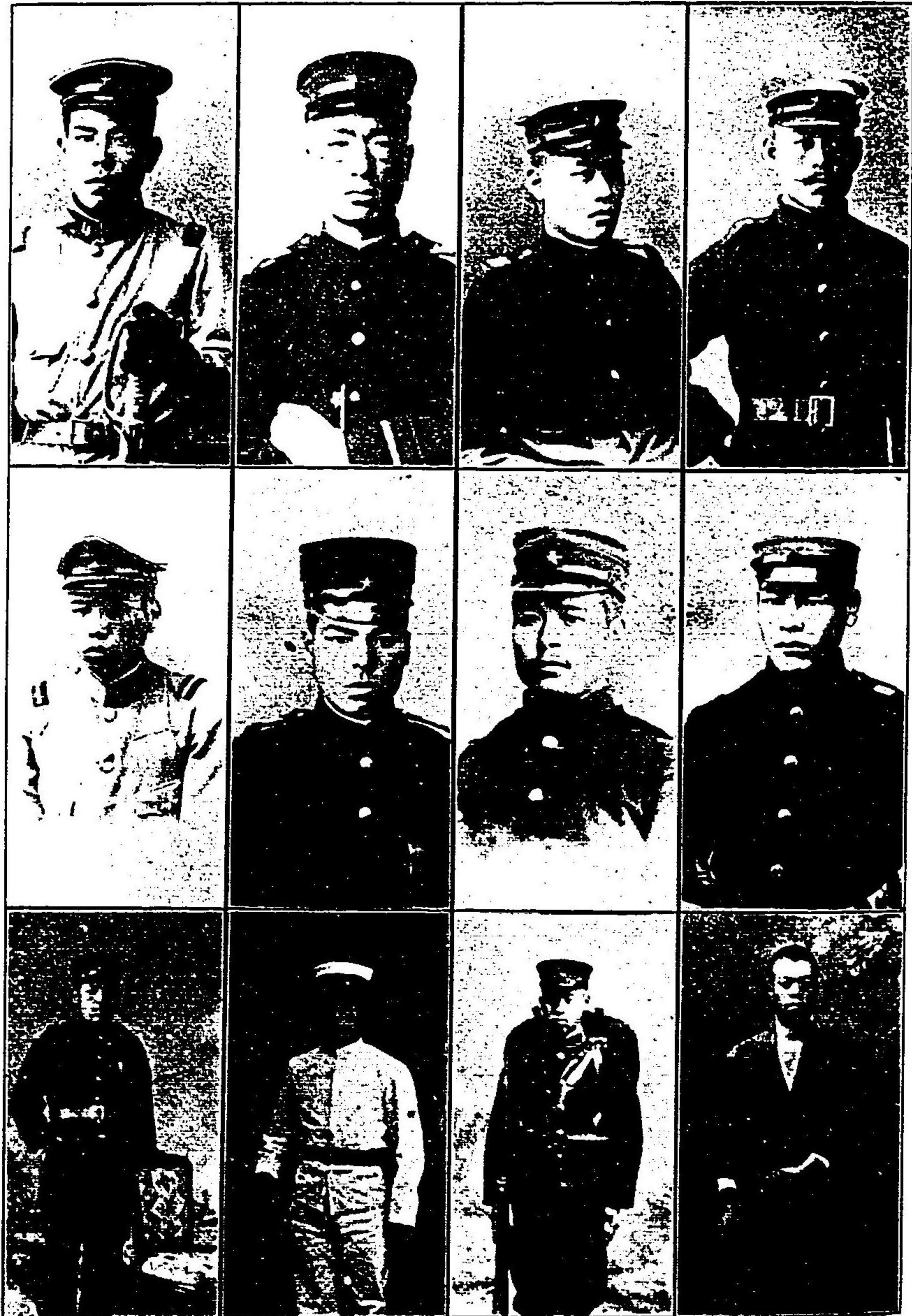
理髮師 關根和市 君



關山 根崎 兵衛 一君 關野 根崎 泰右 治衛 恩砂 田生 柳春 吉吉 吉合 田島 通茂 次太郎 八君



小松 林本 正次 次重 船田 戶中 藤三 藤五 飯千 島野 政武 次作 田中 島田 善和 善治 五君 善君



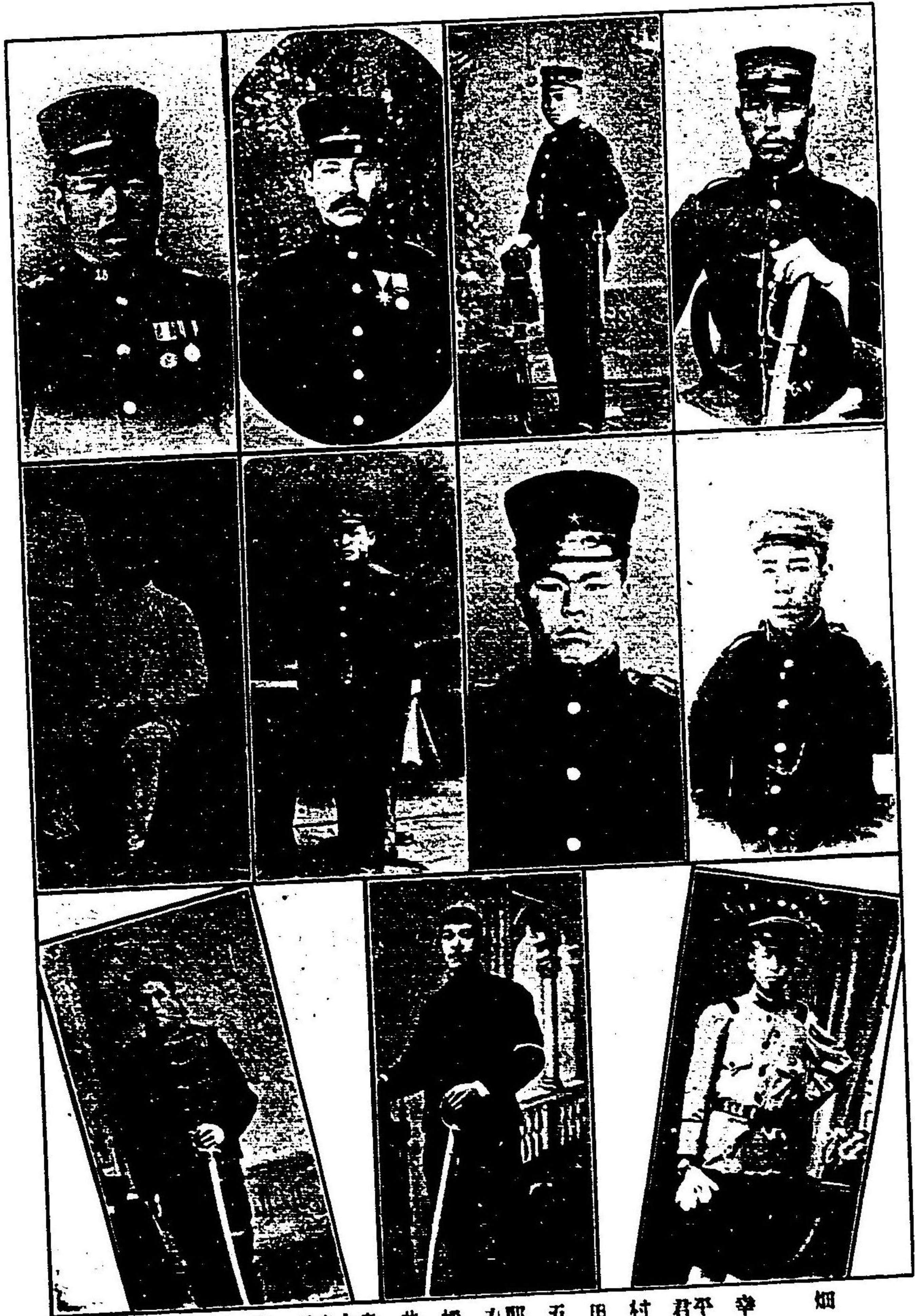
君作米田山君耶太猪柳高君耶太清井櫻君吉秀合落
 君耶次非荷高君一義端田君耶次定島栗君耶太安野岡
 君吉惣荷高君耶十健荷高君一兼合落君儀清端田



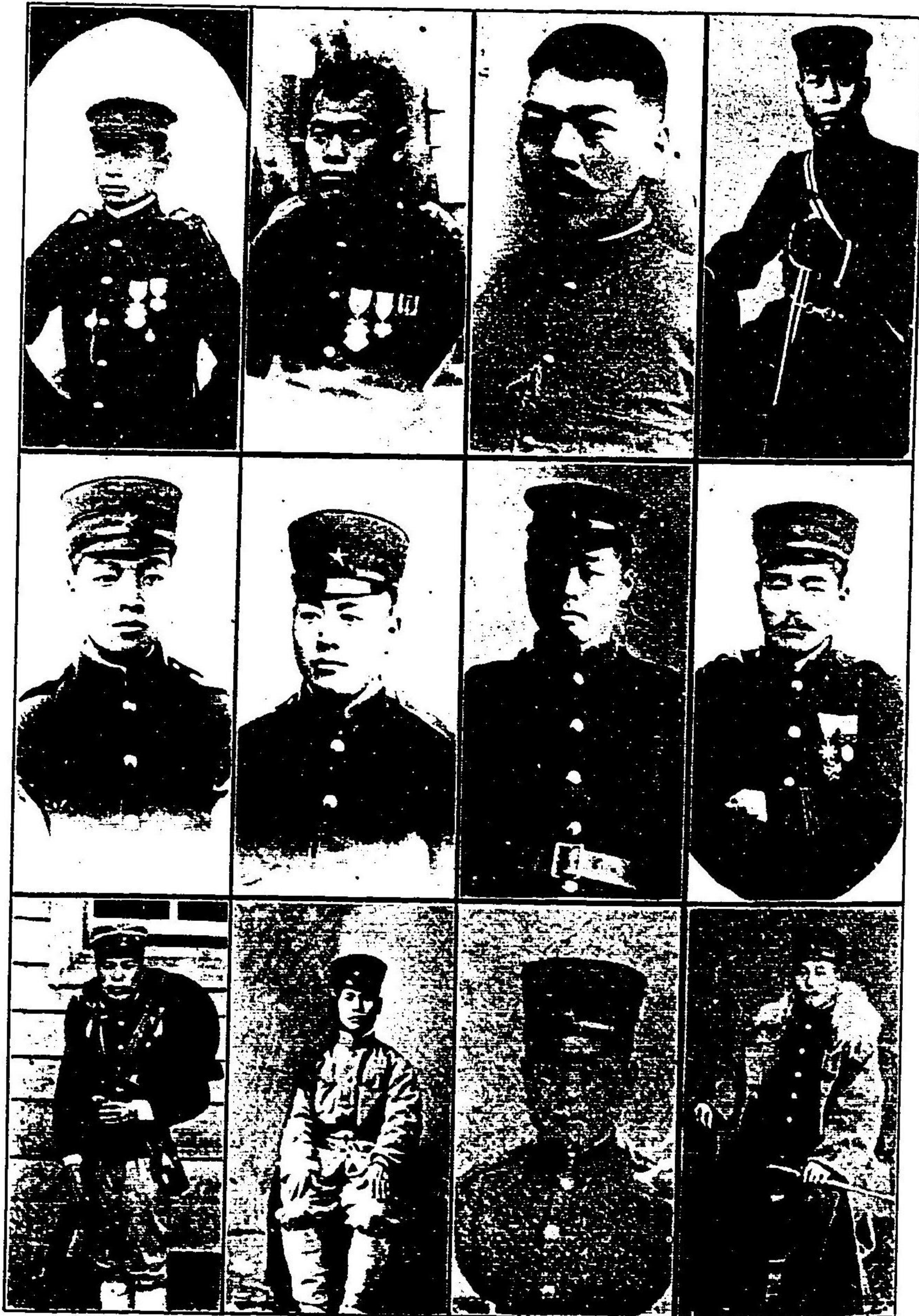
君三五七峯小君耶十九塚飯君一儀櫻根關君耶次木鈴
 君次宮田杉君耶十金川早君三熊口野君造西井新
 君耶三金口關君作清戶船君治又岸君耶太鍋保久小



松 瀧 山 神 君 三 多 田 吉 君 英 處 田 福 君 樹 瑞 本 松
 八 清 山 小 君 藏 熊 山 神 君 吉 長 田 森 君 耶 松 下 眞
 君 樹 重 本 松 君 耶 一 保 久 小 君 平 喜 輔 田 君 松 富 部 服



君 耶 十 下 森 君 大 太 彦 井 坪 右 耶 五 田 村 君 平 幸 畑
 君 平 甚 畑 池 君 一 興 非 平 君 耶 太 茂 永 須 君 耶 五 榑 口 山



大石 知川 惣若 七吉 田武 島藤 金三 利五 作耶 榎松 田本 陸盛 平吉 君藏 武宮 田崎 金寅 作吉 君七



篠田 崎野 仙宮 松吉 君耶 宮吉 島野 敏春 池太 君吉 宮小 澤口 米之 照安 吉照 野林 上早 野川 三友 次茂 君保



野須川 義常 君七藏
 市岡 須 川野 宗藤 君吉
 柿坂 君作 沼本 君吉
 衛周 君三 平君 坂平
 本井 沼 重井 吉三
 君三 君平 君重 君吉



大島 新 君次 田代 千代 君太
 信 口 田 茂 君好 君太
 信 口 田 茂 君好 君太
 信 口 田 茂 君好 君太



君緒 度上 井君 助藤 柳高 君平 源崎 篠君 作春 原栗
 君助之 川市 君耶三 岩田 竹君 耶太 芳川 根戶 君信 安川 石
 君耶重所 藤安 君松 福木 鈴君 衛兵 佐木 青君 耶五 惣中 田



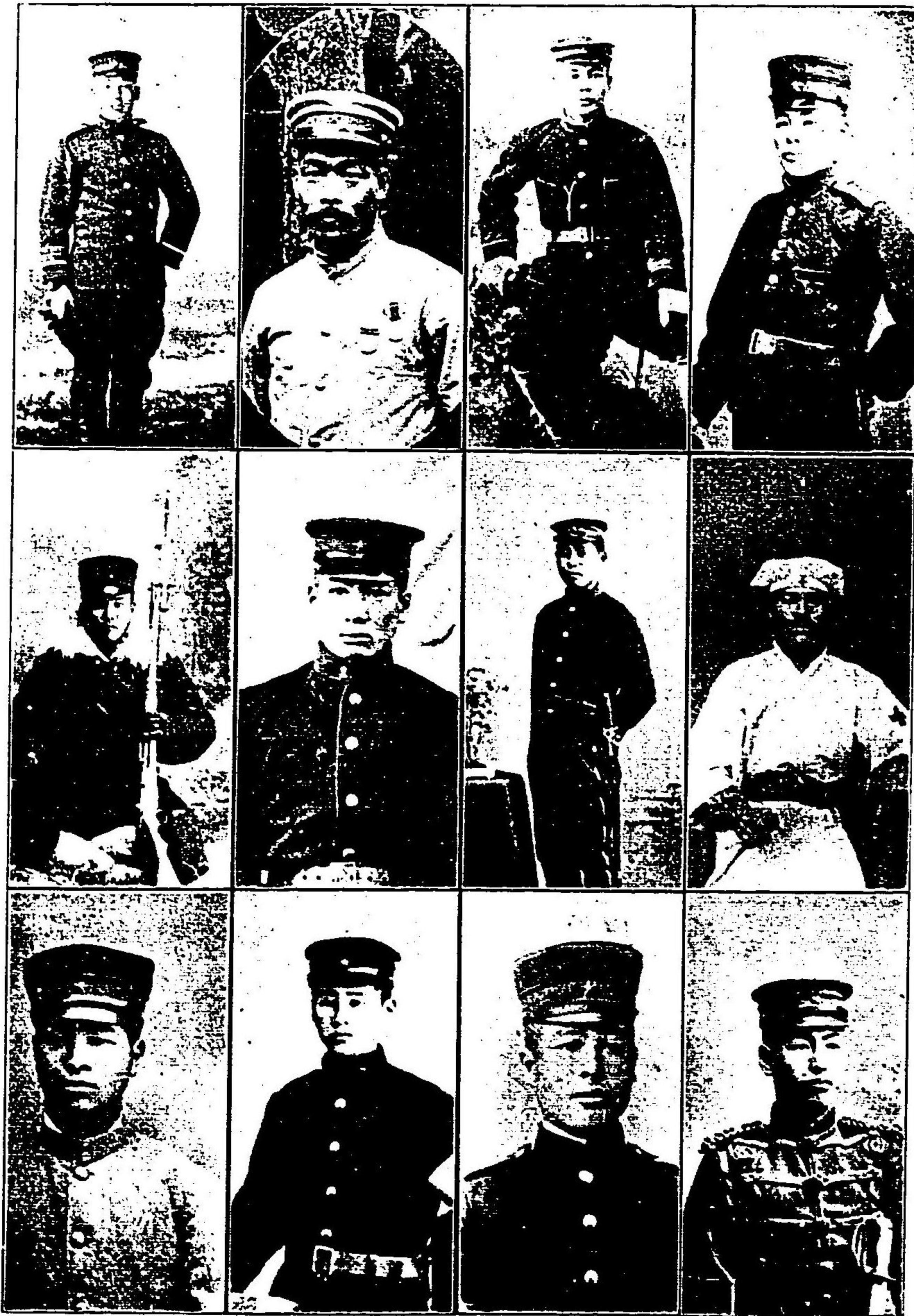
君松 福川 吉君 松福 山下 君藏 高見 淺君 松清 松兼
 君吉 榮本 松君 吉政 根關 君耶重 泰田 吉君 耶太 士富 田響
 君耶五 光川 中君 耶太 幸岸 根君 耶五 泰橋 高君 助之 甚藤 遠



高橋山 橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山 高橋山



高田山 島口 高田山 高田山 高田山 高田山 高田山 高田山 高田山 高田山 高田山 高田山



松新佐 本井藤 支市三 弘大次 山島新 口田井 武文三 平文三 君平三 根田橋 岸中橋 長富清 平三松 栗生新 生田井 三友井 君吉三 君那十



島保久 野田原 福要治 次作平 君那三 錦橋森 井本川 岩彦寅 吉治吉 君吉三 神井町 田上田 一孫又 君那八 秋關澤 山口渡 山義賢 義賢太 君治太



杉田友吉 田村吉之助 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎
 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎
 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎 田島次郎



大塚多惠八 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治
 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治
 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治 野政治



石大谷 升 健 大 健 太郎 松 森 篠 本 田 崎 六 長 喜 平 次 君 一 宮 吉 能 島 野 見 充 長 微 三 平 君 吉 木 加 野 村 藤 恒 定 寅 利 吉 君



須田 石 川 芳 三 近 太郎 君 大 派 加 野 田 藤 之 助 吉 順 助 吉 平 布 瀧 新 施 瀨 井 學 喜 伴 次 君 七 平 新 山 井 一 井 口 益 吉 君



君作 要 村 中 君耶三宇 杉 古 君耶五增 于 全 君大 種 根 關
 君平 孝 杉 古 君耶三藤 崎 松 君耶一和 崎 松 君助之喜 木 鈴
 君耶次宗 島 長 君治 昇 澤 黑 君吉 藤 木 苗 君吉 陽 田 嗣



君吉 金 倉 小 君耶五岩 田 恩 君作 柳 崎 松 君吉 春 田 恩
 君耶太覺 子 金 君藏 富 崎 松 君藏 忠 島 長 君平 武 本 野
 君平 豐 藤 加 君吉 米 村 中 君吉 熊 高 小 君耶三喜 野 大



大内武 明田井 又田井 平次克 君 大内武 中内武 島田井 嘉六 君 藏三 野口山 大井 喜久 一久 君 野口山 君 大井 君

自序

劍光閃々天日を貫ぬき、砲聲殷々地軸を覆へし、海陸並び進んで連戦連勝、恰かも猛虎の群羊を驅るが如く、世界の強國をして全く顔色無きに至らしめ、有史以來未曾有の光榮を博したるものは、實に去る明治三十七八年の日露戰役に於ける我が陸海軍の勇將猛士ならずや知るべし。アラブ民族も亦我が大和民族の勁敵には非らざる事を、然りと雖も凡そ世に恐るべきは戰勝の後、國民華奢の風に流れ、輕薄の俗に陥り、武を忘れ、文に偏するの弊より甚しきはなし、武備夫れ何ものぞ、徒らに力を角し、劍を闘はずの謂に非らず、要は只各自の精神をして常に武裝せしむるにあるのみ、士人的氣概を保たしむるにあるのみ、此の精神を除きては他に大和魂なく、此の氣概を棄てしは又日本國あるなし、曾て聞く、吉田松陰の師村田清風、居常武内宿禰神孫を抱くの圖を掲げ、當年國家多難、宿禰が忠勇の志存する所を想ひて

涙數行下ると云ふ、在朝の臣宿禰の精神ありて甫めて國家を泰山の安きに置き、在野の民清風の氣慨をりて、甫めて外列國と對峙し得べし、吾人此の書を編するの意亦啻に征露の紀念にのみ止まるものならんや、實に茲に見る所あればなり、讀者幸ひに清風宿禰に對するの心を以て心と爲し、居常此の書に向つて發憤興起する所あらば編者の満足何ものか之れに如かんや

明治四十壹年三月世界の

風雲急にして電光僅かに

天の一方に没するとき

編者識

謝言

一本書題して征露紀念勇士之書翰集と云ふ、蓋し主として日露戰役中戰地より勇士の發送せる書翰を蒐集し、之れに寫真小傳を添附して發行せんとせしが爲めなり、然るに戰役中の書翰は已に逸散して收拾すべからざるものあり、又直接戰役には從事せざるも所謂後援者として君國の爲めに盡碎し戰地よりの書翰丈けを欠ける者あり、遺翰無き故を以て如上の人々を本書に掲載せざるは編者の特に遺憾とする所なれば、苟くも日露戰役に關し國家に功勞ありと認むるの士は其の書翰の有無に關せず、其の寫真小傳の存否に論なく、將又出征者と出征せざる者とを問はず、悉く之れを本書に網羅する事としたれば書名と其の内容との多少符合せざるものあり、讀者請ふ幸ひに之れを諒せよ

一日露戰役後諸種の出版物非常に増加し各印刷所の繁忙名狀すべからず、故を以て本書の如きも出版着手以來荏苒二ケ年の永きに及び、印刷所を換ゆる事二ヶ所、編纂者、校正者等の交代する事亦一再にして止どまらず、隨つて印刷、編纂等の體裁も區々に亘り、或は各位の寄稿を其の

儘に編入せるあり、或は編纂者の思ひ通りに執筆せるあり、遺憾渺なからざれども前述の如き次第なれば偏に讀者の寛恕を希ふのみ
一本書出版に際しては各町村役場吏員、並びに各町村名譽職員、及び各部
落軍友會有志等の非常なる盡力を恭ふせり
記して以て各位に鳴謝す

編者識

征露 紀念 勇士之書翰集 比企郡之部

故陸軍輜重輸卒

吉田武助君

君は比企郡大河村大字飯田十一番地吉田伊勢

五郎氏の二男明治十三年三月生明治三十三年出兵滿期
歸休後三十七年二月十日勳員命により近衛師團第五補
助輸卒隊へ編入三月廿三日征露の軍に従ひ宇品港出帆
二十七日韓國鎮南浦上陸全月廿九日糧秣を積載し鎮南
浦發江西を経て四月八日永柔養永柔淵川間の輸送に従
事四月廿日永柔發安州義州を経て五月八日清國九連城
着全月十日全地出發全日安東縣着全所より老古洞間の
輸送の任に當り克く其任務を遂行す六月廿二日安東縣
發鳳凰城を経て廿六日林家臺着全所より通遠舖に輸送
す七月廿日彈藥を積載し雪裡店發晝夜兼行にて通遠舖
に着す八月十七日より廿七日に至る迄五峯觀に於て摩
天嶺の險坂を擔送勤務に従事す八月廿八日より十月十
三日迄甜水站に於て黃泥崗及河欄溝の二線に輸送す十
月十四日孫家寨に至り湯河沿大平間の輸送に従事し十
二月より木炭製作勤務に従事す三十八年二月廿六日灰

吉田武助君

蜜に至り銀匠係及八家事間の輸送に従事し四月十七日
高力村に至り第一軍陣沒者の建碑工事に従事す五月廿
日唐家屯に至り前全斷建碑工事に従事せり六月廿四日
鐵嶺着全日滿州軍倉庫支庫附被命全所に於て糧秣集積
整頓及雜役に従事す九月十日八里庄に於て腸窒扶斯に
罹り鐵嶺兵站病院に入院全月廿九日終に病没す三十八
年十一月廿日特別賜金貳百貳拾圓及び明治三十八年十
二月十二日遺族扶助料年額金參拾圓を賜はる
左掲は遺言書と家郷宛の出翰なり

遺言書

第一師團第五補助輸卒隊補充兵

陸軍輜重輸卒

吉田武助

右明治三十八年九月廿六日病症増進の兆あるに依り遺
言の有無を訊たるに
一、遺言は何もありませんと答へたり
右證明候也

明治三十八年九月廿九日

大木鶴吉君

鐵嶺兵站病院附

陸軍二等軍醫 龜山唯吉
陸軍三等看護長 西崎巳之衛
陸軍看護病人 清原寅之助

拜啓陳者其後は意外の御疎音に打過ぎ候未だ餘寒難去候處御貴家には一同益々御揃ひ恙なく御座被遊欣重の至に奉慶賀候次に不肖遼陽を隔て、約七里なる湯河沿兵站部附近の孫家寨と云ふ村落に本隊と同時に宿泊致居酷烈なる寒冷を凌ぎ辛酸勞苦を何の意とせず日夜職務に勉勵し其れより井泉屯と云ふ村落に分遣せられて薪炭の製作に従事し冬營の準備殊更多忙を極め其れ故御地へも御伺ひ兼萬事行き届かざる處も可然御許し被下度右翼軍方面に向て前行軍の豫定にて廿三日早朝の出發に相成候又到達の上は後便にて委細の情況御報道申上べく候不肖も最早軍隊の嚴正なる下に服従すると一ヶ年歳月は流水夢の如くなり上陸以來一回の病症にも罹からず身体健全に軍務罷在候間御安意被下度先は御報道旁御伺ひ迄願首

第一師團第五補助宮澤隊第二小隊七分隊

比企郡大河村大字飯田

吉田 鉾三郎殿

吉田 武助 拜

故陸軍歩兵二等卒

大木鶴吉君

君は比企郡大河村大字青山五拾貳番地大木竹

次郎氏長男明治十年六月の生明治三十一年三月一日教育召集の爲め歩兵第三聯隊第九中隊へ入隊五月三十日滿期歸郷三十七年八月三十一日勅員令により歩兵第三聯隊第四中隊へ編入九月廿二日征露の軍に従ひ宇品港出帆廿六日清國盛京省青泥港上陸廿七日歩兵第三聯隊第九中隊へ編入以來各地に戰闘十一月廿六日より旅順背而寺兒溝北方高地攻撃の際中隊は前面の敵に對し牽制射撃をなし敵は僅かに應射せしのみ廿七日聯隊は豫定の如く三里橋北方高地を占領す此日君は百〇一高地南方に於て敵の小銃弾を蒙り左腹部より右背部に貫通銃創を受け甲子山屯第一師團野戰病院に入院治療中全月三十日傷死す三十八年四月七日特別賜金四百四十圓を賜り三十八年六月十四日遺族扶助料年額金四十五圓を賜はる

左掲は中隊長より氏の遺族宛の書翰なり

拜啓本職は茲に熱き同情を以て鶴吉殿の訃報を呈る

の止むを得ざる事に御座候段御賢察被下度候却説鶴

吉殿は本年九月二十七日補充として當中隊へ編入相

成身体強健にして諸勤務熱心只管職務に服し居候然るに去月廿六日より寺兒溝北方高地攻撃に於て中隊は前面の敵を牽倒するの任務を受け専ら敵と對戰中廿七日氏は不幸にも敵の小銃弾を蒙り左腹部より右背部に貫通銃創を受け候に付早速手當を施し入院せしめ候處全月三十日午前十時に至り第一師團第四野戰病院に於て遂に名譽の戰死を遂けられ候嗚呼今や戰局大に進捗し前途尙重要の秋に至り此勇敢なる氏を失ふ誠に愛惜に不堪候依て本職以下一同深厚なる同情を表し申上候御遺族様には定めし御驚嘆被爲遊候事と奉推察候へ共未曾有の國難に際し君國の爲め一身を捧げし事なれば本人の芳名は永く日露戰史に膾炙り且つ御家門の御名譽なれば宜敷御賢察被下度候先は亂筆ながら右戰死の御通知迄如斯に御座候草々敬具

明治卅七年十二月六日

第九中隊長

坂部 正 健

大木すい殿

故陸軍歩兵上等兵勳八等

鯨井清作君

君は比企郡大河村大字腰越百九十四番地鯨井

鯨井清作君

淺次郎氏の長男明治十六年二月生三十六年十二月十五日歩兵第十五聯隊第五中隊へ入隊三十七年三月七日勅員下令歩兵第十五聯隊補充大隊第二中隊へ編入四月十六日第四中隊に轉入九月廿一日歩兵一等卒十一月十四日出征の途に上り宇品港出帆全月十八日清國盛京省青泥窪へ上陸十九日歩兵第十五聯隊第五中隊へ編入十一月廿七日歩兵上等兵拾一月廿八日寺兒溝西方約千米突高地に於て戰闘の際腹部貫通銃創を受け戰死す功により勳八等瑞寶章を賜はる三十八年四月十四日特別賜金五百二十拾圓全年六月廿七日遺族扶助料年額金五拾五圓を賜はる

左掲は實父宛の書翰なり

拜啓其後は無事罷在候間御安心被下度出發之儀は宇品港にて明十四日上船の筈に付右様御承知被遊度何れ彼の地へ上陸次第書面差出可申候過般而會之節御拜受仕候金圓道中以來日用品被服等一切仕度仕最早入用の途無之に付金拾圓爲替に致し御送付申上候間此狀若次第小川郵便局に於て御受取御祖父様の御酒料とも致留守中の御勤勞を御慰め被下候様願上候折角の襦袢チヨツキ等も軍隊より充分なる胃寒衣相渡り候に付御返送申度候得共是迄持參の厚意に對して

岡本軌一君 松本仲藏君

彼地に捨るとも持參可任心算實に澤山の持ち物で誠にあきれば候くれども見儀に於ては決して不自由無之に付御心配被下間敷候先は要用のみ餘は後便に萬々可申述候也

明治三十七年十一月十三日

廣嶋市猿猴橋町中川兼吉様方

清 作拜

父 上 様

尙重々も申上候得共私に於ては不自由無之と確信に付一寸も御心配あらざらん事を申添へ候也

故陸軍工兵上等兵功七級勳八等

岡本軌一君

君は比企郡大河村大字腰越八十八番地岡本喜三郎氏の三男明治十六年四月生明治三十六年十二月一日第七師團工兵第七大隊第二中隊へ入營三十七年十月十四日一等卒全年八月七日勳員令により工兵第七大隊第二中隊へ編入十月廿四日征露從軍の爲め旭川屯營出發青森を経て十一月七日大坂着全月十五日大坂出帆廿日清國青泥窪上陸全月二十一日より第三軍旅順包圍軍に参加す全月二十日より二〇三高地攻撃に參與し十一月三十日赤坂山戰鬪の際右胸部右上肢右上下腿爆裂彈

九日廿日全所南方高地第一堡壘附近に於て戰鬪拾一月廿六日歩兵上等兵全日松樹山補備砲台戰鬪の際決死隊に選拔生死不明なりしが三拾八年一月四日死体發見せられ頭部貫通銃創により戰死せられたるを知る功により功七級金致勳章並に年金百圓及勳八等旭日章を賜はる三拾八年五月二日特別賜金五百貳拾圓下り三拾八年八月四日遺族扶助料年額金五拾五圓を賜はる兄鶴藏君も出征し奉天附近轉灣橋に於て戰死功七級金致勳章を賜はる別項戰歴に詳なり一家二人出征して共に戰死せらる家門の名譽と共に又悲惨の極なり

左掲は家郷宛の書翰なり

拜啓益々御清穆奉大賀候陳者仲藏殿には去る拾一月廿六日特別隊編成の際當中隊の決死隊に率先して應せられ松樹山補備砲台附近に於て生死不明と相成候處本日死体發見戰死と確定致誠に残念至極に存候乍去此事たるや豫め期したる事も有之且つは職務を全ふし名譽なる御戰死に付御諦め有之度候就ては早速其筋へ武功の恩典稟申致置候に付日ならず其速に相成候事と存候又遺骨も直に御送付可申候間麻布歩兵第三聯隊補充大隊より御受領相成度候小官は茲に熱淚を注ぎて同情の感を表し併せて戰死御通報旁御

松本鶴藏君

(四)

創負傷金州應下曹家屯定立病院へ入院全年十二月九日全所に於て病没す功により功七級金致勳章並に年金百圓及勳八等旭日章を賜はる三十八年五月三十一日特別賜金五百貳拾圓全年八年廿五日遺族扶助料年額金五拾圓を贈らる實兄孝一君も出征し戰功を立つ大なり別項に戰歴あり

故陸軍歩兵上等兵功七級勳八等

松本仲藏君

君は比企郡大河村大字腰越四十三番地松本國藏氏四男明治十一年五月生明治三十一年十二月一日歩兵第三聯隊第四中隊へ入隊三十三年十月廿一日台灣守備步兵第一大隊へ編入廿四日神戸港出帆廿八日台灣基隆港上陸全日第四中隊へ編入す翌三十四年九月三十日台灣守備交代基隆出帆十月五日神戸港上陸全八日復隊第四中隊編入全年十月三十一日飯休除隊三十七年三月六日勳員令により十一日歩兵第三聯隊第四中隊へ入隊四月廿三日征露軍に従ひ字品港出帆五月十一日清國盛京省猴兔石へ上陸十六日陣家屯附近に於て戰鬪廿六日金州南山に戰鬪七月廿七八日双台灣附近に於て戰鬪同月廿九日脚氣病の爲め第四野戰病院に入院八月十四日全治退院八月廿日廿一日水師營附近に於て戰鬪九月拾

吊詞申上候謹言
明治三十八年一月四日
歩兵第三聯隊第四中隊長
陸軍歩兵大尉 伊達新一
松本國藏殿

故陸軍歩兵上等兵功七級勳八等

松本鶴藏君

君は比企郡大河村大字腰越四十三番地松本國藏氏の二男にして明治五年六月生明治廿五年十二月一日歩兵第十五聯隊へ入隊二十七年八月三十日勳員令野戰隊に編入九月二十二日日清戰役從軍の爲屯營出發二十四日廣島着十月十五日字品港出帆二十四日清國盛京省花園河口に上陸十一月六日金州攻撃に參與十一月二十一日金州に於て戰鬪十二月二日歩兵一等卒二十八年一月二十日乃木少將の率ゆる混成旅團に従ひ北進一月十日蓋平城攻撃に參與二月二十四日大平山及東、西七里溝庄に於て戰鬪三月八日營口攻撃に參與九日田庄台に於て戰鬪五月二十三日凱旋の爲め大連出帆二十六日字品港上陸二十九日屯營に歸着十一月三十日現役滿期除隊功により金二十五圓を賜はる卅七年八月十四日勳員令により第七師團歩兵第二十八聯隊の補充大隊第

(五)

四中隊に編入二十八日歩兵第二十五聯隊に轉入十月二十一日征露從軍の爲め屯營出發二十三日室蘭港出帆二十四日青森上陸二十七日全所乘車三十日大坂着十一月十三日大坂港出帆二十日清國青泥窪上陸第三軍に編入廿六日松樹山攻撃拾二月一日より三日迄赤坂山に於て戰闘五日標高二〇三高地に於て戰闘全地占領二十六日渡邊山戰闘の際負傷野戰病院に入院三十八年十一月五日全治退院復隊二月二十八日奉天附近阿司牛に於て戰闘三月二日三日達子堡に於て戰闘三月七日轉灣橋附近の戰爭に於て敵彈の爲め口腔より後頭部に至る貫通銃創により戰死す全上等兵に進められ功により功七級金鷄勳章并に年金百圓及勳八等旭日章特別賜金五百廿圓遺族扶助料年額金五十五圓を賜はる實弟仲藏君出征戰死せしことは前項にあり

左掲は家郷宛の書翰なり
拜啓陳者時下春氣の候には有之候へ共寒氣嚴敷凌兼候處貴家皆々様御揃御壯健の由目出度奉賀過日は弟仲藏の戰死御見舞狀御送り被下有難御禮申上候降て遷生儀無事軍務に従事致居候間御休心被下度候去る一月二十二日旅順口前方鳩灣附近瀋家屯を出發し永城子に一泊翌日金州城北方三里方に滞在二十四日東

雲より寒風烈し朝晝の區別なく腮には氷を結び手足は凍へ四方の氷雪云はん方なく蓋平城迄は實に行軍に困難當地に滞在其際弟仲藏の戰友に面會し戰死の模様委細承知仲藏の敵思ひ知れと平日の士氣は百倍層一層奮戰の心を生し明二月十五日敵の騎兵中立を犯し八千餘騎勇を振ひて汾河附近に來襲し砲聲一發もの見せ呉れんと第一師團と第七師團は左右に分れ曉月を破つて彼の地に向ひ前進したり其夜は汾河右岸の村落に露營翌日前進敵は我軍の勇勢なるを覺り終に退却せり第一師團は敵に相遇し敵は僅に抵抗したれども進退極り敗進せり是に向て追撃す敵は死体約六十名斗り殘し退却せり我支隊は張泥堡に歸る是れより何れへか出發の模様あり何れ後に讓る先は御禮旁々御報知迄草々

明治三十八年二月二十日
出征第七師團
歩兵第二十五聯隊第六中隊
松本鶴藏拜
比企郡大河村大字増尾
初野佐吉様

故陸軍歩兵伍長功七級勳七等

荒井光五郎君

君は比企郡大河村大字青山千五百九十九番地戸主明治七年二月生廿七年十二月一日歩兵第十五聯隊補充大隊第二中隊へ入營二十八年三月二十五日日清戰役補充として宇品港出帆四月一日清國大連に上陸全十九日民家店に於て第四中隊に編入五月二十三日凱旋大連灣出帆二十六日宇品上陸二十九日屯營着功により金二十五圓及從軍紀章を賜はる全年十二月四日一等卒二十九年五月十二日威海衛守備に編入せられ全月卅日宇品港出帆六月二日清國山東省碼頭街上陸全地守備明治三十年五月十一日威海衛守備交代全所出帆十六日横濱着港全日屯營着隊全年十一月三十日滿期除隊三十七年三月九日動員により後備歩兵第十五聯隊第三中隊へ編入六月二十日海外出征の爲め宇品港出帆二十五日清國三官廟上陸全月二十八日後革鎮堡七月四日警急に應じ全月五日亂泥橋東方高地に於て歩兵第四十四聯隊第十一中隊と交代第一線防禦地に就く七月二十六日より二十八日に至る三日間旅順背面南分山溝高地附近に戰闘三十日榮城子附近に戰闘八月十三日より十五日に至る六日間曲家屯附近に戰闘十九日鉢卷山新砲臺

前項攻撃の際顔面負傷二十日第四野戰病院に收容九月二日本隊へ復歸十一月二十八日大平溝東南方標高二〇三高地攻撃に當り勇進突撃遂に腹部貫通銃創により戰死功により功七級金鷄勳章并に年金百圓及勳七等旭日章特別賜金六百拾圓遺族扶助料年額金七拾圓を賜はる死して餘榮ありと云ふべし
尙左記威狀と吊詞等に徴るも當時の戰功の如何に大なりしかを知るに足らん

感 狀
後備歩兵第十五聯隊第三中隊
陸軍歩兵伍長 荒井光五郎
明治三十七年十一月二十八日二〇三高地頂山頭歩兵線攻撃の際分隊を率ひ猛火を冒して邁進し敵と格闘するもの數刻以て敵壘の占領を容易ならしめ身數創を被りて死す其動作勇敢壯烈功績顯著なりとす
明治三十七年十一月二十八日
第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵乃木希典
吊 詞
陸軍歩兵上等兵 荒井光五郎
右は今回未曾有之義戰に方り當隊に編入爾來勤務勵

精良く其分を盡し其結果良好を告げ中隊の成績上大に見る所あり以本職の深く感賞する所なり出征後數回の戦争に於て奮戦衆に秀ひて殊に十一月二十八日清國盛京省大平溝東南方標高二〇三高地攻撃に當り勇進突撃中遂に名譽之戦死を遂げたるは痛惜の至に不堪然れ共該高地たる敵か持て以て鎖鑰とする險要にして襲に九月中中隊は他隊と協力し攻撃せしも防禦工事の頗る堅牢なると抵抗の極めて頑強なりしとに因り終に其目的を達する能はざりき爾後困難に耐へ日夜攻路作業に従事し竣工と共に十一月二十七日より十二月の五日に至り好機に投し敵の抵抗を排して遂に全く該地を占領し軍の目的を達成するの時期を促進せしむるに至りしは上等兵等の奮戦分を盡し邦家の爲めに斃るゝの致す所其名永世に香はし以て瞑すべきなり茲に哀悼の情禁する能はず吊詞として一辭を呈す

明治三十七年十二月十二日

後備歩兵第十五聯隊第三中隊

陸軍歩兵大尉 岡部 義雄

埼玉縣比企郡大河村

杉田助左衛門殿

陸軍歩兵二等卒勳八等

大木房次郎君

君は比企郡大河村大字青山四十五番

地農大木兵吉氏の二男明治十四年十二月生明治三十四年補充兵役として歩兵第十五聯隊第八中隊に入營す全年五月三十日教育済歸郷全三十七年十二月二十二日勳員令により歩兵第二十六聯隊補充大隊へ入隊す全年二月二十九日露戰役の爲め屯營出發室園青森を経て三十八年一月八日廣島に着す全年七月十七日清國青泥窪に上陸全月二十六日八中隊へ編入全二十七日全地出發復州蓋平を経二月九日海城縣騰教與堡に着す全月二十七日より奉天總攻撃に參加す三月七日より九日迄奉天省家屯守全月十日北陵附近の戦闘に従事四月二十五日黃家嶺に於て疾病に罹り十月二日在馬家屯第七師團第一野戰病院入院數牛堡玉牛堡浦子義道屯奉天遼陽を経て全年十一月十六日大連兵站病院に着す全月二十一日大連出發全月二十五日宇品上陸全月二十九日廣島病院に入る六月四日東京戸山病院に入る全年七月十六日旭川近文分院に入院す三十九年一月十一日歩兵二十六聯隊補充大隊第二中隊に編入全月十三日陸軍服役條例第百四十七條に依り戰役免除歸郷功に依り勳八等旭日章

及金百圓を賜はり又兵役免除により賑恤金を賜はる左揚は家兄宛の書翰なり

久しく御むさたしました最早時候も春めきました父上や母さま御初めとして御家内皆な無事との事でます安心自分は奉天や三台子の戦闘後は石佛寺と云ふ村落に於て滞在し身体保養中ですから安心成下さい次に數日の戦にのぞみましたが幸の事に一發の敵彈もうけず仕合の思をなし滿州の野の一大戦の事は皆細に申上度とは思考しましたが筆や紙も十分なく更に目下は非常に一生懸命の時が來ましたりの懸命は大君へ捧げましたからは

胸のむら雲この身は風になつて晴すも國の爲

御笑評成下さい

目下内地は櫻の花が咲くならんと古郷を思だし圓光寺のふくべ山の花見は定めし盛會ならんと昨夕あたりは浮か〜と小川町〇〇家の〇〇と全家の〇〇子の白首連が千鳥足の出禮助とさ〜折さげて又四五人の職人風の男ベラ棒メエの一言交りで一舛のあき梅豆しぼりとやらの手ぬぐいにて首にく〜り附け又三四人の商人風の一群ビールの酔に之れらも見る影もなき其の他が〜と人聲しければ吾不知兩手をあ

田端義作君

げて歌へ初めければ戦友の久保田。君起き玉いどの一言に起きてピツクリ見れば野陣の露枕

達よて嬉しや恨みも晴れて

愚考當日〇〇村落に着し尙戦闘に加入散りて香の殘る大和の櫻かなと一會の勇氣を躍らし度然しながら日毎の新聞遠からず談判も初まりて平和の風吹き初むとの事イヤ失禮

明治三十八年三月末日

石佛寺に於て

兄上 大木芝吉殿

房 次 郎

陸軍歩兵二等卒勳八等

田端義作君

君は比企郡大河村大字腰越三十八番地田端太

郎氏の弟明治九年七月生明治二十九年補充兵として入隊三十年三月一日歩兵第三聯隊第一中隊へ編入三十二年五月三十一日滿期除隊三十七年八月三十一日充員召集に應じ歩兵第三聯隊第四中隊に編入九月十五日後備歩兵第十五聯隊第一中隊に編入九月二十二日露出征の爲め宇品港出帆九月二十六日清國ゲルニー港に上陸

(九)

十月二日第一聯隊に夜襲を受け其の際援戦す十月七日一七四高地に戦闘十月八日夜襲を受け應戦す十月十二日獨立下士哨中夜襲を受け應戦す十月十四日敵の作業中へ突戦す十月廿一日工事作業援護隊にて戦闘す十月二十八日工事作業援護隊にて敵の下士哨と衝突す後に逆襲を受けて應戦十一月十一日夜襲を受けて應戦す十一月廿六日二〇三高地突撃戦闘十一月二十七日清國盛京省二〇三高地攻撃の際敵の爆烈彈の爲め右眼右手首爆創を受け直に後送二十八日大盤家屯第三野戦病院に收容十一月二十九日將家屯定立病院に轉す十二月一日ダルニー病院に轉送す十二月三日清國ダルニー港出帆す十二月六日宇品港に上陸す十二月六日廣島第七病院に收容十二月十三日東京水川分院轉入三十八年一月十日歸郷療養として六十日間を命せられ退院す三月十日歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊に復隊す五月二十七日傷病再發の爲め高崎分院に入院六月二十四日東京澁谷分院に轉入七月三十日傷病に依り兵役免除全く右眼の視力を失ふ恩給年額金六十五圓を終身賜はり又功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる君の甥田端八十次君は砲兵中尉全新作君は砲兵上等兵其勳功は別項戦歴を見て知るべし

左掲は救護會宛の書翰なり

拜啓其後は御疎遠に打過ぎ候處益々御清榮の由奉拜賀候次に自分義不相變壯健軍務に執掌罷在候間乍憚御放念被下度候倍て此頃留守宅よりの通知に依れば貴會より御懇篤なる御救護を仰き居り候由千萬難有奉深謝候軍國多事の折柄然らざるも何かと御繁勞の處卒先御盡力被下候段實に感謝の至りに不堪候元より自分は國家の爲め一身を犠牲に供し居り候次第故家郷を顧慮する等の念は毛頭無之候へ共尙貴會の熱心國民後援の實を御擧げ被下度候尙一層後顧の憂なく充分奮勵致すべく候實に安堵仕候就ては邦家の前途は尙遠達にして今後幾何の御盡力を煩はすやら實に汗顔の至りに不堪候へ共尙分共宜敷御補助被下度偏に御願奉申上候

二伸 戦況も不日一大發展を來し大快報に接するならんと被存候其節は不及ながら軍人なるの本分を盡し以て貴會の優渥なる御思召の萬一を報する覺悟に御座候先は不敢取御禮まで草々

十一月二十六日

大河村

救護會御中

田端儀作

陸軍歩兵一等卒勳八等

梅澤卯之助君

君は比企郡大河村大字腰越百六十五番地梅澤榮之助氏の二男にして明治十二年七月生明治三十二年十二月一日現役歩兵第十五聯隊第六中隊へ入營三十三年九月十五日臺灣守備の爲め神戸港出帆二十一日基隆港に上陸守備歩兵第一大隊第二中隊に編入三十五年五月十一日定期交代の爲め其任務を終へて基隆港出帆全月十九日屯營者全日元中隊に編入全年十一月二十四日飯休除隊明治三十七年三月九日動員に依り歩兵第十五聯隊補充大隊第四中隊へ編入六月六日日露戦役従軍の爲め宇品港出帆九日清國盛京省猴免石に上陸進で南山の初陣に苦戦し續て七月二十六日前牧城駒附近に二十七日對面溝附近に二十八日双喜溝附近に三十日東西泥河子附近に於て戦闘す八月十三日より十五日に至る三日間礮撃溝附近に十九日より二十二日に至る四日間寺戸溝北方高地附近に九月十九日二十日の兩日は椅子山西方約二千六百米突に於ける地下八ナマイル形附近に於て戦闘す十一月二十八日二〇三高地及赤坂山激戦に参加す此際君は奮然敵の機關砲に向けて前進し終に左ト膺貫通銃創を受け野戦病院に入院す十二月四

日ダルニー病院に轉院十二月七日還送宇品港歸着全月十一日東京豫備病院に入院治療す爾來伊豆國熱海に轉地療養創傷依然として全治の見込なく三十九年五月六日兵役免除となる免除恩給金九十五圓を賜はりたる上功に依り勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる

診斷書の寫左の如し

診斷證書

第一師團歩兵第十五聯隊第七中隊

豫備陸軍歩兵一等卒 梅澤卯之助

右明治三十七年十一月二十八日清國盛京省旅順赤坂山戦闘の際左上膊下部外側より上膊骨肉體部に骨傷貫通銃創を受け各地病院を経て全年十二月十一日東京豫備病院に轉入當時創面治療せるも時關節運動を妨ぐるに依り轉地療養温浴按摩法并に全身麻酔の下に時關節伸屈術を試むるも効を奏せず現今上膊骨内體部骨傷に因せる骨質肥厚を貽し之に周圍軟部組織の一部癒著し爲めに時關節は屈曲妨げなきも伸展百二十度に制限せられ左上肢の運動を妨ぐるに因り軍人恩給法第十四條第一項即陸軍軍人傷殘疾病恩給等差例第二條第二款の乙症と診斷候也

明治三十八年四月十四日

小高近之助君

主任

東京豫備病院附陸軍三等軍醫 望月鐵太郎
再診

東京豫備病院氷川分院院長陸軍三等軍醫正皆川今朝
陸軍歩兵一等卒勳八等

小高近之助君

君は比企郡大河村大字青山六百十五番地戸主明治六年八月の生明治二十七年九月五日歩兵第十五聯隊補充大隊第三中隊へ入營全二十八年三月廿五日日清戰役從軍の爲め宇品港出帆四月一日大連港上陸金州を経て復州着凱旋の爲め六月六日宇品歸港六月九日歸休除隊十一月二十八日戰役の功により從軍徽章及金二十五圓を下賜せらる二十九日三月二十八日現役補充として歩兵第十五聯隊第五中隊に入隊六月十九日二等卒十月三十一日歸休除隊三十七年三月九日動員により後備歩兵第十五聯隊第四中隊に編入六月二十日日露戰役從軍の爲め宇品港出帆二十五日清國三官廟上陸七月二十六日より廿八日に至る三日間旅順背面南分山溝高地に戰闘三十日營城子附近に戰闘八月十三日より十五日に至る三日間曲家屯南方高地に戰闘十九日鉢巻山新砲臺前面攻撃に際し鐵條網脚下に於て戰闘中敵彈

の爲め左下顎部首管銃創を受け二十日第四野戰病院に收容せられ九月二日後送の爲めメルニ港乗船五日廣島豫備病院に入院十三日澁谷分院に轉院明治三十八年三月九日傷疾に依り兵役免除咀嚼の機能を失ふ爲めに免除恩給年額七十二圓を賜はる又功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる
左掲は何れも郷里の役場宛の書翰なり
謹啓先日之御書狀に依れば各諸君様には野生の傷所御憂慮被下候由難有感謝之至りに存候借て此前御報知之如く顎部首管銃創兼骨折なれば今に至り彈丸を切出す事を得ず開口不充分にして差指の出入を得るのみにして未だ食物を嚙む事出來ず粥食牛乳玉子等を給せられ居候へ共是非普通食を食す迄にと思居候へ共近々前の如に相成見込み無き事の事にて自分ながら實に残念の事と思考致居候先は一寸御通知申上候
一月二十八日
東京豫備病院澁谷分院三十九番室にて
小高近之助
埼玉縣比企郡大河村大河役場
小學校 援護會 御中

拜啓負傷後最早數ヶ月を経實に村内諸君様の御配慮に預り難有千萬奉謝候次に小生其後は一日も早く全治し不及ながら萬分の一も國恩を報せんと飽まで再征を希望致今日まで治療を乞ひ是非全治退院せんと思居候に最近橋本閣下及び當院長殿の親診を得たるに到底全治の見込みなきとの事にて遂に不具者の一部に加り實に絶望の至りに候へ共不得已得兵役免除の手續き中に付其筋より許可相成候へば近々の内免役歸郷致候に付不取敢御通知申候に付き何卒胸中御推察被下度候草々
二月二十八日
東京豫備病院澁谷分院三十三番室にて
小高近之助 拜

埼玉縣比企郡大河村村長

野口宜銳殿

外役場員御中

陸軍歩上等兵勳八等功七級

笠原才五郎君

君は比企郡大河村大字飯田二十二番地笠原文右衛門氏の二男明治十一年五月の生明治三十一年十二月一日歩兵第三聯隊第十一中隊へ入營三十三

年十月二十一日臺灣守備步兵第一大隊へ編入全日東京出發十月二十四日神戸港出帆十月二十八日基隆港着第四中隊へ編入十一月三日一等卒申付らる九月二十九日善行證書附與九月三十日臺灣守備交代基隆港出帆十月五日神戸港上陸十月三十一日歸休除隊三月六日動員下令全三月十一日充員召集に應し歩兵第三聯隊第十一中隊へ編入四月十二日出戰の目的を以て屯營出發四月廿二日宇品港出帆五月十二日清國盛京省張家屯上陸五月十五日夜家屯同十六日關家店附近に於て戰闘に參加全月廿五日金州全月廿六日南山攻撃占領に參加六月十二日及十三日利家屯北方高地附近に於て戰闘に參加七月廿六日二十七日廿八日牧場駒南溝及對面溝附近の高地并に同三十日土城子附近に於て戰闘に參加八月十九日二十日二十一日水師營附近に於て戰闘に參加九月十九日二十日旅順附近に於て戰闘に參加十一月二十六日松樹山西方畑地に於て戰闘に參加十二月一日寺兒溝西方約千米突高地に於て戰闘に參加十二月五日票高二〇三高地に於て戰闘に參加全十二月二十二日上等兵申付全三十一日松樹山に於て戰闘に參加三十八年一月二日旅順開城全月五日より全十二月迄老師尾半島守備全月二十二日水師營出發北進の途に就く全二月六日鞍山店着

笠原才五郎君

全十七日より房家店に於て一線勤務全二月二十六日より奉天攻撃に移り運動を開始三月八日三臺子前進攻撃の際左下腿骨折貫通銃創を受け道義屯第四野戦病院に入院平羅保奉天蘇家屯遼陽等の病院を経て四月六日大連病院に着全月七日内地後送の爲め大連出帆全月十日宇品港歸着全日廣島豫備病院第七分院へ入院全四月十九日東京豫備病院へ轉送全二十七日氷川分院へ轉入全七月二十七日轉地療養の爲め熱海へ轉療全九月九日東京廣尾分院に歸院全九月二十七日已故退院全日麻布補充大隊第六中隊に編入全日依傷痍兵役免除其傷項は左記の如し賑恤金百六十八圓を賜はり又功により功七級金鵄勳章并に年金百圓及勳八等旭日章を賜はる兄笠原忠太郎氏も出征して功あり其戰歴別項の如し

左掲は家郷宛の書翰なり
拜啓其後は打絶へて御無音申候段不惡御海容被下度候時正に陽春三月花笑へ鳥歌ふの好期節御兩親様には如何御消光被遊候哉定めて御老体彌々御健勝の御事と奉尋候過般遼陽北方約十二里を距て候房家店より一書差上候へ共御落掌被成候哉否哉げにや人生の禍福は糾へる繩の如しとか申候へ共小生事從軍以來御承知の通り誠に無事壯健にして軍務に従へ居殊に

世界の耳目を聳動致し候旅順攻撃の難關に當り候へしも露助のヒロ／＼玉にやられもせず壯嚴なる入城式に参加仕更に軍の一大飛躍に伴ふて奉天方面に行軍し二月二十八日未明より彌々前進攻撃に移り非常なる困苦欠乏に耐へ連日連夜殆ど不眠不食の狀態に在りて般々轟々たる砲火の中前後十一日間に亘り攻撃仕漸々敵を驅逐して其退路を扼せん爲め奉天背面なる鐵道線路に迫り花は櫻木人は武士散るを厭わぬ覺悟にて電光石火の勢を以て三臺子に向へ進撃中殘念にも左下腿骨折貫通銃創を受け一時は何小癩など立上り候しも遂に衛生隊の手を煩し九日午前一時道義屯第四野戦病院に收容被致十三日更に擔荷に依りて當平良堡病院に轉送せられ目下療養相加へ申候思へば仁慈天地を覆へ玉へる 陛下の大御代に生れて振古未曾有の戰役に從へ一死皇恩に報ゆるを得ざりしは誠に遺憾に御座候へ共終身磨滅すべからざる好箇の紀念を身に受け候しはせめてもの心やりに存候殊に負傷とは申ながら先々輕傷の分に候へば追々平愉可仕と存候へば必／＼御心配被下間敷候遠からず病院船に依りて内地へ後送相成べき摸稜有之候に付何れ歸國病院決定次第早速御報道可申上候先は遅延

ながら負傷入院の御通知迄御隣家諸君へも宜敷御傳聲被下度余は後便に萬機可申上候早々

明治三十八年三月二十日

奉天附近平良堡兵站病院にて

才五郎 拜

御兩親様

陸軍歩兵伍長勳七等

村木邦平君

若は比企郡大河村大字 増尾四十八番地延藏氏

の長男戸主明治九年六月生明治二十九年十二月一日歩兵第三聯隊獨立大隊第三大隊に入營三十年六月四日第三大隊第十中隊に轉入全月十一月一日一等卒全日上等兵被申附三十二年十一月三十日下士適任證并善行證書被附與三十二年十二月一日現役滿期豫備役編入三十六年七月二十二日陸軍歩兵伍長被任三十七年三月九日充員召集に依り歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊に編入全月十二月野戰第四中隊に轉入全月十四日第二小隊第六分隊長被命全月十九日出征の爲め屯營出發二十二日廣島着四月二十二日露戰役從軍の爲め宇品港出帆五月七日清國盛京省大沙河口に上陸翌八日斥候長として孫家屯に至り敵の乘馬歩兵騎を斃し馬具武器を鹵獲

木村邦平君

す之れ師團交戦の最先なり五月十六日全省十三里臺戰團に参加二十六日南山及附近に戰闘す七月二十六日より二十八日の三日間に渡り全省双臺溝及附近に戰闘す七月三十日全省泥河子に戰闘す八月十三日より十五日の三日間に渡り全省碾盤溝西南方高地(後に高崎山と名命す)に戰闘す九月十九日より二十一日に渡り全省旅順背面二〇三高地及附近に戰闘す二十一日二〇三高地散兵壕に突進の際負傷右下腿貫通砲彈破片創を受け第一師團第一野戦病院に收容十月四日内地還送の爲め青泥窪港出帆九日宇品港上陸廣島豫備病院第一分院に入院十一月二十二日 天皇陛下より御菓子料として金五圓下賜せらる十二月一日廣島出發四日東京豫備分院に轉入三十八年三月十七日千駄ヶ谷獨乙病院に轉入五月六日陸軍轉地療養所熱海温泉場に轉療六月十六日東京廣尾分院に歸院七月十五日澁谷分院に轉入十月十日傷項策定の上兵役免除歸郷其傷項は左記策定書の如し免除恩給年額金百圓を賜はる又功により勳八等旭日章及金三百圓を賜はる君の弟武三氏も出征して功あり別項戰歴に詳なり

診斷證書

第一師團步兵第十五聯隊第四中隊

陸軍歩兵伍長 村木邦平

右明治三十七年九月二十一日清國盛京省旅順背面二
○三高地戦闘の際右下腿貫通砲弾創を受け爾來各地
病院を経て十二月四日東京豫備病院澁谷分院に轉入
爾來加療の處現今右下腿下三分の一外側射入口同後
側射出口共に癰痕治癒すと雖脛骨神經損傷の爲ゆ右
足關節並第一乃至第五趾共に施緩無力にして自動的
足關節背屈運動九十度以上を營む能はず患肢は健肢
に比し瘦削すること下腿腓骨部を周測するに六仙米
にして常に役足狀跛行を營み該一肢の用を大に妨ぐ
るに由り軍人恩給法第九條第六項症と診断候也

明治三十八年十月一日

主任

東京豫備病院附陸軍一等軍醫 中島藤次郎

再診

東京豫備病院澁谷分院長陸軍二等軍醫正

醫學博士 保利真直

陸軍憲兵上等兵

淺見靜太郎君

君は比企郡大河村大字青山九十九番

地淺見勝三郎氏の長男明治三十年十月生明治三十三年

現役に召集され今年十二月一日習志野騎兵第十五聯隊

へ入隊全日第一中隊へ編入三十四年十一月十一日第三
中隊へ編入十二月一日一等卒申附らるる全月二十九日普
行證書附與三十六年十一月三十日滿期除隊豫備病院に
編入さる三十七年五月十八日動員下令騎兵第十六聯隊
補充中隊へ編入三十八年四月一日第一憲兵隊へ分遣を
命せられ今年七月一日卒業歸隊全十月十六日憲兵上等
兵全月十八日騎兵第十六聯隊を召集解除全十九日第一
憲兵隊へ補充召集横須賀憲兵分隊浦賀分遣所附を命せ
られ三十九年三月三十一日召集解除功により金五十圓
を賜はる

左掲の書翰は勤務先きより發信せるものなり

拜啓久々御無音に打過ぎ候段平に御容捨被下度候時
下秋冷之候に赴き候處役員御一同事務御勉勵の段奉
賀候降て迂生儀無事軍務罷在候間御心配被下間敷く
候扱本村の出征軍人の所屬武隊は何如なる編動有之
候哉御多忙の處御手数甚だ恐入候へ共御通報被下度
願上候次に小生出征致ざるは實に残念のみならず郷
里の諸君にも申譯も無之き次第に御座候乍然野戰隊
は奉天方面戦闘中なれば近き内補充の見込も有之候
其の時は三ヶ年間習し馬術にて滿州露兵を追拂ひ世

界第一の強國として郷里に錦を飾らん事を祈り居候

先は御伺迄余は後便に譲り候草々頓首

九月十七日

淺見靜太郎

村役場御中

陸軍看護手動八等

吉野治吉君

君は比企郡大河村大字飯田三十七番地吉野兼

三郎氏の弟明治十二年四月生三十年九月東京慈惠醫院
醫學校へ入學三十二年五月醫學開業前期試験及第三十
二年徴兵現役看護卒となり今年十二月一日歩兵第二聯
隊第十一中隊へ入營三十三年三月三十一日教育召集滿
期歸休三十四年七月醫學校卒業三十五年四月一日豫備
役全月醫學開業後期學說試験及第三十七年三月十二日
動員により第一師團軍醫部へ召集全日第一師團衛生豫
備員へ編入三十七年五月三十日露戰役從軍の爲め宇
品港出帆六月六日清國蘆大澳上陸六月八日金州着六月
十日より金州兵站病院開設手術室に勤務六月二十五日
閉鎖七月二十四日より七月三十一日まで後革鎮堡定立
病院勤務八月一日より九月二十四日までタルニー(大
連)兵站病院第二分院手術室勤務九月二十四日より山
瀾堡定立病院手術室勤務十月廿六日第一師團第一野戰

病院へ配屬換を命せらるる全日より大東溝に於て野戰病

院手術室勤務十二月十七日閉鎖三十八年一月八日旅順
口衛生委員助手として出張アムール及タウレット海軍
病院スオーズネ赤十字病院に於て監督醫官の助手勤務
全月十七日復歸一月二十日洪家溝出發二月四日城島堡
着全月六日騰鷲堡に至り患者療養所開設勤務全月十日
閉鎖城島堡へ復歸二月十九日地口子に於て舍營病院開
設全月二十七日閉鎖全月全日より奉天附近の戦闘に參
與三日三日七工臺に於て野戰病院開設手術室勤務全月
九日閉鎖全月十日上浦河に於て野戰病院開設十一月閉
鎖三月十七日徐家窩棚に於て舍營病院開設四月十一日
閉鎖病毒研究室勤務全月十二日馬家孤山子に於て舍營
病院開設病毒研究室勤務五月三日閉鎖六月十一日新城
堡舍營病院開設病毒研究室勤務(七月四日より全月十
七日まで大泉眼舎營病院へ出張赤痢病原研究助手勤
務)七月二十九日閉鎖八月十二日大泉眼舎營病院開設
病毒研究室勤務八月二十六日陸軍看護手申付手術室兼
務三十九年一月十三日閉鎖一月廿二日大連出帆二月二
十五日宇品歸着二月二日東京歸着二月六日復員に付召
集解除全日衛生部下士適任證書を授けられ五月醫學開
業試験に及第す明治三十九年四月一日動八等旭日章及

金百五十圓を賜はる

左掲は戦地勤務中の書翰なり

去月二十日御投函の貴墨昨十四日遼陽の西南方餘り遠からざる地に於て拜見致し候前以て御依頼申置候試験願書今回御差出し被下候由戦地より突飛の願ひ出でとて掛り員の怪しむ点無理ならざる事に存し候生きて歸るか死んで歸るかは神なしの身の自分にも知れざれば人の知る處でなし兎に角初念貫徹の今日あるを得たる偏に君の御盡力の結果によるもの深く感謝する義に御座候

此の秋も水か嵐か知らねとも

今日のつとめに田草とるなり

メカラネー○テーワエ君の御出征云々始めて承り候瀾州はなか／＼廣い幾人來ても邪魔にはならぬ出來るとなら君も來たまひ君の如き大入道を生はせるには至極適當の土地殊に土人に斯道研究の材料決して乏しからず候○君よりは久しく音沙汰なし只だ仄に聞く成業後間もなく小兒まで設けられた様子誠に結構小兒つくとも國の爲め益々御勉勵せられん事を希望する旨御傳聲被下度○小生去る旅順開城當時衛生委員助手として出張病院監督の任に當つた黄金山

の慶病院三つ、入院數七百五十人、病者の過半はスクールブート(病名)左腕の赤十字章此の時始めて其本色を示し得た、非常なる優遇と尊敬を以て迎ひられ不完全ながらも任務はやり果した、品物の變つてると言葉の通じないには閉口少なからず失策もやつた殊に手洗水と思ふて彼れ等の小便で手を洗つたなどは著しきもの(歐州人は大小便を一度に出さぬ、便所へ行つても手は洗はない、便所の周圍に手洗水のあき筈なきに後で氣が付いた)露助料理の味合決してまずからず候一月二十日より二月四日まで約半月旅順より北進軍をやつた三日乃至四日位は一番つかれる五日目に一日の滞在があるので息をつく、當時の寒さは最低攝氏〇下二十三度手と耳は冷たくつてチヤレる様、ヒゲや眉毛は眞白、あつたら二十男も白鬚老爺と間違はれるばかり、鼻毛はヒリック毛は上下ヒリックなど變テコの現象御話すれば數々有之候○渡清以來、に十ヶ月天未だ微症だに貸さず健康と勇氣は昔日に倍加以前困難と感じた事も近來は却て一般の愉快を覺ゆる様相成候近日奉天の戦闘開始さる、やにて心忙はしく候間又折を見て申上る事に致し今晚は之れにて御免蒙り候

三十八年二月十五日夜

治 吉

露木良助殿

陸軍二等計手勳七等

澤田金十郎君

君は比企郡大河村大字腰越百四十九番地戸主明治七年六月生全二十七年徴兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊補充大隊第四中隊編入全二十八年三月十三日露戰役從軍の爲め屯營出發全十五日廣島着全廿五日宇品港(高砂丸)出帆四月一日清國盛京省大連灣上陸全十日蓋平に於て野戰歩兵第十五聯隊第九中隊へ編入五月廿五日凱旋の爲め大連灣出帆六月三日宇品港歸着全六日歸營十一月六日陸軍戸山學校教導大隊へ分遣十二月四日歩兵一等卒申付らる二十九年年月十七日戸山學校より歸隊十一月十日歩兵上等兵申付らる全年十一月六日二十七八年戰役の功に依り金二十五圓を下賜せられ三十年五月從軍記章を下賜せらる全年十一月廿九日善行證書及歩兵科下士適任證書授與せらる全三十日滿期退營十二月一日豫備役編入三十五年四月一日後備役編入三十七年三月九日充員召集に應し後備歩兵第十五聯隊第五中隊へ編入全年六月八日出

澤田金十郎君

十九

戰の目的を以て屯營出發全十一月廣島着全十五日宇品港出帆(須賀浦丸)全廿二日清國盛京省張家屯へ上陸七月廿六日より二十八日に亘る案子嶺戰闘に参加す八月十四日旅順背而小東溝標商一三一高地戰闘に参加す全十九日二十日松樹山標高一七四高地戰闘の際砲彈破片頭部負傷全日第二野戰病院へ入院全四日長嶺子定立病院へ轉院全二十五日ゲルニ一兵站病院へ轉院九月三日内地後送全港(安藝丸)出帆全五日宇品港着全六日廣島市豫備病院第一分院へ轉院全十四日東京豫備病院澁谷分院へ轉院十月四日全治退院全日歩兵第十五聯隊補充大隊へ編入八月八年三月十六日任陸軍三等計手全日野戰砲兵第一聯隊補充大隊付を被命全四月一日第十三師團彈藥大隊第二歩兵彈藥縱列付を被命七月六日全隊出納官更分任官を被命全十二日露戰役從軍濱濱港出帆全廿四日樺太島北部「第二アルコハ」上陸全九月十日「アレキサントル」府出帆全十四日青森港歸着全二十日陸軍二等計手に任セラレ十月二十一日高崎聯隊區司令部付を被命十一月一日全部物品會計官吏を被命三十九年三月廿七日物品會計官吏を免し全二十八日召集解除功により勳七等旭日章及金貳百圓を賜はる又三十九年七月十七日恩給年額八十圓を賜はる

陸軍輜重輸卒

島野龜吉君

君は比企郡大河村大字腰越一千六百〇六番地

平民島野丑太郎氏の弟明治十七年十一月生明治三十七年現役三十八年三月召集に應じ輜重兵第一大隊へ入營爾後日露戰役從軍の爲め宇品港出帆清國盛京省大連に上陸第一師團兵站糧食縱列へ編入さる大孤家子法庫門間の糧秣輸送に従事三十八年十月十六日平和克復全月十八日第一師團衛生豫備廠へ轉じ三十九年二月一日宿營地を出發全月十四日東京に凱旋す全月二十日解散歸郷功により金五十圓を賜はる

左掲は家郷宛の書翰なり
小生儀今度召集せられしより僅かなる日數を経て萬里遠征の途に登る世界有名なる露兵を粉碎し無恙凱旋の心組に候然れ共若し過て敵の刃に倒れ彈丸に裂かれ候とも決して悲歎有間敷君國のため忠死と思召し此の上もなき名譽の事と御断念下され度候早々
明治三十八年五月十二日

島野丑太郎殿

島野 拜

陸軍輜重輸卒

荒井保市郎君

君は比企郡大河村大字上古寺十九番

地荒井梅次郎氏の長男明治十五年二月生明治三十五年補充兵役に服し三十八年七月五日動員令により全月十一日四谷輜重兵大隊へ入營す第一師團十五輸卒隊の補充員として全月十五日品川を發し十七日廣島着八月三日宇品港出帆全月七日清國大連へ着し遼陽奉天鐵嶺法庫門等を経て八月十五日小塔子なる本隊に合し爾來第七師團平井兵站倉庫に於て勤務三十九年一月三十日宿營地を發して鐵嶺奉天を経て二月三日大連へ歸着し全月五日全地出帆二月九日宇品上陸廣島へ着し十二日全地を出發し全月十四日東京へ着十九日を以て召集解除となる功により金三十五圓を賜はる

陸軍輜重輸卒勳八等

山口兼吉君

君は比企郡大河村大字青山五十一番地山口松

五郎氏の長男明治三十六年補充兵役明治三十八年四月五日動員令により輜重兵第一大隊補充隊第二十一號補助輸卒隊へ編入六月二十三日東京出發橫濱に至る全二十七日橫濱港出帆三十日青森港着七月二日青森港出帆

全九日薩哈噠島「ホロアントマリ」へ上陸同十日より十六日迄揚陸及輸送に従事し同十七日大泊港出帆二十日小樽沖集合二十一日出帆二十五日アルコワ港着二十六日アレキサントロフ港揚陸に従事し二十七日上陸全二十八日より九月十三日迄揚陸及輸送に従事し全十五日樺太島「アレキサントロフ」港出帆全十八日青森港歸着上陸全十九日青森出帆全二十四日神戸港和田岬着上陸十月十七日大坂豫備病院入院(依病)三十九年一月十九日治癒退院同二月四日和田岬出發全月六日東京着全月八日復員下令全月十日召集解除功により勳八等瑞寶章及金七十圓を賜はる

陸軍輜重輸卒勳八等

島田文之助君

君は比企郡大河村大字増尾十九番地

島田助治郎氏の長男明治十六年三月生明治三十六年補充兵役に服す三十七年八月四日充員下令全月九日輜重兵第七大隊へ編入全月十四日第七師團第一糧食縱列へ編入十月二十八日露戰役從軍の爲め旭川屯營出發十一月二十四日大阪築港乘船出帆十二月一日清國青泥窪へ上陸旅順戰闘に參與十二月五日二〇三高地攻撃に參與す三十八年一月二十五日大平溝より歩兵第二十八

山口兼吉君 島田文之助君

休戦に等しく大平の内地に在るかと思位但し不自由は筆紙に盡し難し又各我軍宿營地にては芝居角力等の興行を設け今回の大海戦大勝利の祝捷なし居候猶引續き祝捷會の催ある由目下講和は八月頃ならんとの噂専ら高し

島田文之助拜

大河村役場御中

陸軍輜重輸卒動八等

角田清三君

君は元比企郡小川町大字大塚百二番地に籍を有せしが明治三十八年四月大河村大字増尾五百三十二番地へ轉籍明治十七年五月生明治三十七年補充兵役に服す三十八年四月六日充員の爲め歩兵第十五聯隊補充大隊へ應召第二十四補助輸卒隊へ編入全年四月二十七日屯營出發五月一日宇品港出帆全月六日清國大連上陸全月十日大連出發全月十八日旅順着全月十九日より第一手押式輕便鐵道班に屬し撫順營盤間輕便鐵道敷設に従事す同二十九日より第一手押式輕便鐵道班撫順工場に於て臺車の製作修理及同鐵道用材料の製作に従事す七月十日石門塞輕便鐵道班出張所員として同地へ出張同地にて輕鐵用臺車の修理製作及同用材料製作に従事す八

陸軍輜重輸卒動八等

澤田芳太郎君

君は比企郡大河村大字青山百九十四番地戸主明治十七年一月生明治三十七年補充兵役に服し明治卅八年四月六日充員召集に應じ歩兵第十五聯隊補充大隊へ召集即日第廿四補助輸卒隊へ編入全卅八年五月一日日露戰役從軍の爲め宇品港出帆全月六日清國大連上陸十日大連出發全月十八日撫順着全月十九日より第一手押式輕便鐵道班に屬し撫順營盤間輕便鐵道敷設に従事す同二十九日より第一手押式輕便鐵道班撫順工場に於て臺車の製作修理及全鐵道用材料の製作に従事す八月十六日天幕輸送監視として別府上等兵に従ひ二道河子へ出張全月二十七日歸隊全月二十八日より撫順工場に

於て輕便用臺車の製作修理及全用材の製作に従事す十一月十三日旅順英領城間の輕便鐵道撤收業務に従事す三十九年二月二十八日凱施の爲め撫順出發三月一日大連着全月四日大連港出帆全月八日宇品港上陸全日廣島着全月十日廣島出發全月十二日東京歸着全月十六日召集解除功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

陸軍輜重輸卒

青木豐藏君

君は比企郡大河村大字青山第百〇六番地青木藤吉氏の三男明治十七年三月生明治卅七年徵兵にして補充兵役三十八年八月十日教育召集の爲め東京府下在原郡目黒村近衛輜重兵補充大隊に應召全年八月二十日第二兵舎第十三給養班又第六組合長を命ぜらる全年九月六日東京市國民大會紛擾の爲め東京市荏原郡豊多摩郡北豊嶋郡南足立南葛飾郡戒嚴令發布公用の外は外出を禁せられ全年九月九日午後五時東京市赤坂區青山近衛歩兵第四聯隊補充大隊に編入全年九月十日日比谷三菱原内閣總理大臣官舎外務省陸軍省警戒兵の食糧運搬を命ぜらる全年九月三十日警戒兵食糧運搬交代目黒本隊に歸營全年十月九日教育召集滿期全年十月十日補充召集に編入せらる全年十月十五日武州比企郡松山町箭

弓神社境内に軍馬拂下に出張す全年十月二十三日復員により召集解除功により金三十五圓を賜はる

陸軍輜重輸卒動八等

峰岸榮吾君

君は比企郡大河村大字腰越二十番地峯岸紋吉氏の弟明治十五年一月生明治三十四年補充兵役に服し三十七年二月六日充員召集に應じて第一師團第四補助輸卒隊へ編入全年三月十三日日露戰役從軍の爲め宇品港出帆全月十八日朝鮮國鎮南浦に上陸し四月二十六日より五月一日に至る清國九連城戰闘に參與す全五月十日安東縣に於て赤痢病に罹り全月十七日清國安東縣兵站病院に入院全月四月四日全院に於て「レーマチス」病に罹る三十七年六月十五日内地還送朝鮮國龍巖浦出帆全月二十一日宇品港に歸着す全月二十一日廣嶋豫備病院に入院廿八日廣嶋出發卅日東京澁谷病院に轉入七月十四日又東京戸山病院に轉入全月二十日疾病の爲め召集解除功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

陸軍輜重輸卒動八等

田中每吉君

君は比企郡大河村下古寺十五番地田中每吉氏の養子明治十五年十月生明治三十五年復補充兵役卅七

年二月十日充員召集に應じ近衛師團第三補助輸卒隊へ編入全月十六日東京出發十八日廣嶋海田市に着滞在三年三月十一日露戰役從軍の爲め宇品港出帆十五日鎮南浦に上陸十六日鎮南浦港出發平壤安州定州宜川車籠館を経て全年四月四日鐵山着七日鐵山出發良策館着八日より廿七日まで良策館批峴面塙裡間糧秣運搬に従事二十八日提峴面塙裡出發宴舞洞九連城安東縣を経て五月七日湯山城着八日より六月二十一日まで老古洞湯山城間糧秣運搬に従事六月二十二日湯山城發鳳凰城雪裡店林家臺通遠舖石門子四道溝草家嶺を経て七月二十二日通子峪に着二十三日より八月二十九日まで草家長嶺通子峪橋頭間糧秣運搬に従事全月三十日通子峪を發孤家子大安平を経て九月七日湯河沿着八日より十月十日迄浪子山湯河沿間糧秣運搬に従事全月十一日湯河沿發沙漣屯着全日より三十八年二月廿五日迄沙漣屯半拉山子灰窪間糧秣運搬沙漣屯遼陽間患者輸送及炭燒伐木に従事二月二十一日恩賜金十一錢五厘拜受二十六日沙漣屯發灰窪八家子自深塞朱家屯の各地間に糧秣輸送に従事三月十六日灰窪を出發同日四方臺に着四月九日迄四方臺連刀灣沿家屯の各地間糧秣輸送に従事十日より李石塞兵站司令部に配屬したり爾來停車場勤務に従事

全月廿二日近衛第三輻重監視隊全遣全勤務従事六月二十七日本石塞出發連刀灣瓢起屯撫安屯東窪の各地を経て七月一日下肥地着全日より下肥地兵站司令部に配屬倉庫使役司令部用材伐木及道路修繕に従事十月三十日下肥地出發翌三十一日三家子着待命す十二月七日鐵嶺出發九日清國大連灣着十四日清國大連灣出發宇品港へ歸着全二十一日東京着十二月二十五日解隊功により勳八等旭日章及金貳百圓を賜はる

左掲は村長小久保氏宛の書翰なり

謹啓其後は御無音に打過き候處御書而被下有がたく奉存候降て自分は東京出發は二月十六日全月十八日廣島市與海田村に滞在三月十一日宇品港出帆し全月十五日鎮南浦に上陸十六日は車輛に二斗入の大麥十三俵之を以て三夜の露餐をなし一夜は雪ふりて其中に在り平幸城三月十八日到着し平坂に二日滞在をなし補安、安州、嘉山、三月二十九日定州に着し之に戦あり宜川、車連官、鐵山、良策官に四月七日着し之に荷物の輸送をなし二十八日出發し批峴面塙里所申官、いんばらり、いんぶとう三十一日義州に五月二日鴨綠江を渡り九連城、安東縣、老古洞を過き湯山城に四十日間輸送をなし六月二十二日出發し鳳

鳳城に二日滞在雪裡店、林家臺、通遠保、草加溝、石門子、草加長、四道溝、通子峪、橋頭、大安平此の間にては川は一日に二十より三十位を越へ遼陽大戰迄は一日も滞在無之夜は月の光にてわらじを造り日中は午前四時より午後は七時まで輸送をなし湯河沿にては工兵と共に橋をかけ十月十一日沙漣屯と云ふ所に宿營なし牛車の監視をなし又は木炭製造をなし當時十一月十五日よりは兵站練兵所にて日々練習勤務致し居り無事御安心を乞ふ

十二月二日

近衛師團第三補助輸卒隊一の二

田中每吉

大河村長殿

陸軍輻重輸卒勳八等

馬場廣吉君

君は比企郡大河村大字腰越百九番地馬場豊八

氏の弟明治十四年四月生明治卅四年補充兵役に従事し卅七年二月六日動員下令全月十日充員應召第一師團第四補助輸卒隊に編入二月十五日東京出發十八日廣島着三月十三日第一軍に屬し宇品港出帆全月十八日朝鮮國鎮南浦へ上陸二十一日より行動を開始す以來引續き韓

馬場廣吉君

國龍崗黃盛、文洞店、留雲潭、漢川、永柔、肅川、安州、嘉山、宜川、鐵山、車籠館、良策館其他各地を経て五月一日鴨綠江戰闘に參與全月三日鴨綠江を渡り九連城安東縣湯山城鳳凰城雪裡店林家臺通遠舖草河口連山館四道溝草河長嶺を経て北分氷嶺を越へ通子峪、橋頭、楡樹林子、孤家子寒波嶺を経て大安平に着す滞在以來英守堡サフートン、湯河沿、方面各地輸送、十月二十一日日本溪湖に至り患者輸送に従事、全月二十五日黃泥崗に着以來兵站部に於て勤務中三十八年二月十三日脚氣症に罹り十四日大安平兵站病院に入院十六日遼陽兵站病院に轉入十八日大連兵站病院に轉入二十二日内地還送大連港出帆二十五日宇品港歸着三月二日東京陸軍豫備病院麻布廣尾分院に入院全月二十三日より五月十日迄歸郷療養、五月十一日召集解除三十八年七月四日御菓子料貳圓尙依功勳八等旭日章及金八十圓を賜はる

戦地よりの書翰左の如し

時下池水氷は解け嘉山(韓國)の頂きに黃鳥の初音を聞き青葉を見初ぬる長閑なる候と相成申候處貴家始め益々御清祥時局に御盡粹被遊候段迄に御察し申候降て野卒事渡韓以來遭遇する辛酸勞苦實に夥多なりと雖經る毎に勇氣萬倍し既にバイカル湖畔に月の

映するの勢にて軍務に掌握罷在候何卒御安心被下度
 候却説這回は御熱心なる御慰問状に接し感佩に不堪
 候此は實に深く腦裡に刻まれて忘るゝ期なく時に膝
 臆として映出し來り夜半野營の夢を驚かす事も數々
 に御座候只一死以て君國に報じ貴家等御深厚に酬ゆ
 るを得ば生が哀心又遺感無御度候抑も現時の戦況を
 窺ふに皇師の向ふ處相勝ざるはなし連日連夜の行動
 實に面白く且つ愉快に御座候之れは實に 聖上の御
 威稜によると雖も一に敵愾心に富む諸君が熱誠后援
 事業の結果五十有餘萬の將士をして后故の憂なから
 しむるの所以とこそ誠に汗顔に不堪懷ろに涙塊掌に
 撤し申候何か戦況なり御通信申上度候得共如何せん
 戦況通報は其の筋の禁する處而已ならず御存じの拙
 筆加ふるに昨今非常に繁務の折柄不本意にも御通信
 出來不申候何卒不惡御諒察の程希上候何れ凱旋の賜
 を得ば實況申上げ貴酬の一つにかへ申度候右不取敢
 御慰問之答辭如斯候草々不具
 明治三十七年四月末日

韓國於義州

廣吉

大河援護會腰越第四區御中

陸軍輜重輸卒勳八等

古屋佐仲君

君は比企郡大河村大字腰越九十一番地古屋伊

勢藏氏の弟明治十四年六月生明治三十四年補充兵役に
 服し三十七年二月十日動員令により近衛歩兵第二聯隊
 へ入營全日近衛師團第四補助輸卒へ編入二月十六日出
 戦の爲屯營出發十八日廣島着三月十二日宇品港出帆全
 十六日韓鎮南浦へ上陸爾來肅川安州定州義州輸送に従
 事す五月三日より十一月七日に至る清國安東縣鳳凰城
 高家店東方流河廣泥大安平浪子山砂嶺屯英守堡の輸送
 に従事す十一月八日より戰場掃除及患者輸送の爲め近
 衛師團司令部へ分遣十一月十四日より三十八年二月十
 一日迄担架術實習二月廿五日近衛師團衛生隊に屬し前
 進奉天附近の戦闘に參與三月十二日浦河附近の戰場掃
 除に従事す全月十三日より二十五日に至る潘家臺附近
 に戰場掃除及兵器收集に従事全月二十六日衛生隊に復
 歸即日近衛師團司令部へ復歸す四月一日原隊へ歸隊午
 後連刀海東寧撫安屯の兵站勤務十二月七日凱旋の爲め
 鐵嶺乘車十日大連港出帆全十四日宇品港上陸二十三日
 復員により召集解除功により勳八等旭日章及金百五十
 圓を賜はる

左掲は郷里の村長宛に送れる書翰なり

謹啓爾來は誠に御無音に接し候段多罪平に御海容被
 下度候然れば時下愈々寒冷之候に相成候折柄尊高様
 益々御健全にて御捷務被爲遊候欣喜雀躍の至に奉存
 じ候降て小生に於ても御蔭を以て無事軍務の一端に
 服従仕り居り候に付此の段々他事御休神被下度候目
 下勤務は適度の運動位に御座候當地の時候は去年よ
 りは寒氣至て烈しく實に閉口仕り居り候得共鄭重な
 る防寒衣御下給せられ居り候に付何等の苦勞も御座
 なく唯々時代の接追せし凱旋の命有るを鶴首待ち居
 るのみに御座候也餘は後便に接す何卒時節柄御攝養
 專一に御健在あらんことを希ふ
 明治三十八年十一月九日

古屋 佐 仲

小久保萬尊殿

陸軍輜重輸卒勳八等

恩田福三郎君

君は比企郡大河村大字青山百八十四

番地恩田菊三郎氏の二男明治十六年一月生明治三十五
 年徴兵として補充兵役三十七年二月十日充員の爲め近
 衛歩兵二聯隊へ召集全日近衛師團第四補助輸卒隊附全

恩田福三郎君

十六日衛戍地出發全十八日廣島着三月十六日韓國鎮南
 浦部に着上陸爾來肅川安州義州の輸送勤務に服し五月
 一日清國盛京省安東縣鳳凰城高家店東方流河廣泥崗
 大安平浪子山砂嶺屯英守堡橋頭庚大人山松崗堡連刀灣
 東寧撫安屯の兵站勤務に従事し野戰郵便局に一時分遣
 三十八年十二月七日凱旋の爲め鐵嶺より乘車十日大連
 灣出帆十四日宇品着上陸全二十日編成地東京に歸着二
 十三日復員の爲召集解除功により勳八等旭日章及金貳
 百圓を賜はる

戦地よりの書翰左の如し

荒金の地花さくと云ふ今日此頃のおあつさ御尊兄開
 下にはいかに凌がせらるや私かに御伺申候其後は意
 ならず御無音に打過候段何卒寛大の御深慮もて平に
 御海容被下度候降て迂生も出征以來別状もなく目下
 は清國鳳凰城を去る十三里の所四門子と申して遼陽
 街道に滞在軍務精勵罷在候ま、他事御休神下され度
 候兩三日の内に摩天嶺と申す所まで前進の筈に候生
 等補助隊は戦闘するの任務には御座なくて一名車力
 隊とか申して野戦隊の糧食を輸送するが毎日の貴務
 に御座候へば戦況等に至ては内地にありて新聞でも
 御覽なさる方程には知れ不申實に残念の至に御座候

尤も時としては戦争最中に糧食を輸送いたす事も御座あれども之れは誠に稀れの事に御座候所には遠陽は昨七月二十五日より攻撃を始め旅順も近々大攻撃を始むとの風聞に候して過日拙宅よりの恩書によれば當地大河村にては今回出征軍人遺族の爲め援護會なるものを設けられ以て出征軍人を安緒せしめんと御良策實に生等の光榮之れに不過候尙先日は過大の金額援護會よりお恵み被下候由實に大河村有力者諸君平素村事に御熱中よりして今回の如き出征軍人且つは遺族に慰藉を與へられ誰れか出征軍人之れに満足せざるもの之あらむ皆御厚情の御賜ものに感泣いたし候生等も日ならず重大の責任を全ふして歸郷するの期あらば充分に深謝するの心懸けに候申上けたき事は濱の眞砂の數つきづ候へども今や軍務實に多忙なれば追て申上可く候此頃にあつた役場員諸君御身御大切に祈居候末筆ながら有志諸君に宜敷生が深謝の意御傳い下され度候草々

近衛師團第四神永補助隊一小隊三分隊

恩田福三郎君

大河村長閣下 御中
役場員諸君

陸軍輜重輸卒勳八等

吉野友次郎君 君は比企郡大河村地吉野定四郎氏の二男明治十四年五月生明治卅四年徴兵にして現役三十五年九月一日輜重兵第一大隊へ入營十一月三十日滿期除隊三十七年三月九日充員召集に應じ歩兵第十五聯隊第一大隊へ編入四月二十二日海外出征の目的を以て宇品港出帆五月八日清國盛京省大沙河附近に上陸十六日十三里臺攻撃に參與二十六日二十七日金州南山の攻撃に參與七月二十六日前牧城附近二十七日對面溝二十八日双臺溝附近の戦闘に參與八月十三日十四日十五日に於ける碾盤溝附近の戦闘に參與九月十八日より二十二日に亘る太平溝東南方高地に於ける戦闘に參與十一月二十八日より十二月六日に亘る太平溝東南方約千五百米突標高二百三高地の戦闘に參與三十八年二月二十七日二十八日奉天府阿司午附近の戦闘に參與三月二日より三日迄奉天府沙岑堡の戦闘に參與四月五日奉天府大石橋の戦闘に參與全月八日より十日まで奉天府三臺子の戦闘に參與三十九年一月二十二日凱旋の爲め大連出帆二十五日宇品港歸着二月八日復員により召集解除功により勳八等瑞寶章及金七十圓を

賜はる兄吉野藤三郎君も出征し功七級に叙せらる別項戦歴に詳かなり

陸軍輜重輸卒勳八等

小林鷲太郎君

君は比企郡大河村大字腰越百三十三番

地小林喜一氏の弟明治十四年十一月生明治三十四年徴兵にして輜重輸卒第一補充兵に編入明治三十七年二月十日充員召集に應じ近衛歩兵第二聯隊へ召集全日近衛師團第四補助隊卒隊へ編入全月十六日衛戍地出發全十日八日藝州廣島着三月五日第三分隊の組長を命せられしも料理の辨へあるを以て全月九日炊事當番の摸範を命せらる三月十二日露戰役從軍の爲め宇品港出帆十六日韓國鎮南浦上陸爾來、劉崗、向灘、平壤、巖積里、肅川、安州、定州、宜川、莫萊館義州の勤務に服す五月三日清國盛京省、安東縣、鳳凰城高家店、東方流河、黃泥崗、大安平、浪子山、英子堡、砂澁屯の勤務に服し當地に於て分隊各箇炊事を命せられたる故之れより輸送勤務に服す全年十一月二十日炭燒きの組長を命せらる卅八年二月十九日腸窒扶斯に罹り全月二十八日砂澁屯兵站病院へ入院二月一日遼陽兵站病院へ轉院全月四日快復し腸窒扶斯後の衰弱に轉症八日汽車にて

小林鷲太郎君 根岸辰次郎君

後送され九日大連兵站病院へ收容さる十五日内地還送の爲め青窪泥港出帆十五日宇品港へ上陸し宇品患者宿泊所へ收容さる十八日宇品患者宿泊所を出發し二十一日新橋着全日東京豫備病院氷川分院へ收容さる全年三月九日より五月七日迄六十日間歸郷療養養滿期と全時に召集解除を命せられ五月十日地方醫師の診斷書を添へ再度召集を出願したり然れども其効なくして召集なかりし功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる

陸軍輜重輸卒勳八等

根岸辰次郎君

君は比企郡大河村大字青山百七十五番

地戸主明治十三年四月生明治三十三年現役に召集され三十四年三月一日輜重兵第一大隊に入隊全年五月三十一日組長適任證書を附與せられ全日在營滿期に付除隊三十六年四月一日豫備役編入明治三十七年三月十一日充員召集輜重兵第一大隊へ入隊全日第三糧食縦列に編入全年五月三日東京出發全月五日廣島着六月五日宇品港出帆全日清國盛京省大澳三官廟に上陸三十八年一月迄旅順攻圍軍に參與全月下旬旅順附近出發蓋平海城を経て二月中旬砂河附近に達し全月下旬より三月中旬に渉り奉天附近の會戰に參與三十九年一月二十五日鐵嶺

出發全月二十七日大連着全二十八日大連出帆二月一日
宇品港歸着全月五日廣島出發二月八日東京着二月十四
日復員により召集解除せらる功により勳八等旭日章及
金百圓を賜はる

陸軍輜重輸卒勳八等

關根鐵次郎君

君は比企郡大河村
大字腰越七十九番

地關根吉兵衛氏の長男明治十三年三月生明治三十三年
補充兵役に就き三十七年二月十八日勳員令により全月
二十一日鐵道大隊第二中隊へ編入三月一日中野屯營出
發四日神戸乘船九日韓國仁川上陸十二日仁川出發全日
龍山着四日五日龍山發紋山浦に十一日龍山歸着測量工
事の爲め四月二十一日席浦に向て龍山出發坡州馬井里
を経て四月二十八日龍山歸四月二十九日より七月五日
に至る龍山軍用線材料運搬に従事七月六日龍山出發八
日開城着七月十九日開城出發二十一日龍山着全二十五
日龍山出發全日仁川着二十八日仁川出帆三十日清國安
東縣上陸八月七日より於安賓間所遼陽八日輕便鐵道工
事に就事九月八日鳳凰城に轉進全月二十五日道溝に轉
進一月二日中村に轉進三十八年七月十四日鳳凰城發雪
裡店通遠堡連山關下馬塘橋頭本溪湖唐家屯荒山を経て

二十六日奉天着八月三日奉天出發白馬三家子に着奉天
高力屯軍用輕便鐵道工事に従事す又三十八年二月十
一日金十一錢十一月三日金十錢を下賜せらる全月十七
日奉天に轉進糧食運搬に従事す卅九年三月一日奉天出
發二日大連着四日大連乘船七日宇品上陸全日廣島着十
一日廣島出發十三日中野屯營歸着二十日召集解除功に
より勳八等旭日章及金百圓を賜はる

左掲ば郷里の援護會宛の書翰なり
拜復如仰の時下酷暑の候に候へ共貴殿等御揃へ益々
御精福の由目出度大賀至極に御座候降て小生に於て
も誠に健全にして日々軍務に罷在候間何卒御休心被
下度願上候扱て過日は御深切に御書狀を忝ふし不計
も難有頂戴仕候如何に戰役と雖も滿州の寒氣又赤金
とくる炎熱と雖も赤き心にて御送り越されし御厚情
を以て防がば何ぞ驚かんや人は死すべき時に死せさ
れば死するに勝る恥ありと古人の金言然るに不肖
昨年以來若干戰役の一部に参加すと雖も一寸功蹟な
し然るに此不忠を責めす怒り給はず却て固き御慰問
狀賜ふの榮を得て謝するの道なし不肖素と生還を期
せされど若しも不幸にして歸國の曉は其恥を忍んで
罷越御禮申上候一寸亂筆を以て御返事草々不備

關根鐵次郎

援護會御中

陸軍輜重輸卒勳八等

落合徳次郎君

君は比企郡大河村
大字上古寺二十九

番地落合良太郎氏の二男明治三十一年徴兵にして現役
三十二年三月一日輜重兵第一大隊へ入營全月五月三十
日滿期除隊三十七年三月九日充員召集により工兵第一
大隊へ召集全日架橋縱列第二小隊第五分隊に編入全月
五月三日新橋發廣島に向ひ汽車行軍六月二十日宇品港
出帆全二十六日清國張家屯に上陸七月二十五日徒歩砲
兵第三聯隊第二大隊配屬七月二十七日より全二十八日
に至る安子嶺の戰闘に參與七月三十日大孤山戰闘に參
與八月二日より全十五日に至る大孤山戰闘に參與八月
十九日より三十八年一月一日に至る旅順要塞攻撃に參
與全月十二月一日より長嶺子、后砂包間の糧秣輸送に
従事三十八年一月二十七日より北進の爲め石灰窪子出
發金州蓋平を経て二月十二日八卦溝に着全月二月二十
七日より奉天附近の會戰に參與三月十六日より全十九
日に至る迄奉天拉馬臺間架橋林材運搬従事全月廿三日
より全廿九日に至るまで鐵炉舖關原停車場間糧秣輸送

に從事全月四月六日より全十日に至るまで古土臺古城
子對岸間架橋材料運搬に従事す全月七月八日より八月
十七日に至る迄小塔子小大窪間の道路橋梁修築并に大
來虎屯渡船場構築作業に従事全月八月十八日に(支那
語ホウシイン)に着全十九日より三十九年一月十九日
に至る迄全地に宿營三十九年一月二十日宿營地出發凱
旋の爲め全月二十四日鐵嶺乘車全月一月二十七日大連
港出帆全卅一日宇品上陸二月六日復員下令二月十一日
召集解除功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる

横田與吉君

君は比企郡大河村大字
青山百三十三番地横田

唯次郎氏の次男明治十一年六月生明治三十一年徴兵に
して現役全月十二月一日輜重兵第一大隊第一中隊へ入
營三十二年二月二十八日滿期除隊明治三十七年三月六
日第一師團勳員下令全十一月一日輜重兵第一大隊へ召集全
日第一師團第四糧食縱列に編入五月三日東京出發全六
日廣島縣佐伯郡草津村に着待命六月六日日露戰役従軍
の爲め宇品港出帆全九日清國盛京省撫大澳三宮廟に上
陸全十二日三宮廟出發蒼家屯を経て全十三日金州城着
全十四日金州城出發全日蒼家屯着七月四日蒼家屯出發

全日眺家屯着全日以来輸送に従事全月二十六日眺家屯出發前重鐵堡を経て全三十一日文家屯着爾來糧秣輸送に従事す八月十日脚氣病の爲め「ダルー」豫備病院に入院八月十六日大連出帆廿二日宇品港に着す廣島第一分院第卅一號室に入院九月二日廣島出發全四日東京着全日澁谷豫備病院第九號室に入院九月十四日東京出發全日信州輕井澤着全日より十一月二日まで輕井澤柳瀬多一宅に滞在十一月三日輕井澤出發全日東京戸山病院に入院全治再出征の爲め三十八年二月十九日東京出發全二日廣島着全日宇品港出帆全二十五日清國柳樹屯上陸三月十七日第三糧食縱列に編入全日三家子に轉進馬三家子鐵炉甲間及前孤家子間の糧秣輸送に従事四月十二日三臺子に轉進古城子倉庫間糧秣輸送に従事五月三日后孤子に轉進し通江口より前孤家子焦家崗子饒家屯間の糧秣輸送に従事九月十六日休戦十月十六日奉和克復十一月以後各倉庫間の糧秣輸送に従事す三十九年一月二十六日鐵嶺出發二月二十八日大連着二月二十九日大連出帆二月二日宇品港歸着二月六日廣島出發二月八日東京へ着二月十四日復員により召集解除功により勳八等瑞寶章及金八拾圓を賜はる

陸軍輜重輸卒勳八等

陸軍輜重輸卒勳八等

武川勘三郎君

君は比企郡大河村大字腰越二十二番

地戸主明治七年十二月生二十七年徵兵にして現役十二月二十日豫備徵員として輜重兵第一大隊補充中隊に入隊二十八年四月一日輸卒組長適任證を下賜せらる全年四月九日日清戰役從軍の爲め屯營出發廣島着六月一日平和克復により屯營歸着六月九日復員により除隊功により金二十五圓を賜はる三十七年三月十日動員により野戰砲兵第一聯隊彈藥大瀨第二縱列に編入全月二十七日出戰の爲め編制地を出發五月一日廣島着全月三十一日宇品港出帆六月六日清國盛京省張家屯に上陸九日金州城附近三十里堡七月二十七日營城子附近戰團に於て滿頭山攻撃の命を受け十數余里の間彈藥を補充すること四回にして敵退却追撃して全月三十日土城子に交戦八月十三日より十六日に至る碾盤溝附近戰團に参加八月十七日より二十四日に至る海軍陸戰隊の使役として金家屯附近に勤務九月二十日より三十八年一月二日に至る旅旅包圍戰にありて獸醫藥劑部に於て軍務に従事す一月二十五日第三軍北進の命を受け二十七日前沙包を發し二月十七日遼陽附近大藥屯着途中降雪三晝夜爲

に全地滞在二月二十七日より三月十一日に亘る奉天總攻撃に於て彈丸雨飛の中に戰丸を補充すること三回陥落後滿州軍野戰倉庫所在地なる小塔子附近に滞陣し歸鐵業に従事す明治三十九年一月十九日凱旋の爲め北滿州馬家溝を發し鐵嶺乘車二十四日大連着二十五日全所を出帆廿八日宇品歸港上陸二月六日屯營に凱旋全月十二日召集解除功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜る君武術を能くし同村小久保先生の門に入り練磨すること數年念流の目錄を附與せらる其性推して知るべし

野口百太郎君

君は比企郡大河村大字青山二十六番

二十二番地戸主明治二年十月生二十二年徵兵にして現役廿三年四月一日輜重兵第一大隊第一中隊へ編入全月二十二日輸卒組長を命せらる全月三十一日在營滿期除隊二十七年八月三十一日充員召集に應し第一師團工兵小架橋縱列編入全年十月二十六日日清戰役從軍の爲め廣島縣宇品港出帆十一月十四日清國盛京省大連灣に上陸全月十八日後備工兵隊に分遣旅順口に戰團二十八年二月十日復州城攻撃に参加全月二十二日より三月十二日迄熊岳河に架橋作業に従事す二十八年三月二十三日

蓋平河戰團架橋三月二十四日より四月十四日迄海山塞に滞陣四月二十四日より五月二十日迄新店兒に滞陣六月五日大連灣出帆歸還全月十一日第一師團工兵第一大隊へ着全月十三日復員下令解隊功により二十五圓を賜はる明治三十七年十二月一日動員により工兵第一大隊補充中隊へ召集十二月十三日病弱の爲め召集解除三十八年三月十六日動員により輜重兵第一大隊へ召集全年四月一日工兵第十三大隊第一中隊へ編入六月二十三日屯營地出發全月廿六日日露戰役從軍の爲め橫濱港出帆七月七日樺太島ノレヤの敵前に上陸全月八日コルサコフ占領全月十日追擊隊に加はりウラジミトルに前進全月十日ウラジミールロフカ戰團全月十一日より全月十六日迄ダルーネエ附近の戰團に参加全月十八日アドラドノエ附近の敵兵攻撃隊に参加全月十九日ガルキノウラスコエに前進全月二十日ドウキウ附近の敵兵攻撃隊に参加全年八月二十四日より全年十月十七日迄ノトコ岬よりリウトガに至る間道路開通作業に従事十月十八日ホロアンドマリ出帆全月三十一日宇品港に着上陸十一月五日宇品港出帆全月八日韓國咸鏡道元山津に上陸全月十四日咸興城着駐屯三十九年一月四日より全年三月十六日迄咸興西湖津間輕便鐵道布設作業に従事全月十

九日西湖津出帆三月二十二日宇品港に着上陸全月二十七日工兵第一大隊へ歸還全月二十九日復員解除功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

青木喜代次郎君

君は比企郡大河村大字

上古寺九番地青木徳次郎氏の養子にして明治八年五月生明治二十八年現役に召集さる明治三十九年八月一日近衛輜重兵大隊第二中隊に入營全年十二月三十日滿期除隊三十七年二月八日動員により近衛輜重兵大隊へ入營近衛師團兵站糧食縱列附二月十七日東京出發十九日廣島着三月十八日日露戰役從軍の爲め宇品港出帆二十三日鎮南浦上陸翌日出發二十九日平壤着四月五日平壤出發五月四日清國安東縣へ着十二日安東縣出發十三日邊條溝着全日より湯山城鳳凰城間糧秣輸送に従事六月二十二日迄全地滞在二十三日出發二十七日芦家南勿着滞在八月一日出發二日花家堡子に着滞在八月十七日出發チトへを経て二十七日下馬塘に着滞在九月十六日出發二十六日より騎兵第二旅團長の命下に入り各地の戰鬥に參與す十月二十五日より騎兵第二旅團を離れ第十二師團の配下に屬し上銀匠堡に舍營し灰紫銀匠堡間の

陸軍輜重輸卒勳八等

志藤喜太郎君

君は明治九年四月四日比企郡大河村

大字腰越貳百十一番地に生る資性堅忍精勤を以て聞へ馬を御するに妙を得たり明治三十年六月一日輜重兵第一大隊第二中隊へ入營全年八月三十一日滿期除隊在營中一意専心軍務に精勵せし功を以て賞盃を授與せらる卅七年三月九日動員下令第一師團第四糧食縱列に編入せられ五月三日東京出發全六日廣島縣佐伯郡草津村到着六月六日宇品港出帆全月九日清國三官廟上陸全十二日出發蒼家を経て十三日金州城着全十四日蘇家屯着全七月四日姚家屯に轉宿吳水屯三十里堡及三十里堡前草鎮堡間の糧秣輸送に従事七月二十六日姚家屯出發營城子双台溝附近の戰鬥參與全三十一日文家屯に轉宿營城子双台溝后砂包間の糧秣輸送に従事八月十五日金龍溝に轉宿全十九日より旅順要塞戰に參與全二十一日石灰窪子に轉宿〇〇長岑子后砂包間糧秣輸送に従事し九月十九日より旅順要塞戰に參與十月二十九日より旅順第三回總攻撃に參與す三十八年一月二日旅順陷落全十四日旅順入場式參與一月二十一日石灰窪子出發大辛寨子蘇家屯李家屯普蘭店瓦房店得利寺北草甸子唐家屯

糧秣輸送をなす十一月二十一日より又騎兵第二旅團に屬し卅八年一月十四日子至迄銀匠堡响山子間の糧秣輸送をなす一月十五日より第二旅團を離れ第十二師團の命下に屬し銀匠响山子間の糧秣輸送をなす二月二十二日より第十二師團の令下に離れ兵站監の令下に復歸し銀匠堡响山子兵站司令部間の糧秣輸送をなす三月十二日松崗堡兵站司令部に屬し上銀匠堡を出發全日杜家堡子着滞在康太人山杉崗堡子間の糧秣輸送に従事全月二十四日大樂屯に移轉し杉崗堡季石塞間の糧秣輸送五月一日瓢起屯兵站司令部に屬し出發四日耿家庄子着滞在瓢起屯旅家屯間の糧秣輸送に従事七月五日下午地兵站司令部に屬し六日開家屯着滞在全月八日第二軍へ轉屬し十二日全地出發十四日悦家窪子着滞在待命全月廿四日小季家台子兵站司令部に屬せられ二十五日後馬園子着關原左大宮身間の糧秣輸送に従事し全年十月十六日露の平和條約發布せられ二十日第一軍に復歸し二十二日鎮西堡移轉待命十一月二十六日凱旋を命せられ十二月五日鐵嶺乘車九日大連乘船十三日宇品港上陸十六日廣島出發十八日東京凱旋十二月三十一日解散功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる

*** **

蓋平大石橋甜水溝南沙河城昂堡を経て二月八日東台着全十二日全所出發刻二堡着二月二十七日より奉天附近の戰鬥に參與三月十日奉天陷落爾來各兵站都第九師團野戰倉庫間の糧秣輸送に従事三月十五日大新屯に宿營爾來馬三家子鐵炉甫大孤家子間の糧秣輸送に従事四月十二日〇〇に前進古城子兵站倉庫四家子野戰倉庫間の糧秣輸送に従事五月三日鮑家屯へ前進通仁口頭子台小塔子顧家屯錢家屯趙家窩棚關家屯間糧秣輸送に従事十月二十九日顧家屯へ轉宿平和克復により三十九年一月十九日顧家屯出發全月二十六日大連着全月二十九日全所出發二月二日宇品港歸着全六日出發全月八日東京着二月十二日復員により召集を解除せらる功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

郷里宛の書翰左の如し

拜復這般は御慰問狀并に多大の藥品御郵送被下難有奉謝候指示の如く頃日來は瓶中の厭苦實に堪へ難く候處先以て諸彦益御健勝御清居の段遙に賀し奉り候平生御疎情に打過失敬の段是とて軍務多忙故不惡御思召可被下候兼て御報申上候通各地轉戰今は〇〇間運輸に晝夜間斷なく從事仕居候得共層一層健全に有之是全く各位の熱誠なる信向と藥品の賜と厚く感佩

の至りに不堪候猶益奮勵邦家之爲に盡粹可任決心に御座候此の節の風聞に依れば〇〇攻撃之由に御座候何れ戦闘の上は早速御報可仕候家事願慮するに暇あらす何分宜敷御盡力に預り度只管希上候一々各位へ御挨拶可仕の處右可然御傳聲なし被下度候先は貴答まで余は次便に申上べく候草々敬具

七月二十五日

志藤喜太郎

役場員御中

陸軍輜重輸卒勳八等

安野寅次郎君

君は比企郡大河村大字青山百四十九番地戸主明治四年十二月生二十五年八月一日輜重兵第一大隊へ入營全日第二中隊へ編入十一月三十日現役満期除隊明治二十七年八月三十一日充員召集に應じ第一師團小架橋縦列に編入全年九月二十五日清戦役從軍の爲め東京出發全月二十七日廣島着滞在十月二日宇品港出帆(旺洋丸)に乘し十一月十四日大連灣に上陸全月十九日兵站部に附屬し全月二十三日柳樹屯に於て元隊に歸隊す十二月二日より金州城に滞在二十八日二月十一日金州城出發全月十四日復州城に着滞在全月二十

日復州城出立全月二十二日熊岳城着滞在三月六日より全十二日迄で熊岳川架橋なし全月二十日熊岳城出發全月二十三日蓋平川架橋全月二十四日海山着滞在四月十四日海山賽出發全月二十一日新店兒着滞在五月二十日新店兒出發六月五日大連灣着全日内灣出帆(三池丸)乘し全月八日宇品港着全月九日宇品發車全月十一日東京着同月十三日解散明治二十八年十一月十八日全二十七八年戦役從軍紀章を賜ふ明治三十七年十月三日充員召集にて全六日東京輜重兵第一大隊補充中隊編入全年十一月二十一日日露戦役の爲め東京品川出發四月二十三日廣島着滞在全月二十五日宇品出帆十一月二十九日清國青泥窪に上陸十一月三十日第一師團兵站司令部へ編入全日長嶺子兵站司令部に到着八年三月一日長嶺子出發南三十里堡大王溝瓦房店曲家屯熊岳城着青石出發舖刻家台長店舖九日遼陽着唐庄子を経て全月十日小北河に着全十三日茨榆坨沙河子を経て大房身に着全二十日窟家棧着全二十八日三面船に着全五月二十八日より第三軍兵站監部附全年六月卅九日第一師團機關砲隊に轉屬し野戦勤務に従事す八月十日第一師團野戦衛生隊に轉隊す九月十六日休戦下令十月十六日平和克復凱旋を被命三十九年一月二十六日大連灣出帆(リョトウ

九)に乘船全三十日宇品上陸廣島滞在二月五日廣島乗車全五日東京着全九日解隊功により勳八等旭日章及金八十圓を賜はる陣中よりの書翰左の如し

征露大捷の嘉新年併而帝國の祝萬歳猶を貴家健全を禱却說本月五日を以て御投書被下候御書面今十二日を以て正に拜見仕貴家御一同様の御壯健なる事を承り大に安堵致し申候且つ又自分儀も戦中は恙く加年仕候次第故偏に御安心被下度次に當旅順口も一月二日午後四時三十分正に陥落仕候に付左様御承知の上偏に御自重今後專一に奉願候先つは御返書旁御禮迄如斯に御座候敬具

明治三十八年一月十三日

於在清國長嶺子兵站司令部

安野富次郎拜

埼玉縣比企郡大河村大字青山

高瀬利三郎殿

陸軍輜重輸卒勳八等

野崎英吉君

君は比企郡大河村大字青山百七番地野崎八左衛門氏の長男明治七年十二月生明治二十七年徵兵にし

野崎英吉君

て現役二十七年十二月二十日補充兵として輜重兵第一大隊補充中隊に編入四月九日日清戦役從軍の爲め廣島着六月平和克復の爲め東京に凱旋六月九日復員に付解隊功により金二十五圓を賜はる三十七年三月十日充員召集に應じ野戦砲兵第一聯隊彈藥大隊歩兵第一縦列へ編入二十一日編制地出發廣島に至る四月二十二日宇品港出帆大同港及鎮南浦に滞在五月十日清國孫家哈子に上陸全月十六日十三里臺戦闘に参加す全月二十六日金州南山の戦闘に参加す七月二十七日八日營城子附近の戦闘に参加す全三十日土城子戦闘に参加す八月十三日より十六日迄碾盤溝附近の戦闘に参加す十六日より二十三日迄海軍砲彈輸送として勤務し九月十一日速射砲補助となる九月十九日より二十一日迄太平溝附近の戦闘に参加す全二十三日より二十五迄擔架補助十一月二十六日より二十九日迄擔架補充十月二十六日より三十八年一月一日に至る旅順攻圍戦闘に参加す第三軍遼陽附近集中行軍の爲め三十八年一月二十七日後沙包出發全二月十日前三家峪着全月二十七日より三月十一日に亘る奉天總攻撃に参加す五月三日より八日まで秋山支隊に使用さる十一月より糧食縦列の補助をなし三十九年一月十八日凱旋の爲め舍營地出發二十一日鐵嶺乘車二十三

日大連着二十五日大連出帆二十九日宇品上陸二月三日
品川着三日編成地八幡町に舎營二月十一日復員により
除隊功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる實弟
野崎佐十郎氏も出征し殊勳を樹てたる事蹟は別項戦歴
にあり

左掲は陣中より郷里の役場宛に送致せる書翰なり
拜啓時下秋冷の期に相成候處小子よりは久々御無沙
汰仕候段惡からず御推察被下度候扱て御高堂様氣
候不順の處益々御壯健にて業務罷在候よし大慶至極
の至りに存候就ては内地は當春より雨期多き様子の
事に候も昨今は如何定めて快復の事に候哉降て小子
も目下は法庫門附近の村落に滞在日々軍務罷在候間
乍憚御休神被下度候扱て清國の氣候も近頃は余程朝
夕は寒氣を覺え候も小子などは自愛專一に御座候就
ては戦地にても種々の購和のうはさも有之候處愈々
成立の事我各隊にて祝捷會を催し芝居角力の興行有
之候處私の隊にても去る九日十日兩日以祝捷會を催
し芝居角力の興行交々各宿舍にては飾り物を作り丸
で内地の祭典と同じ様で舞臺も中々よくできまして
午前は角力種々なる番付を作り午後は芝居です萬事
行届き兵隊の役者にては實に驚入る程の腕前に御座

候見物人は皆軍人にて上は師團長殿御覽に相成充分
大入に候又近々之内師團にも祝捷會の事故準備中に
御座候次に昨日は滿州軍總司令官殿其他各師團長殿
御通行の處私の隊にて御休み遊され候も私隊にては
村落の先まで出迎に行きました夫より各師團を御廻
りの様子御座候休戦は去る十五日以て命有之候へば
遠からず歸郷の事と愚考仕候先は亂筆を以て御一報
まで余は後使に萬を申述べ候草々以上過日は度々
御通信に預り難有幾重にも御禮申上候
明治三十八年九月二十日

野崎英吉拜

役場御中
野口様

陸軍輜重輸卒勳八等

青木駒吉君

君は比企郡大河村大字
青山三十四番地青木清
次郎氏の長男明治八年四月生明治二十八年徴兵にして
現役全年十二月一日近衛輜重兵大隊第二中隊へ編入二
十九年三月三十日滿期除隊同年五月二十日復隊により
更に野戦砲兵第一聯隊第四中隊大行李附を命せられ全
年五月二十九日清國威梅衛守備として宇品港より乗船

六月一日威海衛上陸三十年五月七日威海衛出帆全年全
月十日宇品港着全年五月十三日解隊三十七年二月八日
充員召集に應し近衛輜重兵大隊に編入全年二月八日近
衛師團兵站糧食縦列に編成られ全月十七日露戰役の
爲め第一軍附として東京出發十九日廣島着三月十八日
第一軍に編入され宇品港出帆全月二十三日韓國鎮南浦
に上陸全月二十四日鎮南浦出發二十九日平壤に着四月
五日平壤出發五月四日清國安東縣に着五月十二日安東
縣出發十三日邊條溝着全日より湯山城鳳凰城間の糧秣
輸送に従事し六月二十二日迄全地に滞在六月二十三日
邊條溝出發全日芦家南勾に着滞在八月一日芦家南勾出
發二日花家堡子着滞在八月十七日花家堡子出發テトへ
を経て二十七日下馬塘着滞在九月十六日下馬塘出發二
十六日より騎兵第二旅團長の令下に入り本溪湖其他各
地の戰闘に參與す十月廿五日より騎兵第二旅團に離れ
第十二師團の配下に屬し上銀匠堡舎營し灰室銀匠堡間
の糧秣輸送をなす十一月二十一日より又騎兵第一旅團
に屬し三十八年一月十四日まで銀匠堡嶮山子間の糧秣
輸送をなす一月十五日より騎兵第二旅團に離れ第十二
師團の令下に屬し銀匠堡嶮山子間の糧秣輸送をなす二
月二十二日より第十二師團の令下を離れ兵站監の令下

に復歸し銀匠堡嶮山子兵站司令部間の糧秣輸送をなす
三月十二日松崗堡兵站司令部に屬し上銀匠堡を出發し
全日杜家堡子着滞在康大人山松崗堡間の糧秣輸送全月
二十四日大樂屯に移轉し松崗堡李石塞間の糧秣輸送五
月一日飄起屯兵站司令部に屬し大樂屯出發同月四日取
家庄子に着滞在飄起屯撫安屯間の糧秣輸送七月五日下
肥地兵站司令部に屬し全地を出發七月六日開家屯着滞
在七月八日第二軍に轉屬せられ十二日全地を出發十四
日後抗家窪子着滞在待命七月二十四日小李家台子兵站
司令部に屬せられ二十五日後馬園子着滞在開原左大房
身間の糧秣輸送に従事す十月十六日露平和條約發布
せらる全月二十日第一軍に復歸し二十二日鎮西堡に移
轉待命十一月二十六日凱旋を命せらる十二月五日鐵嶺
乘車九日大連乗船全月十三日宇品港上陸全月十六日廣
島出發十八日東京に凱旋全月三十日解散功により勳八
等旭日章及金貳百圓を賜はる

左掲は戦地よりの書翰なり

謹啓爾來は意外の御無音に打流れ候段平に御容赫被
下度候扱て過般は御多忙を不願御芳墨を煩し誠に御
厚意の處奉深謝候早速御返信申上べくの處軍務に取
紛れ遂に延引致し候不惡御推察被下度候陳者貴村々

長殿を始め大河村有志諸氏には愛國恤兵の熱誠を以て出征軍人を迎ひ内には後援の實を擧げられ實に感激の至りに不堪候斯く郷里の諸君には御恩情を寄せられ候ても我等は後方の勤務故何等の微功なく赤面残念の至りに存じ候素より無智淺學の者に候得ば御察し被下度候御承知の通り戦争も益々發展の兆を現はし終局も近きに有るもの、如し「ハルビン」の攻撃浦塩の包圍も遠に有らずして開始せらるべし是非共此際「ハルビン」浦塩樺太を占領し戦争の紀念として何れの地か永久我が有に歸せしめ再び露國をして起つ能はさらしめ以て光榮ある戦局を結び度候先は目下の情況に於ては無論最終の勝利を得らるべく候敵國は益々兵を募り滿州に増援しつつあり然れ共此際一日も早く「ハルビン」を占領し再び沙河奉天の如き大損害を與ひ度各兵士は演習を勉め戦闘力を養成しつつあり氣候は日増暖氣に向ひ好氣節に相成晴天打續日中は随分熱を感じる位に御座候併し寒國の事なれば未だ漸々發芽の摸様に候内地に於ては追々暑氣に向ひ養蠶も發生し晝々御多忙の事と奉推察候候先は延引ながら御返事迄余は後便にて申上候早々頓首

在清國

青木駒吉

大河村長

野口宜銳殿 外役場員御中

大河學校々長

馬場駒三郎殿 外職員御中

陸軍輜重兵一等卒勳八等

高瀬忠助君

君は比企郡大河村大字青山百八十一番地高瀬

重太郎氏の二男明治十二年五月生明治三十二年徵兵にして補充兵役三十七年八月九日勳員令により輜重兵第七大隊召集全日第七師團第一糧食縱列に編入十月二十八日宿營出發征露の途に就く十一月十六日堺市二十八日大坂築港を解覽し十二月四日曙光畑々として射るの中遠東の一角大連に上陸し旅順の堅壁に向ひ専心軍務に服す明ければ三十八年一月一日旅順は開城となり一月廿八日北進の命を受け奉天の役に參與し三月十七日より四月四日迄馬三家子中心臺間の輸送をなし四月六日より五月二日迄中心臺大孤家子間の輸送に従事四月二十四日組長を命せらる五月三日より法庫門康平間小塔子、康平、大平地、間の輸卒に従事す十月二十日

輜重兵第七大隊長陸軍輜重兵中佐

正六位勳五等 大隈勳 團

左掲は戰友宛の書翰なり

謹啓其後は久しく御無音の段奉謝候小生儀も別條なく輸送勤務罷在候間乍憚御休心相成度候扱亦髮育眼の金城鐵壁と頼みつゝ、ありし旅順も過日正月元日東天紅を告ぐる頃落城を告げたる事小生の今更喋々申上す候共已に御地の新紙にて御承知の事と推し居候が御互様實に萬々歳を歡呼して已ざる次第に御座候付て去日彼の有名なる二〇三高地に於て忠奮義死の靈を吊へしが時はたそがれの夕暮暉風颯々して隱山を拂ふ山にて〇〇將軍の吊談有之しが音聲肅々幽々として實に追懷の情に不堪轉々涙の禁する事能はざりし次第に御座候亦昨日旅順入城式有之始めて極東唯一の要塞港を見物せしが光景慘憺たるものに御座候先は御一報傍々一寸申入候

第七師團第一糧食縱列

近衛後備歩兵第二聯隊第三中隊

高瀬忠助

高瀬房三郎殿

(四十二)

第七師團轉宿の爲め孫家屯を出發法庫門大孤家子を経て二十三日平羅堡滯陣十一月十日より三十九年一月十日に至る迄鐵炉舖茨榆坨間の糧秣輸送に従事中三十八年十一月二十五日輜重兵二等卒を申付らる全年一月二十三日一等卒に進級二十四日馬廠へ轉屬第一小隊に編入二月二十日凱旋の命を受け三月三日宿營地を奉天下項子に移轉し九日奉天乘車十日金州下車行軍柳樹屯に着し十四日全地出帆十九日室蘭港檢疫を了し二十一日上陸二十日旭川屯營に凱旋す二十七日召集解除輜重兵二等卒となり故郷に歸る左記賞狀により其勳功を知るべく又三十九年四月一日功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

賞狀

第一糧食縱列

陸軍輜重輪卒 高瀬忠助

平素馬匹の飼養保育に注意し特に奉天附近會戰後半歲の久しき頻繁なる輸送に従事し炎熱に耐へ霖雨を冒かじ拮据勉細心注意能く馬匹を完全に保護し輸送の任務を完ふしたるは其功績顯著なるものと認め依て茲に賞狀を附與す

明治三十八年八月四日

高瀬忠助君

陸軍輜重兵上等兵勳八等

馬場福松君

君は比企郡大河村大字腰越百十番地馬場福松四郎氏の長男通稱を華峰と云ひ明治十五年五月を以て武藏の國乳首山麓の一寒村に生る家世々製紙を業とし小川製紙家の泰斗と稱せらる君實に八世の孫なり始め學を青木喬先生に修め後松山の人齋藤竹次先生に英學を學ぶ明治二十七年の春東京皇宮の侍講たりし市河万庵の門根岸操先用を居宅に聘し儒學を學ぶこと三年衆人の勸めにより身を教育界に投し子弟を訓育すること五年後徴兵に應ずるに至れり明治三十七年三月十一日勳員令下るや君は奮然出征の先登たらんことを乞ふて直ちに戦地に渡れり君又文章を克くし激務の最中と雖も能く所感を綴り新聞雜誌に寄せて大に世人の好評を博したり三十九年二月錦衣凱旋せらるや人皆官を勳むれ共欲せず直ちに實業界に心を注ぎ我が遺業の改良發達を企圖すると共に地方經濟の隆興を圖れり尙ほ戰歴としては三十五年十二月一日輜重兵第一大隊に入營全日第一中隊に編入三十七年二月四日一等卒申附けらる全年三月十一日勳員令第三編食縦列に編入全日分隊長被仰付全年五月三日東京出發全月五日廣島着全六月

五日宇品港出帆全九日清國蘆大澳三官廟へ上陸以後三十八年一月迄旅順攻圍軍參與三十七年十二月十四日上等兵を申附けらる三十八年一月下旬旅順附近出發蓋平海城を経て二月中旬沙河附近に達し全月下旬より三月中旬に至る奉天附近の戰闘に參與す全五月八日歸國卒業三十九年一月二十五日鐵嶺出發全月二十七日大連着全月二十八日大連出帆二月一日宇品港歸着全五日廣島出發全月八日東京着二月十四日復員により召集解除全日輜重兵歸職工長適任證書を附與せられたり功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる左掲は川上埼玉新報社長宛の書翰なり

滿州の秋色

異郷も又夏去りて秋來りぬ銀河帯の如く流れ白露玉の如く滴る而して武陽の風光今や如何滿州の地方萬里南に遼河の流れあり東に大孤の湖あり浩々呼として平野涯なく黃塵面を撲ち朔風髪を吹く蓋し甲午の役日軍の此に入れる弊寒骨を徹し惡雪肌を刺すの時に屬し以て地味の肥瘦土質の潤稿を究むるに由なく唯だ其枯柳蕭條空しく風に打たれ寒响寂寞徒らに雲に憫むの光景に看て滿州は到底一種の沙漠に過ぎずと斷了せり然かも遺次の役予盛暑驕熱の際を此處に

送り大石橋以北の原野悉く草肥へ獸走るの地なるを

目睹し慘然として前非を悟り爾然として後是を知りぬ高粱の長さ二丈畑の大なる者周廻三四里に及ぶ宛然たる湯池金城也露嘗て此に伏して日帥を憐まし馬賊住々此に隠れて官兵を苦む粟の高さ七尺豆の延ぶる六尺陸米は短しと雖も尙生じて一尺に亘り青禾疎々として風に戯る即ち是れ日本男子の宜しく飛躍す可きの處其の風俗は敦厚其人情は朴寬思霖一降せば何者にも従ふ可く威壓一施せば何人にも服す可し予野戰倉庫の附近に在りて萬般の輸送を爲す常に清人と相往來す武人も來り文官も來り村長も來り苦力も亦來る笑聲室に滿ち秋語堂に湧く騎して出づれば婦女は顔を破り兒童は大人ライ(來)を叫ぶ快なるかな若し予にして黨爭政闘に意なからんか常に非役軍人を提げて滿州に入り地を耕し傍ら兵を練るを事とす可し徳を樹つる豈百年と謂はんや

滿州の秋色は子を促がし馬上の人と爲す前日千山に遊び嶺南嶺北紅葉の多きを眺めて情緒轉た纏綿たり惡詩此に於てか就る
征塵漠々滿邊城 唯有千山秋已清
匹馬暫留殘照裏 半林紅葉不熱情

大塚新吉君

(四十三)

風雲附與張家兒 丁落江湖此一詩
秋入千山紅葉發 龍孫祠畔雨如絲
千山の紅葉は佳なりと雖も武陽の春野に如かず白馬銀鞍蝶に戯れ蛛を追ひて諸兄と共に陣屋に遊ぶは果して何日か

於 滿州

華 峰

明治三十八年九月四日

埼玉新報社 川上社長殿

陸軍輜重兵上等兵勳八等

大塚新吉君

君は比企郡大河村大字青山百三十六番地大塚庄右衛門氏の二男也明治十年五月生全三十年徵兵にして現役十二月一日輜重兵第一大隊第二中隊に編入三十二年一月十八日一等卒を命せらる全年十一月十五日北海道第七師團輜重兵第七大隊新設の爲模範兵として一ヶ年分遣を命せられ三十三年十一月三十日滿期除隊全年八月九日勳員により輜重兵第七大隊に編入三十八年三月三十日上等兵を命せらる全年十月二十三日遺骨護送として札幌へ旧張十二月五日留守第七師團司令部より貨物宰領助手として滿州野戰司令部へ出張を命せらる

送として札幌へ旧張十二月五日留守第七師團司令部より貨物宰領助手として滿州野戰司令部へ出張を命せらる

る全月七日屯營出發室蘭青森東京名古屋大坂を経て全月十四日廣島に着全十六日宇品港出帆全月十九日大連上陸全月二十四日大連出發金州得利寺奉天を経て全月二十七日鉄炉浦に着全月全日野戰司令部に貨物交附濟十二月二十八日補充として第四糧食縱列本部へ編入全地に滞在三十九年三月一日凱旋の爲鉄炉浦出發奉天金州を経て全月三十日大連着二月六日大連港出帆全月十一日宇品上陸全月二十八日廣島出發東京郡東京仙臺を経て旭川に歸營平和克復により全月三月二十日召集解除功により勳八等瑞寶章及金七拾圓を賜はる

陸軍輜重兵上等兵勳八等

島野金太郎君

君は比企郡大河村大字腰越百七十二番地明治元年二月十七日源次郎氏の長男に生る祖先是元男衾郡鉢形城主北條安房守氏邦の家臣島野隼人たりしも時世に鑑み殖産業に従事せんと兄弟三人相携へて今の郷邑を撰び山腹に穴居せし事明なり後出で山麓に土木を起し子孫相繼で東西に家を起し南北に分つに資産を以てし數十年の久を経て遂に島野家の一廓を爲すに至る故に世呼んで家名を御前と稱せらる祖先の遺物今尙歴々として存す君は明治九年村立小學校に入り壯

なるに及て村里の子弟を學堂に鞠育薰陶せし折しも明治二十一年第一師團輜重兵に徴せられ爾來専心服務の結果品行方正勤務勉勵學術優等の廉を以て全二十三年歸休を命せらる二十七年八月三十日日清戰役に際し充員下令九月一日第一監隊分隊長に編入せられ全月十月十八日宇品乘船全月二十三日清國花園口に上陸せり金州蓋平田庄台等の戰闘に参加し構和訂結し二十八年六月十六日大連灣乘船全二十三日大坂上陸全月二十六日過員に付歸郷を命せらる卅七年十一月九日日露戰役に際し充員下令全十七日輜重兵第一大隊に應召す全日後備糧食縱列分隊長に編入せらる越て三十八年二月二日宇品乘船全七日清國柳樹屯に上陸先遣部隊に追及せんと急迫行軍をなし金州普蘭店得利寺熊岳城蓋平海城の古戰場を経て全月二十四日遼陽に着する事となれり全二十五日近衛混成旅團長に屬し戰列に入る爾來奉天砂河鉄嶺撫順攻撃に參與し全六月六日第四軍に編入せられ從軍中軍務勉勵せし廉を以て賞を受くる數次遂に團隊長より左の賞状を受く

賞状

明治三十七年十一月十七日當縱列編入以來品行方正勤務勉勵にして部下の使御馬匹の保護兩ながらを宜しき

得特に精勵能く任務を盡し其の成績優秀なるを認む

明治三十八年九月二日

後備混成第十旅團第一糧食縱列長

陸軍輜重兵大尉 秋月胤逸 ㊦

明治三十八年十月日露和約成立し全十一月大連灣乘船凱旋の途に就き全十一月末日歸郷を命せらる功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる

左掲は郷里なる友人に送致せるものなり

爾來は御無音遼陽着迄の事は既報の如くに候今や帝國にては梅花も已に綻ひんとするの候當滿州は反比例の寒の極点にて帝國軍には一切無之候得共土人は往々有之自分等は滿州生活も再度なれば兎角經驗も有之候間此の邊は御安心被下度兼て我が軍は久しく冬營中にて脾肉の嘆に堪るざりし處愈々奉天總攻撃開始も目前に迫り志氣大に揮ひ道回は後備隊の我等況して四十路の老櫻の手腕を振ふ可き時なれば死出の名残りに今一度と大に樂み居候餘は當大戰の結了次第更に吉報申述候間御待被下度候早々

むかしゆかしき滿州も十歳の前のなづかしき

明治三十八年二月二十五日

第一軍近衛後備混成旅團第一糧食縱列

第三分隊長 島野金太郎

島野雅兄へ

陸軍工兵二等卒勳八等

新井長十郎君

君は比企郡小見村大字松永新井彦五郎氏の弟明治十六年十二月の生明治三十九年大河村大字腰越二百五十番地へ分家明治三十六年徵兵にして補充兵役三十八年一月十八日臨時教育召集に應じ近衛工兵大隊補充隊へ入隊全月三月十七日教育召集滿期の處在隊の儘補充隊の要員に編入全月二十一日野戰近衛工兵大隊の補充として屯營出發二十三日宇品乘船二十七日清國柳樹屯上陸四月十八日補充として第一中隊へ編入五月十五日より六月七日迄柴派堡より下肥地に至る兵站線道路構成に従事す七月十四日より九月十三日迄東王家窩棚附近橋梁保護に従事す全月十一月二十三日凱旋の爲め宿營地出發二十四日鐵嶺乘車二十六日大連二十七日大連出發三十日宇品歸港十二月五日屯營着隊復員下令により全月十一日召集解除歸郷三十九年四月一日戰役の功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

陸軍工兵一等卒勳八等

島野藤藏君

君は比企郡大河村大字
履越百六十六番地島野

藤右衛門氏の三男明治十七年三月生、日露戦役の爲め明治三十八年一月六日臨時召集に應じ、工兵第一大隊補充隊第二中隊に入營、三十八年四月六日宇品港出帆、三十八年四月九日清國盛京省大連上陸、三十八年五月九日補欠として工兵第一大隊第一中隊に編入、三十八年五月十五日より全二十五日に至る小塔子及法庫門間の道路工事に従事す、三十八年六月四日より全十八日に至る小塔子、黄花山間の道路補修工事に従事す、三十八年六月二十日より四十三日間小塔子小大窪間遼河の軍橋及び道路の構築に従事す、三十八年九月三日より七日間饒家屯附近に於て道路工事に従事す、三十八年十一月二十二日工兵一等卒被申付、三十八年十月十六日平和克復、三十九年一月二十六日凱旋の爲め大連出帆、三十九年一月三十日宇品港上陸、三十九年二月三日凱旋歸隊、三十九年二月五日復員開始、三十九年二月七日歸郷、功により勳八等旭日章及金八十圓を賜はる。
左掲は家郷宛の書翰なり。
謹啓貴下には一方ならざる御介抱を蒙りたるも出征

以來御疎遠勝にのみ打過ぎ奉謝候爾後益々壯客地の戦闘工事に従事し寒熱雨露に逢も些の變なく就中遼河軍橋架設の如き平素鍛練した敏腕を振は今日なりと全力を注て愉快に従事致申候郷國の諸君は百方心慮を勞せられて家族の援護會を設立して吾人軍人をして後顧の憂なからしめ且つは慰問狀等に接する如山何ぞ斯る厚意に對し粉骨碎心邦家の爲め國民の代表者たるの任を盡さずして措く可けんや幸に前陳の如く身体益勇壯日々愉快に奉公仕且軍務の餘暇には或は餘興等も有之少も不自由を感ずること無之候に付希は清慮を煩さらんことを書外は後報に譲る草々頓首

明治三十八年九月一日

清國於饒家屯 島野藤藏 啓

陸軍工兵一等卒勳八等

吉田宇三郎君

君は比企郡大河村
大字下古寺五番地

吉田多七郎氏の長男明治十二年六月生、明治三十二年徴兵にして補充兵役三十三年六月三十日より三月間教育召集に應じ、三十七年三月九日動員により工兵第一大隊

補充中隊へ編入、全年四月廿二日後備工兵第二中隊へ轉入、七月四日第二軍編入として赤羽屯營出發、全月七日廣島着、全八月宇品港出帆、全月十三日清國青泥窪上陸、十四日金州着、十六日普蘭店着、十八日より第二軍兵站監部に屬す、二十日北賀尾尾房店砂向台間道路修繕工事に従事す、廿三日蓋平着、全日より蓋平河にて架橋に従事す、全年九月六日脚氣の爲め海山藥兵站病院に入院、十三日南架房店へ轉送、十八日柳樹屯兵站病院へ後送、二十日柳樹屯出帆、二十三日大坂病院へ轉送、二十八日東京豫備病院氷川分院へ轉送、十月十七日全愈退院歸隊、十一月九日野戦工兵第一大隊補欠として屯營出發、全月十一日廣島着、十七日宇品港出帆、全月十二日清國青泥窪上陸、十一月二十三日野戦工兵第一大隊第二中隊へ編入、全月二十六日松樹山攻撃に従事す、三十八年一月二十四日旅順出發、北上の途に就き、二十六日大幸寨子に於て病の爲め入院、全日大連兵站病院へ收容、二月一日大連港出帆、全日宇品着、廣島豫備病院へ收容、二月十三日東京豫備病院澁谷分院收容、三月十五日に至る五月十三日迄歸郷療養、全年五月十四日歸隊、工兵第一大隊補充隊へ編入、全月廿七日野戦工兵第一大隊補欠として屯營出發、二十九日廣島着、全三十一日宇品港出

帆す、六月三日大連灣へ上陸、十一月一日野戦工兵第一大隊着、十二月病氣の爲め入院、大泉眼舎養病院二十四日大連兵站病院へ轉送す、二十七日大連港出發、七月一日宇品港上陸、十七日東京豫備病院廣尾分院へ轉送、二十三日全治退院、補充隊へ歸隊、全年八月十日第二軍第一師團後備工兵第二中隊補欠として屯營出發、全月十二日廣島着、全十四日宇品港出帆、全月十八日清國大連港上陸、全月二十八日二仕窩棚着、第二軍第一師團後備工兵第二中隊編入、八月二十四日より三十九年一月五日迄、アルシオへに於て左邊軍橋保護及諸勤務に従事す、全月十三日凱旋の爲め宿營地を出發、鐵嶺着、十六日大連着、十八日大連港出帆、二十二日宇品港上陸、二十八日廣島乘車、三十日屯營着、二月八日復員に付解散功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる。
左掲は戦地より郷里の役場宛の書翰なり。
拜啓寒烈の候、役員諸君益々御健康の事と奉遠察候降て、迂生無事勤務能在候間、乍他事御放念、被下度候、扱て旅順も今や陥落致し、御同意芽出度存候、就ては迂生従軍以來、役場宛にて時々戦況通知致し置候へ共、着如何に候哉、未だ役場よりわ一回の御返書も無之、實に遺憾に堪ず、候迂生役場の慰狀を望むには無之候へども、多き兵士の中、役場よりして慰狀に接せざるは生一人に

御座候最も過日はがきにて慰問状如き者を頂戴致し大に戦友に其冷嘆なるを笑れ申候嗚呼役員諸君よ生は國民の義務として出征致し居り筆に盡し難き危険も犯し居り候否生一人に無之出征兵士たる者皆同じ事に御座候然れば國民を預り居る役場は又其れに對する義務有之者と存候然れば吾郷里なる役場に置ても他郷役場と同様なる同情を表せられん事を一重に望み候生は來る廿五日を以て遼陽に出陣仕り候早々一月十八日

吉田 宇三郎

大河村役場御中

陸軍工兵一等卒勳八等

青木佳太郎君

君は比企郡竹澤村大字鞆負二十六番

地竹澤岩吉氏の次男明治八年七月生明治二十八年徵兵現役十二月一日第一師團工兵第一大隊へ入營二十一年十一月三十日に滿期除隊三十二年三月十日比企郡大河村字上古寺八番地青木さいへ入夫三十七年四月二十日勳員下令工兵第一大隊へ召集全月二十六日完結第二軍兵站電信隊へ編入三十七年五月二十七日出發征途に就く六月六日宇品港出帆全十三日清國盛京省張家屯上陸

同十四日より十六日迄均漢通信所より轉角房通信所に至る半永久線添架六月十七日より十九日迄古谷班と合し轉角房普蘭店間半永久線建築全廿日より七月七日迄普蘭店通信所檢査兵七月七日より全二十二日迄南瓦保店間國用線の修理及半永久線の建築七月十三日より本部へ付屬す三十七年四月二十七日建築部に歸隊す全八月十日第二建築部に合し他山保海狹浦間軍用線架設十三日より十四日に至る小姐廟牛莊間電話線架設十八日より十九日に至る牛莊小姐廟間電話線架設及撤收二十日より二十三日に至る海城停車場間半永久新架全二十四日本部へ歸る三十八年三月一日小煙臺近傍兵站司令部間被覆線撤收全四日黑溝臺鎮南保間軍用線修理五日鎮南保長難間軍用線架設十二日感状を授與せらるる左掲は郷里の小久保村長宛の書翰なり

拜啓時下晝は炎帝の來るなく夜は蚊虻の飛ぶなく洵に秋天の好時節郷里諸君愈御清寧業務被遊候段欣喜の至り奉慶賀候降て劣生平素の光蔭を以て恙無兵務に精勵仕候に付乍憚御省慮可被下候願みれば去る明治七年五月二十七日熱誠なる國民歡呼の下成功を誓て涼船萬國丸に塔し敵艦出沒の間を冒して征途に向ひ六月十三日清國盛京省張家屯に上陸時恰も我軍

は敵壘を南山に陥し更に敵を得利寺に攻撃し前進急速にして其後方及旅順包圍軍の連絡線愈々延長増加となり此切迫せる時期に際するを以て寸刻猶豫の暇なく野戰電信隊と行動に共にし全軍の連絡活動に務め追々前進致し爾來暫く烟臺附近に在て冬營の苦難を嘗め年を越へ敵の黑溝臺方面に壓迫し來に際しては軍の行動に隨て降雪を冒し沍寒に堪土地凍結して岩石より堅きの時に於て半永久に建築し奉天會戰に於て軍の疾風迅雷の勢を以て敵を追撃し之を奉天に壓するに當りてや是が行動に伴ひ一部は東清鐵道に沿ひて前進し一部は之に跟隨して其後方連絡線を延伸し野戰電信隊に餘力を與へ大に全軍の行動を助け其連絡を確實に保ち此戰鬪間に於る行動に對して特に軍司令官閣下より感状を授與せらる我電信隊作業も又順次に擴張せる兵站線の連絡を造り昌圖府に達し戰鬪準備全く成るに及び偶々平和克復となり茲に日露戰役の終局も定まり今や年を経ること二十閱月にして其成果を表すれば線を架すること半永久線二百有餘里軍用線百九十里餘線を撤すること四百里線を修理する事四百七十七里餘通信所を開きし數百十九ヶ所其取扱たる電報數廿一萬餘通の多きに達し此

間辛酸の境遇となり或は快然不可言の場合もあり近々凱旋となるの今日に至るも只一回の罰典等彫断だに受けし事なく首尾能く國民としての奉公義務結果し來り候に付此亦乍他事御休念被下度候何れ歸郷の上は從軍行動中實踐の物語り等申述へ其上は第二國民の義務たる産業を以て尙爲國家聊か御助力仕度き精神に御座候嗚呼光蔭の速かなること恰も流るゝ水の如し何卒歸郷の上は百年業務の點に就て諸君の御保護を仰き度願上候先は御近狀御伺に併せて申述へ候就ては村内重なる諸君を始め外御一同様へ此旨宜しく御鳳聲被下度奉懇願候也早々敬具

明治三十八年九月二十五日

第二軍兵站電信隊 青木佳太郎

村長 小久保滿尊殿

陸軍工兵一等卒勳七等

岡本雄藏君

君は比企郡大河村大字腰越七十一番地岡本貞

次郎氏の養子明治三年七月生明治二十三年徵兵にして現役十二月一日工兵第一大隊第三中隊へ編入二十四年十二月四日一等卒二十五年十一月三十日歸休除隊廿七年九月一日勳員令により戰時工兵第二中隊へ編入九月

二十五日日清戰役從軍の爲め屯營出發十月十五日字品港出帆十月二十四日清國盛京省花園口上陸二十九日に至る花園口に於て架橋十一月六日七日金州城攻撃並に除加山砲臺占領に従事す十二日金州二十一日二十二日の兩日椅子山砲臺攻撃並に旅順砲臺占領に従事す二十三日旅順十二月三日金州二十八年一月三十日摩天嶺附近攻撃に參與二月二十四日太平山攻撃に參與三月七日營口に於て地雷發見及堀除三月九日田庄台に於て戰闘三月二十一日より全二十六日まで蓋平河に於て架橋六月三日凱旋の爲め大連灣出帆七日字品港九日屯營へ凱旋召集解除功により勳八等瑞寶章及金三十五圓を賜はる三十七年十二月十一日充員召集に應じ工兵第一大隊補充隊へ入隊全日後備第三中隊へ轉す三十八年一月三十一日征露從軍の爲め字品港出帆二月六日柳樹屯に上陸七日より徒步行軍にて劉家溝より復州海城を経て二月二十三日遼陽西方高洛子全日第三軍に屬す二十七日より六月二十七日まで遼陽蘇家屯奉天等に分遣經鐵材料受領及運搬に従事す七月十八日前營子二十三日二臺子二十五日より八月二十日迄橋梁及道路の修繕に従事す二十一日石佛寺三十九年一月三十日まで軍橋補習作業及道路修繕に従事す三十一日凱旋の爲め石佛寺出

發二月三日鐵嶺發車六日大連出帆十日字品上陸十二日廣島發十四日屯營歸着十九日復員により召集解除功により勳七等旭日章及金百圓を賜はる

平栗辰五郎君

君は比企郡大河村大字青山百六十番

地戸主明治十五年十一月生明治三十五年徵兵にして現役三十六年四月一日徵兵として野戰砲兵第十四聯隊へ入隊第六中隊に編入七月三十一日在營滿期除隊三十七年三月九日充員召集に應じ野戰砲兵第十四聯隊補充隊に編入全月十六日彈藥縱列に轉入(但し本聯隊)五月三十一日日露戰役從軍の爲め字品港乘船六月六日清國盛京省張家屯上陸全月十五日得利寺附近の戰闘參與七月九日蓋平附近の戰闘參與七月二十三日遼陽戰闘に參與十月十日沙河鎮にて馬蹄症を受け十一月第四師團衛生病院に入院十二月兵站病院に轉出二十日青泥窪より乗船全二十三日字品港着二十七日東京戸山分院に遺送十一月十八日退院十九日召集解除功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる

陸軍砲兵輪卒勳八等

島田宇八君

君は比企郡大河村大字増尾二十三番地島田房

次郎氏の甥明治十二年八月生明治三十二年徵兵にして現役十二月一日野戰砲兵第十八聯隊第一大隊第二中隊へ入隊三十三年四月一日歸休除隊三十七年三月十日勳員により野戰砲兵第一聯隊第四中隊へ入隊四月二十二日征露從軍の爲め字品港出帆五月十一日清國盛京省大沙河附近に上陸全月十六日關ヶ店附近に戰闘二十六日金州南山戰闘に參與七月二十六日より二十八日に至る榮城子附近に戰闘三十日付家甸子附近に戰闘八月十四日胡家屯附近に戰闘十五日より二十日に至る曲家屯附近に戰闘二十一日より二十四日に至る小東溝東方標高百三十一高地の東北方高地に於て戰闘二十五日より十一月二十一日迄全所に戰闘十二月二十八日より三十八年一月一日まで里橋東方高地戰闘二日旅順陥落に付北進一月二十五日曲家屯出發二月九日沙河鎮附近に着二月二十七日より三月十日まで奉天附近七子臺及五家子田義屯に戰闘十一日より三十九年一月十三日まで奉天東方臺三家子に滯陣十四日凱旋の爲め全所出發廿一日鐵嶺乘車二十四日大連出帆二十六日字品港上陸三十一

日屯營着二月十一日復員により除隊功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる

田端安太郎君

君は比企郡大河村大字腰越百九十五

番地田端秀次郎氏の二男明治十七年八月生明治三十七年徵兵適齡補充兵役に編入せらる三十八年四月十四日補充召集を以て野戰砲兵第十六聯隊補充大隊第二中隊へ入營後幾何もなく急性胃加答兒兼腸痙痛并に脚氣病を併發し全年六月十六日東京豫備病院國府臺分院に入院八月二日戸山分院に轉送せられ九月七日召集解除を命ぜらる平和克復後一時賜金三十五圓を賜はる

左掲は病中郷里宛の書翰なり
 肅啓前便申上候通り私事入院以來日夜嚴重なる治療相受け居候得共何分未だ全快不仕然しながら御心配被下問敷候病辱中とは申ながら新紙の寄贈等有之一讀忠勇なる諸士奮戰の状況恰も見るが如く唯一の樂みに有之候亦實に羨敷此事に御座候何れ其内全快彼の地戰友と共に「ハルビン」見物の心組に御座候先は亂筆ながら近隣各位へも宜敷願上候早々
 明治三十八年八月十日

原三代藏君 島野桑十郎君

鯨井宗太郎殿

田端安太郎

陸軍砲兵二等卒

原三代藏君

君は比企郡大河村大字青山八十七番地原元次郎氏の次男明治十七年五月生れ明治三十七年徴兵にして補充兵役三十八年四月十日教育召集の爲め野戦砲兵第十三聯隊補充大隊第二中隊へ編入七月九日補充召集に移し要員編入七月十一日蹄鐵術修業を被命十月二十五日卒業證書附與全月十六日平和克復三十八年二月二十六日日本隊凱旋に付準備委員を命せられ全年二月二十三日より品川町品川館へ出張し電話掛りを被命二月廿七日復員下令三月六日勤務勉勵により善行證書を附與せられ三月七日召集解除功により金三十五圓を賜はる

陸軍砲兵二等卒

島野桑十郎君

君は比企郡大河村大字腰越百七十六番地島野林三郎氏の弟明治十七年六月生れ明治三十七年徴兵にして現役十二月一日野戦砲兵第十三聯隊補充大隊第三中隊へ入隊軍務に勉勵せり出戦の命を受けざりしは遺憾ならんも功により金五十圓を下賜せらる

島野桑十郎拜

埼玉縣比企郡大河村役場

野口宜銳殿外役員諸君殿

陸軍砲兵二等卒

馬場駿三君

君は比企郡大河村大字青山百八十七番地馬場忠次郎氏の養子明治十六年六月生れ明治三十六年徴兵にして補充兵役三十七年七月二十五日教育召集に應し野戦砲兵第十三聯隊補充中隊へ入隊十月二十二日在隊儘要員に編入十二月一日編制換の爲め野戦砲兵第十三聯隊補充大隊第二中隊へ編入爾來出戦の命を待ちつゝありしも終に目的を達せず三十八年八月二十五日召集解除となる功により金五十圓を賜はる

左掲は郷里の村長宛の書翰なり

拜啓余等軍人の勞苦に對し懇篤なる慰問狀に預り奉深謝候自今益奮勵以て御鴻恩の萬一を報せんことを期し居り申候頓首

明治三十七年十一月十六日

府下世田ヶ谷野砲第十三聯隊補充中隊第二班

馬場駿三

野口村長殿

馬場駿三君 荒井眞平君 山口留吉君

(五十二)

左掲は東京在陣中郷里の村役場宛の書翰なり

拜啓陳者嚴寒の時節に相成候其後は御無音に打過ぎ候折柄役場員殿益々御清榮の段日々務能任候由奉遠察候降て小生儀合格當籤以來本日に至るまでの御盡力は一方ならず候尙又自分郷里出發の節は御丁事なる養生のお藥までも頂戴仕難有候折柄御禮等も可申上の處誠に自分勝手のこと計り申譯無之平に御勤辨相成度猶又御丁寧なる饒別被下難有頂戴仕此處に謹て御禮申上候何卒援護會諸君へ宜敷貴殿より御禮相成度依て小生出發以來村内より補充兵二三回各隊御入營の由猶又地方の國民軍を召集せらるゝ由抑々軍人は國家の干城たるものなれば海賊を未發に防ぎ國威を海外に輝し我が國の如き海内皆兵と云ふ制度にては志願をも致す事情に御座候依て小生現役に編入相成候ては誠に難有幸福なり依て自分も紀律整然命令の下に運動し健全に人を重じて軍務勉勵の修業致し國家の干城たる責任の任務を盡さんと覺悟罷在候依て出征の節は彼の滿州の地に行き戦闘に望み露助を追拂はんと毎日思ひ軍務罷在候に付乍憚御休神被下度先は不敢取御禮旁御一報申上候早々頓首

明治三十八年一月八日

陸軍砲兵二等卒

荒井眞平君

君は比企郡大河村大字腰越三十二番地荒井兼三郎氏の三男明治十七年九月生れ明治三十七年徴兵にして補充兵役三十八年一月七日教育召集に應し野戦砲兵第十三聯隊補充大隊第一中隊へ入隊四月七日在營の儘全隊へ補充召集に移さる五月五日日露戰役從軍の爲め宇品港出帆九日清國大連に上陸十七日乘車北進二十日鐵嶺二十三日徒步行軍補欠馬一頭を率ひ「カワカウツ」に野營二十五日沙河にある本隊に着全日第五中隊に編入七月二十七日脚氣の爲め前四方臺病院に入院以來通林津病院を経て開原乘車八月二日奉天病院に五日遼陽病院に七日大連病院に八日大連港出帆十一日宇品上陸廣島竹屋分院に入院十四日東京氷川分院に轉院九月十一日全治退院本隊へ復歸全月二十二日病氣再發の爲め召集解除となる功により金三十五圓を賜はる

陸軍砲兵二等卒

山口留吉君

君は比企郡大河村大字青山六十四番地山口爲三郎氏の弟明治十七年八月生れ明治卅七年徴兵にして現役十二月一日野戦砲兵第十三聯隊第四中隊へ入隊以來

(五十三)

行軍又は演習に勉勵功により金五十圓を賜はる兄爲三郎氏は出征して殊勳を立てたり別項其戦歴に詳かなり

陸軍砲兵二等卒勳八等

山口豊作君

君は比企郡大河村大字 腰越百九十八番地山口

藤太郎氏の弟明治十六年十二月生明治三十六年徴兵にして補充兵役三十八年二月二日動員により野戦砲兵第十六聯隊補充大隊へ入隊全月十日日露戦役従軍の爲め宇品港出帆全月十四日清國柳樹屯に上陸十六日金州城十七日十三里堡十八日普蘭店二十日南瓦房店二十一日得利寺二十二日北凡房店二十三日熊岳城二十五日蓋平二十六日大石橋二十七日海城二十九日鞍山店三十日沙河鎮五月一日遼陽三日煙臺四日白塔堡五日奉天六日鐵炊舖七日三面船八日大孤家子より法庫門全日野戦砲兵第十六聯隊第一中隊に編入十五日戦利砲隊第二中隊へ轉出六月十七日小塔子十八日三眼井十月二日急性氣管支加答兒に罹り紅石橋第三野戦病院へ入院十月通江口病院十三日鐵舖病院二十日大連病院に轉院二十四日大連出帆二十七日宇品上陸全日廣島竹屋病院へ入院十一月三日東京澁谷病院三十九年一月十三日圓府臺病院全日退院野戦砲兵第十六聯隊第一中隊へ入隊一月二十一日

日召集解除功により勳八等瑞寶章を賜はる

陸軍砲兵一等卒

岡本三平君

君は比企郡大河村大字 腰越百二十八番地岡本

喜助氏の次男明治十七年二月生明治三十七年徴兵にして補充兵役三十八年一月七日教育召集として野戦砲兵第十三聯隊補充大隊第一中隊へ編入す全月三月二十七日野戦隊へ補欠として出征四月六日宇品港出帆九日清國盛京省柳樹屯に上陸五月一日野戦砲兵第十三聯隊第三大隊第六中隊へ編入七月十九日新立屯附近に於て實彈射擊演習又九月六日休戦下令全月二十一日新立屯南方高地に於て實彈射擊をなす十二月十八日於腰塞子附近射擊演習三十九年一月二十三十四日腰塞子附近に於て射擊演習二月八日砲兵一等卒任命二月十七日清國大連港出帆全月二十一日宇品港上陸全月二十四日復員下令二十五日屯營歸着三月八日召集解除功により金五十圓を賜はる兄岡本虎之助君も出征す其の勳功は戦歴を見て知るべし

陸軍砲兵一等卒勳八等

山崎武平君

君は比企郡大河村大字 腰越八十番地山崎善次

郎氏の長男明治十六年十二月生明治卅七年徴兵にして補充兵役三十八年二月二日動員により野戦砲兵第十六聯隊補充大隊第二中隊に入營全月五月二十五日日露戦役従軍の爲め屯營出發六月八日宇品港出帆全月十一日清國大連灣上陸二十六日大連出發二十七日鐵嶺着七月二日野戦砲兵第十六聯隊第四中隊に編入全月十二日步兵第二十五聯隊援護の爲め黒龍山に全月二十八日東三合方に八月二十九日第二十六聯隊の援護として獅子峪に行軍し十一月二日出發五日黃花嶺に歸着す十二月四日一等卒を申付けらる三十九年二月四日全地出發全月五日双樹子に歸省六日出發七日鐵嶺に歸省八日鐵嶺乘車十日大連着十一日大連灣出帆全月十四日宇品港に歸着十九日品川に凱旋二十五日召集解除功により勳八等瑞寶章及金九十圓を賜はる

陸軍砲兵一等卒勳八等

峰岸林平君

君は比企郡大河村大字 腰越十四番地峰岸萬九

郎氏の長男明治十六年三月生明治三十六年徴兵にして補充兵役三十七年七月二十五日教育召集として近衛野戦砲兵聯隊補充大隊第一中隊に編入全月十一月二十五日第三中隊に轉入三十八年三月三日靴工術修業證附與せ

られ全月四月六日第十三師團彈藥大隊第一歩兵彈藥庫列に轉出す全月六月二十四日日露戦役従軍の爲め營所出發二十六日橫濱港出帆三十日青森に着港七月二日青森出帆八日樺太大泊に着港九日上陸十日全地出發全月二日西久保村附近の戦闘に參與す植田村に滞在し十八日糧秣を輸送して大泊に向向す十九日全地より糧秣を輸送して本深村に歸着全地に滞在し二十七日義勇兵來襲し之れを奮闘す八月十日本深村を出發して大泊に歸宿す十二日大泊出發十日市村に轉宿し全地に於て糧秣を輸送す全月九月十四日内 還送十日市村を出發して大泊に着十七日大泊港を出帆十九日青森に着港全日上陸して東津輕郡油川村に宿營す二十一日全地出發二十三日野戦砲兵第十三聯隊補充大隊へ編入東京に歸着十月二十五日召集解除功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

陸軍砲兵一等卒勳八等

野口寛治君

君は比企郡大河村大字 青山二番地野口愛之助

氏の孫明治十六年八月生明治三十六年徴兵にして現役十二月十五日近衛野戦砲兵聯隊第三中隊へ入營三十七年四月十四日全聯隊補充大隊第二中隊へ編入十二月六

日一等卒三十八年二月十六日征露從軍の爲め宇品港出帆二十日清國柳樹屯へ上陸三月十五日近衛師團彈藥大隊第三砲兵彈藥縱列へ編入十九日舊站五月八日車夫屯七月十一日康熙樓に八月六日東營盤に移轉宿營全年十二月三日凱旋の爲め鐵嶺乘車六日大連出帆十日宇品港上陸十七日復員地歸着三十日復員により近衛野戰砲兵聯隊第一中隊へ轉出三十九年四月一日功により勳八等瑞寶章及金七十圓を賜はり尙ほ全年十一月二十四日酒肴料金二圓五十錢を賜はる全日歸休除隊

陸軍砲兵一等卒勳八等

本澤邦滿君

君は比企郡大河村大字上古寺五十九番地本澤

仙太郎氏の長男明治十六年十一月生明治三十六年徵兵にして補充兵役七月廿五日近衛野戰砲兵補充大隊第二中隊へ入營し三十七年十月二十七日臨時教育召集終へ補充召集に移せられ後取車候補者を命せらる十一月廿五日第三中隊へ編入十二月廿一日野戰隊へ補充の爲め世田谷屯營出發十二月二十三日廣島着全市寺町に一宿二十四日全市出發宇品港より鎌倉丸に搭して出帆二十七日清國大連灣に上陸三十日大連出發三十八年一月一日畑臺に到着一月二日近衛野戰砲兵聯隊第五中隊へ編

入沙河に滯陣する事四ヶ月餘一月二十八日馬耳山堡子附近に陣地を占め店家屯附近の敵に對して威嚇射撃を行ふ爲め砲手を命せらる二十四日奉天攻撃に付宿營地に砲廠を移し二十五日滯在地發馬圈子山西北方なる陣地に就き小北屯及奉集堡附近の歩兵を射撃す二十六日夜後武家溝北方高地栗畑山の陣地に就く廿七唐家屯北方高地にある砲兵及歩兵を射撃す三月七日まで陣地に露營全日夜半陣地出發沙河を渡り八日朝唐家屯に集合し翌九日追撃隊の前衛に屬し渾河を渡り「タイコウ」に至り敵の後衛部隊と戰鬪を交ゆ同夜「タイコウ」に幕營し十日石台南高地に陣地を占め鼓家樓西方高地にある敵の歩兵と戰鬪し前進して鼓家樓西方高地に至り奉天より鐵嶺に通ずる街道に充滿して潰走せる敵兵と戰鬪す其夜又新屯に幕營す十一日潘家臺を経て蓮花池に至り宿營兩三日間滯在す十三日全地出發追撃を續行す大異牛溝に至り三日間滯在す十六日斯屯に十七日寧官屯に至り追撃を止む十九日東防風溝に宿營し二十日百官屯に至り爾來此地に滯在す五月八日百官屯を發し瓢起屯に至る九日小屯に至る十六日小屯を發し宿老屯に至り全地に滯在する事二ヶ月七月十一日宿老屯を發し平頂堡十二日老虎頭に至る此地に滯在する事五ヶ月餘八月

一日を以て再び取者を命せられ取車候補者となり日々演習す九日五日婚和談判成立平和克復により十一月二十三日老虎頭を發し二十六日鐵嶺停車場より鐵道輸送に依り二十八日大連停車場に着す三十日大連出帆劍山丸に搭じ十二月二日宇品港へ上陸三十八年十二月二十日特別恩賜金二圓五十錢を賜はる同月二十三日召集解除功により勳八等旭日章及金八十圓を賜はる左掲は戰地よりの舊翰なり

謹啓時下寒氣相催し候處諸君も御壯健の由奉大賀候降て迂生事寒烈彈雨を凌ぎ君の爲め國の爲め忠節を盡し命を鴻毛の輕きに比し以て諸君にも返禮に

砲兵第五中隊大一小隊

本澤邦滿拜

大河役場御中
小學校御中
援護會御中

陸軍砲兵一等卒勳八等

神山美與治君

君は比企郡大河村大字尾十五番地

寄留比企郡福村大字福田百廿四番地神山初太郎氏の長男明治十六年八月生明治三十六年徵兵にして補充兵

役三十七年十月二十一日教育召集の爲め野戰砲兵第十三聯隊補充中隊へ編入す十二月廿二日在隊のまゝ補充召集に移る同日勳員下令征露從軍の爲め屯營出發二十六日宇品港出帆三十日清國柳樹屯へ上陸三十一日金州三十九年一月二日柳溝三日普蘭店四日瓦房店六日得利寺七日北瓦房店八日熊岳城十日蓋平十三日大石橋十四日海城十六日鞍山店十七日遼陽十八日大荒地を經て十九日日本隊へ着第三中隊へ編入二十五日戰鬪準備の爲め大家屯二十九日より三十一日迄三日間黑溝嶺山臺を經て戰鬪二月一日大東山堡二十五日敵は攻勢を執り戰鬪の都合により本隊は西方五里浪洞溝滯陣二十五日午後七時沈且堡西端に陣地の工事二十七日午前一時工事浪洞溝に歸隊午後三時戰鬪の命により前陣地に於て三月一日迄戰鬪三月二日に樹子戰鬪を始めとし三日水羅衛臺四日玄家八家子五日小薊家堡六日角家子七日張子屯八日季官堡に戰鬪九月十日分臺に戰鬪追撃奉天に戰鬪十二日後方張士屯に滯陣十四日分捕並收集の爲め大橋子出張四月二日張士屯五月四日同所出發九日開元西方前施家堡六月二日小家子四日同所出發七日昌國府守備八月七日刻家荒地十月十七日第四軍に屬す十一月十四日開原西方四塞子三十九年二月十一日凱

旗の爲め同所出發同日鐵嶺十三日乘車十五日大連十六日出帆二十一日字品港上陸二十六日屯營三月八日召集解除功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

左掲は郷里の村役塲宛の書翰なり
拜啓仕候時下秋冷の候に候所貴村役員御中様には其後何等の御障りもなく日々勤務罷在候御事と乍蔭大慶至極に存候借て過日以來の平和條件に際しては小村全権員も非常に腦を痛めたる結果として去日構和談判も結了し尙去る十四日に批准交換も相済との由にて我々も追々と撤兵致す模様には有之候へば不日御諸君に御面會申し出征中の御厚情御禮可申候へば久々の御無音平に御許し被下度候先は御伺迄で早々

次に過日出征軍人名簿御送附被下正に受納致し早速御禮可申の所兎角戦地の事とて他事に取紛れ御無音致し候段平に御海容被下度此段御詫申上候
明治三十八年十月十九日

在滿州昌圖西方刻家荒地にて
神山美與次拜
大河村役塲員御中

陸軍砲兵一等卒勳八等

本澤留吉君

君は比企郡大河村大字上古寺六十番地戸主明

治十六年五月生三十六年徵兵にして現役十二月一日第七師團野戰砲兵第七聯隊第六中隊へ入營三十七年十一月十六日征露從軍の爲め大阪港出帆二十二日清國ダニニ上陸二十六日より旋順口方面の戦争に參與明治三十七年十二月七日一等卒明治三十八年一月二十七日北進二月廿七日より奉天攻撃軍に従事す三月三日德勝營子に戰闘四日姚家屯五日季官堡附近六日分山臺七日大石橋附近八日より十日に至る三日間轉灣橋十一日北陵附近の戰闘に參與す十一日北進灰土崗十一日法庫門五月三日黑鴨屯に至る遼陽窩棚の戰闘に參與十月二十五日凱旋の爲め黑鴨屯出發二十七日五家子三十九年二月二十四日御花園三月二日奉天乘車三日柳樹屯六月同所出帆十日室蘭着港十四日屯營歸着三月十九日復員十月二十九日善行證書授與十月二十一日歸休除隊功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる
左掲は郷里の村役塲宛の書翰なり
拜啓久々御疎遠勝に打過き申候段平に御赦免相成度時下春湯之候尊職には益々御清邁御勤務之由奉進

賀候次に鄙生儀入營後益々壯康日に軍務に勉勵罷在候に付き乍憚御休心相成度候扱て此度は御懇信の御書翰に接し忝く拜誦仕候不肖留吉一旦國家干城の責任を負ひし上は時局も時局有機に逢遇せし鄙子一朝出戦の上は未熟ながら軍人の本分を完ふせんこと今より期し國恩萬分一にても酬ゆるの決心に付き以後共相變らず御心添相成様幾重にも御願申入候詳細は追て申上可く候亂筆御免相成度候早々

旭川野戰砲兵第七聯隊第六中隊第七班
本澤留吉拜
埼玉縣武藏國比企郡大河村役塲
村長横川重右衛門殿
外吏員一統御中

陸軍砲兵一等卒勳八等

岡本長次郎君

君は比企郡大河村大字腰越百十三番

地岡本六五郎氏の長男明治十三年六月生明治三十三年徵兵にして補充兵役明治三十五年四月一日教育召集として野戰砲兵第十六聯隊第五中隊へ入隊六月三十日教育結了解散三十七年五月十八日充員召集に應じ野戰砲兵第十八聯隊補充大隊へ入隊九月十五日第二回補充と

岡本長次郎君

して出征十九日廣島着二十二日字品港出帆二十六日清國青泥窪上陸二十八日西泥河子に於て本隊第一中隊へ編入二十九日香河子に於て旅順攻撃に參加す三十八年一月二日旅順陥落の爲め全月十五日より北進し全月三十一日奉天省頭臺子着二月七日一等卒申付られ二十七日奉天攻撃の爲め發三月一日蘇家安及大平附近に於て三日碩嶺堡五日岔臺附近に於て戰闘六日大石橋全七日關上及高力屯附近に於て戰闘十二日より四月十二日迄錢家堡に十三日より五月三日迄河路海に四日より二十四日迄陶家屯に二十五日より三十九年二月五日迄柏家溝へ駐屯六月全地出發十三日大連灣出帆十六日字品上陸二十二日屯營歸着二十八日召集解除功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる
左掲は大河村役塲宛の書翰なり

二〇三占領す我中隊即死一負傷二龍松樹はまだ眼張つて居る決心隊四千人内千名の死傷中村少將負傷す目的を達するに能はず小生幸に無事に御座候間御安心被下度候早々

出征第三軍野戰砲兵第三旅團
第十八聯隊第一中隊
大河村役塲役員御中様
岡本長次郎拜

陸軍砲兵一等卒勳八等

田端長吉君

君は比企郡大河村大字 腰越二百三番地田端重

次郎氏の長男明治十二年三月生明治三十二年徴兵にして現役今年十二月一日野戦砲兵第十八聯隊第二中隊へ編入爾來能く軍律を守り善行證書を附與せられ褒賞休暇を賜はるゝこと屢々なり三十四年十二月一日一等卒拜命三十四年十二月二十四日滿期退營後ち日露の國交敗れて宣戰の大昭煥發せらるゝや三十七年三月十日充員召集を以て野戦砲兵第一聯隊へ編入せられ四月二十二日宇品港出帆五月十一日清國盛京省孫突咀子上陸十六日普蘭店西北高地の戰闘に參與二十六日金州及南山の戰闘に參加七月二十六日より二十八日に至る營城子双臺溝附近の戰闘に參與三十日土城子北方高地の戰闘に參與八月十三日より二十九日に至る胡家屯曲家屯李家屯小市溝附近の戰闘に參與九月十九日より二十二日に至る寺兒溝西北方高地戰闘に參與十月三十日旅順第二回總攻撃に參與十月二十六日より三十日に至る標高二〇三高地戰闘に參與十二月五日二〇三高地戰闘參與三十一日松樹山攻撃に參與三十八年三月二日より三日に互り拉木河附近に於て戰闘七日五臺子附近の戰闘參與

八日より九日に至る田義屯附近に於て戰闘全日右脚大碓部に貫貫砲創を蒙り衛生隊へ收容せられ今年四月九日木邦護送澁谷分院に或は氷川分隊豆州熱海温泉に轉地療養五月二十一日天皇陛下より御菓子料として金若干拜受卅九年三月三日歸郷療養全月廿二日歸隊廿三日召集解除功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる戰地出發の際郷里某の許に寄たる書翰左の如し
前便申上候通り愈只今當港出帆可仕就ては戰地上陸之上は早速御報告可仕候軍人戰場に臨む素より生還を不期最大望を屬す貴下後事宜敷先はさよなら御免
四月二十二日
在宇品港に於て
田端長吉

陸軍砲兵一等卒勳八等

岡本虎之助君

君は比企郡大河村 大字腰越百廿八番

地戸主明治十二年五月生明治三十二年徴兵にして補充兵役明治三十三年四月一日教育召集の爲め野戦砲兵第十三聯隊第一大隊第二中隊へ入隊今年六月三十日滿期除隊三十七年三月九日勳員令により野戦砲兵第十四聯隊補充中隊へ入隊四月九日第四中隊へ編入十六日第

二軍戰闘序列に編入し二十四日征露從軍の爲め宇品港出帆五月十二日清國盛京省張家屯に上陸全月二十六日南山に戰闘三十一日大連灣守備に派遣六月一日歸隊全月十五日得利寺附近戰闘に參與七月九日蓋平及海山塞附近に戰闘廿三日大石橋二十四日太平庄岳州に戰闘八月一日より四日迄海城附近に戰闘全月三十一日首山堡に九月一日より三日迄遼陽に戰闘全月十八日第四軍戰闘序列に編入十月十日より十五日まで沙河に戰闘全月十六日三導崗子に戰闘し十一月三十日砲兵一等卒三十八年二月二十六日まで沙河に對軍翌二十七日より三月二日まで奉天に戰闘六月九日南城及附近に戰闘三十九年二月九日凱旋の爲大連出發二十二日宇品港上陸二十四日復員下令三月九日召集解除功により勳八等旭日章及金八十圓を賜はる弟君岡本三平氏も出征別項戰歴に詳かなり

陸軍砲兵一等卒勳八等

朝日周作君

君は比企郡大河村字腰越志藤定五郎氏の二男

にして明治九年六月十五日生明治二十九年徴兵適齡全年十一月三十日東京灣要塞砲兵聯隊へ入營第六中隊へ編入翌三十年十二月六日一等卒に昇進三十二年現役滿

期除隊三十七年勳員の爲め五月六日東京灣徒歩砲兵聯隊第三中隊へ編入出征の命に應じ六月二十三日屯營出發全日横須賀港より備後丸に乗船七月二日清國大連灣に上陸翌三日行軍南泡子崖に到着二十六日より鞍子嶺に於て戰闘二十八日陣地撤去三十日前進三十一日より東講附近に於て幕營八月五日劉家屯に前進七日より梨嵐子西方陣地に幕營廿六日より戰闘十一月七日水師營東方に前進全月廿六日より戰闘三十八年一月二日旅順降伏開城二十九日北進二月五日より上石橋子に宿營三月四日より東嶺に於て戰闘九日上平臺子に宿營廿六日前進三十日三盆子に着五月十九日徒歩砲兵第三獨立大隊第三中隊に編成六月二十二日より奉天東方東塔に宿營七月十七日前進全日より清水勾子に宿營三十九年二月十四日全地出發十六日鐵嶺乘車二十一日柳樹屯より仁川丸に乗船三月二日横須賀港に上陸五日解散歸郷明治三十九年四月一日勳八等白色相葉章及金二百圓を賜はる
左掲は郷里の有志者宛の書翰なり
(前署)却說軍は一昨三十日午前十一時より激烈なる大攻撃を試むるや敵は屈せず抵抗を與ふると雖も兵力微なるを以て既に四十有餘時間と云ふ長時に亘り

我兵力の勇敢なるに愈々敵將をして我が軍門に白旗を掲げて乞降の光榮を占むるに至る噫敵ながらも悲嘆の極のなり余は茲に左の龜歌を詠じて曰く

滿州の野に美しき日の御旗

立つれば消る若竹の露

右唱ふるや砲軍長以下諸輩に頗る賞せらるゝととも
に俄然國旗を翻へして萬歳の祝聲は鋭く兩耳を劈か
んと欲するのみか四面天地を掠め恰も百雷の墜落せ
しが如く我が中隊も突然射撃停止の下令あるや集蟻
の崩るゝ如く散亂として幕舎内に歸り恩酒を各自の
水筒に分ち黍穀を燃へて之を暖め一杯を傾け慎むて
陛下の萬歳を三唱し續ひて第三軍の萬歳を唱ひ終て
再び杯を重の好期に望む嗚呼諸君快ならずや〳〵明
治三十八年の新春を迎ふるに供に敵をして難攻不落
と申し堅壁も防禦も全く我軍の握掌となり漸く吾々
の目的も既に一部達せり然る上は片時も早く北進の
下令を俟つて北部軍を壓迫せしめ浦鹽哈爾濱を占領
し瞬間に本國へ攻込み浦流の山脈に我が日章旗を翻
さんと決心す是れ我が軍の勇氣百倍たるを得得せら
れよ云々噫親愛なる諸氏よ余が出征以來幾數回も懇
々たる御慰問狀に接するに雖も遂に今日に至るまで

一の御回答も不仕失禮の段平に御海容被下度何卒軍務多端の爲め書翰を差出不能今回我が目的たる旅順陥落を祝すと共に深く感謝の意を呈す何れ詳細は後便を以て悉く御報可申上候早々敬具

旅順陥落に付て 旅順口義の貫くや御年五
三十八年一日元旦

出征第三軍徒歩砲兵第一聯隊第一大隊三中隊

朝日周作

比企郡大河村大字増尾

有志者御中

陸軍砲兵一等卒勳八等

山崎彈次郎君

君は比企郡大河村大字腰越七十六番

地山崎五郎右兵衛衛氏の長男明治八年五月生廿八年職兵にして現役十二月一日要塞砲兵第一聯隊第五中隊へ入隊廿九年十二月三日一等卒三十一年十一月三十日滿期除隊三十七年五月六日勳員により東京海軍要塞砲兵聯隊へ應召全日徒歩歩兵第一聯隊第三中隊へ編入九日東京海軍要塞砲兵聯隊第五中隊へ編入五月二十二日徒歩砲兵第一聯隊四中隊へ編入六月廿三日出戦の爲横須賀軍港出帆七月一日清國青泥窪着二日上陸三日南砲子

八日臨時編成戦利野砲兵隊第三中隊編入十一日戚家屯着二十六日より廿九日に至る四日間安子嶺附近の戦闘三十日東小磨子三十一日東溝八月五日劉家屯七日より梨嵐子西方高地砲臺築設及砲撃準備作業に従事す十九日より旅順背面本防禦線攻撃參與十一月六日前進東八里庄西方高地に砲臺築設及砲撃準備作業に従事卅八年一月四日老鐵山砲臺受領に出張十八日獨立重砲兵旅團徒歩砲兵第一聯隊第四中隊と改稱す北清の命を受け二十八日劉家屯九日遼陽十日十里河十一日孤家子十二日一月より沙河方面蛇山子東方高地に砲臺築設作業廿七日より三月八日まで奉天附近の大命戦に參與廿四日營盤二十五日三岔子五月九日復員全日徒歩砲兵第三獨立大隊第四中隊へ編入六月二十二日東塔七月十八日北進十九日清水勾子三十九年二月十六日凱旋の爲め鐵嶺乗車二十一日柳樹屯出帆三月二日横須賀港上陸九日召集解除功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

左掲は郷里の役場宛の書翰なり

前文略陳ば再三の御厚志を蒙り御慰問に接し生感謝之至りに不堪候如仰寒威凜烈とし難凌候處幸に別條無之奉公に勤の居候間御安意被下度候扱て去る四日を以て生等隊號表記の如く變更尙八日奉天方面へ向

て出發の命を受け全時出發の途に就き唐菓子停車場に至り上車晝夜の別無く進行九日午後六時遼陽に着一泊翌朝午前一時出發午前八時五里街に着下車其れより徒歩にて十里河に至り一泊翌朝八時出發尙徒歩にて萬家柳子及三里山を経て孤家子に至り只今當所に滞在奉公に勤め居候間又御安意被下度候當地奉天を去ること約五里旅順を去ること百三十里余に有之候當地は旅順方面よりは尙一層寒氣甚敷朝夕は零度以下四十度を降る日中卅度は平常に御座候間爲に列車行車中も如意ならず建築車に有之恰も貨物を積載するに異ならず剩へ海岸寒風強く肌を透し難凌に北進命あり生等同輩已に凍死傷者ありと雖も爰に極まる哉と思考仕候も辛じて斯に至らず生等の同情如何に思ひやるに限なき次第に御座候又貴命の如く旅順は世界難攻不落と唱へられ候堅城に有之去年々末日より攻撃に着するや敵は狂氣となり發砲す恰も彈丸は水田に雨の降る如く地に落つる丸は穴を穿ち黒煙吹き上り目も眩むに至れり殊に我砲臺は第一線極めて近離りに有之候處砲臺前後に砲彈を受くる事輕石の如し實に慘憺たるの極にあり然りと雖も此季に乗し敵を降服せしめんと益々勇を鼓し一蹙の下に飛奉

る彈丸を左右し振て應戦する事に晝夜を急ぎ之に於て敵は苦痛に堪ず最早此迄と思ひけん白旗を上げ開城を申込むに至る之に於て生は其辛苦艱難の甲斐有り満足致候去ながら前方を眺れば死は山をなし血は流れて川をなす嗚呼我が勇士と云ふも落涙止むる處を知らず世界に一名を得たる旅順にこそ有る者と存候御地は例年に比し別條無之候哉當方は先般降雪にて我幕營も雪下になり通行不通殆ど七八尺に及ぶ爲めに欠食に及ぶ有様言外に御座候又只今敵は我が陣地より前營迄六百米突陣地迄六千米突の所に居候敵は晝夜の別なく砲發し夜も眠る事能はず彈丸飛來し空中地上に發裂するも恐れず應戦致候近來露國大紛擾は起り大砲に齊彈を以て冬室に發砲するや露都益々大紛擾となり農工商百般に至迄争鬪を極め電信電燈鐵道破壊したる様子爲めに我前面なる奉天方面の敵大に潰え困難の由に聞く之れ敵國全滅の兆なるに有らずや暴戻倨傲の振舞は世の同情を失へり不遠奉天も我が有に歸す敵大に衰弱し此れに依り奉天ハルピン踏破り烏拉爾の山の絶頂に旭の御旗を翻すに至る殊に御國の同胞が群血注で得し土地に有之天定れば人に勝惡運長き十歳の今日近々一大開戦あるな

らんと存候先は御厚志に反し御回答迄就ては援護會員諸君へも宜敷御傳言相願度候早々

山崎彈次郎

大河村役場御中

陸軍砲兵上等兵勳八等

菅間作次郎君

君は比企郡大河村大字青山百八十三

番地菅間作次郎氏の長男明治十四年四月生明治三十四年徴兵にして現役十月一日野戰砲兵第一聯隊第一中隊へ編入三十五年十二月二日一等卒に命せらる三十六年三月十日蹄鐵術卒業三十七年三月六日勳員下令十八日屯營出發二十一日廣島着二十三日大行李監視兵を命せらる四月二十二日宇品出帆清國盛京省孫家咄へ上陸五月十六日十三里臺戰闘に參與二十六日金州南山の戰闘に參與七月二十六日より二十八日まで營城子附近の戰闘に參與三十日付家甸附近の戰闘に參與八月十四日より二十日に至る胡家屯附近の戰闘に參與九月十九日より二十日に亘り播家屯附近の戰闘に參與十月二十六日より三十日に亘る碾盤溝附近の戰闘に參與十一月二十六日より十二月五日に亘り千太山南方高地の戰闘に參與十二月二十八日及全三十一日より翌三十八年一月

二日に亘り千太山高地の戰闘に參與廿一日碾盤溝南方高地出發二月六日陳家臺に着三月三日也汁牛泉附近の戰闘に參與七日四臺子附近の戰闘に參與八月八日より十日に至る田義屯附近戰闘に參與全月二十一日上等兵を命せらる十月十六日平和克復三十九年一月十六日清國新城堡出發全月二十二日大連出帆二十六日宇品上陸三十日廣島乗車二月二日屯營着全日善行證書を賜はる十一日復員解散功により勳八等旭日章及金貳百圓を下賜せらる

戰地よりの書翰左の如し

拜復過般は御慰問狀を忝ふし候時哉我軍の旅順背面を出發北進途中に候て爲めに通信を止められ軍の其目的地に達するや尙ほ機密を要して通信を欲かし兎や角する内本回の進攻に御座候我軍は最左翼より去る二月二十七日を以て〇地を發し進攻活動を開始したるなり本月八、九、十日は彼我總軍の決戦當日にして尤も激戦に候へき殊に我師團は奉天の西北より其退路を斷つて攻撃を加へたれば非常なる苦戦の結果遂に撃退せしめ追撃以て去る十五日鐵嶺をも占領したるなり未だ確たる通知には有らねど敵の死傷捕虜共約十五萬ある由砲五百門其他の戦利品は目下調査

中我死傷は僅に五萬内外なりと此激戦に參加するも幸にして微傷だも負けず以て過般の御慰問に答ふるを得たる次第に御座候尙ほ確たる報は後便にて御通知仕る覺悟に候目下我軍は奉天を距ること西北約八里の地に滞在人馬の休養中に御座候敵も又抵抗力を失したりけん只今の處銃砲聲を耳にせず誠に平穩に候先は右御禮券々如此御座候敬具

三十八年三月二十日

菅間作次郎

大川村役場全尋常小學校全援護會御中

二伸 誠に御手数ながら漏なく御廻送有之様願わしく候

陸軍砲兵上等兵勳七等

田端新作君

右は比企郡大河村腰越三十八番地田端太郎氏

の長男明治十一年四月生明治三十一年の徴兵にして現役全年十二月一日東京灣要塞砲兵聯隊第四大隊第十一中隊に入隊三十二年七月二十四日上等兵候補者並に通信術終業を命せらる全年十二月三十日一等卒申付けらる全三十三年八月二日勳員下令横須賀出發四日徒歩砲兵中隊を編成十一日宇品港出帆十五日清國太沽北岸砲

臺に上陸し天津に至る九月十二日北京城陥落後と雖も所々に團匪集合して靜ならず徒歩砲兵中隊を兵士撰抜して獨立鎮を討伐せらるる之に参加す卅四年一月十六日中隊の大部は山海關に轉隊の際太汰沽岸砲臺に止る三月十四日小隊の編成を換へ北岸砲臺を出發して翌日山海關に至る六月八日太汰沽岸砲臺より乗船宇品港に凱旋上陸十七日復員解散を命せられ第十一中隊に入隊す十月卅日除隊全年十二月二十八日北清事變の戦功に依り勳八等瑞寶章並に従軍紀章を下賜せらるる三十七年五月六日勳員召集徒歩砲兵第一聯隊に編入六月二十三日横須賀軍港を出發征露の途に付く七月二日清湖青泥窪に上陸八月十九日梨嵐子に於て旅順口背面攻撃に參與三十八年一月二日開城の止を得ざるに至る之に攻圍軍の戦局を結ぶ二月二十八日より八日間沙河停車場附近に二十八珊知米榴彈砲要員として分遣戦闘を開始す三月十二日元中隊に復歸三十九年二月十四日横須賀軍港に凱旋上陸三月五日下士摘任書下附全日解散を命せらる功により勳七等旭日章及金百五十圓を賜はる君の家よりは都合三人の出征者を出だせり別項戦歴に詳かなり

難啓前に我大君の威力に依て臣民は能く遼陽に沙河に旅順口に草葉の露とたゞき落してから以北の敵をつくの戦は正に始まらんとす實に壯決とも悲惨とも謂ふべし生等の命は天に有り明日をも知らず無頼者の軍人が支那家に至り小兒を合手に解らぬ話し露助ボコベンなど嘶しうみて我が家に歸り敵彈の頭上をせじよく通るを願す犬肉又豕肉を皿に盛りならべ清國酒を呑み明友の三人が五人と云ふ様に多くなりて歌ふ者も有り踊る者も有り内には己が自慢を相嘶し相語り申居り候實に壯健なればこそ此の如き様な事もなし得べく候得者御安心被下度候左れば誰として古里を思はざるはなく如何に御暮しなされ候や御達者に遊され候やも今は遠く波上の木葉舟の如く致し方無之時は時節を待つより外なく候先は此の戦に望み居り候得ば目出度とも御思召し被下度一書封じ送り申候草々不一

父 太郎 様
新 作 拜

陸軍砲兵上等兵功七級勳八等
川島國平君 君は比企郡大河村大字 屢越二十四番地にして西南の役に従ひ勳八等を賜はりし川島國次郎氏の長子

なり明治十二年十月生る三十二年の徴兵にして現役十月二日野戦砲兵第十五聯隊に入營三十四年六月八日北清の役北京駐屯軍として野戦砲兵第十三聯隊へ派遣二十一日野戦砲兵第十三十四十五の三個聯隊にて二個中隊を編成し二十五日宇品港出帆二十九日清國西太沽に上陸七月四日北京駐屯十一月二十一日西太沽を出帆二十五日宇品上陸二十九日屯營着十二月一日上等兵三十五年十一月二十二日善行證書を附與せらる二十五日歸休除隊三十七年三月九日勳員により野戦砲兵第十五聯隊第四中隊に編入四月二十四日征露の軍に従ひ宇品出港五月十三日清國張家屯に上陸五月二十六日金洲東方新家屯附近より南山戦闘に參與六月十五日龍玉廟及雜家屯附近に於て戦闘に參與七月九日蓋平城攻撃に參與全月廿四日大石橋攻撃の爲孫家屯馬家屯廿五日賴家屯附近に於て戦闘に參與八月一日金嶺功撃に參與卅一日より九月三日迄遼陽戦闘に參與十月十二日十三日十四日廿八日沙河戦闘に參與卅八年二月廿八日三月十日迄奉天戦闘に參與五月十五日第四軍戦利砲隊編成に付第三中隊に編入此編入は兵馬各別兵は第一師團徒歩砲兵馬迄は露捕馬及支那馬編成後は大久保少將の命により後方開原の南方に四ヶ月間の冬營三十九年二月

二十五日凱旋の爲め大連出港二十八日宇品上陸三月六日解散全月下士適任證を附與せらる七日廣島に於て召集解除功により功七級金鷄勳章及年金百圓並に勳八等旭日章を賜はる

陸軍砲兵軍曹功七級勳八等
荒井金次郎君 君は比企郡大河村 番荒井仙助氏の三男明治十四年七月生明治三十四年下士候補生志願三十五年十二月十五日徴兵として野戦砲兵第一聯隊第三中隊へ編入三十七年三月六日勳員下令十九日更に上等兵申付らる三十七年三月六日勳員下令十九日屯營出發四月廿二日宇品港出帆五月十日清國張家屯へ上陸二十六日關家店北方高地に於て戦闘二十六日金州城東方畑地に於て戦闘七月二十六日より二十八日に亘る三日間營城子附近にて戦闘全日疾病に罹り前收城子第三野戦病院に入院全月三十日後革鎮浦定立病院へ轉送全日又青室泥兵站病院へ轉送八月十五日宇品港上陸二十四日東京澁谷分院へ轉送十月二十三日より十二月二十二日迄請暇療養翌二十三日野戦砲兵第一聯隊補充大隊第二中隊へ編入三十八年四月十日任砲兵伍長全年七月十七日勳員下令全月全日野戦砲兵第二十一聯隊第三中隊へ編入八月三十一日再出征にて宇品港出帆九月

七日清國大連上陸十二日首山堡到着韓國守備として當地出發二十六日韓國鎮南浦へ上陸二十九日平壤着駐軍十一月二十一日任砲兵軍曹全月三十一日より四十一年十一月三十日迄再服役三十九年四月一日復員整理下令全日戦役の功に依り功七級金鷄勳章並に年金百圓及勳八等白色桐葉章を賜はる

左掲は小久保大河村長宛の書翰なり

久々御無音に打過御疎遠重々御許被下度候陳ば塞氣甚嚴相成候處各位皆々様如何御起居被遊候や降而小生無事軍務罷在候間御休神被下候結んで解けざりし日露の葛藤も平和克復の榮運に立ち至り候に就ては東郷閣下と共に多大の名譽を荷ふて凱旋に參與する事と思ひ候にこんだ話がやかんとばけて韓國の守備と相成今は平壤に宿營致し居候然しながら該所は大洞江河邊にて目下日本市街は頗る盛大にして電車の設備も有りて案外賑しく候夜に至れば圓月中空に懸り金波溶々たり而して笛聲遙に皖々として響く晝は釣魚を成し網打を事として日々氣隨に暮し居り候間御安心被下度候各職員方にも宜敷申上候草々

大河村村長小久保萬尊殿 荒井金次郎

陸軍騎兵二等卒

菅間國三郎君

君は比企郡大河村大字青山百十四番

地菅間藤左衛門氏の二男明治十六年十月の生明治十六年徴兵にして補充兵役三十八年四月三十日動員により騎兵第十五聯隊補充中隊へ入隊以來各地に行軍又は演習勤務中特に第二旅團長森岡騎兵大佐殿より馬術優等證書を賜はる三十九年一月二十三日過員により召集解除勤勞により金三十五圓を賜はる

陸軍騎兵上等兵

吉田直助君

君は比企郡大河村大字飯田四十四番地吉田伴

七氏の三男明治十九年十月生明治三十七年十二月一日徴兵令に依り現役を志願し騎兵第十三聯隊補充中隊へ入隊卅八年十一月三十日一等卒申付られ全日又上等兵を被命三十九年一月二十九日精勤の賞として菱形勳章を授與せらる全年二月九日復員下令全月十七日完結全日騎兵第十三聯隊へ編入功により金五十圓を賜はる左掲は郷里の村役場宛の書翰なり

拜啓時々御慰問に接し恐縮の至りに存し奉り候愈々和談判の期到來既に再會の會合談判の端緒を開始し

たると雖も行雲未だ如何とも計り雖く或は好果を見る非らざんか然らば尙依然從來の行動に依らざる可らず不肖目下兵籍に在りながら其の行動に預るを得ずと雖も身命を犠牲に供し赤誠以て國家大橋の一たるに背かざらんこと深く銘刻し居り候右返禮迄敬具

明治三十八年八月十四日

吉田直助拜

大河村役場御中

陸軍騎兵一等卒勳八等

山崎治良平君

君は比企郡大河村大字腰越九十一番

地山崎茂重郎氏の長男明治十七年四月生明治三十七年徴兵にして現役十二月一日騎兵第一聯隊補充隊へ入隊三十八年七月廿一日第十五師團騎兵第十九聯隊第二中隊へ編入八月一日一等卒八月廿九日露戰役從軍の爲宇品港出帆九月二日大連港上陸六日孔家窩棚十二日高力屯十五日師團傳騎として調兵山へ分遣二十日高力屯歸着十月二十一日韓國駐劄守備として高力屯出發二十五日大連港出帆二十七日韓國仁川港上陸南京城大門着廿八日大漢江坊三十九年三月京城軍司令部へ分遣十七日漢江坊歸隊四月一日復員下令五月二十七日徒非鎮定

山崎治良平君 吉田文五郎君

の爲め洪洲に出張六月七日歸隊功により勳八等瑞寶章及金七十圓を賜はる

陸軍騎兵一等卒勳八等

吉田文五郎君

君は比企郡大河村大字上古寺三十四

番吉田鐵五郎氏の二男明治十六年七月生明治三十六年十二月一日徴兵に合格し騎兵第十四聯隊に入營三十七年四月九日動員下令補充中隊に編入され本隊より補充來り三十八年二月十八日屯營出發二月二十日廣島着二十二日宇品港出帆廿六日清國柳樹屯へ上陸此地に三日間滞在三月一日柳樹屯出發金州。柳江。不關天。南瓦房天。得利寺。北瓦房天。熊岳城。蓋平。大石橋。街上。安山店。佐賀京。遼陽。小墾至。大荒地。淺野。奉天。鐵領。昌圖。に至り本隊に着す城内を通過し二十七日第二中隊に編入三十八年四月三日より八日迄で驚鷲樹附近の戰闘に参加五日昌圖西方に敵騎來襲の爲め之を防ぐ事半日にして退却全月十四日中隊は前哨となり四方至より大台廟高地に至り敵を警戒し撃て之を退く十七日昌圖出發張家爐にて敵を警戒す二十六日盤邊大佐の指揮にて四方台高地より四面城占領に參加卅日高中橋に傳騎となり五月十一日四方臺獨立家に至り

日本文家屯着二十九日まで駐軍三十日小黒石着九月二十一日より五日間旅順總攻撃に參與十一月九日より五日間旅順總攻撃に參與二十七日より九日間二〇三高地攻撃に參與十二月三十日松樹山攻撃に參與三十八年一月二日旅順口陥落全月二十八日小黒石出發遼陽に向つて北進を始む金州普蘭店得利寺熊岳城蓋平海城を経て二月十二日八卦溝着十九日全地出發南麻線溝着二十四日より三月十日まで奉天附近の會戰に參與三月十二日新台子着四月十二日全地出發榆樹堡着五月三日全地出發大勾着九月十六日休戦十月十六日平和克復十一月六日大勾出發段家窩棚着三十九年一月二十六日鐵嶺乘車二十八日大連着二十九日大連乘船二月二日宇品港着六日廣島出發九日東京着十三日歩兵上等兵十四日復員に依り召集解除功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる

戰地よりの書翰左の如し

拜復此度は軍人一覽附軍事關係明細表御遞送被下成誠難有深謝不斜候炎熱の候役員御一同様御故障もなく益々御清榮専ら軍事に御盡粹被成候よし大慶至極に奉存候出征軍人中には各所の戰闘に於て拔群の偉功を奏し或は某々地激戰の際名譽の負傷名譽の戰

死を遂げられたる諸君も尠なからざる様承知仕候誠に羨望の事たるや海の深く山の高きに適し難く候不肖事幸か不幸か只偶然軍務に服し居るのみの次第何とも赤面の至に不堪候目今兩國外務の會見も成否如何にて候哉不惡御諒察相成度願上候先は答酬旁々以序署中御窺ひまで申進候敬白

明治三十八年八月十日

春

吉再拜

大河村役場員全援護會員

御中

陸軍歩兵二等卒

齋藤晴藏君

君は比企郡大河村宇大藏氏の長男明治十七年十二月生明治三十七年徵兵にして補充兵役三十八年二月二十日動員により歩兵第一聯隊補充大隊第三中隊へ入隊全年九月一日第四中隊に編入六日東京市民國民大會紛擾戒嚴令發布の爲め日本橋區に於て二十一日間の警戒勤務十二月八日過員により召集解除恩金三十五圓を賜はる

陸軍歩兵二等卒勳八等

大木近次郎君

君は比企郡大河村大字青山四十五番地大木兵吉氏の三男にして明治十七年六月生明治三十七年徵兵にして現役全年十二月歩兵第十五聯隊第六中隊へ編入す三十八年八月十九日野戰歩兵第五十八聯隊第七中隊へ轉入し二十九日露戰役從軍の爲め宇品港出帆九月二日大連へ上陸十八日滿洲阿吉午綽堡に十月十八日韓國守備を命せられ全日全所を出發し二十四日韓國鎮南浦着二十五日全所出發二十七日平壤着全地守備功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる兄房次郎氏も出征し職務中終に兵役免除となる詳細は載せて氏が戰歴中にあり

陸軍歩兵二等卒勳八等

關根訓治君

君は比企郡大河村大字腰越六百七十七番地關根政太氏の弟明治十三年十二月生明治三十三年徵兵にして補充兵役全三十五年三月一日教育召集として近衛歩兵第二聯隊第十中隊へ入營全年五月三十一日召集解除三十七年九月二十日動員により近衛歩兵第二聯隊補充大隊第二中隊へ編入十月二十八日補

充員として野戰近衛後備歩兵第二聯隊へ轉出全月三十日外征の爲め屯營出發廣島着十一月七日清國大連上陸近衛後備歩兵第二聯隊轉出歪頭山附近に於て前哨中隊九炎に罹る全月十八日戰地高力勾定立病院へ入院全月二十四日清國大連出帆二十九日宇品港着廣島豫備病院入院十二月八日東京豫備病院戸山分院入院三十八年二月八日歸郷療養許可全日戸山分院退出全年四月八日召集解除功により勳八等瑞寶章を賜はる

陸軍歩兵二等卒

瀧澤泰次郎君

君は比企郡大河村大字上古寺六十一番地瀧澤健次郎氏の弟明治十二年一月生明治三十二年徵兵にして補充兵役全年三月一日教育召集として歩兵第三聯隊第八中隊へ入營同年五月三十一日滿期解散明治三十七年八月三十一日動員により歩兵第三聯隊補充大隊へ召集第四中隊へ入隊九月十七日後備歩兵第十五聯隊へ編入全月二十二日露戰役從軍の爲め宇品港出帆二十六日大連上陸二十七日清國盛京省大平溝第一線の陣地に着し第一中隊へ編入戰闘參與中十月十三日大腸加答兒に罹り野戰病院へ入院全月十六日大連病院へ轉送十一月十一日大連灣乘船全月十二日出帆十五日

宇品港に上陸して廣島豫備病院へ入院轉送の爲め十二月一日出院して四日東京豫備病院に入院す病後衰弱の結果全月十二日召集解除功により金五十圓を賜る

陸軍歩兵一等卒勳八等

村木武三君

君は比企郡大河村大字増尾四十八番

地村木邦平氏の弟明治十七年十一月生れ三十七年徴兵補充兵役三十八年一月二十七日臨時召集に應じ北海道月寒村歩兵第二十五聯隊補充大隊第二中隊に編入全年四月二十日日露戰役從軍の爲め補充員として屯營出發翌二十一日室蘭出帆二十二日青森上陸二十七日青森出發五月一日廣島着二日宇品出帆六日清國盛京省大連港上陸十八日野戰歩兵第二十五聯隊第七中隊に編入六月十三日滿洲小七象子附近に偵察斥候として派遣せらる十六日遼陽窩棚戰團に參與す三十日小七象子附近に戰闘七月一日四象子附近に戰闘八月十八日中隊の競點射撃にて優等賞状を受く十月十六日平和克復孔家窩棚に滞在十二月三十一日一等卒申付けらる十二月十一日より三十九年二月十二日まで中隊の書記を務む二月二十五日凱旋の爲め清國柳樹屯出帆三月三日北海道室蘭上陸五日月寒屯營に歸着六日復員令十一日召集解除功に

より勳八等白色桐葉章及一時賜金百圓を賜はる兄邦平君も出征負傷す戰功は氏の戰歴を見て知るべし戰地より郷里の役場宛の書翰左の如し

謹啓其後は御疎音に打絶候段重々御用救被下度候陳れば去る二十六日付を以て村内現時の成行細々と御通報被下時節柄御熱情なる感謝の至りに不堪候降て野生義不相變元氣にて本務勤勉罷在候條御配慮被下間敷候就ては當地の狀況一言左に

陳れば氣候先づ口中にて百度前後夜間は此れに反し温度非常に下り先づ六十度位に有之候而て當今我が夜營地は法庫門より北進する事約七里の一村落在り(康平と云ふ所を二里前)董家窩棚と云ふ當村落へは去る月二十四日に轉宿仕候事にて其までは尙北方約三里「六象子」に宿營仕日々前哨勤務に従事致し居候處六日第一師團歩の第二聯隊と交代し該村なる後方に引下り居申候尙ほ右交代前即ち七月一日(多分新聞紙上にて御承知の筈)之敵襲の際は丁度小哨として六象子より一里半前方なる三官窩棚と云ふ所に服務致し居り優勢なる敵騎約五ヶ中隊(約千人)に當り(我れは一ヶ中隊二百人)大に砲撃且つ銃撃を受け遂に退却する事止むを得ざるに至り約三千米突後

陸軍歩兵一等卒勳八等

島田文平君

君は比企郡大河村大字増尾五十二番

方なる「四象子」と云ふ小村落迄引上げ其場にて防止し夜十二時頃に至り逆襲す可き決死隊に参加(是れ白虎隊として三十名不肖も其内に撰拔されたり)仕該三官窩棚に突入し難無く陣地を占領したり其時敵は約百騎我が決死隊の近寄るを知らず突然我等三十名着剣し突進せし爲め敵は大に狼狽し甚だ敷は乗馬に間に合はず徒歩にて退却せしも有り爲めに三頭の馬を鹵獲せり其時の快なりし事全く前後も六々覺せず中隊長殿に賞せられて始めて我が身の無事なりし事を知る有様なりき其れより我等卅名は他兵卒の模範として大に賞言を受け前哨線に在り乍ら十日間の休勤を給はりたり其後敵は更に來襲せず(尤も敵の最前線即ち前哨線は我が前哨線前方約一里半の處に在り)て互の斥候衝突位のこと而して二十四日を以て右の如く二聯隊と交代し後方に引上げたり先は右略義ながら貴翰拜受御禮旁々拙隊現況御一報迄余は何れ活動の好期を待ち快報御通知可申上候也

不具

八月九日

在滿洲 村木武三拜

大河村役場員援護會御中

島田文平君

地島田才治郎氏の長男明治十六年三月生明治三十六年徴兵にして補充兵役三十七年八月十日三個月間の教育召集にして歩兵第十五聯隊補充大隊第二中隊へ入隊三十七年十一月八日日露戰役從軍の爲め屯營出發十日安藝國廣島市着十日より十四日に亘り廣島市に滞在十四日宇品港出帆十八日清國青陀窪へ上陸翌十九日乘車長嶺子に至り四里半の行軍寺兒溝北方約半里の地にて野戰歩兵第十五聯隊第二大隊第六中隊へ入隊十一月二十六日より旅順包圍軍に於て全年十二月一日に亘る寺兒溝西方約千米突なる赤坂山高地に於て戰闘二日より赤坂山左翼寺兒溝前方約三百米突なる高地にて第一線警戒卅八年一月二十日旅順出發北進二十日泥家子二十一日善懸鎮堡二十二日金州二十三日皇海屯二十四日は爰に滞在二十五日唐家屯二十六日南瓦房店二十七日得利寺東南方約一里半なる季家屯二十八日北瓦房店宿二十九日は爰に滞在三十日遊懸城三十一日蓋平城三月一日鐵嶺屯代千家屯三日爰に滞在四日八象子五日沙河六日南邊爺子爰に七日八日滞在九日三道溝警戒の爲め九日

より十四日に直り六日間滞在十五日吾家崗子にて敵騎約五六百騎と衝突し十五日十六日交戦十六日より二十五日により妥を警戒す二十六日より益々北進三月二日三日沙嶺係附近に於て戦闘是より前進五日四台子に於て戦闘七日より十日に至り奉天背而約一里三台子に於て戦闘十二日四家子爰に十二日より十六日に於て滞在十七日大孤家子に至る四月十一日に至り滞在十二日前進小明碑に至り爰に五月四日迄滞在五月五日前山に至り全十八日迄滞在十九日前山後方約一里なる小頭台子に至り二十五日迄滞在二十六日前進大三家子に至り警戒二十九日歩兵一等卒同年十月二十九日迄大王家子に滞在三十日同地出發後方約一里なる第三軍司令部所在地たる法庫門市に轉宿三十九年一月十六日迄諸勤務に服従す十月十六日平和克復三十九年一月十六日凱旋の目的を以て法庫門出發双樹子に宿營翌十七日鐵嶺を通過東南方約二里熊官屯に宿營十八日十九日爰に滞在二十日午前二時鐵嶺彈藥鑪停車場にて乗車二十一日大連灣下車翌二十二日大連灣乗船二十五日宇品港上陸二十五日より三十日迄廣島に滞在三十日午後十時乗車二月二日高崎屯營着八日召集解除により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる

戦地より郷里の村役場宛の書翰左の如し
 謹啓嚴寒の候に相成候所久々御無沙汰仕り申譯も無之次第悪からず御承引爲被下度候扱て過日御書而被下難有拜讀仕候却説今回拙家留守慰問まで御厚情に預り此段難有御禮奉深謝候次ぎに小生儀幸にて内地出發以來無事日々軍務罷在候に付御安意爲被下度候猶又彼の二〇三攻撃兼て新聞にて洩なく詳に御存じと候間別に詳しき事は申上ず候得共實に猛烈なる戦闘にて既に最後の戦にも思はる程の激戦に有併し敵軍には随分多大なる損傷を與へ且又捕虜人等も多數有之候と先以我軍至る所蓋し連戦連勝なり實に上大元帥陛下始とし國家萬民に至る迄歡祝の次第に御座候幸にて野生儀も彼の二〇三攻撃激戦四日間參加仕り候所何等の變事無之猶又益々奮勵致し前途の目的を達する精神に御座候間右乍他事御放念被下度候先は御禮傍々御報道迄餘は猶後便に讓る早々
 十二月三十一日年末

島田文平拜

比企郡大河村役場

村長野口村長殿役場御中

陸軍歩兵一等卒勳八等

杉田半作君

君は比企郡大河村大字腰越八番地杉

田嘉七氏の二男明治十六年十一月生明治三十六年の徴兵にして補充兵役三十七年十一月十二日動員により近衛後備歩兵第三聯隊第四中隊に編入三十八年三月十九日日露戦役補欠として近衛歩兵第三聯隊第七中隊に轉出全月二十三日宇品港出帆二十七日清國柳樹屯上陸二十八日金州城四月三日得利寺八日大石橋十三日遼陽十九日鐵嶺東方約六里の肥牛屯全所に於て近衛歩兵第一聯隊第九中隊に編入五月六日李千古屯七日「シャットルリー」八日大台十一日告非山屯七月十一日山頭堡十二日王家窩棚十一月二十日凱旋の爲め宿營地を出發し鐵嶺東方熊官屯を経て二十二日鐵嶺乘車二十四日大連着二十五日大連出港二十八日宇品上陸十二月三日歸營十二月十一日召集解除功により勳八等瑞寶章及金八十圓を賜はる

左掲は郷里の小久保村長宛の書翰なり

謹啓其後は久々何等の御訪もんだに致さず意外の御無沙汰仕候にも拘はらず度々御慰もん狀御投箱被下候段辱なく拜讀仕候早々御返事申上べき筈の處勳

杉田半作君

務多端の折から遂々御失禮申たる次第不惡御海容被下度候然れど夏の暑さも何時しか消へ失せて昨今は毎朝雪の如き白霜を見るの候と相成候處御貴家様には如何御消光遊され候哉御伺申上候降而小生事は何時も變りなく無事にて軍務罷在候間乍憚御省慮被成下度候

却説御貴殿様には今回村長に撰任致され候段かげながら賀上げ居候職務柄とは申ながら留守宅は申すに及ばず村内の事を萬事御心配被下御心勞の段旁々謝感の外之なく深く御禮申上候次ぎに小生等も御承知の通り媮和談判も成立し御批准書之交換も相濟み全く平利克復と相成候へば凱旋の期も不遠と思ひ居候處去る二十三日を以て愈々來る本月二十日當宿營地出發廿三日乘船の豫定なりとて凱旋の心得等を命令に相成目下凱旋準備中に候間御報知申上候歸朝は多分十二月十日頃と思はれ候間是れも併せて御報申上候亦た清國の景況等をも詳細申上べき處に候へども最早近きに歸朝致し得る事に候へば省略仕り御面談致しべく候へ共小生の大に驚感致したる事を略記仕候寒國とは申しながら先月十日頃より俄に寒冷烈しく相成毎朝白霜を降らしつゝ有之候處倍々増寒仕り

(七十七)

汲置きの水は申に及ばず流水等迄日中に於て氷り
 堅り申候日々手足を凍らすばかりの激風を吹かし昼
 天かと思へば忽ち積雪致す有様にて晝中二千度夜間
 は零下と相成恰も内地の十二月頃の寒氣よりも猶ほ
 甚だしく候然れども先月二十八日を以て防寒衣給與
 濟に相成候様致し居候へば去程寒氣も相成じ申さず
 候間御心配被下間敷候内地の氣候は如何に候哉同上
 候先は右様のみ餘は次便猶ほ委しき事は歸朝の上萬
 々草々頓首

三十八年十一月三日

杉田 半 作拜

小久保滿尊殿

二伸 此亂書御手元着の頃は勃海灣に在るやも難計
 く候間御返書被下間敷候也

陸軍歩兵一等卒勳八等

野口增平君

君は比企郡大河村大字青山四番地野

口民次郎氏の二男明治十六年十一月の生明治三十六年
 の徴兵にして現役十二月十五日歩兵第十五聯隊第十二
 中隊へ入營明治三十七年三月六日動員下令補充大隊第
 三中隊へ編入全年六月二日補充大隊第五中隊へ轉隊全

年八月二十八日野戰隊へ補充として高崎屯營出發三十
 日廣嶋着九月一日海外出征の目的を以て宇品港出帆五
 日清國盛京省青泥窪に上陸全日派車行軍にて長嶺子下
 車一泊翌六日出發團山子に着野戰歩兵第十五聯隊第十
 二中隊へ編入滞在防禦工事に従事十八日より二十二日
 に至る清國盛京省標高二百〇三高地に於て戰闘二十二
 日大平溝着十月二日歩兵一等卒申附らる八日出發新砲
 台に着滞在警戒勤務二十七日出發水師營に着滞在松樹
 山に至る夜間防禦工事に従事十一月二十六日清國盛京
 省松樹山に於て戰闘二十八日出發し砲台に着滞在松樹
 山に至り前哨勤務十二月二十五日出發大西溝に着師團
 の豫備隊なり松樹山附近の戰闘に參與す三十八年一月
 二日旅順口開城翌三日砲台受領の爲め八城魂門溝砲台
 に着砲の監視勤務十二日兒寺溝に着滞在勤務二十一日
 沙河方面へ旅路行軍同日前鞍覺鎮堡へ着一泊翌日金州
 城に着一泊翌日出發蒼家屯に着滞在二十五日普蘭店に
 着一泊翌日南瓦房店に着一泊翌日得利寺に着滞在二十
 九日出發北瓦房店着二泊翌日滿福庄に着一泊翌日蓋平
 城に着滞在二月二日大石橋に着一泊翌日海城に着一泊
 翌日安山店に着一泊翌日沙河に着滞在六日小正地に着
 滞在全日八日小北河に着滞在勤務二月二十一日出發大

蛇に着一線にて警戒勤務二十七日出發戰備行軍を開く
 全日陽家溝子に着前哨勤務二十九日前進三月二日三日
 に至る清國盛京省沙嶺堡に於て戰闘四日大石橋に着五
 日前新臺に着翌六日敵を追撃し奉天府附近田木屯に於
 て戰闘に參與す三月八日より十日に至る奉天府三臺子
 に於て戰闘翌日前進四臺子に至捕虜一千五百名翌十二
 日三臺子に着滞在野戰砲兵第一聯隊戰列の援護隊十九
 日出發凌角子に着滞在警戒勤務四月十三日出發娘々廟
 に着滞在防禦工事二十四日來襲せる敵を撃退の爲め出
 發通江口に着翌日十五日前進双臺子附近の戰闘に參加
 す二十七日出發頭臺子に着滞在警戒勤務五月十八日敵
 騎の大襲團を撃退の爲め全日法庫門に着防禦工事二十
 日前進清國盛京省法庫門西南方大房身附近の戰闘に參
 加す二十一日出發丁家房身に着工事翌日團山子に着滞
 在全二十三日新城堡に着滞在二十五日出發四家子に着
 滞在警戒勤務十一月三日天長節に際し天皇陛下より酒
 肴料として金十錢御下賜三十九年一月十七日凱旋の爲
 め四家子出發全日絶家窩棚に着一泊翌日熊官屯へ着滞
 在二十日鐵嶺より乗車二十二日大連へ着滞在二十三日
 大連港出帆二十六日宇品港へ上陸全日廣嶋へ着滞在一
 月二十九日復員下令二月一日廣嶋出發四日高崎歸營四

月三十日陸軍凱旋觀兵式に際し天皇陛下より肴酒料金
 二十錢を御下賜十一月二十四日歸休除隊功により勳八
 等旭日章及金二百圓を賜はる
 左掲は郷里の野口村長宛の書翰なり
 謹啓時下殘暑之候愈々御清祥の段歡喜此の事に御座
 候二に愚兵も幸ひ無異軍務に精勵罷在候處今回生等
 今春來滿腔の熱誠を注ぎて待居候出征の期も彌々到
 來仕候今回第三回の補欠約五百有餘名の命に接し明
 二十八日午前四時營所出發征途に上ると相成申候
 就而慰問として莫大なる金圓御寄贈被成下辱なく拜
 掌仕り候猶一と度身を軍籍に置く上は素より生還を
 期せず進んで西伯利亞の野に屍を晒すも敢て屈せず
 百折不撓の精神を以て斃れて後止むのみ益々我帝國
 の皇威國光を輝さん覺悟に御座候壯絶快絶此の上な
 き次第御全悦被下度候猶申までもなきことながら生等
 出征後は拙家の事共宜敷奉願上候
 此の度の事たるや實に東洋の全局にも關し我帝國の
 稜威を驍揚するは今を措て他あるべき生等も國家あ
 るを知り又郷里諸氏あるを知り如何なる辛苦艱難に
 遭遇するも随分大河村諸氏体面を汚す如き振舞ゆめ
 仕間敷候間御安堵被下度候先は右不取敢御答禮

旁出發の報知まで何れ出征後は出来得る限り屢々御
香信を仕べく候 勿々
取急ぎ亂筆御高免被下度候

八月二十七日午後七時

野口増平

野口村長様貴下

陸軍歩兵一等卒勳八等

松本又重郎君

君は比企郡大河村
大字上古寺二十五

番地松本幸太郎氏の三男明治十六年四月生明治三十六
年徴兵にして補充兵役明治三十七年十一月二十日動員
により歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊編入三十八年
二月十四日宇品出港出帆す十八日清國盛京省大連へ上
陸す二十五日野戰歩兵第十五聯隊第一中隊へ編入二十
七八日に亘る阿司手附近の戦闘に參與三月二日三日に
亘る沙嶺堡附近の戦闘に於て中隊長横田少尉より當大
隊小行李輜重補充に命せられ全月八日九日十日に亘る
三臺子附近戦闘の際八日午後四時頃激戦中彈藥缺乏し
之が補充として岡部軍曹より特別任務として運搬を命
せらる依て約二千米突の散兵線に彈丸を犯して運搬す
ると二回以て任務を完了四月一日一等卒三十九年一月

二十二日大連港出帆二十五日宇品港上陸二月六日復員
下令召集解除功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる
陸軍歩兵一等卒勳八等

新井寧君

君は比企郡大河村大字
上古寺第二番地新井作

次郎氏の長男明治十六年二月生明治三十六年の徴兵に
して補充兵役三十七年九月二十三日補充召集として歩
兵第十五聯隊補充大隊へ編入十二月七日野戰隊へ補充
として高崎出帆十二月十三日日露戰役從軍の爲め宇品
港出帆十六日青泥窪港着二十日野戰歩兵第十五聯隊第
八中隊へ編入し十二月二十日より翌三十八年一月二十
日まで旅順背而寺兒溝に於て斥候又は作業に従事二十
一日北進三月二日三日沙嶺堡攻撃に參加三月七日八日
奉天附近三臺子攻撃參加全九日北龍夜攻撃に突貫の際
敵と五米突程接近して戦ひ終に右腰骨節貫通銃創を
受け十日第四野戰病院に收容三月十三日平羅堡定立病
院に二十一日沙嶺堡定立病院に二十七日遼陽兵站病院
に三月二十九日大連兵站病院に轉院三月三十日内地護
送の爲め大連を出帆全年四月三日大坂港に歸着全日大
坂豫備病院に收容四月七日東京豫備病院澁谷分院入院
五月六日より六月五日まで三十日間歸郷療養六月六日

陸軍歩兵一等卒勳八等

落合良三君

君は比企郡大河村
大字上古寺第三十

歩兵第十五聯隊第八中隊に歸隊す同月十五日召集解除
三十九年四月一日勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる
左掲は戰友宛の書翰なり
拜啓陳者旅隊口攻撃終り北進して久しく御無沙汰致
し居候次第不意御用赦被下度候然らば〇〇地三月二
十五日に着三月二日三日沙嶺堡攻撃に參加し我が軍
の電撃にをぞれて敵兵防禦に追なき秋風木葉を散ら
す如く逃走せり我が軍占領地となり次に八日九日奉
天附近の三臺子攻撃に従事成され候處聯隊長殿小隊
長殿分隊長殿上等兵殿も名譽の戦死を遂られ候由に
て軍人の本分を盡され候小生儀も九日夜攻撃に敵と
五米突の處に突進して戦ひ終に右腰骨貫通銃創を
受け戦闘中衛生隊に助けられ遂に第四野戰病院に
入院致し療養罷在り候得共負傷何れ輕少に付不日退
院に至るべく全治の上は再び戦陣に相向う所存に御
座候早々 同村の落合良三君も重傷して野戰病院に
て拜顔致候一つ毛布の中に戦況亦歸里の話をして二
人悦び居候

三月二十一日

新井寧

比企郡大河村上古寺新井作次郎様

落合良三君

九番地落合良太郎氏の三男明治十六年六月生明治三十
六年の徴兵にして現役兵十二月十五日歩兵第十五聯隊
第四中隊入營三十七年三月六日動員下令七日歩兵第十
五聯隊補充大隊第一中隊へ編入六月二日第五中隊に編
入八月二十八日補充として日露從軍の爲め高崎出帆三
十日廣島に着九月一日廣島發全日宇品上船五日清國大
連上陸全日長嶺子着翌日團山子着歩兵第十五聯隊第四
中隊編入滞在八日發高崎山に着滞在十八日より二十二
日迄て二〇三高地に於て戦闘す全日大平溝着滞在十九
日發水師營着松樹山に於て歩兵第一聯隊を攻撃中工兵
第一大隊の援助として三十六日間夜工事に従事す十一
月二十六日發全日高崎山に着翌日鉢巻山に着十二月五
日第七師團二〇三高地攻撃の際鉢巻山を被り加戦闘す
七日發寺兒溝に着十二日椅子山に向ひ防禦す三十八年
一月二日旅順陷落滞在二十日旅順出發前鎮鎮着翌日
金州西北八里溝に着翌日門家屯に着二十五日佛崗店に
着翌日南瓦堡店に着翌日得利寺着翌日北瓦堡店に着三

十日遊廓城に若翌日外敵城に着二月一日大石橋に若翌日開城に着四日家山店着翌日沙河に着十一日發三道溝着十五日發八家高子に於て滞在二十六日より奉天回廻の目的を以て出發第四中隊は尖兵となり警戒しつゝ前進す二十七日二十八日阿司牛附近に於て戰闘す三月二日三日沙嶺堡附近に於て戰闘す四日發大石橋着六日發北部四台子着全日聯隊集合し第四中隊は尖兵となり前進す八日三臺子攻撃の際左下腿軟部貫通銃傷を受け九日第四野戦病院入院十一日より後送二十九日清國大連着翌日出旭四月三日大阪上陸全日大阪病院入院五日後送七日東京澁谷豫備病院へ入院二十八日師歸療養五月十八日歩兵第十五聯隊補充大隊第九中隊へ編入六月三十日第九中隊を第七中隊と改稱す十四日第九中隊に轉入七月十七日動員下令歩兵第五十八聯隊編入二十日高崎出發全日歩兵第一聯隊に於て第八中隊に編入徳川家令所に合營二十五日慶應義塾に轉宿八月一日野營演習として千葉縣下志津原出張八日飯着二十九日海外出征の目的を以て宇品港出帆九月二日清國大連上陸四日大連發鐵嶺を経て十一古城子着滞在一月十九日朝鮮守備の目的を以て古城子發二十六日韓國黃州に着翌日鳳山に着守備三十九年一月四日發黃州に着守備四月十九

日黃州發全日平壤に着二十日發全日江西着翌日鎮南浦着二十三日鎮南浦出帆二十八日宇品上陸滞在五日七日發九日歩兵第十五聯隊第四中隊編入功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる
左掲は家郷宛の書翰なり
拜啓陳者久々御無音に打過ぎ候段中に御用捨被下度候次に小生も愈々二月二十日より奉天回廻の目的を以つて當地を出發致し第四中隊に尖兵となり警戒しつゝ前進せしか翌二十七日午後五時阿司牛と云ふ村落方面より我が騎兵斥候報告前方の村落に敵の歩兵の一ヶ大隊占領せりとの事にて第一小隊は將校斥候の命を受け前進せしが村落近寄に事の三百米突に至り敵は我が小隊は一撃射撃受け其儘臥し射撃の數に敵の人員を改め遂に任務を全ふし其夜を待ち歸り來り其時小隊にて五六名の死傷者有之候得共小生無事翌日尖兵となりて大邦牛に於て敵ひ衝突し敵砲八門を以て砲撃しこゝに於て約二時間戰ふ右左翌より第七師團騎兵約三ヶ中隊襲撃す之を敵發見退却せり又敵の防禦するを見て敵の中へ突進し三月二日午後三時沙嶺堡と云ふ村落に突進敵は一度に驚きの八百米突斗り退却せしが畑中に敵一ヶ大隊集合せし我が

隊に猛烈射撃を加はへ我が聯隊は沙嶺堡村落土壁に銃穴を作り之れに依り射撃を致し敵は砲十六門を以て猛烈に射撃せしが我が砲兵此時村落東端に砲をすへ敵陣に猛撃し此時彈丸雨霰の如く天地に響くは雷の如くにして此時敵の死傷三百名程にて我が軍の死傷は十二三名位にて其夜明るると同じく太陽は東より昇ると共に朝日の御旗をひるがへし實に愉快の事に存候次に三月三日より當聯隊は沙嶺堡左翼より進撃し翌日午前三時出發し全日午後四時大石橋に着此敵は前夜奉天方面に退却せり其日の午後九時當中隊は前哨の命を受け約二千米突前方に於て第二分隊は下士哨となり其時寒氣甚しく實に苦難致し候其一夜明るを待ち翌日大石橋に歸り此時騎兵斥候報告前方の村落に敵の大軍警戒致つゝとの報告當聯隊は左翼約千五百米突の處に於て集合し全日午前十一時左翼より前進全日午後五時四臺子附近に着致し此時騎兵斥候報告前方の村落に敵騎約一ヶ中隊警戒しつゝあり此時當中隊は尖兵となり出發し當斥候村落に近寄る約五百米突に至り敵は之を發見し猛撃せり我が砲兵は敵陣を砲撃し彼は退却せり又進撃す北部四臺子に至る敵の大軍我軍を猛撃す當中隊は西部四臺子北端

に集合し休憩す此時最早夕食たひて食せとの命にて速に米をとき火をたきつけ湯のわくと同じく出發の命にて其湯をこぼし出發せし處約一里程の村落に舍營夕食し同時に前方の下士哨敵集くとの事にて早速掩堡付翌午前三時出發尖兵となり前進しが前方村落に近寄る事約八百米突至れば敵約一ヶ大隊占領せり全日午前二時頃に至り奉天より敵兵派車にて送る事約四十ヶ聯隊も集り五六回もやく進加し小生も急射撃を以て猛撃せり其時小生左下腿に貫通銃傷を受け戰闘力を失ひ後方第四野戦病院入院致し候得共輕傷御座候得者御心配被下間敷候外は御報知迄で如斯御座候 早々
明治三十八年三月十日
落合良三
陸軍歩兵一等卒勳八等
吉田九平君
君は比企那大河村大字岸尾四十五番地戸主明治十六年十一月生明治三十六年徵兵にして補充兵役三十八年四月一日充員召集に應じ歩兵第二十六聯隊補充大隊へ入隊全年九月十三日露戰役從軍の爲

吉田九平君

(八十三)

め宇品港出帆十九日大連上陸二十三日鐵嶺二十六日歩兵第二十六聯隊第八中隊へ編入(八六幕三十九年二月十四日一等卒二十二日凱旋の爲在地出發(高架々方子)二月二十五日奉天乘車二十七日柳樹屯出帆三月五日室蘭港上陸十三日召集解除功により勳八等瑞寶章及金七十圓を賜はる

左掲は郷里の村役場宛の書翰なり

拜啓生儀去る九月十九日午前七時三十分無事清國大連へ安着致候間乍憚御休神被下度就ては兎角音信も遠さかり勝ちに相成哉も難計候間其節には御賢察被下度餘は後便に可申述候 敬白
二仲 二十一日奉天に向ふ豫定に御座候
九月二十日

出征第七師團歩兵第二十六聯隊第八中隊

補充員 吉田 九 平

大河村役場御中

陸軍歩兵一等卒勳八等

野口龜太郎君

君は比企郡大河村大字青山三番地野口留次郎氏の長男明治十六年三月生明治三十六年徴兵にして補充兵役三十八年二月二日勳員により野戦砲兵

日廣島着二十四日宇品出帆二十七日大連上陸六月二日後備歩兵第十五聯隊第六中隊へ編入八月六日一等卒申付らる十一月八日凱旋の爲め房山屯出發十五日鐵嶺出發十八日柳樹屯出帆廿二日神戸上陸二十六日高崎凱旋全日復員下令三十日解散功により勳八等旭日章及金八十圓を賜はる

左掲は入院中郷里の村役場宛の書翰なり
花笑鳥啼ふ頃しも都も鄙もおしなべての麗らかさ凌ぎも宜しく相なり候處隨つ御健やかに御消光殊に恤兵に國債に御奔走の御心勞干戈を預る小兵等よりも其勳功層一層のもの有之御推察致し奉り候降りて小兵出征以來修羅の巷に否花を敷戰場往來の事とて懸念しながらも御無信に打過し候段御海容なし下され度候高梁引寝に夢結ぶ間も現と昔恩を想起し降雪を踏みてかけ廻る斥候の時すらも昔情想起されて寸毫も忘却仕らず夫れ古人の所謂泣て指さす雲間一點の峯とか思起されず去り乍ら備兵常に郷を顧みつる恩を致せしにあらす唯々郷里に有る間の御愛情決別の時の御見送り等も赤誠よりの御取なし忘れんとして能はざる次第御憐察なし下され度候備兵幸に數回共勇兵と伍して其目的も果し殊に旅順の降伏の榮を受

第十七聯隊補充大隊第二中隊へ入隊四月十日征露從軍の爲め宇品港出帆十四日清國大連柳樹屯上陸五月九日より間石崗子大高力屯小家堡に滞陣十二月二日砲兵一等卒三十九年二月五日小家堡出發凱旋の途に就き十二日大連港出帆二月十六日宇品港上陸二十二日屯營廿二日十七日召集解除功により勳八等旭日章及金七十圓を賜はる

陸軍歩兵一等卒勳八等

山下重太郎君

君は比企郡大河村大字腰越百九十二番地山下良助氏の二男明治十六年八月生明治三十六年徴兵にして補充兵役に編入三十七年十一月二十日充員召集に應じ歩兵第十五聯隊へ入隊三十八年二月十二日露戰役從軍の爲宇品港出帆十八日清國大連上陸二十五日野戦歩兵第十五聯隊第二中隊へ編入二十七日奉天攻撃の爲三日開戰團參與三月二日砂嶺戰二日間全月八日三臺子攻撃の際翌九日右足左手砲彈刺負傷十一日第三野戦病院へ入院二十四日後送青泥窪出帆二十九日大阪上陸大阪病院へ入院四月一日東京氷川分院へ入院十九日全治退院歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊へ編入五月十九日後備隊へ補充として高崎の出發三十七

け尙北滿州に奔走致しあり備兵も大に勇兵に化せしめ花々しき戰場勇を進む戰友を見捨て後送の止むなきに至り候嗚呼遺憾く御推察なし下され度候申上るまでもなく出征するや生還期せず赤心國恩に報ゆるの覺悟然るに一つの勳きとて數られる應た歌はるゝの事もなく病寢の夢は涙に魔敵追撃の有様に有之候最も輕傷にしあれば追々退院隊伍に列するの榮も程近しと待ちある次第乍憚御安心なし下され度候聊か亂筆を呈し小兵が遺憾陳述仕り長らくの御無信御詫に及び候翼くは各員益々御健かならん事を祈る
四月七日
氷川分院第十五號室 山下重太郎
役場吏員御中
陸軍歩兵一等卒功七級勳八等

山口爲三郎君

君は比企郡大河村大字青山六十四番地戸主明治十五年十一月生明治三十五年徴兵にして補充兵役三十六年三月一日歩兵第十五聯隊へ入隊五月二十九日教育演習を了り翌卅日除隊となり三十七八年の戰役起るに際し明治三十七年六月十九日補充召集を

山口爲三郎君

て歩兵第十五聯隊補充大隊第四中隊へ編入のため高橋を出發し三十一日廣島に着八月三日宇品港を出帆七日清國盛京省青泥窪へ上陸し十日第一中隊へ編入せられ八月十三、十四、十五日碾盤溝附近に於て戰闘に従事し九月十八日より二十二日迄太平溝東南方高地に於て戰闘し十一月二十六日軍の特別豫備隊を編成せらるゝに當り當隊より其員に撰拔せられたるもの十七名君亦之に加はり水子平に至りて其行動の目的を訓諭せられ一同白標を纏ひ爆發彈及鐵條銃其他の需用品を授かり死を決して目的地に向つて行進せしは全日日没の頃なりき智勇なる中村少將は遺算なく部下を指揮せられ松樹山補備砲臺附近に至りしに敵の各砲臺よりは探照燈の光輝きて其瞬間殆ど白晝の如く斯くて打出す砲彈は雨霰の如く隊の行動は實に窮境に陥り爲めに勇敢なる武夫も敵彈に斃れしもの無數終に遺骸にも豫定の行動と其目的を果す能はず涙を吞で退却するの止むを得ざる場合に至りき君は同僚三名と共に九死に一生を得て歸隊せしは翌日午前十時なりき尋て大隊本部附を命ぜられ全年十二月六日寺兒溝北方高地に於ける戰闘に參加し三十八年二月二十七日二十八日阿司牛附近の戰闘に加はり三月二日三日沙嶺堡附近に於て戰闘し八九日

日十日の三日間三喜子附近に於て戰闘せり其後尙ほ大隊本部に勤務中平和克復の令下り三十九年一月二十二日大連港を出帆し二十五日日本國宇品港に着二月六日位員の令下りて歸郷せしは其翌七日なりき功により功七級金鷄勳章并に年金百圓及勳八等旭日章を賜はる左掲は郷里の母堂宛の書翰なり

拜啓追々秋冷の候に向へますが母上様には御別條もなく御暮しなされまするか御伺ひ申します私事相違らず壯健で軍務に従事して居りますからどうぞ御安心下さい過日も御知らせ申せし如く八月七日「ムニ」へ上陸以來最早二度ほど激戦に向へましたが少しの手傷も身に負はず至て達者に勤めて居りました處が當十一月二十六日特別豫備隊と申するものを編制致されたに就て私も日頃報國の志むなしからず幸にも此の大切な隊員の一人に撰拔致されし有り難さに此處ぞひつじの場合と覺悟を極め〇〇曹長殿の命令により當隊選抜員〇〇名と共に〇〇〇の河原に至り日の暮るゝをもち豫て訓諭されし如く〇〇少將閣下指揮の下に〇〇を破壊する目的にて或は鐵條網や漆など敵の設けし障害物を破り暗夜を幸ひ進みました處が敵の各砲臺よりは探照燈と申して二世で

も三里でも一時にバツト明るくなる器械を使用されましたからたまりません忽ち隊の行動を覺られまして砲彈が雨あられの如く飛で来て如何に白標の決死隊も殆ど〇〇の姿となりまして餘儀なく退却する事となつたのです實に残念の至りでした私共の仲間にて生き歸つたものは僅かに三人でありまして皆大隊本部附となりました何れ委細の事は新聞で御知りになる事と存じますから大畧御知らせ申上ます時候も日増しに冷氣なること故からだを御大切になさる様御願ひ申します

尙御近所皆様にも宜敷御傳へ下さい
十一月二十八日

爲次郎

母上様

陸軍歩兵一等卒勳八等

山崎藤太郎君

君は比企部大河村大字腰越八十六番

地山崎浪五郎氏の長男明治十五年五月生明治三十五年撤兵にして現役十二月一日歩兵第二十六聯隊第二中隊へ編入三十六年十二月一日一等卒を申付ける三十七年二月十二日守備隊として北海道室蘭港へ出張五月二十

七日歸營全年八月四日勳員下令に付野戰隊へ編入さる全年十月二十三日出征の爲め屯營を出發大阪築港を十一月十三日出帆十九日清國青泥窪港へ上陸二十六日旅順背而攻撃に參加戰闘二十八日(二〇三高地)に於て戰闘中左額頂部銃創を受け二十九日第一師團第四野戰病院へ入院十二月一日定立病院へ轉送五日内地運送の爲め青泥窪港出帆九日宇品港上陸全日廣島第六分院へ入院十二月十七日東京戸山分院へ轉送全二十日入院十二月二十八日東京戸山分院に於て陛下より御菓子料として金二圓を拜受す三十八年二月八日戸山分院より旭川豫備病院へ轉送二十日全治追院全日歩兵第二十六聯隊補充大隊第一中隊へ編入二十六日第七師團衛生隊擔架第二中隊へ轉入二月二日出征の爲め旭川屯營を出發十一日宇品港出帆十六日清國柳樹屯へ上陸十八日遼陽へ向け進軍四月八日清國舊兵營に於て第七師團へ到着全月九日法庫門へ向け進軍十一月法庫門着全地滞在五月三日叶叭屯へ向け進軍全日着滞在六月十五日遼陽窩押へ向け進軍十六日遼陽窩押攻撃戰闘に參與十七日江家窩押着滞在二十四日大新屯へ轉送三十九年三月九日凱旋の爲め大新屯出發十四日柳樹屯出帆十九日北海道室蘭へ上陸二十二日旭川衛戍地飯着三月二十三日復員下

令二十五日善行證書を賜ふ二十六日現役満期除隊功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

左掲は郷里の村役場宛の書翰なり

謹啓時下暑氣の候に趣き候處却説其後は意外に御無音に打過ぎ其儀は平に御容赦被下度候就而は郷里よりの書面に承れば役場方より迂生に宛て何寄の金圓澤山に被下質に忝なき次第に奉存候小生も難有頂戴仕候是非此後は此様なる事は御心配致し被下間敷候故に迂生遠方なる師團へ入營仕候へは何にも「タコ」者少しも無之候故金圓斗りは大切に有之然れば郷里より送金被下し金は全く(ミダリニ)使用せず而して日用品の當りは最も嚴重に致し居り候間乍失禮御休神致被下度候

二仲 此度日露の事件に付當第七師團へも去る三三月の頃より勳員の下るや否やにて非常の混雜に有之然るに未だ下らず併し去る二月八九日時は非常の(サハヤ)にて又夫に付青森港より室蘭港へ汽船通行止め何となれば露艦(ツガルカイキヨウ)を通過し其上我か商船をなやまし夫を聞き去る二月十二日の午前十時に第十三旅團長より今日此聯隊は第二中隊へ編成し直に今日は室蘭港へ守備に出發せとの命令あり

り夫れより當中隊長殿直に各中隊へ其命を報告し各中隊の最も健康なる者九名を撰抜し直に編成し同日午後三時に屯營を出發し旭川驛を同五時に發車し途中の(トマコマイ)の停車場より歩哨を立て一時間づきの交代にて室蘭迄立て置き室蘭港へ日曜の午前三時に到着仕り下車致すと同時に各危険の海岸へ衛兵を設け歩哨を速に配置し又歩哨は大胆をして其方向を最も嚴格に監視し尙ほ勤務小隊より毎夜三回廻程將校斥候其歩哨線へ巡察致し夫より異状あるや否やを守備隊長に報告し次に室蘭へ到着致し其一ヶ月斗りは最も中隊長殿より命せられたる規則は確實に實行し目下演習等は嚴敷行へり夫れより敵狀に付段々と(オマヤカ)に成り然るに規則は嚴格なれども演習等は若干猶豫になり而して三月半程守備し居しが何の必要なしと見なし師團長閣下より守備隊長に最早守備隊引上の命あり去る五月二十六日に其命あり夫れより直に歸營の順備をなし同二十七日に室蘭驛を一番の汽車にて旭川驛へ同日午後三時に無事に到着仕り同五時に屯營へ歸營仕而して小生勳員の見込みあるやと喜んで居り(アエハカランヤ)聯隊は目

下の時期にあれば演習は最も嚴格に行ふ(オモニ)師團の練合演習を施行せり又日曜日にては殆ど半日程しか休めず夫れ故に皆々様には御書面を差上可の處實に多忙に取紛れ其儀は不惡御用捨願度然る後當師團は勳員の見込みも無之迂生御地の御出征者の事を聞くに全く残念の事と思へ居候處又迂生滿期に成りても皆々様と御話にはなりません然る後皆々様の〇〇方面へ趣きて名譽なる御手柄なすを迂生楽しんで兵務に服し居り候

而して此戦争に付何回も日本大勝利を得實に迂生其事を聞き兵隊は戦闘するを本分とは云へなから自分直接に戦地に行く譯には行かず然る後大勝利の事を聞き安心致し居り一寸御知らせ先は書面にて御禮申上候也余は後便に讓る

大河村役場御中

山崎藤太郎

陸軍歩兵一等卒勳八等

根岸愛三郎君

君は群馬縣山田郡桐生町大字安樂土

村百七十三番地根岸徳次郎氏の弟にして比企郡大河村大字腰越六番地寄留明治十三年九月生明治三十三年徵

根岸愛三郎君

兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊第三中隊へ編入三十五年四月二十八日臺灣守備歩兵第一大隊第二中隊へ編入を命せられ同年五月一日屯營出發四日屯品港出帆八日基隆港上陸十二月一日一等卒三十六年七月十日交代歸還の爲め基隆港出帆十八日屯營歸着十一月二十四日現役満期除隊三十七年三月九日勳員により歩兵第十五聯隊第三中隊へ入隊同月十九日外征の爲め屯營出發四月二十二日字品港出帆五月七日清國盛京省喉兎石へ上陸十五日蘇家屯附近に於て戦闘十六日十三里臺附近に於て戦闘二十六日南山附近に於て戦闘七月二十六日前牧城泊二十七日對面溝二十八日双臺溝三十日泥河子附近に於て戦闘八月十三日十四日碾盤溝附近に於て戦闘十四日左足負傷第一野戰病院へ入院後送八月二十七日大阪豫備病院へ入院東京澁谷分院を経て豆州熱海へ轉地療養十一月五日全治歩兵第十五聯隊補充大隊第二中隊へ編入十二月七日補充の爲め屯營出發十二月宇品港出帆十六日青泥窪港上陸十九日第三中隊へ編入三十八年二月十六日三叉子附近に於て戦闘三月二日三日沙令堡附近今月七日八日九日十日三臺子附近に於て戦闘十月十六日平和克復三十九年一月二十二日大連乘船二十五日宇品港上陸二月八日復員に依り召集解除功

により勳八等旭日章及金二百圓を賜ふ

陸軍歩兵一等卒勳八等

野原兵治君

君は比企郡大河村大字青山八十二番

地寄留比企郡唐子村大字石橋百二十一番地野原惣三郎氏の長男明治十四年二月生明治二十四年徴兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊第九中隊へ入營三十六年六月廿六日臺灣守備歩兵第一大隊第二中隊へ編入七月五日宇品港出帆九日基隆港上陸三十七年二月五日基隆要塞警急配備の爲配属七月二十日警急配備解除十一月二十四日歩兵一等卒全日動員下令二十八日基隆要塞配属三十八年二月二十八日復員三月三日交代の爲歸還基隆出帆九日横濱港上陸十日歩兵第十五聯隊補充大隊へ編入二十日第九中隊へ轉入四月一日動員下令歩兵第四十九聯隊へ編入六月二十六日出帆の爲横濱港出帆七月七日樺太「メシヤ」村上陸十日「ウラジミロフカ」十三日「ダリネー」附近に於て戦闘八月十二日「クスナイ」守備三十日「ベルニセツト」山附近に於て戦闘九月一日内地歸還の爲め全地出發十三日「ホルサコフ」十八日「ホロマントマリ」出帆廿四日宇品歸着全日韓國守備の目的以て全所出帆二十二日北韓清津に上陸守備三十九年

三月十八日歸還清津港出帆二十二日廣島歸着二十八日歸隊全日歩兵第十五聯隊第五中隊へ編入三十日滿期除隊功により勳八等旭日章及金貳百圓を賜はる

陸軍歩兵一等卒勳八等

松岡九平治君

君は明治十四年五月新潟縣に生る二

十九年十月武藏に來り比企郡大河村字下古寺酒造業松岡祐右衛門氏の養子となる三十五年徴兵にして補充現役に編入日露戦役に際し三十七年十一月十一日召集の命に應じ同月二十一日第二師團の分營越後村松歩兵第三十聯隊補充大隊へ入營同時に第四中隊に編入す令兄吉田和藤治氏は特務曹長に昇進せられ出征第一軍第二師團後備歩兵第三十聯隊第 大隊第四中隊に従軍す君は令兄の命に依り同隊へ志願し三十八年二月二十二日屯營出發二十六日廣島着二十七日宇品港出帆三月三日清國盛京省大連港上陸六日遼陽着同地東方約二十里本溪湖にて第四中隊に編入五月十四日迄第一軍兵站各地に守備す十五日遼陽を經十六日鐵嶺着同地に守備す六月十八日第一戰線に参加の豫定にて鐵嶺を出發す二十日東方約十七里光頭山に着す第一軍司令官に直屬し金家屯附近の警戒隊となる七月十一日第一軍兵站監の兼

下を脱し後備歩兵第十三旅團の戰闘序列に編入され前任務を繼續す九月二十七日一等卒申付けらる平和克復凱旋の爲め同年十一月五日光頭山出發鐵嶺を經て十一日大連港に着し十七日乗船二十日宇品港上陸廣島に着す二十五日廣島出發二十九日越後村松聯隊へ歸着す十二月一日召集解除同月七日歸郷三十九年四月一日勳八等瑞寶章及金七十圓を賜はる君の歌あり
大君に捧げし命永らへて今日古郷に歸る嬉しさ
戰地より郷里の役場宛の書翰左の如し

拜啓時下暖和の候陳ば過日御執篤なる御慰問狀に預り手に取る遅しと拜讀委細難有承知仕り候依て御厚意の段奉多謝候就ては御役場村長殿始め各役員皆々様益々御勇健にて事務御精勤の由欣喜此事と奉遙賀候降て小兵事出征以來御蔭を以て極々無事にて軍務罷在り候間乍他事御休神被下度候借而御役場にては日露開戦以來各兵の召集人馬の糧食其他種々の徵發に付き皆々様の辛勞實に推察仕り候就ては目下當隊は鐵嶺に在り一昨日の公報に日本海軍大勝利敵の(バルチック)艦全滅との報に接す是れ偏に 陛下の御威徳猶ほ天祐と云わざるを得んや萬歳三唱して猶ほ餘り有る實に慶賀の至りに御座候今回は陸軍大活

勳當隊も來る六月中旬頃當地出發第一戰線に参加の豫定但し右翼軍方面なるべし今や待ちに待た好時期來れり奮戰敵兵を吉林以北に壓迫し以て功を奏し君國の爲め萬分の一を盡し度く勇氣日に百倍致し居り候依て何れ遠からず珍事山山可申上候
二伸 鐵嶺は東南山脈連なり西北は平地にして或る日戰友を誘へ水筒に酒を詰め一日山に遊ぶ先づ高地に登り互に一盃傾けながら四方を望む萬山は青色を帯び地上には一面草花にて包む實に美なり小鳥は聲克く唄ふ又柳の太木は所々に青々茫々として風に打る又山の麓には支那馬車列をなし(チャク) (ヨワイ) の號令にて日本糧食を運び居る西方には運河あり支那の運送般帆柱を揃へ殆ど港灣の如し又兵站部を見渡せば倉庫の數數うるに暇あらず汽車は氣笛を鳴らし黒煙を吹く實に愉快にて凡で内地に居る心地せり楽しく一日を暮し申候先は御禮旁々御返事迄余は前進の上に乍末筆皆々様御養生專一に希ふ「トバイツ」支那が座敷で日本がお客露助は藝者で引くばかり

明治三十八年五月二十七日 松岡九平治
大河村長小久保滿尊殿各御役員御中

陸軍歩兵一等卒勳八等

荒井角之助君

君は北企郡大河村大字上古寺二十三番地荒井福太郎氏の二男明治十一年七月生明治三十一年徴兵にして現役十二月一日歩兵第三聯隊第三中隊へ入隊明治三十三年十二月一日一等卒三十四年二月二十七日擔架卒々業全年十月三十一日歸休除隊三十七年三月六日動員下令十一月第一師團衛生隊第二中隊編入廿二日東京出發廿四日廣島着四月二十三日征露の目的を以て宇品港出帆五月十日清國盛京省孫家咀子に上陸十六日大和尙山附近の戦争に參與廿六日金洲及び南山の戦闘に參與七月四日前草嶺堡出發幹家屯に到り盤道附近即ち歩兵第二聯隊の傷者を收容後革鎮堡舎營病院後送李家屯に一泊翌五日も前日の任務續行七月二十五日第九師團に分屬せらる二十六日より二十八日に亘る安子嶺及び四子形高地附近の戦闘參與全日第一師團に復歸三十日土城子附近の戦闘參與八月十四日より十六日に亘り碾盤溝附近の戦争に參與二十日より二十四日に亘り水師營及び大西溝附近の戦闘に參與九月十九日より二十二日に亘り水師營附近の戦闘に參與二十二日はり二十四日に亘る二〇三高地戦闘に參與十一月廿六日

より十二月七日に亘る二〇三高地及び赤坂山附近の戦闘に參與十二月三十日より三十八年一月二日迄松樹山第三回攻撃に參與三日より六日迄在旅順口元露國病院に收容せられ有し日本軍傷病者に野戰病院に收容從事八日より迄十四日旅順新市街に分遣老虎尾半島に有る露國海軍傷病者に諸市に開設せる我陸軍病院に收容に従事二十四日より前草嶺堡金州亮甲店土地普蘭店南瓦房店得利寺北瓦房店熊岳城盖平大石橋海城鞍山店劉に堡を経て二月九日北教廠に着二月二十七日より開始せる奉天總攻撃三月二日及び三日沙嶺堡戦闘に參與八日より十一日に亘る田義屯附近の戦闘に參與十二日田義屯附近の戦闘の功に依り吾衛生隊は威狀を授與せらる七月二日第七師團は早朝より敵を迎撃し中村混成旅團に分屬午前七時前孤家子出發花楊樹に至り豫備隊として七師團戦闘に參與翌三日編成に解し前舎營地に歸着凱旋の途に就く三十九年一月十九日陞叭台舎營地出發大三家子双樹子を経て二十一日鐵嶺着二十三日同所出發二十五日大連着二十六日大連出帆三十日宇品港着二月三日廣島出發五日東京着九日復員解隊歸郷す功により勳八等旭日章及金百五十圓を賜はる左掲は郷里の役場宛の書翰なり

謹而戰捷國の新年を奉賀候愈々烈寒の候各位ますや御健康御越年被遊候由先以目出度申納候降而不省儀相變らず壯健にて軍務の元に無事加年仕候間憚ながら御休意被下度候併而出征以來は殊さらに御厚情を蒙り千萬奉深謝候尙前途遠遂に候へば相變らず御引立の程願度奉存候先は聊か賀辭の印まで申上候謹言
元 且

荒井角之助

大河村役場御中

陸軍歩兵一等卒勳八等

小林龜太郎君

君は比企郡大河村大字腰越五十番

地小林鶴五郎氏の長男明治七年二月生明治二十七年徴兵にして二十八年九月十五日近衛歩兵第三聯隊第二中隊へ編入十一月十六日歸休除隊明治三十七年二月五日動員下令十日近衛歩兵第二聯隊へ召集せられ近衛後備歩兵第二聯隊第七中隊へ編入六月七日屯營出發九日廣島着十一日出發全日宇品出帆十五日清國南尖に上陸二十五日沙子崗に着兵站部守備七月十七日沙子崗出發二十五日三咀子着守備三十一日八月二日に至る迄代家堡子及び枕山附近に戦闘全月二十五日より九月五日迄寒

小林龜太郎君 笠原忠太郎君

披嶺黑英臺小連溝に戦闘九月十七日上平臺子にて戦闘十月八日八十二日に至る迄大嶺にて戦闘十七日大柳峪にて戦闘三十日歪頭山にて戦闘十一月四日より歪頭山及び花勾嶺附近に守備十二月十一日歪頭山守備勤務中脚氣病に罹り三十八年一月三十日高力勾定立病院に入院三十一日黄堡療養所に轉送二月十一日灰坑に轉送十二日遼陽に轉送十四日青泥窪病院に入院十七日青泥窪港出帆二十日宇品上陸廣島病院に入院二十七日東京澁谷分院に入院三月二十九日より歸郷療養四月二十七日近衛歩兵第二聯隊補充大隊第二中隊に編入七月四日近衛後備歩兵第四聯隊へ轉出全日第三中隊へ編入十月二十七日復員下令召集解除功により勳八等旭日章及金百圓を賜はる

陸軍歩兵一等卒勳七等

笠原忠太郎君

君は比企郡大河村大字飯田二十二番

地笠原文右衛門氏の長男明治四年九月生明治二十四年徴兵にして現役十二月三十一日歩兵第十五聯隊第九中隊へ入隊二十六年十一月十五日歩兵一等卒二十七年八月三十日動員下令十月十六日清戰役從軍の爲め宇品港出帆二十四日清國盛京省花園河口上陸十一月六日金

(九十三)

州城に於て戦闘七日除家屯砲臺攻撃十一月二十一日旅順口に於て戦闘二十四日控樹房に於て敗兵と戦闘二十八年一月十日蓋平に於て戦闘二月二十四日大平山附近に於て戦闘三月六日營口占領九日田庄臺に於て戦定五月二十五日凱旋の爲め大連出帆三日宇品港上陸六日歸營六月九日滿洲除隊全日善行證書を授與せらるる三十二年四月一日後備三十七年二月九日動員により近衛後備歩兵第二聯隊第八中隊へ入隊六月十三日征露の爲め宇品出帆十七日清國南尖上陸二十五日四臺子七月二十五日山咀子三十一日柳家堡子戦闘八月一日榆樹林子戦闘二日副金嶺着二十六日大塞坡山領戦闘午後各地に轉戦九月五日小窪九日下石橋十七日平家子附近に至り戦闘十月八日より十四日迄大嶺附近戦闘十七日十八日小柳峪附近に戦闘全日八家子着三十日歪頭山戦闘二十九日より三十八年二月二十四日に至る迄歪頭山及西勾附近守備二月十五日歪頭山村に於て戦闘三月一日より十六日迄達子堡達連堡子心臺子腰堡茨林子 鐵嶺附近に於て戦闘三月二十一日丁家溝溝陣五月六日先進部隊として出發全九日李家臺附近守備六月二日より敵情及地形偵察の爲め掬家方面に出張五日李家臺歸還二十二日下清河に於て戦闘二十八日馬家堡子溝陣十一月三日凱旋

の爲め全地出發五日鐵嶺十五日大連出帆十八日宇品港上陸二十四日歸隊全日復員下令全二十九日召集解除功により勳七等旭日章及金百五十圓を賜はり尙ほ三十九年六月六日恩給年額五十圓を賜はる

左掲は郷里の野口村長宛の書翰なり

謹而爾來の御無音を奉謝候尊殿始め吏員諸氏には御變りなく御奉務の段奉賀候降而私儀も其後何ごとも變りなく無恙職務なしつゝあり請ふ御意を休められんとを今回は御慰問狀に預り深く奉謝候抑今回の戦闘は日清戦争の當時とは異なり我日本帝國の運命の關る處に有之豈に夫れ大に奮戦せざるを得んや此時に當て上長官より下我輩に至るまで死を決し而戦わざるべけんや

不肖儀は渡清以來幸に健全にして七月卅一日八月一日榆樹林子の大激戦を始めとし遼陽第一防禦線たる大塞波多年の戦績に煙台附近の速戦平台子の逆襲沙河の大合戦歪頭山の攻撃及夜襲其他小衝突は數回交戦仕候得共幸にして不肖一の微傷だも受けず無恙健全に御座候間御安心あられ度候先は御返事旁々聊か戦況を報す 草々頓首

明治三十七年十一月廿五日

野口宜銳殿

並原忠太郎拜

陸軍歩兵一等卒勳八等

石塚平助君

君は比企郡大河村大字青山百四十三番地石塚市左衛門氏の長男明治二年三月生明治二十二年被兵にして十二月一日歩兵第十五聯隊第四中隊に編入二十三年十二月八日歩兵一等卒二十四年三月九日擔架術卒業二十五年十月三十一日歸休除隊全日善行證書授與十二月一日豫備役二十七年八月三十一日充員召集により歩兵第十五聯隊第四中隊へ入隊十月十五日露戰役從軍の爲宇品港出帆二十四日清國花園河口へ上陸十一月六日下方(鑛家山)に於て戦闘二十一日金州北方高地に於て戦闘十二月一日第一大隊本部付二十八年一月十日蓋平に於て戦闘二月二十四日太平山及西七里溝に於て戦闘三月六日營口攻撃に參與九日田庄臺南方に於て戦闘五月二十三日凱旋の爲め大連より上船二十六日宇品歸港六月九日解散十月某日二十七八年戦役の功により勳八等瑞寶章及金五十圓を賜はる十一月十八日從軍記章を賜はる明治三十七年四月二十九日日本赤十字社第壹患者輸送隊列員志願應募全年六月二十八日卒業

君は比企郡大河村大字青山百四十三番地石塚市左衛門氏の長男明治二年三月生明治二十二年被兵にして十二月一日歩兵第十五聯隊第四中隊に編入二十三年十二月八日歩兵一等卒二十四年三月九日擔架術卒業二十五年十月三十一日歸休除隊全日善行證書授與十二月一日豫備役二十七年八月三十一日充員召集により歩兵第十五聯隊第四中隊へ入隊十月十五日露戰役從軍の爲宇品港出帆二十四日清國花園河口へ上陸十一月六日下方(鑛家山)に於て戦闘二十一日金州北方高地に於て戦闘十二月一日第一大隊本部付二十八年一月十日蓋平に於て戦闘二月二十四日太平山及西七里溝に於て戦闘三月六日營口攻撃に參與九日田庄臺南方に於て戦闘五月二十三日凱旋の爲め大連より上船二十六日宇品歸港六月九日解散十月某日二十七八年戦役の功により勳八等瑞寶章及金五十圓を賜はる十一月十八日從軍記章を賜はる明治三十七年四月二十九日日本赤十字社第壹患者輸送隊列員志願應募全年六月二十八日卒業

全年六月三十日召集全日日本赤十字社第壹患者輸送隊列に編入せらるる七月五日第一軍兵站監部附十一日宇品港出帆十六日清國安東縣上陸十九日鳳凰城兵站地駐屯二十一日湯山城患者集合所附十月十五日連山關患者療養所附十一月十七日賽馬集兵站病院附十二月一日韓國駐劄軍部首附三十八年二月十五日鴨綠江軍附四月十五日遼東守備軍附五月一日遼東兵站監部附六月十一日賽馬集患者療養所附八月二十四日遼陽兵站病院附十月二十三日鐵嶺兵站病院附十一月一日關東總督府附十九日大連より上船十一月二十三日宇品港に上陸二十八日解散

左掲は郷里の役場宛の書翰なり

謹啓陳者日増に向署に相成候處御各位倍々御清勵之由奉大賀候小生出陣の際には種々御懇切なる御厚情且つ優待せられ小生不堪感謝候降て小生入社以來就業多忙に付乍思御疎遠仕候段御免被下度其後小生も無事にて去月六月三十日を以て全科卒業全日卒業式舉行せられ授令書接受致候間乍憚御放念被下度就ては來る六日出征の目的を以て出發可致様陸軍省より命令有之本日戦時被服類受取準備相整へ候間留守中宅は御憐み被下度然る上は報國恤兵趣旨を嚴守し誓て

救護任務全ふするを期す御参考の爲め左に
常縦列の編成は未だ曾て世界になし當日本赤十字社
に於て今回始めて組織せらるゝ者にて其編成理事一
輪長三書記一看護人長二看護醫員一人二輸送人一二
〇計百三十一名より成戦地派遣の上は總て軍人と同
一の資格を有す小生等行動如何に依り本國體面に及
すとと考候附ては奮發を以て國に報を期し併せて御
報導申上置き餘は戦場にて御報導可申上候先は御伺
迄 早々敬具

七月三日

役場 御中

石塚 平 助拜

陸軍歩兵上等兵勳八等

關根 八十八君

君は比企郡大河村
大字腰越六百七十

三番地關根忠四郎氏の甥明治十六年七月生明治三十六
年徴兵にして現役十二月十五日歩兵第十五聯隊第二中
隊へ入營三十七年三月六日勳員下令七日歩兵第十五聯
隊補充大隊第一中隊編入九月二十六日歩兵一等卒十月
二日補充兵教育掛助手十一月十六日歩兵上等兵全日第
六中隊編入新兵教育掛助手三十八年五月二十六日野戰

戰補充員として高崎出發三十日宇品港出帆六月三日清
國盛京省大連上陸十一日野戰歩兵第十五聯隊第五中隊
編入十六日平和克復三十日清國法庫門守備隊三十九年
一月十六日凱旋の目的を以て法庫門出發二十二日大連
港乗船二十五日宇品港上陸二月二日高崎屯營歸着八日
復員下令十日一年志願兵教育掛助手四月一日明治三十
七八年戰役の功に依り勳八等瑞寶章及金八十圓を授け
賜はる

陸軍歩兵上等兵勳八等

田端 鹿治君

君は比企郡大河村
大字腰越七番地田

端平次郎氏の弟明治十六年七月生明治三十六年徴兵に
して現役全年十二月十五日近衛歩兵第二聯隊第一中隊
へ入隊卅七年二月五日勳員下令六日補充大隊へ轉出第
一中隊へ編入全年九月十四日野戰隊補充の爲轉出十八
日宇品出帆二十三日ダルニ上陸二十八日野戰隊第一
中隊へ編入十月十一日より十三日に亘る上黒牛屯附近
の戦闘に参加十月十四日馬圈子山附近の戦闘に参加十
一月二十三日二等卒申附らる三十八年一月十日疾病の
爲高力句定立病院へ入院十一月廿二日病院へ轉送十
五日遼陽兵站病院轉送二十日青泥窪兵站病院轉送二十

廿六日青泥窪出帆三十日宇品港へ歸着全日廣島豫備
病院へ收容二月五日廣島出發八日東京へ歸着東京豫備
病院澁谷分院へ收容せらる全月二十七日退院近衛歩兵
第二聯隊補充大隊第六中隊へ配屬し全日より三十日間
歸郷療養三月二十八日全治復隊四月二十一日上等兵命
せらる全年十二月五日復員下令十二日第二中隊へ編入
三十九年四月一日附を以て明治三十七八年戰役の功に
より勳八等白色桐葉章及從軍記章並に金八十圓を賜は
る尙ほ全年十一月二十二日、金一圓五十錢特別恩賜金
を下賜せられ全月二十四日善行證書を賜ふ全日歸休除
隊さる

陸軍歩兵上等兵功七級勳八等

岡本 豊治君

君は比企郡大河村
大字腰越岡本友次

郎氏の二男明治十六年二月生明治三十六年徴兵現役全
年十二月十五日歩兵第十五聯隊第四中隊へ入隊三十七
年三月六日勳員下令に付高崎市鞆町矢島清次郎宅へ外
宿す廿二日補充大隊第一中隊編入全年六月三日補充大
隊第五中隊へ轉入八月二十八日戦地補充員として高崎
屯營出發九月一日宇品乗船全日出帆五日清國青泥窪を
上陸九日野戰歩兵第十五聯隊第十一中隊へ編入十月三

日一等卒に昇進三十日より十二月二十五日に亘る松樹
山戦闘二十六日より十二月一日に至る松樹山戦闘三十
八年一月二十日旅順より北進す三月三四日清國盛京省
汐嶺堡に於て戦闘全日八九十日に至る奉天附近三臺子
に於て戦闘四月三日上等兵に昇級す二十五日双堆子に
於て戦闘五月二十日法庫門西南方大身に於て戦闘三十
九年一月十七日凱旋の爲め法庫門桃兒山屯出發二十三
日大連出發二十六日宇品上陸二月四日高崎着全年四月
一日三十七八年戰功に依り功七級金瑞勳章年金百圓及
勳八等旭日章を賜はる

左掲は戦地よりの書翰なり

拜復其後は絶て音信を怠り候處時下御近況如何に御
座候や奉伺候降て小兵義無異戰務罷在候間御安意を
乞ふ扱て最早新聞紙上にて御承知とは存候得共過日
來の戦況一寸御報申度當隊は先に申上候某滞在地に
り更に北進し愈々八日午前九時頃奉天附近〇〇地に
於て敵の大部隊と衝突し爰に戦闘は開始せられ既に
彼我の砲銃聲は般々として恰も山嶽も崩れん斗り益
々激戦に至り殆んど二晝夜の長きに亘り死傷者續出
ずるも敵は猶ほ頑強に抵抗せり然れ共我が幾許の
戦友は各々生還を歸せずとし勇戦奮闘の結果遂に

十日午後三時頃全く此の地点を占領せり其の時の爽快は實に筆紙に盡し難く小生も此の大戦に加はり候得共幸に微傷だも蒙らず健全に有之候間先づは御放念被下度右御報知まで 早々頓首
明治三十八年三月十八日

於滿州龍崗子

岡本 豊 治

酒井茂三郎様

陸軍歩兵上等兵勳八等

青木徳太郎君

君は比企郡大河村大字青山二十九番

地青木兼三郎氏の弟明治十四年七月生明治三十四年徵兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊へ入營三十六年十一月三十日歸休除隊歩兵一等卒三十七年三月九日勳員により歩兵第十五聯隊第五中隊へ編入全年四月二十日日露戰役從軍の爲め宇品港出帆五月六日清國盛京省大沙河南方猴免石へ上陸十六日十三里臺附近の戦闘に參與二十五日南山附近に於て戦闘七月十九日脚氣症により第一師團第四野戦病院へ入院二十八日青泥窪兵站病院へ轉送八月十六日大連出帆十九日宇品港上陸同日廣島豫備病院へ入院九月六日東京豫備病院へ轉送

十日信州沓掛に轉地療養十月八日戸山分院へ歸院十月二十八日全治退院二十九日歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊に編入十二月七日野戦隊補充として高崎出發十二日宇品港出帆十六日清國盛京省青泥窪上陸十九日歩兵第十五聯隊第五中隊に編入三十八年二月十五日吳崗子附近に於て戦闘二十八日閩家窩棚附近に於て戦闘三月二日三日に亘る沙嶺堡に於て戦闘四月八日九日十日に亘る三臺子に於て戦闘四月二日歩兵上等兵申付けらる全年十月十六日平和克復三十九年一月十六日凱旋の目的を以て法庫門出發二十二日大連乘船二十五日宇品港上陸二月二日高崎屯營歸着八日召集解除功により勳八等旭日章及金八十圓を賜はる

陸軍歩兵上等兵功七級勳八等

岡本常次郎君

君は比企郡大河村大字腰越百四拾七

番地岡本勝五郎氏の長男明治十三年六月生明治三十三年徵兵にして現役全年十二年一日歩兵第十五聯隊第九中隊へ入營三十五年十一月二十二日縫工術卒業證書を附與せらる三十六年十一月二十四日歸休除隊三十七年三月六日充員下令九日歩兵第十五聯隊第九中隊へ編入二十日海外出征の目的を以て高崎出發四月二十二日宇

品港出帆五月六日清國盛京省大沙河南方猴免石へ上陸十六日十三里台附近の戦闘に砲兵掩護をなす二十五日六日金州及南山の戦闘の際に飯塚中隊長の許より田中大隊長殿への傳令として重要な書簡の傳達數回及命令傳達の任務をなす七月二十六日より二十八日に至る双台溝附近の戦闘に參加七月三十日後沙包附近の戦闘に參加八月十三日より十五日に至る三日間碾盤溝西南方高地(高崎山)攻峯に際し選抜斥候として前進中決死隊に改選を受け鐵條網を切斷し敵壘に肉迫し突撃を實施すること數回十五日遂に之を占領す八月二十一日旅順要塞第一回總攻撃水師營西南方標高九十三高地戦闘に參加九月十九日より廿三日に至る大平溝東南方約千五百米突標高二〇三(師團總攻撃第一回二〇三)高地の攻撃に際し決死隊として戦闘に參加十月卅日旅順要塞第二回總攻撃第一回松樹山攻撃に參加十一月二十六日旅順要塞第三回總攻撃第二回松樹山砲臺攻撃に従事す十二月一日より五日に至る太平溝東南方約千五百米突標高二〇三(第二回二〇三)高地攻峯の際聯隊本部より傳令として最も重要な書簡傳達をなすこと數回此時攻略となる三十八年三月二日三日奉天會戰沙嶺堡の戦闘の際

に參加八日九日十日に至る三臺子攻略の際には展望歩哨をなし夜に至り潜伏斥候となり終日續勤して遂に攻略となる四月二日歩兵上等兵五月二十日より二十二日に至る法庫門西南方大房身附近の戦闘の際には展望歩哨をなす十月十六日平和克復三十九年一月十七日宿營地(孟家商棚)出發范家商棚着十八日同地出發熊官屯に着翌十九日滞在二十日熊官屯を發し二十二日大連着二十三日大連出帆二十六日宇品港に上陸二十九日復員下令二月三日高崎に凱旋歸營八日召集解除功により功七級金鷄勳章及年金百圓及勳八等旭日章を賜る

左掲は郷里の村役場宛の書翰なり

拜呈時下向署の候御貴君様方御一同御變りも之無候哉増々御壯健にて御勤勉の事と遠察致居候以來永々無音に打過ぎ候段平に御容赦被下度隨而小生儀無異軍務に罷在候間乍慮外御休心被下度就ては我軍は去月十六日十三里臺を占領し續て二十六日金州南山を攻撃し前後十六時間の大激戦に渡つて之を占領せり委細は豫て新聞紙上にも御高覽に相成居候得ば余は略す先は一寸御報迄

六月十四日

岡本常次郎

は終日展望歩哨及潜伏斥候を行ふ同月七日四臺子攻撃

大河村役場御中

陸軍歩兵上等兵勳八等

岡本孝一君

君は比企郡大河村大字腰越九百三十

一番地岡本親三氏の弟明治十三年一月生明治三十二年徵兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊第十二中隊へ入營三十三年十二月一日歩兵一等卒三十五年十二月三十一日滿期除隊三十七年三月九日歩兵第十五聯隊第十二中隊へ應召二十日海外出戰の目的を以て高崎屯營出發四月二十二日露戰役從軍宇品港出帆五月八日清國盛京省大沙河口猴兎石へ上陸十六日十三里臺附近の戰鬪に參與二十六日南山に於て戰鬪三十日王家屯附近の戰鬪に參與七月二十六日前牧城子附近に於て戰鬪二十七日日營城子附近に於て戰鬪二十八日金龍寺溝及双臺溝に於て戰鬪三十日東西泥河子に於て戰鬪八月十三日より全月十五日迄で礮盤溝附近に於て戰鬪九月十八日より二十二日まで太平溝東南方高地に於て戰鬪十月六日歩兵上等兵三十日松樹山に於て戰鬪十一月二十六日松樹山に於て戰鬪十二月三十一日松樹山に於て戰鬪三十八年三月二日より三月三日まで沙嶺堡に於て戰鬪七日四臺子に於て戰鬪八日より十日まで奉天府三臺子に於て戰鬪四月二十五日双堆子に於て戰鬪五月二十日法

庫門西南方大房身附近の戰鬪に參與三十九年一月二十三日大連港出帆二十六日宇品港上陸二月四日高崎隨着五日復員下令八日召集解除功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる弟軌一君も出征して功あり別項戰歴を見るべし

左掲は戰地よりの書翰なり

謹啓其後は異外なる御無音に打過ぎ恐入候陳ば時下秋氣の候に相成候處御尊體如何定めて御健勤被遊御事と遠推仕り候降而私儀上陸以來別條なく金州南山の戰鬪後〇〇方面に於て數回の戰鬪に參與仕り候得共未だ輕傷だも受けず益々健康目下〇〇地に於て滞在休養罷在候間他御放念被下べく候未筆ながら郷里に於ては出兵者留守宅を皆様の御盡力にて厚く御世話被下由何共深謝の次第に御座候先は御身體の無事を祈上候 順首

明治三十七年九月 日

在清國 岡本孝一

大河村長殿外役場吏員御中

陸軍歩兵上等兵勳八等

金子定吉君

君は比企郡大河村大字青山百一番地

金子源次郎氏の二男明治十二年十月生明治三十二年徵兵にして現役十二月一日歩兵第二十七聯隊第三中隊へ入隊三十三年十一月北海道石狩國上川に轉隊す全聯隊第七中隊へ編入六月三十日一等卒三十五年十月三十日歸休除隊三十七年八月十三日充員召集に應し歩兵第二十七聯隊第七中隊編入後傳令任務を申付らる十月二十五日出征の爲屯營出發全日室蘭着二十七日室蘭港出帆二十八日青森上陸十一月三日閱兵式及び遙拜式を行ふ六日青森出發九日大坂着十五日大坂出帆二十日清國青泥窪上陸二十五日第三軍へ編入二十六日二十七日第九師團の豫備隊となり盤龍山西砲台戰鬪に參加す全地より旅順に前進し十一月三十日太平溝東南方標高二〇三高地に於て戰鬪十二月五日全高地に於て戰鬪十七日高丁山戰鬪三十八年一月一日鳩灣戰鬪に參加十日旅順口出發全日方家屯着十二日方家屯出發十四日海城着全地附近の守備二十日全地出發牛莊着全地附近の守備二月十二日全守備地出發高力堡着全地附近の守備二十日全地出發羅家套子着全地附近の守備二十七日全地出發三月一日より五日に至る疊道姚家屯四臺子の戰鬪に參加

三月六日岔臺北方村落附近に於て戰鬪七日轉灣橋附近に於て戰鬪全日負傷第七師團第三野戰病院入院三月十

四日砂嶺堡病院へ後送三月二十二日黃泥窪兵站に病院へ後送二十四日遼陽兵站病院へ後送四月一日退院す五日復隊四月八日黒油溝出發十日法庫門陶家屯着全地附近の守備五月三日全地出發北進して康平に至り全地附近の守備七日上等兵を申附らる十月十六日平和克復二十四日康平縣道監套海出發二十七日奉天北方尚義林着三十九年二月二十四日全地出發三月四日柳樹屯上船九日室蘭上陸十日凱旋歸隊十五日召集解除功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

左掲は郷里の村役場宛の書翰なり

拜啓時下暖氣の候に相成候其後は御無音に打過候段平に御容赦被下度御役場一同御變り無き事と思ひ欣賀の至りに有之候降而小兵儀も幸へ奉天附近前進し三月二三日頃より戰鬪し三月五日六日分臺にて戰鬪し七日天港橋戰鬪にて午後七時頃足部負傷し其後早速第七師團第三野戰病院に入院し候へ共遼陽迄後送致され候處幸にして退院致すとに相成只今にては本隊に來りて職務に従事罷在候我師團鐵嶺北方道仁套海三所に守備致し居り候處前哨線には度々敵の騎兵來襲せり然れども當隊にては負傷なく敵は本月上旬にも三四百死傷をのこし退却致候先は短書を以て御

通知迄余は後便を以て萬々申上候 草々不一

二伸 小兵儀をかげを以て先月上旬上等兵に相成候

間一寸御通知申候

六月四日

金子定 吉拜

大河村役場御中

陸軍歩兵上等兵勳八等

中澤長八君

君は比企郡大河村大字飯田五十六番

地中澤幸三郎氏の長男明治十一年三月生明治三十一年徵兵にして現役十二月一日歩兵第三聯隊第十二中隊へ入營三十四年二月二十四日擔架術卒業の證附與せらる十月三十日善行證書附與せらる三十一日現役満期除隊三十七年三月六日動員下令十一日歩兵第三聯隊第十二中隊へ編入四月十一日露間戰團の目的を以て東京出發十四日廣島に着二十三日宇品港出帆五月十二日清國盛京省張家屯上陸五十六日石拉子附近に於て戰團參與二十五日南山に於て戰團參與二十七日南關嶺占領六月二十六日磐道附近に於て戰團參與七月二十六七八日双臺溝附近に於て戰團參與八月火石稜北方高地附近に於て戰團參與八月十八日より旅順口攻圍二十日二十一

日水師營南端に於て戰團參與九月十九日二十日水師營南方高に於て戰團參與十一月二十六日三里橋北方高地に於て戰團參與全日松樹山補備砲臺に於て戰團參與十二月三十一日松樹山に於て戰團參與三十八年一月二日旅順陥落四日より十二日迄老虎尾半島砲臺受領及守領二十二日北進の途に付く全二月十日金州普蘭店蓋平海城等を経て北邊橋子着全三月八、九、十日奉天附近(田義屯)電官屯戰團參與二十九日歩兵上等兵申付らる五月廿五日より三十一日迄河套附近に於て第一線勤務に服す六月一日より十月二十六日迄顧家屯附近に於て滞在す十月二十七日平和克復に付東五顆樹に轉し明治三十九年一月十九日迄全地滞在一月二十日鐵嶺着二十四日鐵嶺より奉天無家屯遼陽海城大石橋熊岳城得利寺金州等を経て大連に着二十六日清國盛京省大連灣出帆三十日宇品港上陸二月二日廣島出發四日屯營に凱旋す五日復員下令七日復員に依り召集解除八日歸郷す功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

左掲は戰地より家郷宛の書翰なり

謹みて蕪眉を裁し旅順攻圍軍中より膝下に拜呈仕候時下秋冷の候御兩親様益々御勇健欣舞の至りに存候降而小子儀其後の激戦にも微傷だも受す極めて頑健

九日更に第二回の攻撃を加へ候

今回は我砲兵と連絡を通じて初めて猛烈なる砲火を浴せかけて散々敵壘の一部を破壊して大損害を與へ時期を計りて電光路に依りて歩兵の突入を開始致候我歩兵は漸次敵壘に近づき猛烈に射撃して突入せんと致し候て亦た能はず其夜は遂に銃聲中に一夜を送り二十日二十一日に渡り此處に一場の大混戦を現出仕候則ち彼我の接戦激烈にて銃を發するに遑まなく互に或は石を投じ若くは爆彈を擲て甚しきは敵の擲げたる爆彈の未だ爆發せざる中に素早く拾ひ取りて又た投げ返すなど實の其の猛烈なること筆紙に盡し難く候

此の日敵も随分頑強に抵抗仕候へ其復讐的觀念を以て猛撃する我軍の勞ひ遂に支へ切れず壘を捨て、退却するの止むなきに至り第一第三兩大隊の占有に歸し申候占領後の有様は實に之れ酸鼻の極に有之候第一回の攻撃に於て殆んど全滅の悲運に遭遇して而も敵の射撃烈しき爲め死體の收容を爲す能はず第二回の攻撃又た激烈を極め候是れ烈風吹き去つて落葉地に滿ち數日の風雨に腐爛するの有様に御座候第一回の死者の如き肉已に腐敗し餘す處唯だ軍服と骨との

に服務罷在候間御靖神被成下度候借て我第三聯隊は軍の作戰計畫に隨ひ第一師團の左翼に位置し旅順街道の両側に在り日夜警戒致居候へしも彌々八月廿日軍の總攻撃開始と共に旅順街道を前進仕り水師營市街南端に於て一時休憩夫れより有名なる幽靈砲臺即ちクロバトキン砲臺に向て小銃射撃開始仕候當砲臺は幽靈砲台と名附らるゝ丈ありて中々巧妙に築造せられ一見微々として見るに足らず一攫にもなし得らるゝ様に見受けられ候爲め我軍は何等の準備も不仕少時小銃火交換の後直に第一大隊を右翼とし第三大隊を左翼とし砲壘に向て突撃致候處敵壘強固にして突易に突入致兼ね候のみならず壘内には多數の機關砲据付あり我が突撃隊の附近を見て一齊に發射被致候爲め無殘や見るゝ中に我聯隊は殆んど全滅の慘狀を現出し遂に突入の目的を達すること能はず其儘無念を忍び他日の大々の復讐を期して前集合地に歸還致候而て我聯隊は人員の不足甚しく如何とも致方なく之れが不足を補ふべく水師營南端より東北方に亘り身を掩蔽すべき掩堡を掘り其の中に匍匐して約一ヶ月間警戒を嚴にしてひたすら部隊の補充を待ち居候其内地より數百人の補充兵到着仕候故九月十

み其の何人なるを辨じ難く相成候小子等補助擔架卒との其の掃除を命せられ敵軍の目を忍びつゝ夜間に乘じて前進の當時堀り置き候電光路中に數十人を一擲として埋葬致し涙ながらに假りの墓地と仕候得其實に之れ一切有爲法如露亦如電の身を以て電光路中に曇らなれば候事記すも涙語るも涙永遠に痛悼の情に堪へず此の激戦中に在りて小子の如き無事なりしは全く御兩親様御慈念の御蔭と感謝罷在候其後師團命令に依りクロバトキン砲台の守備第二聯隊と交代仕り目下水師營西北の高地に陣營致居候尙々御報道申上度事澤山有之候へ共軍務多忙思ふ様に認め兼ね候故更に他日を期し候御兩親様始め家内一同時節柄御加養被下度偏へに御願申上候 頓首

明治三十八年十月二十三日

旅順攻圍軍中にて

長 八拜

御 函 親 様

陸軍歩兵上等兵勳八等

影山宗五郎君

君は比企郡大河村大字飯田第四十八

番地平民農影山春吉氏の弟明治十年一月生二十九年十月一日徴兵にして現役歩兵第三聯隊補充大隊第三中聯に入隊三十年六月四日第十中隊に轉隊全年十二月二十八日歩兵一等卒を申附らる三十二年四月四日滿期除隊豫備役三十七年三月九日野戰歩兵第十五聯隊第十一中隊に編入二十日屯營出發二十三日廣島市に着四月一日後備役に編入二十二日日露戰役海外出征の目的を以て宇品港を出帆二十六日韓國大同江に入船五月六日清國盛京省大沙河河口南方猴兔石へ上陸十六日韓家屯附近に於て戰鬪二十六日南山に於て戰鬪七月二十六日前收城堡に於て戰鬪二十七日營城子に於て戰鬪二十八日金龍寺溝及び双台溝附近に於て連戰三十日泥河子に於て戰鬪八月十四日碾盤溝攻撃決死隊を編成して夜襲の際敵前約二十米突の地點に在りて射撃中左肩軟部に敵小銃彈の貫通銃創を受け負傷十五日第一野戰病院に入院十六日長嶺子定立病院の收容を受く十七日清國盛京省青泥窪兵站病院に入院二十二日皇后陛下の御慰問に預り金二圓を皇太子殿下より御菓子料として金五十錢を下賜せらる二十三日内地に後送せらる二十七日大阪港へ上陸全日大阪陸軍豫備病院砲兵營分病院に入院九月十二日東京陸軍豫備病院氷川分院に轉送十六日伊豆

國田方郡海町に轉地療養十一月六日東京陸軍豫備病院廣尾分院に入院九日東京陸軍豫備病院澁谷分院に轉送十二日東京陸軍豫備病院高崎分院に轉送十七日全治醫院歩兵第十五聯隊補充大隊第四中隊に編入三十九年一月二十九日復員下令二月八日召集解除功により明治三十九年四月一日勳八等旭日章及金二百圓を賜はる左掲は戰地より郷里の阿兄宛の書翰なり

芳墨拜呈仕候陳者其後は絶ての御疎音平に御許容被下度候時下向暑の候に相成り候節御貴兄家皆々様には御勇健にて御消光罷在り候由大慶至極に賀奉り候降而弟儀長々安藝國廣島市に滞在中の處四月二十三日當地出張し地方有志者諸君の深厚なる萬歳歡呼と馴れし故郷を後に見て運送船第一八幡丸に乗船す幅は約十五間長は約五六十間も有らんと思ふ巨大なる運送船に外百餘艘船相並んで出帆す歩兵第十五聯隊の第八中隊第十一中隊第十二中隊と砲兵併せて約一千人と五百に余れる軍馬を載せ海路恙無く全く二十六日第二軍の集合地なる韓國大同江に入船碇泊す船中にては陸とは事違ひ演習はせず別に差したる要事なく故に毎日二三回位つゝ甲板に出で身體療養の爲め軍歌を奏し繩引き其他種々の遊をなし又散歩も

したる處船中なれば狭し只一百千里青々として間々警戒の我軍艦と波打つ山を見るのみ又滞在地近傍に於ては韓人の鐵鍊を持つて畑を耕すを見るのみなり大同江に九日間余の滞在は實に呆れたるもの然れども明日をも知れざる國家に捧げし命故香氣に日を送り上陸の期を待ち居れり五月八日敵地清國盛京省大沙河河口南方猴兔石へ上陸以後日夜烈風雨寒暑を厭はず警戒し一夜たりとも清人の家屋に泊らず只一度勤務の爲止を得ず半夜計り人家に立寄り其他家は全くの露營を以て五月十六日韓家屯附近に於て戰鬪を開始す我が中隊は砲兵援護の任を以て休養中敵砲彈二發計り我砲兵陣地の後方に破裂し始めの内は驚くに及ばず我國の烟火の如く美しけれども見る間に敵距離を確知し發射せし處不幸にも我が砲兵陣地に命中し多少の死傷者を生せり然れども勇壯なる我軍は屈せず砲兵援護の任は他隊と交代し戦線に加入し終に全く占領せり捕虜數名ありたり夫れより二十五日迄加家屯に滞在せり全く二十六日南山と全時に金州攻撃の命あり金州城は他の師團の占領故に略す然れども歩兵第一聯隊は攻撃隊に加はり非常の苦戦をなせり南山は旅順口の開門にして一度陥れば旅順口陥落

としても然る可き要所なり我軍は僅か十六時間を以て占領せり山頂には大砲何百門を据付け掩堡は土俵及び切り石を以て前後左右より懸み夫に穴を穿ち其穴より小銃及び機關砲を以て我軍を惱せり砲兵も一度は攻撃を中止せん計りなり副防禦鐵條網落穴其他の諸材料を以堅固に防禦をなせり我軍は右に第三師團中央に第一師團最左に第四師團を以て攻撃す午後六時頃太陽の入ると共に山上に日章旗を翻せり敵の死傷者分捕品大砲小銃捕虜其他は不明我軍死傷も調査中にて不明なり當夜は山上に露營す實に快樂此上もなく然れども警戒は一層嚴になせり二十七日は其近傍に休養せり二回共に戦争に加隊せしも壯健に候様皆々御安神被下度候當地方は至て水利に乏しき處或る村に於ても一二個の井の有るのみ他に水は一滴もなし故に毎日暇さへあれば第一線に井を採掘の事にせり水は命の親なれば大切に取扱へり人家は至て不潔なる故傳染病を避けんが爲に衛生上の注意怠らず訓示致され候故身上に取ては御心配被下間敷候又不足を生せしは煙草なり一本の煙草を五人十人位にて交々喫せり故に唐もろこしの毛を喫せし者數多ありたり南山攻撃の翌日は僅に一木の巻煙草を三

十人位にて喫せし事ありたり辛苦御推察被下度候未だ書き送られたき事山々あれども戦闘の結果滞在の時暇を見て委細を書送申候先は大略御報申上候余は後便に萬々 敬白

明治三十七年五月二十七日

露營地 弟 拜

御兄上様へ

陸軍歩兵上等兵勳八等

關根義一君

君は比企郡大河村大字腰越千三百四

十六番地戸主明治八年八月生明治二十八年徵兵にして現役十二月一日近衛歩兵第三聯隊第二中隊へ入隊二十年十二月一日一等卒三十二年一月五日上等兵全年十一月三十日現役滿期除隊三十七年二月八日近衛後備歩兵第二聯隊第四中隊に編入三月十八日日露戰役從軍の爲め宇品港より乗船二十四日韓國鎮南浦に上陸二十五日行軍瀧岡江西を経て二十七日弘庄里着四月三日出發安州定州を経て十六日鐵山着二十二日鐵山發全日良策館着兵站部守備五月三十一日良策館發所串館義州九連城を経て六月一日清國安東縣に着全地守備二十四日發全日蛤塘着守備七月十日發風風城を経て十五日塞馬

集着守備全月二十日發北分水嶺山咀子を経て七月三十

一日東部代家堡子戰闘八月一日榆樹林子附近戰闘八月

二十五日より九月五日に亘第十二師團に屬し塞破嶺黑

英台小連連溝附近に戰闘九月九日平臺子に於ける旅團

に復歸し右翼守備隊となる十月七日より十四日に亘り

大嶺附近に戰闘十五日より十七日迄て大柳家給守備十

八日第一軍直轄となり上柳河子着全地守備二十一日よ

り三十八年二月十一日まで歪頭山附近守備二月十二日

一等症脚氣にて高力勾定立病院へ入院二十四日全院發

遼陽兵站病院を経て二十八日大連兵站病院着三月二日

大連出帆五日宇品港着全日宇品患者宿泊所く收容七日

宇品發十日東京着全日氷川分院へ收容全月二十日より

四月二十八日迄四日間歸郷療養二十八日歸隊近衛歩

兵第二聯隊補充大隊第九中隊へ編入十月二十一日召集

解除功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる

左掲は郷里の野口村長宛の書翰なり

謹呈陳者生等征露の途に向てより以來茲に十ヶ月に

至り其間生等の苦勞に思召し十一月十三日附の御書

狀を拜受深く村長閣下の御仁心に謝す 頓首

明治三十七年十一月二十六日

近衛後備歩兵第二聯隊第四中隊

大河村長野口宣銳閣下

二仲 砂河戰以來歪頭山を占領し其後右山上にて防禦

警戒仕り候内命に依れば本月中に何地方にか轉じ攻

撃仕る可き山何れ後便に戰況申上可く候 以上

陸軍歩兵上等兵勳七等

高瀬房三郎君

君は比企郡大河村大字青山百四十八

番地高瀬利三郎氏の長男にて明治五年十一月生廿五年

徵兵にして現役十二月一日近衛歩兵第二聯隊第三中隊

へ編入廿八年二月一日一等卒上等兵を申附らる同年三

月廿四日日清戰役從軍の爲め屯營出發四月九日宇品港

出帆十二日清國大連灣に着廿一日柳樹屯上陸廿六日大

連花泡着滞在五月十七日曹家屯着廿二日旅順口出帆征

臺役に從事す全月廿九日臺灣三貂角榮定灣に着六月二

日瑞寶に於て戰争三日基隆至球嶺砲臺占領十二日臺北

府着廿一日太湖口に於て戰闘廿二日新竹縣占領當地に

滞在中東方なる新社に於て戰闘七月十日新竹縣鷄卵面

十八峰山に於て戰闘四月廿二日披頭山に於て戰闘八月

八日先峯山總攻撃として新竹縣を出發十八峰山に於戰

闘九日中溝を占領して宿營す十日中溝出發全日新竹縣

に歸る全廿五日宛里着九月十四日彰化着十六日鹿港着十月一日前進し員林街北斗をへて六日西螺街に於て戰團全日上等兵七日土庫に於て戰團八日蔣庄及び双溪口に於て戰團鎮防溪に至り露營す九日嘉義縣に於て戰團十日嘉義縣出發再寮をへて十一日鹽水港に至り戰團十二日白砂嶺に着滞在十八日白砂嶺出發頭庫中社被港仔頭道頭下大自甲を経て廿三日台南府着十一月十三日打豹着乘船歸還の途に就く十一月十八日宇品港着廿日宇品乘車廿二日東京竹橋屯營に還着十二月三日善行征書及各證狀を賜はる天皇陛下より金貳圓五錢酒肴料賜はる全日滿期除隊全年十一月十八日從軍紀章附與せらるる十二月三十日勳八等瑞寶章及び一時賜金三十五圓を賜はる

明治卅七年二月五日近衛師團動員下令同月十日近衛歩兵第二聯隊へ召集同日近衛後備歩兵第二聯隊第三中隊編入二月十八日露戰役從軍の爲東京出發廿日廣島着三月十八日宇品港出帆同月廿三日韓國鎮南舖上陸第一軍兵站線守備に就く廿六日江西着四月六日安州着七日金城里に舍營す十六日韓國卒安道宜川兵站部守備五月十二日迄服務十三日六月廿二日迄清國安東縣兵站部守備六月廿二日より清國高麗門兵站部守備七月十六日

戰地より郷里の知人宛の書翰左の如し

豫而御承知の通り奉天開戦も大捷を得小生は幸にして無事健全乍他事御休神を乞ふ右戰團中の狀況大略左に陳べむ去る二月二十五日花勾を出發し面家堡子に至り宿營し翌二十六日午前七時三十分聯隊は當村落東北端の畑地に集合し聯隊長より夫れくの訓示あり全日は援隊二十七日二十八日は前日に全しく各方面の偵察をなす三月一日午前四時三十分當所を出發し聯隊長指揮に従ひ大家峪向て前進す翌二日當所滞在三日午後七時三十分大家峪出發聯隊は高家屯に至り近衛師團命下に入る中隊は達子堡に至る當所に於て自分は中隊長の命を受け兵卒三名を率ひ姚千戸屯方面の敵偵察の任に當り其の任務を完ふして無事に歸高す四日午前七時達子堡を發し八時高家屯に歸來す全日當方面の死傷約二千餘又午前七時三十分高家屯出發姚千戸屯に向て前進し當所に至り敵の夜襲し來るを撃退す五日午前三時其の地を引揚げ〇〇地に至る全日九時三十分大家峪歸着六日當所に在七日午後二時敵軍より患者收容の爲め五時間の休戦の申込みあり敵は休戦のまゝ、大なる部分は退却せり此時我が方面の敵の死傷は約一萬銃器彈藥其他の分取

か二十日迄清國四道溝兵站部守備七月十八日第十二師團の指揮に入る全月二十八日より八月一日まで枕山屯家堡子團樹子附近に於て戰團八月二十五日より九月五日まで寒坡嶺黑英台及び達連溝附近に於て戰團九月九日十月十六日まで平台子附近に於て右翼軍警戒隊となる全年十月七日より十四日まで大嶺附近に於て戰團十五日より十七日迄大柳家峪に於て戰團守備十八日第一軍直轄となり上柳家子着同地守備二十四日より三十八年二月廿四日まで清國歪頭山西甸附近の守備二月六日大隊長の命に依り敵の前哨線内偵察の爲め決死隊となり其任務を完ふす二月二十五日花勾出發沙河開戰奉天附近の戰團に参加す大家峪姚千戸屯四方台達連堡子蒲河心台子及び鐵嶺附近に於て戰團三月十七日鐵嶺出發上未台沖着滞在五月六日上未台沖出發九日王家堡子に至り七月六日王家堡子出發李家台に着同地守備八月二十八日大古拉子附近に於て戰團十月二十三日李家台出發王家堡子に着十一月三日まで滞在全日凱旋の爲め鐵嶺に向て行軍五日鐵嶺に着七日全所乘車八日大連着十五日大連灣出帆十八日宇品港上陸二十四日歸營二十九日召集解除功により勳七等青色桐葉及び一時金二百圓を賜はる

品山如し八日午前八時進追撃に移り〇〇地を占領して茲に露營す九日午前五時三十分當所を出發大臺方面に向て追撃し午後六時二十分頃大臺着當所に露營す當夜は奉天より左翌田義屯平太子附近の戰團非常にして第一師團は無上なる苦戦なせり當師團は非常なる死傷を出せりと聞く十日午前六時大台出發四方台方面に向て追進す奉天の敵の一部は本道土蒲河方面に向て退却一部は撫順方面に退却す當旅團第十二師團は是れに向て追撃し當聯隊は十一時二十分渾河を渡渉し〇〇地を占領して茲に休營す茲に於て又命令あり當大隊は左側技隊となり蒲河方面に向て追進し當夜は夜襲を以て〇〇部落を占領し茲に村落に露營をなし敵は懿路新台子方面は退却す十一日午前六時三十分旅團當畑地に集合するや奉天附近の殘兵は我が方面に向て退却し來り我は是に應戦しつゝあり九時三十分頃に至り達連堡方面に於て多少砲聲を聞く益々前進して達連堡に至る當所に於て約四千人の捕虜をなし當大隊第四中隊の一ヶ中隊以て捕虜を後送す當夜我が大隊は奉天方面を警戒す十二日午前六時二十分出發本道土蒲河懿路經て新台子至る當停車場を占領聯隊は當所に宿營す大隊は西方部落に於て

前哨となり村落露營をなす當所分取品山の如く十三日午前五時二十分當部落西北端に集合自分は六時大隊長命令に因り兵五名を率ひ第三軍と連落の任に當り全日午後三時第三軍と連絡をなし全日午後十一時頃新台子歸來す本隊は前進したる故へ當所に宿營す十四日午前五時三十分當所出發し午後一時腰堡に於て本隊に加し河村大隊長に報告し當夜は茲に宿營す十五日午前三時より出發準備をなし十時當所を發し鐵道線路に添つて戰闘しつゝ前進す當夜は鐵嶺停車場前方約三千米突の處に在りて警戒す十六日午前三時聯隊は鐵嶺西南面より攻撃し八時當市街を全く占領す三時より城内に宿營す當所の戦利品は多大なるものにして其の數相分らず十七日午後三時當所出發西方部落馬蜂港宿營十八日午前五時出發にて後方なる上未台沖と稱する處に至り一昨十九日より滯在目下休養中に御座候余は亂筆以て戰闘状況略報す就ては恐入候へ共御近所親類には御貴殿より宜敷御傳言し被下度御願ひ申上候 敬白

明治三十八年三月二十一日

於在清國上未台近歩二ノ三

高瀬房三郎拜

駒倉議 謹殿

水 野殿

高瀬利三郎殿

陸軍歩兵上等兵勳八等

山口丹次郎君

君は比企郡大河村大字青山五十四番

地戸主明治四年一月生明治二十三年徵兵にして現役全年十二月一日歩兵第十五聯隊第十中隊へ編入二十四年十二月十五日歩兵一等卒全日上等兵被命二十六年十月三十一日滿期除隊二十七年九月一日第一充員召集として歩兵第十五聯隊第十中隊へ入隊全月十一日過員に付歸郷を命せらる三十七年十二月十二日動員應召第二次後備として後備歩兵第四十九聯隊第四中隊へ編入三十八年一月十七日全聯隊補充大隊第二中隊へ轉隊す翌年八月志願に依り全聯隊第十一中隊へ轉入全二十一日外征の目的を以て東京出發二十三日廣島に到着二十六日宇品港より運送船江戸丸に乗じ出帆二月一日清國大連灣柳樹屯に上陸二日金州及三十哩係を経て五十哩係に舍營三日滯在四日出發普蘭店を経て南瓦房店附近へ行軍中職 充血に罹り卒倒し人事不省終に翌五日南瓦房店兵站病院に入院十日大連兵站病院轉送せられ十二日

大河村長野口宣鏡殿

陸軍歩兵上等兵功七級勳七等

吉野藤太郎君

君は比企郡大河村大字飯田二十八番

病院船にて大連灣出帆十五日宇品港歸着十六日廣島豫備病院に收容せられ二十五日東京豫備港分隊に入院三月二十一日より歸郷療養九十日間を許可せられ退院す六月十九日歩兵第一聯隊補充大隊へ歸隊し三十八年六月三十日夜病召集を解除せられ功により勳八等瑞寶章及金七十圓を賜はる

左掲は大河村長宛の書翰なり

拜啓然者久々御無音の段平に御容赦を乞ふ扱て小子事廣島を去る廿六日出發全日宇品乗船(いと丸)にて二月一日柳樹屯上陸順次行軍去る四日迄戰線へ向て無事從軍せしも不幸にして滿州寒氣に害せられ今は奉瓦兵站病院に入院するの止むを得ざるに至れり乍然病氣は至て輕症故但し一等症不日退院本隊に歸軍し戰務に服し得る事必定故先以て御休心有之度不取敢御報知迄

二仲大原矢の口組内委員様其他一同へ書面を可差上の處書狀傳出に制限有之差出兼候間村長閣下より宜敷御傳聞願升 不一頓首

二月七日

清國東瓦兵站病院

山口丹次郎

吉野藤太郎君

地吉野定四郎氏の長男明治四年三月生明治二十四年徵兵にして現役全年十二月一日近衛歩兵第二聯隊へ入營二十六年十二月九日歩兵一等卒二十七年九月二十五日動員下令二十八年四月九日日清戰役從軍の爲宇品港乗船十二日清國大連灣着二十一日人馬衛生の目的を以て柳樹屯に上陸五月十四日迄朱家屯に宿營十五日出發十七日東河北着二十一日迄宿營二十三日征台從軍の爲め旅順に出帆二十九日台灣三貂角に上陸直ちに進軍六月一日金山全二日庚寮庄三日基隆に轉戰八月八日枕頭山九日尖筆山に戰闘十三日龍南方壇開山に戰闘二十八日彰化に戰闘十一月二十日打拘に於て乗船二十七日宇品着三十日屯營着十二月三日滿期除隊全日豫備功により勳八等瑞寶章及金三十五圓を賜はる

明治三十二年四月一日後備三十七年二月十日充員召集に應じ后備近衛歩兵第二聯隊第六中隊へ編入全年六月十一日露戰役從軍の爲め宇品港出帆十五日南尖滙上陸揚家屯十六日蕭屯十七日前國山十九日山家子二十

日大東溝二十二日安東縣二十三日湯山城二十四日鳳凰城二十五日雪裡站二十六日林家臺二十七日通達舖全處兵站部守備七月四日より草河口守備二十二日發四道溝三十日三順子發恩嶺三十一日廣溝守備八月二十六日守備引揚げ中隊に復舊二十六日九月五日に亘る寒城嶺黑英臺小達連溝に戰闘五日小室九日上平臺子に宿營十一日敵情偵察の爲め松樹咀子に至り全所に於て戰闘七月上平臺子發大嶺着八日より十四日に至る間於大嶺戰闘十六十七日兩日大柳嶺戰闘十月十九日より卅八年二月二十四日に至る歪頭山及西勾附近守備三月一日より十六日に至る達子堡達連堡及心臺子腰堡樹林子鐵嶺附近に於て戰闘十九日より五月五日まで丁家溝滯陣九日季家臺六月二十七日に至る守備二十八日より十一月二日に至る來家堡子八月九日歩兵上等兵十一月三日凱旋の爲め全所出發九日大連十五日全所出帆十八日字品歸港二十九日復員により召集解隊功により功七級金鷄勳章年金百圓并に勳七等旭日章を賜はる弟吉野友次郎君も出征す戰歴を見て功を知べし

左掲は村長宛の書翰なり

時下寒氣に相向へ候處御貴官様方何等の御別條も無之御奉職の御事と存居候次に小生事九月十 日より十

月七日迄上平臺子に於て前哨配置日夜敵と應戰仕居候處退却の命に接し七日午後一時を以て二里後方大嶺山迄退却し直ちに前哨配置且防禦陣地に據り當聯隊は警戒の任に就く戰闘は八日より開始す砲聲は日夜の區別なく天地も崩る如く段末なく十二日午前二時頃よりして敵襲撃し來る敵は二ヶ軍團の兵力にして四回の実貫迄なす爲に我隊前哨線を破り占領せざる時に敵尤も強勢にして一時退却す然れ共増援をなし貫突なし再び占領す此戰に際し聯隊長及同副官中野大尉旗手有賀少尉書記二名第一大隊長富崎少佐負傷す尤も富崎少佐は第一回の襲撃の折負傷す代理第一大隊長齊川大尉又即死す外將校數名負傷す尙中隊長負傷す尙中隊負傷者十名内即死一より尙聯隊員傷者三百余我第一軍の負傷千餘なり敵の負傷一ヶ師團以上の由實に大激戰に御座候十三日夜大嶺附近の敵擊退し其れより前進再び上平臺子占領す猶又前進し目下「ワイトウ山」附近に至り前哨配置防禦陣地に依り日夜敵と應戰す砲聲は天地も崩る如き有様なり右の次第に候へ共小生事無事壯健に候間是又御安心を乞ふ同郷者皆無事先は一寸書狀にて戰地の狀況御一報迄草々 以上

追伸戰闘は大嶺の激戰より引續きの事何れ近々の内奉天方面附近にて一大激戰有之へくと考へられ候餘は後便に讓る再拜

十一月五日

村長 吉野 拜
横川重右衛門様

恩田義則君

君は比企郡大河村大字青山百五十七番地恩田八十二氏の弟明治三十四年徵兵にして下士候補生志願三十五年十二月一日現役として歩兵第二十六聯隊第十一中隊へ編入同三十六年十二月一日一等卒被申付同三十七年二月十二日室蘭守備として出張同年五月二十七日歸營同年八月四日動員下合同月七日師團司令部要員として轉屬同年十月八日上等兵を被命同二十

五日出征の爲め衛戍地出發同十一月十日攝津國太坂港出帆同十一月三日第三軍に編入同二十日清國盛京省青泥窪上陸同十二月一日より同六日に亘る二〇三高地赤坂山攻撃に參與す同三十八年一月二十五日潘家屯出發同月二十六日長岑子着同月二十八日長岑子出發熊岳城蓋平海城を経て同月三十日牛莊着同年二月九日牛莊出發し

騰鷲堡着同月十日伍長に被任同月二十日騰鷲堡出發獨兒頭に着同年二十七日獨兒頭出發同年二十八日黃泥窪着同年三月一日黃泥窪出發し尖山子着同年二日四臺子着同日四臺子出發同年四月日姚家屯着同日姚家屯出發同月五日古家屯着同日古家屯出發同月六日大石橋着同日大石橋出發同月七日轉灣橋着同日轉灣橋出發八日苞道屯着同月九日苞道屯出發同月十一日愛家屯着以上の各地戰闘に參與同日愛家屯出發同月十三日猛家臺着四月九日猛家臺出發同月十日法庫門着同年五月三日法庫門出發同月五日康平着同年六月十六日遼陽窩棚戰闘に參與三十九年二月二十八日清國盛京省柳樹屯出帆同年三月五日北海道室蘭港上陸同月十日復員下合同日善行證書を附與せられ同月十五日現役延期の處滿期除隊功により勳七等旭日章及金三百圓を賜はる

岡本鶴吉君

君は比企郡大河村大字腰越第百三十一番地慶五郎氏の長男明治拾叁年六月生明治三十三年徵兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊第十二中隊へ入營三十四年十二月一日歩兵一等卒被申付三十五年十二月一日歩兵上等兵被申付三十六年十一月廿三日善

行證書授與同月二十四日飯休隊同年十二月豫備役三十七年三月九日勳員により歩兵第十五聯隊第十二中隊へ入隊同月二十二日日露役従軍の爲め宇品港出帆五月八日清國盛京省大沙河河口猴免石へ上陸十六日十三里登附近の戦闘に參與廿六日南山に於て戦闘七月二十六日前牧城驛二十七日營城子二十八日金龍寺溝双瀑溝附近に戦闘三十日泥河子に於て戦闘八月十三日より十五日に至る迄碾盤溝附近に於て戦闘九月十八日二十日迄二〇三高地に於て戦闘同日右下腿貫通銃創九月二十一日第一野戦病院へ入院二十四日大連兵站病院へ轉送十月一日内地還送の爲め大連港出帆五日宇品港飯着廣島豫備病院へ入院同月十七日東京豫備病院氷川分院へ轉送十一月六日豆州熱海へ轉地療養十二月十二日東京豫備病院戸山分院へ歸院二十八日東京豫備病院澁谷分院へ轉入三十八年一月二日全治退院歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊へ入隊同年四月五日第一師團第二十四補助輸卒隊へ轉編五月一日再戦役従軍の爲め宇品港出帆六日清國大連着十八日清國撫順着同日第一手押式輕便鐵道班に屬し撫順營盤間の輕便鐵道敷設に従事す同月二十九日より第一手押式輕便鐵道班撫順工場に於て機車の製作修理及同鐵道用材料の製作並に撫順英領城間の

輕便鐵道敷設に従事す同年八月十一日清國下章黨へ分遣同所に在りて輕便鐵道用材の伐採及同用材料の製作に従事す同月二十五日任歩兵伍長同年十一月十三日より撫順營盤城間の輕便鐵道撤收業務に従事す十二月十三日より同鐵道の撤收終了同月二十五日原隊へ復歸同三十九年二月二十八日一等給同日凱旋の爲め清國撫順出發同年三月三日清國大連港出帆同月八日宇品港飯着同月十七日復員下令除隊功により勳八等旭日章及金貳百圓を賜はる

陸軍歩兵伍長勳八等

島野常次郎君

君は比企郡大河村大字腰越第七拾

四番地島野嘉七郎氏の長男明治六年十月生明治二十六年の豫備徴員たり日清戦役の爲め二十七年九月五日歩兵第十五聯隊補充大隊第三中隊に入隊二十八年三月二十五日日清戦役従軍の爲め宇品港出帆同年六月五日凱旋す二十八年六月十五日歸休隊同年十一月十八日從軍記章下期同月二十六日戦役の功に依り金貳拾五圓下賜二十九年三月二十八日補欠召集に應し歩兵第十五聯隊第十一中隊に編入同年四月十三日歩兵一等卒被申付同年九月二十六日歩兵上等兵被申付同年十月三十一日

歸休隊明治三十七年三月九日充員召集に應し後備歩兵第十五聯隊第七中隊に編入同年六月十五日日露役従軍の爲め宇品港出帆二十二日清國盛京省張家屯(鹽太澳の沿岸)上陸七月二十六日旅順背面安子嶺東南方高地攻撃二十七日安子嶺東南方堡壘突角部に於て戦闘二十八日安子嶺東南方高地占領八月十三日十四日十五日標高一三一高地に於て戦闘十九日標高一七四高地に於て戦闘二十日午前五時戦闘は再び繼續したり午前十時戦闘耐なるに際し中隊長の從卒(大島嘉平秩父郡大宮町出身)君に近き來り曰く「第一分隊長殿中隊長命令第一分隊長は此隊を率て敵の機關砲に肉迫せよ」と依て君は混成の小隊を率て敵の機關砲前約數十米突の所まで一躍進をなし一時停止して急射撃を開始せしめたるも敵彈雨注死傷續出將に一躍進をなして敵壘に啣入せんとする一殺那敵彈來て頭部(左額部)に貫通銃創を受け猶背髓其他に自傷し遂に其地に倒れ居りしも同日十二時全く同地を占領せり二十一日第二野戦病院に入院同年九月二十二日内地還送の爲め宇品港上陸三十八年三月十九日歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊に復隊す同月二十七日歩兵第十五聯隊補充大隊出納官吏及物品會計官吏助手拜命同年八月二十四日留一徑第二

八九號を以て經理事務修習を命せらる同年十一月十九日任陸軍歩兵伍長三十九年一月二十九日復員下令歩兵第十五聯隊補充大隊經理室に於て殘務整理要員として殘留同年二月二十日經理部下士適任證書附與せらる同年三月一日殘務整理済召集解除に付歸郷す功により勳八等旭日章及金二百圓を賜はる君又嘗て文官たらんとし三十九年四月二十八、九日森林主事特別任用考試を茨城縣會議事堂に於て執行するに當り考試に應して合格同年五月十一日合格證書を領得せりと云ふ

左掲は所屬中隊長より君の家族宛の書翰なり以て君の重症なりしを知るべし

謹啓當中隊附歩兵上等兵島野常次郎君出征以來前後三回の激戦に參與仕り各戦闘に於て勇進奮闘仕り其功勞少からず候殊に明治三十七年八月二十日小東溝東南標高一七四高地に據る敵を攻撃の際には非常の激戦にて敵彈雨注し續々我死傷を生し申候此際上等兵は敵の機關砲に向て射撃の集注を命せられ敵の猛火を冒し挺身勇躍部下を適當の位置に誘導仕り射撃開始を命するや敵彈の爲め胸部を貫通致され候も君の勇氣は更に衰ふる事なく益々士氣を激勵して戦闘に従事致居候然るに君の負傷は甚だ重傷にて出血甚敷

候故一時後方に下け應急手當を施さしめ候處氣力急に衰へ候故至急假細帶所に運搬せしめ候も如何せん頗る重傷にて八月二十二日第二野戦病院にて傷死の旨聞及候に付不取敢御通知申上候勿々

明治三十七年八月二十五日

在清國後備步兵第十五聯隊第〇中隊

中隊長代理陸軍歩兵少尉 高山 章 一

故歩兵上等兵島野常次郎殿遺族御中

(前略)陸軍歩兵上等兵島野常次郎君去月二十二日の戦間に於て重傷を負ひ候處同月二十二日第二野戦病院に於て傷死の趣聞及候故至急御通知申上候得共其後に至り右島野上等兵ダールニ一兵站病院に於て加療中にて日々傷所軽快に趣くとの通知有之(中略)依て島野上等兵の傷死は全く別人にして而も小官より傷死として御通知申上候島野上等兵は去月二十二日激戦に於て重傷を負ひたるも幸ひ日々軽快に趣き生命には別條なきこと、御悦び被下度候(下略)

任清國後備歩兵第十五聯隊第〇中隊

陸軍歩兵少尉 高山 章 一

明治三十七年九月五日

島野嘉七郎殿外皆々様御中

陸軍歩兵軍曹功七級勳七等

澤田錦三郎君

君は比企郡大河村大字腰越百四十一番地平民澤田權八氏の養子にして明治十五年一月生明治三十四年徴兵にして現役十二月一日歩兵第十五聯隊第九中隊へ入隊三十五年十二月一日歩兵一等卒申附らる三十六年十一月二十九日善行證書授與三十日飯休除隊を命せらる三十七年三月九日充員召集にて歩兵第十五聯隊第九中隊へ編入す同月二十日海外出征の目的を以て屯營出發四月二十二日宇品港出帆五月六日清國大沙河河口南方猴兎石へ上陸十六日清國盛京省十三里臺附近の戦場に參與す二十六日南山に於て戦闘す七月二十一日、疾病の爲め第一師團第四野戦病院へ入院す二十四日青泥窪兵站病院へ收容八月八日青泥窪出帆内地後送せらる十三日宇品港上陸同日廣島豫備病院へ收容十九日東京豫備病院へ轉送せらる九月二日全治退院三日歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊へ編入せらる十七日歩兵上等兵申附けらる二十日補充兵教育掛助手を命せらる十一月八日野戦隊へ補充として高崎出發十五日宇品港出帆十八日清國盛京省青泥窪上陸十九日野戦歩兵第十五聯隊第九中隊へ編入二十六日旅順要塞第

三回總攻撃第二回松樹山砲臺攻撃十二月一日より同五日に亘る太平溝東南方約千五百米突標高二〇三高地の攻略に參加す同月廿八日任陸軍歩兵伍長三十八年三月二日奉天會戰沙岑堡に於て戦闘七日四臺子攻撃八日九日十日に亘る三臺子攻略五月二十日二十一日法庫門西南方英城子附近に於て戦闘二十二日より三十九年一月十六日迄清國康平縣孟家窩棚に於て滞在三十八年五月三十一日任陸軍歩兵軍曹同年十月十六日平和克復三十九年一月十五日より在鐵嶺第三軍參謀出張所書記助手を命せらる同月二十六日凱旋の爲め鐵嶺出發二十八日大連着二十九日大連出帆二月一日宇品港上陸三日高崎へ飯營八日復員下令同時に三中隊へ編入同日解散功により功七級金鵄勳章及年金百圓並に勳七等旭日章を賜はる

陸軍歩兵軍曹勳七等

岡本常吉君

君は比企郡大河村大字腰越百五十三番地岡本啓次郎氏の弟明治十年十月生明治三十年徴兵にして現役十二月一日歩兵第三聯隊第七中隊へ編入三十二年十二月二日歩兵一等卒三日歩兵上等兵三十二年十二月一日任陸軍歩兵伍長三十三年十月十三日臺灣守

備歩兵第一大隊附同月二十四日臺灣守備交代の爲め神戸港出帆二十八日基隆港到着同日第四中隊附十二月八日任陸軍歩兵軍曹三十四年九月十七日三十四年度第二種射擊徽章授與せらる同月三十日臺灣守備交代基隆港出帆十月三日神戸港歸着八日歸京歩兵第三聯隊第五中隊附十一月三十日現役滿期除隊三十七年三月九日充員召集に應じ歩兵第十五聯隊第七中隊へ編入同月二十日海外出征の目的を以て高崎出發二十二日廣島市到着四月二十二日露戰役從軍の爲め宇品港出帆五月八日清國盛京省孫家咀子に上陸同月十六日十三里臺戰闘に參與同二十五日金州城附近に於て戦闘二十六日扇子山(一名南山)に於て戦闘三十日王家屯に於て戦闘六月十八日給三等給七月二十六日前牧城附近に於て戦闘二十七日對面溝附近に於て戦闘二十八日双臺溝附近に於て戦闘三十日東西泥河子附近に於て戦闘八月十三日礮盤溝附近に於て戦闘十四日礮盤溝南方約千米突の高地に於て左胸部貫通銃創兼鼻貫通銃創併に左口許に擦過銃創を受け同日小養家屯第一野戦病院へ入院十七日丁岑子定立病院に轉送十八日青泥窪兵站病院に轉送二十三日内地還送の爲め青泥窪出帆二十七日大阪港上陸四天王寺豫備病院へ收容九月十二日東京豫備病院に轉

送十三日水川分院に收容十六日熱海町へ轉地療養の爲
 出發十月九日歸京戸山分院に收容十一月十三日澁谷分
 院に轉院十五日高崎豫備病院に轉送同日全治退院同日
 歩兵第十五聯隊補充大隊第一中隊へ編入三十八年一月
 二十日國民歩兵第四大隊へ編入二十二日第三中隊附三
 月八日東京衛戍勤務補助の目的を以て上京芝増上寺附
 近に駐屯同年七月二十六日給二等給十月十七日復員下
 令二十四日賞狀授與十一月十三日殘務終了召集解散三
 十九年三月三十一日給助金八拾圓を賜はり又功により
 勳七等旭日章及金三百圓を賜はる

賞 狀

第一師管國民歩兵第四大隊第三中隊
 豫備役陸軍歩兵軍曹 岡 本 常 吉
 右明治三十七八年戰役應召中殊に行狀方正勤務勉勵に
 して衆人の模範者たり依て特に之を賞す

明治三十八年十月二十四日

第一師管國民歩兵第四大隊陸軍歩兵少佐

正六位勳四等功五級 山口 正 路

陸軍歩兵軍曹功七級勳七等

櫻井糸助君

君は比企郡大河村
大字若寺四拾七番

地櫻井榮次郎氏の長男明治四年九月四日生明治二十四
 年十二月一日現役兵として歩兵第十五聯隊第六中隊へ
 入營二十五年十一月七日歩兵一等卒同日歩兵上等兵被
 申付二十七年八月卅日日清戰役動員下令の際補充大隊
 第四中隊編入二十八年四月二日野戰隊補充員として屯
 營出發同年四月十七日宇品港出帆廿二日清國大連灣上
 陸廿五日除家屯着滞在五月十三日平和克復十五日大連
 灣出帆廿二日神戸港着六月一日高崎へ凱旋二日滿期
 除隊豫備役に編入二十八年十一月十八日日清戰役從軍
 記章を賜はる二十九年三月三十一日日清戰役の功に依
 り金參拾圓を下賜せらる三十二年四月一月後備役に編
 入三十七年八月四日日露戰役充員召集令狀を受け同月
 十四日第七師團歩兵第二十七聯隊第四中隊入營十月廿
 四日屯營出發十一月十五日大阪築港出帆廿日清國青泥
 窪上陸廿六日旅順背面盤龍山に戰闘同月五十六日二〇三
 一日に亘り二〇三高地赤阪山に戰闘同月五十六日二〇三
 高地戰闘の際決死隊に加はり爆裂彈攻撃を行ふ十七日
 傘山に戰闘二十六日渡邊山に戰闘二十八日任歩兵伍長
 三十八年一月十四日海城附近着同地鐵道守備廿日牛莊
 着遼河方面守備三月二日孤家子附近攻撃の際戰闘四日
 姚家屯攻撃の際戰闘五日より九日に至る岔台守備線に

於て戰闘十日大寒屯攻撃の際戰闘五月十八日任歩兵軍
 曹十八日より廿四日に至る輜重梯隊援護の爲め三台子
 附近へ出張同月廿日より十月廿四日に至る康平附近守
 備十月十六日平和克復廿四日小傳家窩棚出發廿七日四
 台子着同所滞在三十九年二月廿四日四台子出發三月三
 日柳樹屯出帆八日室蘭港着九日屯營歸着十五日復員
 に依り召集解除歸郷功に依り功七級年金百圓並勳七等
 旭日章を賜はり又恩給年額八拾圓を賜はる

戰地より村役場宛の書翰左の如し
 謹啓時下殘暑之候出征以來意外之御無音に打過ぎ候
 段平に御許容被下度陳は毎々御慰問書を賜はり忝な
 く奉存候

回顧すれば大詔以來爰に一年半有餘諸氏には日夜寢
 食を忘却して熱誠を以て軍國の事務に従事せられ而
 己ならず特に出兵者の爲めに援護會なる者を設けら
 れ時々留守宅を慰問せられ吾々出征軍人其遺族に對
 し遺憾なき様優待せられ其勞苦察するに餘りあり只
 管感謝の至りに堪へず一書を以て謝辭を述度如斯に
 御座候不備却説小生儀出征以來旅順口方面にて昨年
 十一月廿六日盤龍山に同月三十日十二月一日赤坂山
 に同月五六、日二〇三高地に同月十七日傘山に同月

廿六日渡邊山に戰闘卅八年一月十四日北行を命せら
 れ海城牛莊附近の守備奉天攻撃に際し二月廿七日運
 動を開始せられ三月二日孤家子附近攻撃に同四日姚
 家屯攻撃に同五日より九日に至る岔台守備線に同十
 日大寒屯に轉戰致し其他小衝突には何度か出合せた
 るも幸に微傷も受けず寸功も無之候へ共無事某所に
 軍務罷在候間一寸御報申上候次に作戦上に付ては愚
 等の知るを得ざるも講和談判開始せば一と會戰ある
 ならんと内命有之候に付近々運動を開始するならん
 と察し居候目下敵は我々宿舍地より三里前方にあり
 斥候歩哨等は時々射撃を交換しつゝあり目下當隊は
 補充兵到着し中隊にして屯營出發のときの中隊人員
 よりも約三十名多きに達し居り候我が師團は患者は
 少くして師團長閣下は満足に御思召され居候殊に傳
 染病の如き一人も無之候

我が聯隊宿營地には蒙古座と申す舞台掛り居り(日
 本兵の役者)毎夜十二時迄芝居見物實に戰爭は愉快
 なる者に有之候先は概略右御報迄余は后便に讓る

明治三十八年八月廿日

某地にて

櫻井糸助

大河村役場援護會御中

陸軍歩兵曹長功七級勳七等

野崎佐十郎君

君は比企郡大河村大字青山第百〇七番地平民野崎八左衛門氏の三男にして明治十三年六月

槻川の沿岸なる一農家に生る明治三十三年陸軍教導團廢止後下士候補生としての第一次募集に應じ同年十二月一日騎兵科下士候補生として千葉縣習志野騎兵第十六聯隊に入營す此の旅團編成の騎兵は二十七八年戦役後の増設にして卅二年十二月一日習志野原廠舎に一ヶ中隊宛を置かれ卅三年二月一日中隊に編成して習志野屯營に移る卅四年十二月一日四ヶ中隊に同日君は上等兵に同十二月十九日軍旗を授與せられ卅五年十二月一日五ヶ中隊に同日君は伍長に卅六年十二月一日軍曹に三十七年二月十二日露國と宣戰の詔敕を布告せられ君が旅團は五月十五日勳員を令下せらる八月十五日第二軍の戰闘序列にて屯營出發同月廿日宇品港出帆廿四日清國柳樹屯に上陸九月廿五日大窪附近に進出し此地に搜索根據地を定め九月廿九日奉集團附近の敵に向ひ聯隊の威力偵察戰に十月一日搜索根據地を灰密に進められ十月九日全線の活動漸く起り同月十六日に亘る沙河の會戰となり敵は極めて我が右翼に向ひ劇烈の攻撃を執り

しを以て旅團は右翼の危急に應せん爲め十月十日日本溪湖方向に轉戰を命せらる同日灰密を出發十二日本溪湖附近の劇戰となり十三日より追撃戰十六日に亘る旅團は第一軍に屬せられて同月廿日搜索根據地を高臺子に茲に冬營をなす卅八年一月初旬「ミスチンユ」の率ゐる騎兵の大集團は我が左翼を迂回して營口、牛莊、守備隊を衝かんとし却て多大の損害を受けて退却し阿司牛カ力馬の線に停止し前身を此の騎幕を以て蔽ひて左翼に事を構へんとす旅團は第一軍を脱し滿州軍の直轄となり其根據地を最左翼に移し北大甸附近に轉進す一月十五日高臺子出發十七日最左翼なる渾河と太子河との中間にある小北河に到着し搜索根據地を吳家崗子に一月廿五日敵は攻勢に轉じ廿九日黑溝臺附近の會戰となり特に廿五日には第十六聯隊の最も苦戰を重ねし吳家崗子君の中隊長皆川氏は此地の花と消へ失せたり卅日根據地を倒臺子に二月十九日更に深井子に移し廿七日より三月十六日に亘る奉天附近の會戰に特に三月三日は左翼包圍の任にある秋山騎兵支隊の大房身の劇戰となり茲に大打撃を興へ我が目的とする包圍の實を擧げ同月十七日より廿一日に至る小師中外の昌圖、馬千總臺門間の敵搜情案に四月三四日並に同十五六日の金家屯

附近の戰闘に同五月一日騎兵曹長に同日第三中隊に轉入す五月十九日より廿七日に亘る中隊の獨立して四家子附近に位置して遼陽窩棚方向の搜索に廿八日根據地を牛頭位に定め六月十六日遼陽窩棚の攻撃に八月廿五日搜索根據地を大真力克に同月廿八日より卅一日に亘る蒙古内地の伯王府附近の戰闘に参加す十月十五日媾和の宣言を布達せられ旅團は第一線に於て凱旋の命を俟つ卅九年一月廿五日凱旋の爲め滯在地西蛇山子出發二月二日大連にて乗船し六日宇品港に飯港十三日習志野屯營に凱旋し十五日復員を令下せられ爾後同隊に服役す功により功七級金鷄勳章並に年金百圓及勳七等旭日章を賜はる君の兄君野崎英吉も亦出征す其功績は氏の戰歴に委はし

戰地より村長宛の書翰左の如し
拜啓過般は御慰問狀に接し辱なく存候却説小生願れば上陸以來茲に半歳の久しきに亘り未だ寸功だも奏せず慚愧に堪えず嘗て軍隊志願にて故郷出發の際は
大言壯語を弄して入營し身の郷里の師黨に對し面目なく候殊には近頃郷里を追想し有士諸氏の郷間に在るも尙遠く陣中に在るか如く拳を握て我等を激勵し

同情を辱ふするの恩義を思ひ實に心魂に徹して片時も忘却仕らず千山萬野白雪皚々只歩哨の黒點を印せるを見るのみなる勤務を確と實行し又は霏々たる風雪全身を撲ち寒威我が勇を挫かんとするも屈せず先生に鍛われし腕を震ひ且又日頃鍛練せし武道を以て世界に強固と自負する彼の大國を挫折し天下に美名を轟かし我國の威名を輝かし一分子を以て郷里の諸士に對して半歳の空に消光せしを謝さんことを願居り候先は御答辭まで如斯に御座候敬具

野口村長 殿
騎兵軍曹 野崎作十郎

陸軍歩兵曹長勳七等
福島榮太郎君 君は比企郡大河村腰越二百十九番地

福島長兵衛氏の養子にして埼玉縣秩父郡槻川村大字白石白石保次郎二男なり明治六年二月出生同村内小學校に放鞭を執る事四ヶ年後東京速記學專修所に入り速記術研究更に東京早稻田大學校外生に入學法律科修業二十七年九月五日補充として歩兵第十五聯隊補充大隊へ入營二十八日四月二日日清戰役從軍の爲め屯營出發十七日宇品港上船二十七日清國盛京省大連灣上陸五月十

下間敷様奉願候漸次快癒の見込に付更に碧血の戎衣を脱して再び戦陣に立ち此の無限の怨恨を回復する覺悟に御座候(後略)

明治三十七年二十三日

清國盛京省青泥窪兵站病院第一分院に於て

榮太郎再拜

御父上様

副啓兄上様は定めて召集令を拜受せしことと存じ候得共如何哉御一報を煩し度願上候

陸軍砲兵少尉正八位勳六等

横川甫介君

君は比企部大河村大字腰越二十一番

地横川頑三氏の弟明治十四年二月生明治二十九年九月熊谷中學校に入學三十三年三月全科優等を以て卒業後兵學に志し出京して海城學校高等部修學三十五年十二月一日一年志願兵として野戰砲兵第十三聯隊へ入隊三十六年四月一日一等卒六月一日上等兵九月一日伍長階級十一月二十八日任軍曹同月三十日滿期除隊三十七年五月十日臨時召集に應じ近衛野戰砲兵聯隊補充大隊附同月見習士官上級勤務同年十月二日任少尉十一月八日叙正八位十二月四日野戰砲兵第十三聯隊第一中隊附被

仰付九日外征の爲め宇品港出帆十二日清國盛京省柳樹屯上陸三十八年一月二十六日より三十日に至る黒溝臺附近の戦に參與同年二月二十七日より三月十一日に至る奉天附近の會戦に參與三十九年二月十六日凱旋のため大連港出帆十九日宇品着三月十三日復員に依り召集解除功により勳六等單光旭日章賜金三百五十圓及給助金百八十圓を授けらる

左掲は郷里の村長宛の書翰なり

謹啓寒氣酷烈人に迫るの候倍御健勝被爲波扑賀の至りに不堪候回顧すれば露國との交り絶えて爰に平和を旗鼓の間に求むるは己を得ざるに至りしは未先頃の事の如く存じ候ひしに隙行く駒の足早み光陰は何時しか過ぎて更に名譽と光榮ある然も一層活動すべき征露二年とは相成候爾來是に十有閱月晨に一墨を抜き夕べに一城を略し伐ちて破れざるはなく攻めて取らざるはなし百戰百勝能く此に至りしもの偏に數聖文武なる 陛下の御稜威に依るものには候へども亦忠勇なる國民が一致協力して外は奉公の誠を盡し内は我等出征者をして後顧の憂を絶たしめたるの賜に外ならざるは我等の深く信じて疑はざる處に御座候殊に先頃御寄贈被下候新聞數種に如き懸軍萬里の

野口宣銳様侍史

折桂生

陸軍砲兵中尉從七位勳六等

田端八十次君

君は比企部大河村腰越三十八番地田

端太郎氏二男明治十三年九月を以て生る明治廿九年九月埼玉縣立熊谷中學校に入學卅三年三月全科優等を以て卒等同年十二月一日一年志願兵として東京灣要塞砲兵聯隊へ入隊三十四年四月一日一等卒六月一日上等兵九月一日伍長階級十一月三十日任軍曹同日滿期除隊爾來身を教育に委ね小川高等小學校川越中學校に教鞭を執り子弟を教育す三十五年八月一日より十月三十一日迄勤務演習應召三十六年三月廿七日任砲兵少尉叙正八位七月廿日より八月廿三日勤務演習應召三十七年五月六日動員により東京灣要塞砲兵聯隊第二中隊へ入隊五月八日走水低砲臺附七月七日免走水砲臺附同月九日三崎要塞監視哨長八月廿日免三崎要塞監視哨長東京灣要塞砲兵聯隊第二中隊付十二月二日徒歩砲兵第一獨立大隊第一中隊へ編入同月二十一日出戰の爲め宇品港出帆廿五日清國盛京省大連に上陸廿八日着隊三十一日水師營大西溝陣地に於て松樹山砲臺攻撃に従事三十八年一

異域にありて北馬雪深き巷に出没する身のさこそ徒然ならんもの厚き御同情より出させ給ひつる事と只管感泣の外無御座候身を軍籍に委するの餘澤として千古未曾有之征露の事に從じ此の暖き同情に浴するを得るは何等の至幸に候や人生の至榮蓋し之に過ぎたるは無かるべくと存候只恐るゝ處は恩厚く力薄ふして御高志に副ふことの難からん事を夙夜念頭に存して戦々競々たるの次第に御座候然はあれども國家の前途は尙遠遠なり奮いて立ちて君の爲め千載不磨の功を建て凱旋なさるるもなくば野邊の嵐に打散りて歸り咲かなん靖國の庭に榮ゆる櫻花靈となりて國や護らん

數ならぬ身にはあれとも猛夫の盡す心はつゆ劣らぬや

哈爾濱の雪はおるかやふかいらりて屍積まん敵の都に

尙近況申上度候へども彈丸雨飛の戰鬪場裡の下其意を盡さず(今戰鬪中)茲に寸楮を裁し御禮旁右申上度

如此に御座候敬具

征露二年如月一日

飛花紛々として降るの夕於〇〇地砲兵陣地

田端八十次君

月十三日鴨綠江軍に編入二月廿四日河家大湖陣地に於て清河城攻撃に従事三月一日より八日迄障堂附近陣地に於て地塔附近戰闘に従事三月廿五日任砲兵中尉五月三日叙從七位八月廿八日英領邊門附近に於て敵兵來襲に際し戰闘九月十三日徒歩砲兵第一獨立大隊附被免同日徒歩砲兵第一獨立副官被仰付三十九年二月十日凱旋の爲め柳樹屯出帆十五日横須賀港上陸十七日復員下令二月二十日より三月廿日迄殘務整理の爲め殘留三月廿日召集解除功により勳六等單光旭日章金四百圓並に給助金貳百廿五圓を賜はる兄田端新作氏の叔父田端義作君も出征し大に功あり別項戰歴を見て知るべし

戰地よりの書翰左の如し
爾來御無沙汰失禮多謝漸く暑さ強く相成候折柄諸賢邦家之爲め御執掌と承り御苦勞に存候小生儀無事軍務罷在候まゝ乍他御休神被下度候當地の氣候は所謂大陸的と申すべきもの晝は九十五六度にも上り夕は寒く相成候今や旬期に入り候へは毎日晴天より雷鳴に伴ひ驟雨來り道路は忽ち膝を沒する様に候河川氾濫聊か困却仕候久しく砲聲も聞かず候處近頃時々兒戲に等しき襲來を試みられ眠り覺し結構に候併し蠅の襲來の方が余程恐るべく候到底内地の想像以外に

存候蚊には未だ何等の苦痛も無之何れにしても戰爭は呑氣も是に反動する苦痛とにて差引〇に候樺太上陸軍の結果は非常之好成绩に候へば當方面も一きは色つくべけれど未だ何等の命もなく構和風が如何に吹くとも氣はいつもながら旺盛にて北進敵地に入るが希望に候只今は支那人を愛撫し勞役して行くこと故面白味なく危険ながら敵地の方が面白き事と申合居候郷里を出で、期年如何に變化せしや故郷雁信何よりの樂しみに候先は右迄
遇日の大河村軍人一覽御惠贈被下有りがたく奉謝候
八月六日

大河村軍人援護會御中

田端八十次

戰時中之大河村後援者

村長

村會議員援護會會長常設委員援護會評議員學務委員援護會幹事毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回大麥供給二俵第一回國債百圓第四回國債廿五圓赤十字社員小久保滿會就職明治卅六年十一月十一日退職明治卅七年四月四日横川重左衛門就職明治三十七年四

月十六日退職明治三十八年九月十三日野口宣銳

助役

村會議員援護會副會長學務委員援護會評議員毛布寄贈二枚第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回大麥供給第一回國債百圓第三回國債七十五圓第四回國債五十圓赤十字社員野崎爲憲就職明治三十六年五月九日退職明治三十七年五月八日大木隆次郎

收入役

援護會書記毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第一回國債百圓第四回國債百廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員關根定次郎

書記

第四回國債五十圓第五回國債二十五圓毛布寄贈赤十字社員常設委員援護會書記第一回馬匹徵發第二回大麥供給第一回國債廿五圓第二回國債百圓第三回國債七十五圓臨事件國債百圓横川禎三兵事主任荒井雄三就職明治三十六年十一月十四日退職明治三十七年四月廿二日野口睦平就職明治三十六年十一月十四日退職明治三十八年九月廿三日小久保麟大河尋常小學校校長赤十字社員訓導馬場駒三郎村會議員常設委員學務委員援護會評議員同幹事毛布寄贈三枚第一回馬匹徵發赤十字社員第一

戰時中之大河村後援者

(百二十七)

回荷車徵發第二回荷車徵發第一回大麥供給五俵第二回大麥供給二俵第一回國債七十五圓第二回國債百五十圓第三回國債百圓第四回國債五十圓第五回國債五十圓臨時事件國債百圓馬場嘉重郎村會議員援護會評議員毛布寄贈三枚第一回馬匹徵發第一回荷車徵發第一回大麥供給五俵第二回大麥供給二俵第一回國債五十圓第二回國債五十圓第六百圓第三回國債五百七十五圓第四回國債五十圓第五回國債二百五十圓臨時事件國債七百五十圓赤十字社員横川宗作村會議員常設委員學務委員援護會評議員毛布寄贈五枚第一回馬匹徵發第一回大麥供給四俵第二回大麥供給二俵第一回國債五十圓第二回國債三百圓第三回國債百圓第四回國債廿五圓第五回國債百五十圓臨時事件國債五百五十圓赤十字社員杉田助左衛門村會議員學務委員援護會評議員同幹事毛布寄贈三枚第一回大麥供給二俵第二回大麥供給四俵第一回國債廿五圓第二回國債廿五圓第三回國債廿五圓第四回國債廿五圓赤十字社員岡本平兵衛村會議員援護會評議員第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第一回國債百圓第四回廿五圓第五回國債七十五圓臨時事件國債百圓軍士出征赤十字社員岡本啓次郎村會議員援護會評議員毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第一回國債百五十圓第三回國

債七十五圓第四回國債廿五圓赤十字社員馬場里次郎村
 會議員後援會評議員毛布寄贈三枚第一回荷車徵發第一
 回大麥供給三俵第一回國債五十圓第四回國債廿五圓軍
 士出征赤十字社員野口宜銳村會議員後援會評議員毛布
 寄贈第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債廿
 五圓第二回國債廿五圓赤十字社員小高宇之助村會議員
 後援會評議員毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給
 二俵第一回國債百圓第四回國債廿五圓赤十字社員笠原
 芳孝村會議員後援會評議員第一回大麥供給第二回大麥
 供給第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社員田
 端才次郎帝設委員毛布寄贈第一回大麥供給五俵第二回
 大麥供給三俵第一回國債百圓第四回國債廿五圓赤十字
 社員岡本角次郎帝設委員後援會幹事毛布寄贈第二回馬
 匹徵發第二回大麥供給二俵第四回國債廿五圓赤十字社
 員森滋次郎帝設委員第一回國債廿五圓第二回國債廿五
 圓赤十字社員第三回國債廿五圓馬場政太郎帝設委員第
 一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵赤十字社員大木隆次
 郎帝設委員學務委員第一回國債五十圓軍士出征赤十字
 社員吉田伴七學務委員橫川重右衛門學務委員金子光廣
 學務委員第五回國債廿五圓出兵赤十字社員島野常次郎
 後援會幹事毛布寄贈五枚第一回馬匹徵發第一回大麥供

給四俵第一回國債五十圓第二回國債四百五十圓第三回
 國債四百圓第四回國債七十五圓第五回國債二百五十圓
 臨時事件國債六百五十圓赤十字社員酒井要五郎後援會幹
 事毛布寄贈第三回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回
 大麥供給第一回國債七十五圓第四回國債廿五圓第五回
 國債廿五圓赤十字社員島野伊八後援會幹事第三回馬匹
 徵發第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債五十
 圓第二回國債廿五圓第三俵國債廿五圓赤十字社員第四
 回國債廿五圓小高三輪造後援會幹事毛布寄贈第一回大
 麥供給二俵第一回國債廿五圓第二回國債二百圓第三回
 國債百圓第四回國債廿五圓第五回國債五十圓赤十字社
 員磯田政之助後援會幹事毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回
 大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債五十圓第四回
 國債廿五圓赤十字社員澤田重次郎後援會幹事毛布寄贈
 第一回大麥供給第一回國債百圓第四回國債廿五圓第五
 回國債廿五圓赤十字社員田端七三郎後援會幹事第一回
 大麥供給二俵第一回國債百圓第四回國債廿五圓第五回
 國債五十圓臨時事件國債百圓赤十字社員武川輝後援會
 幹事毛布寄贈第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一
 回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社員岡本庄之助
 後援會幹事第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回

大麥供給第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社
 員大木恒次郎後援會幹事第二回馬匹徵發第二回大麥供
 給二俵第一回國債五十圓第四回國債廿五圓軍士出征赤
 十字社員吉田幾三郎後援會幹事毛布寄贈二枚第一回荷
 車徵發第一回大麥供給四俵第一回國債二百圓第四回國
 債廿五圓赤十字社員伊藤吉兵衛後援會幹事毛布寄贈第
 一回大麥供給第四回國債廿五圓軍士出征荒井兼三郎後
 援會幹事第一回大麥供給第一回國債五十圓第四回國債
 廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員市川兵太郎後援會
 幹事第二回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第一回國債百
 圓第四回國債廿五圓赤十字社員森田周藏後援會幹事第
 一回大麥供給三俵第一回國債七十五圓第四回國債廿五
 圓第五回國債廿五圓赤十字社員岡本清太郎後援會幹事
 第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第二回國債廿五圓
 第四回國債廿五圓軍士出征赤十字社員山崎茂重郎後援
 會幹事毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回國債廿五圓第五
 回國債廿五圓新井要次郎後援會幹事毛布寄贈第三回馬
 匹徵發第一回國債廿五圓第四回國債廿五圓小久保太四
 郎後援會幹事毛布寄贈第一回大麥供給第一回國債百圓
 第四回國債廿五圓赤十字社員瀧澤猪太郎後援會幹事第
 一回大麥供給二俵第一回國債五十圓第二回國債廿五圓

第四回國債廿五圓赤十字社員佐藤竹次郎後援會幹事赤
 十字社員第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第一回國
 債百圓第四回國債廿五圓笠原元太郎後援會幹事毛布寄
 贈第一回大麥供給六俵第二回大麥供給四俵赤十字社員
 大塚榮吉後援會幹事毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大
 麥供給二俵赤十字社員梅澤文九郎後援會幹事第一回大
 麥供給二俵第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字
 社員杉山梅吉後援會幹事第一回大麥供給二俵第一回國
 債百圓廿五圓赤十字社員山口菊次郎後援會幹事第一回
 馬匹徵發第一回大麥供給二俵第一回國債五十圓赤十字
 社員野口滿之助後援會幹事第四回馬匹徵發第一回大麥
 供給三俵第一回國債廿五圓原金太郎後援會幹事第一回馬
 匹徵發第一回大麥供給二俵第四回國債廿五圓赤十字社
 員島田種三郎後援會幹事第一回大麥供給二俵第三回國
 債廿五圓第四回國債廿五圓赤十字社員根岸太作後援會
 幹事毛布寄贈第一回國債百圓第四回國債廿五圓辻田百
 三郎後援會幹事毛布寄贈第一回國債百圓第四回國債廿
 五圓赤十字社員村木玉太郎後援會幹事毛布寄贈第一回
 國債百圓第四回國債廿五圓赤十字社員篠澤貞造後援會
 幹事第一回第一回大麥供給第一回國債五十圓第四回國債
 廿五圓赤十字社員笠原石松後援會幹事第一回大麥供給

第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社員吉田竹次郎援護會幹事第一回大麥供給二俵第四回國債廿五圓高瀬源太郎援護會幹事第一回大麥供給二俵第一回國債廿五圓赤十字社員山口鶴吉援護會幹事第一回大麥供給二俵第二回大麥供給神部喜十郎援護會幹事第一回大麥供給二俵第四回國債廿五圓赤十字社員恩田利三郎援護會幹事第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵恩田友五郎援護會幹事第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵栗原治三郎援護會幹事毛布寄贈第一回大麥供給島田與三郎援護會幹事第一回大麥供給梅澤安太郎援護會幹事第一回大麥供給赤十字社員野崎五兵衛援護會幹事第一回大麥供給二俵田端作右衛門援護會幹事岸四郎援護會幹事赤十字社員岡本勝春援護會幹事赤十字社員須永覺治郎援護會幹事笠原芳宣毛布寄贈二枚第一回大麥供給二俵第一回國債廿五圓第二回國債二百五十圓第三回國債二百五十圓第四回國債廿五圓第五回國債百五十圓臨時事件國債二百圓赤十字社員愛國婦人會員松本喜與毛布寄贈二枚第一回大麥供給二俵第一回國債百圓第三回國債百圓第四回國債廿五圓第五回國債五十圓臨時事件國債百圓赤十字社員野崎慶次郎毛布寄贈第一回徵發馬匹第四回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回大麥供給第一回國債

債百圓軍士出征赤十字社員福島長兵衛毛布寄贈二枚第一回荷車徵發第一回國債百圓第三回國債廿五圓第四回國債廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員內田伊三郎毛布寄贈第一回國債百圓第三回國債廿五圓赤十字社員田市右衛門毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給第一回國債百五十圓第四回國債廿五圓軍士出征赤十字山口藤太郎毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社員馬場常八毛布寄贈馬匹徵發第一回供給三俵第一回國債五十圓第四回國債廿五圓第五回國債廿五圓澤田吉右衛門毛布寄贈第一回大麥供給二俵第二回大麥供給第一回國債百圓第三回國債廿五圓第四回國債廿五圓軍士出征赤十字社員馬場忠次郎毛布寄贈第一回馬匹徵發第二回大麥供給二俵第一回國債五十圓第四回國債廿五圓軍士出征赤十字社員吉野兼三郎第一回大麥供給十俵第二回大麥供給第三回國債百圓第四回國債廿五圓第五回國債五十圓軍士出征新井清吉毛布寄贈第一回國債廿五圓第二回國債五十圓第三回國債廿五圓第四回國債廿五圓軍士出征赤十字社員松岡祐右衛門毛布寄贈第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債五十圓

第四回國債廿五圓赤十字社員杉田龜次郎毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第一回國債百圓第四回國債廿五圓赤十字社員山口寬作毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第四回國債廿五圓軍士出征赤十字社員吉田吉三郎毛布寄贈第一回大麥供給二俵第二回大麥供給第三回國債廿五圓第四回國債廿五圓赤十字社員岡本爲次郎毛布寄贈第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債五十圓軍士出征赤十字社員淺見勝三郎毛布寄贈第二回馬匹徵發第一回大麥供給第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社員松本茂三郎第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第二回大麥供給第一回國債百圓第四回國債廿五圓赤十字社員山口久之亟第一回馬匹徵發第二回荷車徵發第一回大麥供給二俵第一回國債廿五圓第四回國債廿五圓赤十字社員菅問宗重郎第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回大麥供給第一回國債五十圓第四回國債廿五圓赤十字社員吉田宇之吉毛布寄贈第一回大麥供給二俵第一回國債五十圓第五回國債廿五圓軍士出征赤十字社員島野林三郎第一回大麥供給二俵第一回國債百圓第三回國債廿五圓第四回國債廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員關根孟輔毛布寄贈第一回大麥供給二俵第四回國債廿五圓第五回國債七十五圓赤

十字社員深谷磯五郎毛布寄贈第一回國債百圓第四回國債廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員酒井恒治郎毛布寄贈第一回國債百圓第四回國債廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員梅澤真造毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給第一回國債五十圓杉山佐重郎毛布寄贈第五回馬匹徵發第一回大麥供給第四回國債百圓志藤重郎右衛門毛布寄贈第一回大麥供給二俵第一回國債廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員島野市三郎毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給第一回國債五十圓武川重次郎毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第二回大麥供給二俵松本信吉毛布寄贈第一回大麥供給第二回國債廿五圓第三回國債廿五圓赤十字社員今井治正毛布寄贈第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第四回國債廿五圓赤十字社員澤田要三郎第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第一回國債廿五圓第五回國債廿五圓赤十字社員岸藤左工門第一回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第一回國債五十圓第四回國債廿五圓森田作太郎第一回馬匹徵發第一回大麥供給第四回國債廿五圓軍士出征吉田伊勢五郎第一回馬匹徵發第一回大麥供給二俵第一回國債廿五圓第四回國債廿五圓赤十字社員大本文吉第四回馬匹徵發第一回大麥供給三俵第一回國債五十圓第五回國債

郎毛布寄贈笠原治之助毛布寄贈小久保和三郎毛布寄贈
佐藤惣藏毛布寄贈吉田長次郎毛布寄贈松本清毛布寄贈
軍士出征青木徳次郎毛布寄贈五枚青山見田組毛布寄布
六枚青山大原矢之口組毛布寄贈三枚青山畑ケ中組毛布
寄贈腰越堀ノ内ノ組毛布寄贈腰越南組毛布寄贈峰岸銀
次郎外六名毛布寄贈武川作太郎外三名毛布寄贈吉田伴
七外一名毛布寄贈笠原石松外三名毛布寄贈吉田竹次郎
外一名毛布寄贈吉田宇之吉外二名毛布寄贈吉田彌十郎
外二名第一回馬匹徵發澤田三代吉第一回馬匹徵發柳瀬
禰吉第一回馬匹徵發本澤仙太郎第一回馬匹徵發軍士出征
松本幸太郎第一回馬匹徵發軍士出征荒井仙助第三回馬
匹徵發吉田彌十郎第四回馬匹徵發山口今藏第七回馬匹
徵發關根とも第一回荷車徵發軍士出征齊藤金藏第二回
荷車徵發齊藤豊十郎第一回大麥供給四俵赤十字社員宮
澤善兵衛第一回大麥供給田端右一第一回大麥供給二俵
森丑太郎第一回大麥供給二俵岡本定吉第一回大麥供給
三俵森常次郎第一回大麥供給二俵島田久太郎第一回大
麥供給二俵島田孝藏第一回大麥供給三俵恩田清太郎第
二回大麥供給二俵赤十字社員青木仙吉第一回大麥供給
臨時事件國債百圓軍士出征赤十字社員青木清次郎第一
回大麥供給二俵荒井美輪造第一回大麥供給二俵高瀬方

太郎第一回大麥供給二俵赤十字社員荒井民次郎第一回
大麥供給二枚高瀬彌八第一回大麥供給二俵加藤佐吉第
一回大麥供給二俵馬場文五郎第一回大麥供給二俵澤田
名上第一回大麥供給二俵岡本定次郎第一回大麥供給二俵岡
本政治第一回大麥供給關根藤左衛門第一回大麥供給安
野喜太郎第一回大麥供給安野初太郎第一回大麥供給田
端吉太郎第一回大麥供給恩田傳九郎第一回大麥供給赤
十字社員中村米藏第一回大麥供給山口彦太郎第一回大
麥供給太木菊藏第一回大麥供給赤十字社員柳瀬宗吉第
一回大麥供給軍士出征野口民治郎第一回大麥供給野口
輪吉第一回大麥供給山本利左衛門第一回大麥供給田端
和重郎第一回大麥供給渡邊國定第一回大麥供給赤十字
社員山崎鍋次郎第一回大麥供給赤十字社員峯岸銀次郎
第一回大麥供給島野萬太郎第一回大麥供給馬場伊勢五
郎第一回大麥供給赤十字社員峯岸文七第一回大麥供給
在原長吉第一回大麥供給赤十字社員杉山千松第一回大
麥供給福島瀧次郎第一回大麥供給福島勝五郎第一回大麥
供給福島源太郎第一回大麥供給軍士出征山下徳太郎第
一回大麥供給岡本勝次郎第一回大麥供給岡本秀次郎第
一回大麥供給山崎やち第一回大麥供給馬場五郎兵衛第
一回大麥供給山口源次郎第一回大麥供給赤十字社員野

口松五郎第一回大麥供給軍士出征瀧澤健次郎第一回大
麥供給二俵酒井陸太郎第一回大麥供給二俵中澤佐一第
一回大麥供給小澤茂十郎第一回國債五十圓荒井儀三郎
第一回國債百圓大河信用組合第一回國債廿五圓齋藤の
お第一回國債廿五圓松本勘三郎第三回國債廿五圓西澤
太道第三回國債廿五圓新井作志第四回國債廿五圓赤十
字社員磯田齋松第五回國債廿五圓大谷虎之助第五回國
債廿五圓三上竹次郎赤十字社員横川才助同横川甫介同
武川勘三郎同島野利八同關根一左衛門同馬場秀吉同澤
田金十郎同武田孝信同鯨井淺次郎同野口寛治同野崎廣
吉同松岡九平治同杉田文三同村木武三同酒井万五郎同
芝崎和一同佐藤照吉同笠原忠太郎同吉野隆一小島乘眞
赤十字社員愛國婦人會員横川はな赤十字社員愛國婦人
會員酒井尾壽愛國婦人會員杉田と美同野崎よね西澤つ
な同馬場キヤウ野崎たか横川添子同野口よね關根秋同
馬場しん同馬場ため同澤田すい赤十字社員愛國婦人會
金子千代愛國婦人會員小高さち

馬匹徵發

明治三十七年二月八日第一回腰越出場三八徵發三〇青
山出場一三徵發一三上古寺出場六徵發四下古寺出場三
徵發一増尾出場二徵發二飯田出場八徵發五計出場七〇

徵發五五同年六月廿八日第二回腰越出場三徵發一青山
出場三徵發一上古寺出場二徵發二下古寺出場一徵發〇
増尾出場〇徵發〇飯田出場三徵發一計出場一二徵發五
同年七月三日第三回腰越出場一徵發二青山出場二徵發
二上古寺出場二徵發〇下古寺出場〇徵發〇増尾出場一
徵發一飯田出場一徵發〇計出場六徵發五同年十月廿四
日第四回腰越出場七徵發三青山出場五徵發一上古寺出
場二徵發〇下古寺出場〇徵發〇増尾出場〇徵發〇飯田
出場一徵發〇計出場一五徵發四明治三十八年一月三十
日第五回腰越出場六徵發二青山出場三徵發一上古寺出
場〇徵發〇下古寺出場〇徵發〇増尾出場〇徵發〇飯田
出場二徵發〇計出場一一徵發三同年三月廿六日第六回
腰越出場五徵發一青山出場三徵發〇上古寺出場一徵發
一下古寺出場〇徵發〇増尾出場〇徵發〇飯田出場二徵
發〇計出場一一徵發二同年四月七日第七回腰越出場二
徵發二青山出場四徵發〇上古寺出場三徵發〇下古寺出
場〇徵發〇増尾出場〇徵發〇飯田出場二徵發〇計出場
一一徵發二同年七月廿五日第八回腰越出場七徵發〇青
山出場三徵發〇上古寺出場〇徵發〇下古寺出場一徵發
〇増尾出場〇徵發〇飯田出場五徵發〇計出場一六徵發
〇合計腰越出場六九徵發四〇青山出場三六徵發一八上

古寺出塲一六徵發八下古寺出塲五徵發一増尾出塲二徵發二飯田出塲二四徵發七合計出塲一五二徵發七六

荷車徵發

明治三十七年四月十七日第一回腰越出塲一〇徵發三青山出塲二徵發一上古寺出塲五徵發一下古寺出塲〇徵發〇増尾出塲六徵發二飯田出塲一徵發二計出塲二五徵發八明治三十八年二月八日第二回腰越出塲一八徵發三青山出塲四徵發二上古寺出塲八徵發一下古寺出塲二徵發〇増尾出塲一九徵發〇飯田出塲四徵發一合計出塲五五徵發六計腰越出塲二八徵發六青山出塲六徵發三上古寺出塲一三徵發一下古寺出塲二徵發〇増尾出塲二五徵發二飯田出塲六徵發二計出塲八〇徵發一四

大麥供給 一俵六斗入

明治三十七年八月自廿六日至卅日第一回腰越一七四俵青山一七俵上古寺一八〇麥下古寺七俵増尾三四麥飯田二〇麥計五三二麥明治三十八年三月二十一日第二回腰越二二俵青山一五麥上古寺六俵下古寺四俵増尾五麥飯田六麥計五八俵合計腰越一九六俵青山一三三俵上古寺一八六俵下古寺一俵増尾三九麥飯田二六麥計五九〇俵

太繩供給

明治卅七年八月自廿六日至卅日第一回腰越六七九房青

山五〇七房上古寺一七二房下古寺五二房増尾二四〇房飯田六〇〇房計二二五〇房

干草供給 一束五〇目

明治卅八年八月八日第一回腰越〇東青山七六束上古寺二一束下古寺六束増尾〇束飯田四束計一〇七束明治卅八年九月十六日第二回腰越八〇束青山一束上古寺〇束下古寺〇束増尾〇束飯田二七束計一〇八束合計腰越八〇束青山七七束上古寺二一束下古寺六束増尾〇束飯田三一束通計二一五束

國債應募高

明治三十七年三月十日第一回腰越申込額五一〇〇圓募入額一二七五圓青山申込額一〇〇〇圓募入額六〇〇圓上古寺申込額一〇二五圓募入額三七五圓下古寺申込額三五〇圓募入額五〇圓増尾申込額四二〇〇圓募入額四二五圓飯田申込額募入額三五圓計申込額五五〇圓計一二三三五圓募入額二九五〇圓明治三十七年六月十六日第二回腰越申込額二九五〇圓募入額九〇〇圓青山申込額一七五圓募入額一〇〇〇圓上古寺申込額八〇〇圓募入額二五〇圓下古寺申込額三〇〇圓募入額七五圓増尾申込額三二〇〇圓募入額九七五圓飯田申込額二五圓募入額二五圓計申込額七四五〇圓募入額二二三二五圓明治三十

七年十一月七日第三回腰越申込額二九〇〇圓募入額九七五圓青山申込額三三五〇圓募入額四〇〇圓上古寺申込額八〇〇圓募入額二五〇圓下古寺申込額二〇〇圓募入額五〇圓増尾申込額二八〇〇圓募入額八五〇圓飯田申込額〇圓募入額〇圓計申込額八〇五〇圓募入額二二五二五圓明治三十八年四月二日第四回腰越申込額八五五〇圓募入額三三二五圓青山申込額二五七五圓募入額五〇〇圓上古寺申込額二二五〇圓募入額三一五圓下古寺申込額四〇〇圓募入額四八〇圓増尾申込額四八〇圓募入額三三〇圓飯田申込額〇圓募入額〇圓計申込額二二五〇圓募入額一九四七五圓募入額二八二五圓明治三十八年五月六日第五回腰越申込額八七〇〇圓募入額二〇七五圓青山申込額三二七五圓募入額一〇〇圓上古寺申込額一七五〇圓募入額一七五圓下古寺申込額五〇〇圓募入額一〇〇圓増尾申込額四九〇〇圓募入額六七五圓飯田申込額一〇〇圓募入額一〇〇圓計申込額二二二五圓募入額一三五〇圓青山申込額一四五〇圓募入額二〇〇圓上古寺申込額一三三五〇圓募入額二〇〇圓下古寺申込額二五〇圓募入額一〇〇圓増尾申込額二七五〇圓募入額二二〇〇圓飯田申込額五五〇圓募入額〇圓計申込額二二二〇〇

避塞用毛布寄贈

明治三十七年十一月二十日第一回腰越四七青山三〇上古寺二下古寺九増尾三三飯田一一計一五〇

右軍用品中干草出に對し特に賞状を受く左に
鑿に其村より供出せられたる軍用干草は當該官に於て
検査の結果品質優良結果選擇等凡し丁寧の趣を以て左
記主旨の稱賛を得られ候は遺憾の注意周到なりしに關
るものにして誠に名譽とする所なるのみならず其美譽
は全部の模範とするに足るものと被存候に付ては今後
一層御獎勵更に善良の品を供出し一段の好果を齎せら
れ候様致度此段及通牒候也

明治三十八年八月三十日 比企郡役所

大河村長野口宜銳殿

大河村

右村供出の品質は竹澤村の分より稍見劣りの感あるも其結束及精選の點に於て献品の熱誠は氣も其優劣を認めず軍國の民として能く其義務を盡せり

竹澤村

右村より納付したる秣は品質最良稀に見る所の絶品なり且其勢力を吝まらず美事なる結果を爲し取扱上非常に便宜を與へたるのみならず壹束毎に精選たる熱誠は該品を賣物視せず全く献納的に意志を以て納付したるものなりと各検査官より非常に稱せられ且次位にある大河村より納付の分と共に模範標本品に採用せられたり馬匹二頭以上を徵發せられたる者へ賞狀下賜左に

埼玉縣比企大河村

賞狀 野崎爲憲 福島長兵衛 福島竹次郎

右日露戰役に際し所有の馬匹二回徵發に應じたることを賞す

明治三十八年六月一日

留守近衛師團司令部

- 軍資金献納
- 酒井要五郎
- 磯田政之助
- 岡本菊次郎
- 一金壹百圓
- 一金參拾圓
- 一金拾五圓

田端幸八田端和重郎齋藤豊十郎岡本又次郎槻川鑑卯
原紙合資組合磯田仁右衛門馬場安平森安平吉森常次
郎關重右衛門笠間徳太郎新井清吉田端増五郎杉田嘉
七石田竹次郎島田定吉中里伊三郎荒井重平吉田留吉
山田常次郎荏原實三大谷フジ馬場善次郎淺見辨三郎
田端梅吉高野高次郎金井百七杉田國五郎小林戸平石
井岩吉田端龜次郎渡邊國定飯野金藏加藤武兵衛大塚
榮吉山下鐵五郎佐藤梅作澤田福太郎田端平次郎田端
太郎荒井清作

我等は大河村大字腰越第一區當區には舊習より曰く
若者講と稱し毎年四月三日を期し區内居住の者相集
り親睦會を舉行す然るに目下日露交戰の中にあり軍
人は遙に千里の海上を経て國家の爲め其任務は身を
鴻毛の輕さに置き連戦しつゝあり又國民は多額の軍
資を要するを以て之れが國債に應ずるあり又金員物
品を献納するあり斯くして兵力を強からしむるは國
民の義務なりと然り當區に於ても亦共同一致し此際
前述の如き會を延期し酒食に要する會費を義損し前
書の金額援護會へ寄附仕度候間御受納相成度此段奉
願候也

明治三十七年三月廿日

戦時中之大河村後援者

恤兵部寄付 齋藤つな
一金壹圓 本村出征軍人家族援護會寄附 須永朋吉
私に古寺下古寺須永覺次郎の三男にして高等小學校
三學年生徒平素父母より賈ひ受けし小遣錢の餘りを
去る三十年頃より後來有時の資に充んと心懸け貯金
致居候處今回日露開戰同日本村は出征軍人家族援護
會を設けたる旨父より聞く幸ひ豫ての思望を遂ぐる
は此の時と誠に些少の金額には候得共援護費の一端
として貯金の内より頭書を通り寄附仕度候間何卒御
受納相成度此段奉願候也

明治三十七年七月一日
大河村出征軍人家族援護會長野口宣銳殿
一分は大字青山圓城寺住日露風雲起りし以來平素嗜
好の喫煙を止め此金を貯蓄したるに頭書の金額に相
成候間餘り御耻しき次第には有之候得共援護會費の
内へ寄附致度候間宜敷御取斗ひ被下度此段奉願候也
明治三十七年十月廿日
大河村出征軍人家族援護會長野口宣銳殿
一分八圓貳拾錢
内詳金貳拾錢宛

大河村出征軍人家族援護會長横川重右衛門殿
一分貳圓五拾七錢 各寺院總代 圓城寺住職西澤太道
生等日露開戰に際し出征軍人家族慰撫の爲め道を修
し前記の金額聚得せしを以て援護會へ寄附仕度候間
御受納被成下度此段奉願候
明治三十七年四月五日
大河村出征軍人家族援護會長横川重右衛門殿
一分壹圓 横田辨之助
自分は大宇上古寺三百十五番地前書之金額出征軍人
家族援護會へ寄附仕度皇軍は連戦連勝を以て和約成
り帝國光榮を保障するを得たるは軍人諸士の力に依
りたるものにして深く感謝可仕義と存候其軍人諸士
の凱旋歸郷迄は尙數月を要する事と存候間夫れ迄は
貴會御持續と存候に付乍僅少其資の内へ御加へ被下
度此段奉願上候也
明治三十八年十月十九日
大河村出征軍人家族援護會長小久保滿尊殿
附言若出征軍人の事たるや家業を忘れ東奔西走分て
自字内は親身も及ばざる努力外征の士に對しては書
狀新紙其他種々の方法により月に二三回は必ず慰問

